

デバフネイチャはキラキラが欲しい

ジェームズ・リッチマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ナイスネイチャはデビューから一度も入着できず、早すぎるスランプに陥っていた。このままではいけない。みんなに置いていかれる。そんな時、彼女は名案を思いついたのだ。

「そうだ、他人の足を引っ張ろう」

これは王道と正攻法を捨て、邪道と小細工に手を伸ばした、一人のウマ娘の物語。

目次

私の全力	1
皇帝の牽制	5
悪魔のささやき	10
とあるウマ娘から見たナイスネイチャの策略	15
鷹の眼光	21
抜け駆けのトリックスター	26
女帝から見たナイスネイチャ	33
バクシンの逃げ対策	38
とあるウマ娘から見たラフプレーの真相	43
ナイスネイチャのイケナイこと	50
求められる姿	54
追い込みへの手立て	58
レース前の警戒心	63
スリップギヤードの泥試合	67
今後の方針	75
恒星の如きキラキラ	80
帝王の余裕	84
マーベラスな祈り	89
テイオーの若駒ステークス	94
ネイチャの追い立て・テイオーの追い込み	99
スキルポイント大作戦	105
栄光へのダブルジェット	110
篡奪者の対抗意識	115
蠱惑の一匹狼	120

中山レース場への備え	125
皐月賞の地固め	129
くすんだ色の食い下がり	134
熱いまなざし	140
今年の皐月賞を振り返るスレ	147
チーム・デネボラのトレーナー	154
組織から来た男	159
重くはないはずの合同模擬レース	164
勝利のための布石	169
泥をかぶる覚悟	175
二人きりの魅惑のささやき	181
サイバー上の徹底マーク	190
全員にとつての晴れ舞台	194
日本ダービーの繰り上がり	199
トウカイテイオー	205
今年の日本ダービーを振り返るスレ	211
あらゆる意味での注目株	231
匹場の独占取材	236
遅いウマ娘は練習上手か	241
雨の日のスタミナイター	246
生足魅惑の夏ウマ娘	251
無垢な信頼	255
夏合宿が始まった	260
待ちわびるお一人様	267
二人の小休憩	271

渚のバーベキュー	277
緩やかな束縛	282
後方釘付け	288
テイオーの報告	293
サードカエサルの逃げ作戦	298
チームデネボラのリアタイ視聴	302
今年のクラシック戦線について語るスレ	307
八方睨み持ってそうな顔	322
ロイヤルビタージュースを飲み干して	327
夏夜の郷愁と先行焦り	333
生徒会室戦争	337
運命の収斂	344
心休まることのない場所	348
三日前のフライング	356
切れ者は嘯いている	361
菊花賞の泥仕合	372
鈍らのラストスパート	379
七色のサイリウム	384
デバフネイチャはキラキラが欲しい	389
番外編：菊花賞終了後のスレの様子	393
番外編：誰と一緒にかは予約済み	408
番外編：ロジカルな三人	414
番外編：チーム・スカラーと王者の集い	420
番外編：俯瞰する者たち	425

私の全力

走る。

芝を踏みしめ、蹴り抜き、前へ駆ける。

最善のフォームで。最大の速度で。

私の持てる全てを込めて、ターフを疾走する。

息はある。ハードトレーニングで心肺は鍛えた。

気力はある。前に出る気持ちは折れていない。

それでも、足りない。

私の持てる最善、最速を、他のみんなが追い抜いていく。

レースは無慈悲だ。

個々人の力が残酷なくらいハッキリと現れる。

誰かが死ぬ気で走っていくのを、違う誰かが涼しい顔で追い越して

いくことなんて珍しくもない。

後続が迫る。私はまた追い抜かされる。

眼前の理想のコースがライバル達で埋まる。

前でヨレた相手が私の速度を奪う。

先頭からどんどん引き剥がされる。

三着が四着に。四着が五着に。

脚を残していた一人がまた後ろから駆け抜けていく。私の着順が

またひとつ繰り下がる。

歓声が聞こえる。

未だ走っている私の前の方で、誰かが喝采を受けた声。

「はあ、はあ……！」

ゴールした私が受け取れるのは、祝福のお古。

銀でも銅でもない、色なしの参加賞。あるいは失望。嘲笑。……そ

れすらあるかもわからない。

7着。私の現実。

「……キラキラは、夢のまた夢か……」

私の名前はナイスネイチャ。

どこにでもいる、ごくごく平凡なウマ娘。

喝采を受ける彼女たちの背景で頂垂れる添え物。ターフのモブ。

「……やれやれですなあ」

デビューしてから二ヶ月。

私は未だ、3着にさえ届いていなかった。

レースが終わったあとはいつもの反省会。

撮影された動画を見直して、走りの確認を行う。

コース選び、ポジション、仕掛け、フォーム。自分のことだけでも確認すべき事は沢山ある。

あとはライバルたちの動きのチェック。誰がどんな風に走るのか、どの場面でどんな手を好むのか。才能のない私にとって、レース相手の分析もまた重要な武器のひとつなのだ。

「ナイスネイチャさん。動画を見終わったら部屋の鍵、よろしくお願
いします」

「はいはい。やっとくねー」

部屋を出るのはいつも最後。弱い私は、誰よりも努力しなければ追いつけない。

時間が許す限り、私はレースと向き合い続けている。

「……それと、ナイスネイチャさん」

「ん？」

「今日のレース、お疲れ様でした。……また、頑張りましょう。応援しています」

「あはは、ありがとう。イクノ」

……チームでもトレセン学園でも、浮いてはいない。

友達は優しいし、仲良くやれていると思う。こうして気遣ってくれる人も、沢山できた。

でも、たまに優しさが辛くなる。

頑張れという声援を重荷に感じる瞬間がある。

皮肉でもなんでもない。まごころだってわかっている。

それでも最近は少し、しんどく感じることもあるのは事実。

「はあ……」

一人になった暗い部室で、私はため息をついた。

勝てない。体が頭についていけない。正真正銘、スランプだ。デビューしたばかりだっというのに。

確かにトレセン学園のレベルは高い。地方よりもずっとずっとハイレベルだし、こんな私だっつて上澄みの一員なのだろう。

それでも未だに結果は出ない。ライバル達は輝かしい成長を遂げ、私はずっと差をつけられている。

まあ……焦るよ。普通にね。

「蹴落とされてるわけでもないのに、勝手に沈んでいくのはなあ……モブとはいえあまりにも地味な消え方っつていうか……」

トレーニングはこなしてる。根性も負けてない。知識だっつて人一倍あるはずだ。

それでも前に出られないということは、そう。私の体にどうしようもない限界があるっつてことなんだろう。

練習で出せない力は本番にだっつて当然出せない。……直視したくはなかったけど、現実を見る頃なのかもしれない。

私は、シンプルに。

遅いんだ。

「……」

ナイスネイチャ。良い才能。……センスのある名前だねえ。

「受け入れるしかないかあ……」

今日のレースで身に染みた。もういい加減に認めよう。私は遅く、鍛えても難しいのだと。

そしてまた一から考え直すしかない。

私がキラキラを掴み取るための、新しい走り方を。

大丈夫。自慢じゃないけど私は賢い。考えることだけなら人一倍のものを持つているつもりだ。

そうだ。もういつそのこと開き直っつてしまおう。

私がどうしようもなく遅いウマ娘だというのであれば。

「他のみんなも遅くしてやれば良い……」

こうして私は、ライバルの足を引っ張ることにしたのだった。

…私は今から、悪役モブだ！
なんちゃって。

皇帝の牽制

自分が速くなれないなら他人を遅くすればいい。

そんなヒール丸出しのスタイルで行くことに決めた私は、当然それまで続けていた練習内容を一新させることになった。

そうは言っても基礎は変わらない。

私みたいな弱々モブ娘はサボったツケは高くついてしまう。継続は力なり。私はその言葉の果てに結果を出せなかったが、今でも言葉そのものは否定しきれない。

思うに、必要なのはスタミナだ。これからの私には、何は無くとも持久力が大事になる。

プール、坂路、腿上げ。とにかく今までよりも露骨にキツさを感じるトレニングに重きを置くことにした。

もちろん、自分に足りないものはわかっている。スピードだ。

速さの足りていない私が今こんなトレニングするのは少し的外れかもしれない。それでも、私はひたすら体力増強に時間を費やした。

「精が出るな、ナイスネイチャ君」

「！…会長さん……」

ある日、プールで肺活量を鍛えていた時のこと。

偶然その場に居合わせていた会長……シンボリルドルフさんが、私に声をかけた。

皇帝、シンボリルドルフ。そしてトレセン学園の生徒会会長。誰もが憧れる最強と名高いウマ娘が彼女である。

本来なら私のような未勝利のウマ娘なんかとは生きる世界が違うお人なんだけど、以前会長が口にしたギャグを聞いて思わず笑ってしまった時からというもの、ちよくちよく会長さんの方からコンタクトを受けている。きつかけはともかく、気に入られたのだと思う。

「お疲れ様です……えと、会長さんもプールですか？」

「いいや、私は備品の点検だ。季節も終わって、そろそろプールの利用者が減るだろうからな。これを機に消耗した備品のチェックをしておきたい」

「はあー……生徒会って大変……お疲れ様です、会長さん」

「ふふつ、なに。これが仕事だからね。ありがとう、ナイスネイチャ君」

「……あ、私もうそろそろ上がるんで、よかったらお手伝いさせてください」

「手伝いか」

会長さんは少し考える素振りを見せたけど、頷いてくれた。

「うん。ナイスネイチャ君が手助けしてくれるのであれば仕事も早く終わるだろう。こちらからも、よろしく頼むよ」

「是非！」

私は予定を少し早めに切り上げて、会長さんの備品チェックを手伝った。

元々こういう仕事には慣れているし、生徒会の手伝いも初めてではない。

何より会長さんと一緒に仕事しているとスムーズに事が運ぶ。

近頃はハードトレーニングばかりで根を詰めていたので、半頭脳労働は丁度いい息抜きにもなってくれた。

「最近、調子はどうだろう」

備品のチェックが終わった後、会長さんはそう切り出した。

多分、私のスランプを知った上で言っているのだろう。彼女は後輩をよく気にかける人だから。

「あはは……正直、良くはないです。けど少し前からトレーニング内容を見直したので、それで不調を脱却できたらなーって、思ってるところです」

「ん。そうか……もし私に手伝えることがあれば、遠慮なく言ってくれ。とはいえ生徒会の仕事も忙しいから、併走するにも調整がいるだろうが……」

きた。これを待ってた。

「えーっと、じゃあ、少しお話しさせてください」
「話？」

「はい。走る時のコツについて、実は前々からお尋ねしたいことがあったので。是非ヒントを貰えたらな、と」

「相談くらいならいくらでも力になるよ。何だろう？」

皇帝シンボルドルフの助言。まさに金言だ。どれだけ優秀なトレーナーでも、実感の込められた彼女の言葉には敵わないだろう。

私の新しいスタイルを完成させるためには、会長さんのアドバイスが不可欠だ。

「会長さんって、中盤から追い上げて前に出るスタイルですよ。前半は脚を溜めて、最後の最後に突き放す、っていう」

「ああ。前に出るのも苦手ではないが、後方からの始まりが多いな」

「でも会長さんのレース、どれもスタートに出遅れてるわけじゃないですよ。むしろ綺麗にゲートを出てる。けど、そのあとスツと後ろに下がってるっていうか」

「……良く見ているな」

当然。他人のレースだけは何度も何度も見て勉強している。

そんな中でもシンボルドルフのレースは異色だ。

まるでシンボルドルフただ一人が主役であるかのように、他のウマ娘たちが帝王の走りを前に屈服しているかのような……そんな幻覚さえ見るほどに。

でも、きつとそれは幻覚とかじゃないんだ。

「会長さんのレースでは、他のウマ娘はみんな……怖いような見えるんです。多くの方が中盤以降ペースを崩して、ヨレる。終盤では何人もバテている。その理由が知りたくて」

「……なるほど」

会長さんはニヤリと笑った。

「真正面からそこまで見破られたのは初めてかもしれない。ナイスネイチャ君。君の目の付け所はとても良い。……しかし、中身はそう難しいことでもないんだ。トリックとも言えない、簡単な牽制だよ」

「牽制？」

「ああ。綺麗にスタートを切って、前に出る。少しオーバーなくらい速度を出してペースを上げて、他のウマ娘の作戦を乱すんだ。言ってしまうえば、それだけのことだよ」

「……ペースを乱す、なるほど。序盤は後方に位置取るはずの皇帝が、思いの外前にいるから……尚更みんなは焦るんだ……」

「私自身の存在感や注目度があつてこそその牽制、とも言えるんだがね。意識を向けられやすい前提があるからこそ、相手が引つ掛かる。そういう意味では小手先のテクニクでしかないんだが……私はそれを含めての、私の走りだと自負しているよ」

皇帝といえば圧倒的な走りで勝つ印象ばかりだったけど、違った。会長さんのようなウマ娘でもこういう作戦を立てているんだ。

意外でもあるけど、皇帝シンボリルドルフらしいといえば、らしい気もするから不思議。

「ゲートが開く時は誰もが集中している。逆を言えば、他の意識は否応なく疎かになる。互いに位置も近く、仕掛ける最大の好機と言つても良い。百メートルにも満たない、ほんの一瞬の間の出来事だが……私はこの一瞬も大事にしているよ」

「……いやあ、会長さんはさすがですなあ……私には真似できそうもないですわー」

「ふふ。まあ、そんな走りをする相手もいるかもしれない。知識として、気構えの一つとして頭の片隅にでも入れておくといいだろう」

そう言つて会長さんは柔和な笑みを浮かべたのだった。

「……ふうー」

夜のターフ。

人気のないコースの上で、私はもう一度ダツシユを再開する。

「はっ、はっ、はっ……！」

急加速、減速。急加速、減速。

イメージはスタート時の先駆け。誰よりも速く先頭に躍り出るための鋭い踏み込み。

私は差しウマだ。まかり間違っても前の方で競り合う脚質ではない。

だから本来、こういうスタートダッシュは必要ない。

でも、これはきつと私の武器になる。

「あと、もう一本……！」

その日、私はプールで追い込みきれなかった分を取り戻して余りあるほど、へとへとになるまでトレーニングを行った。

悪魔のささやき

他人の足を引っ張るとはいえ、それはルールの中に収まっていないければならない。当然だけど。

斜行で後続を妨害するだとか、故意の接触や暴力で相手を痛めつけたりなんかは当然NGだ。悪質な場合は出場資格取り消しなんていうのも当然あり得る。

でも、逆に言えばそれ以外のやり方だったら案外セーフなんだよね。

足で蹴り上げた土を後続に浴びせたり、強い相手を無意識のうちにマークしてブロックしたり……もちろん故意は駄目だけど、偶然であれば結構寛容だ。

とはいえ最大の問題として、走ってる最中にそんなことしてる暇があるのかってという話になってくる。

レース中はみんながみんな本気で走っている。邪魔しようと思っても、それが自分の1着に繋がるとは限らない。むしろ足を引っ張った自分も出遅れて、相手と仲良く抜かされるのがいいところだろう。

だから足を引っ張る時は、一人じゃ駄目。

他のみんな、全員を巻き込んでやらなきゃ活路は開けない。

コツは、あるにはある。

失格にもならず、レースを動かすような……そんなコツが。

△ ◎ △

未勝利戦が始まった。

デビューからまだ一勝できていないウマ娘たちが集う、格落ちのレース。

それでもみんなの勝利への執念や執着が薄いだなんてことはこれっぽっちもなく、パドックを見れば飢えた獣のような目をしたウマ娘がピリピリとした笑顔を観客たちに向けている。

みんな必死だ。ここにいる人で必死じゃないウマ娘なんていない。

未勝利のまま何年も続けられるほど、中央は甘くないのだ。勝てないウマ娘は引退するか、地方へ行くか。……それはきつと、ここにいう誰もが望んでいない。当然、私もそう。

「勝つ……絶対に勝つ……！　勝って今年中にGⅢまでは……！」
話したこともないウマ娘が拳を握り、戦意を高めている。

レースにかける必死さだけならGⅠウマ娘にだって負けてないだろう。

だから……私は、彼女の肩に手を置いて、ささやくのだ。

「今日はよろしく！　悔いの残らないよう、頑張ろうねー」

「え……う、うん！　よろしく！」

笑顔を作るのが得意な私は、努めて人懐こいオーラを出したまま、そのままゲートの中に入っていく。

ゲートが怖いという人がいる。

私も最初は戸惑ったけど、今ではこの圧迫感にも慣れてきた。

「……ま、やるだけやってみますかね」

鉄檻の中、誰もが固唾を呑む。

体をこわばらせ、一瞬を待ちわびる。

開く。向こう側の芝が陽を受けて輝いている。

私は即座に本気の一步目を踏みしめて、誰よりも速くターフへ躍り出た。

「なっ！」

「させない……！」

後ろからはライバルたちが続く。

逃げ2、先行4、差し2、追い込み1。

距離は2400、晴れ良バ場右回り！

「1着もらったあ！」

どっかのおバ鹿が開始早々にそんなことを叫ぶ。

一体誰だろう？　言わずもがな私、ナイスネイチャです！

「ふっざけっ……！」

けどこれは立派な作戦だ。

綺麗なスタートを切って先頭を取る。そして後ろのウマ娘を牽制する。

逃げを得意とするウマ娘は少なからず動揺するだろう。このままハイペースが数百メートルも続けばペースを修復するのも難しい。

案の定、私はすぐに抜かされた。そもそもスタートだけ綺麗に決めただけで、ここで釣られて逃げに走るわけにはいかない。

一旦ここで中団に紛れ、息を整えなきや。

「はっ、はっ……！」

先鋒を逃げの二人が駆け、私は3番目として垂れ下がる。

下がる時もコースを意識し、なるべく後続の壁になるように沈んでいく。

コーナー。急めの円弧に引き離されないよう、あまりインを意識せずに安定を取って走る。息を取り戻す。

内側から先行のウマ娘が前に出る。続々と抜かされ、私の順位が剥がれてゆく。

最先鋒のペースが速いから、焦っているんだ。少し掛かり気味。

「くっ、そお……！」

その中でも特に焦れてそうな一人の顔が横目に見えた。余裕のない表情。狙ってた場面！

仕掛けるなら、ここだ！

「今回はあの逃げ二人で、決まりだね」

「……ッ！」

ささやく。すぐ隣にだけ聞こえるように。

呟くように。惜しむように。

「今いかないと、もう無理かも……！」

「くっ、そおおっ！」

先行の一人に火がついた。

レース中盤にあるまじきハイペース。でもその無茶はターフの上に短い奇跡を起こし得るだろう。

ささやかれた彼女は逃げの二人に迫る。

逃げの二人は掛かり気味を自覚しかけた矢先、後続に迫る存在を感

じて戦慄する。

他のウマ娘も全体的に伸びた展開に追いつくよう、普段は絶対にやらないペースで加速していく。

自然と私は後方に沈む。七番手。残り1400。さあ、ここからだ。

「貴女は、焦らないんだねっ」

「……!？」

レース前に肩を叩いたあの子がすぐそばにいる。

彼女は息を切らしながらも話しかける私を見て、目を剥いている。

ああ、走りながら喋るの、きつつい。

でも、やらなくちゃ。

「私と一緒にだ。『諦め仲間』だね」

「……ッ！」

「ま、一緒にゆっくり、ゴール、しましょ……」

私がそれを言い切る前に、彼女は加速した。

こんな私なんかと並走してたまるものかと、影を振り払うように前へ逃げた。

「……あはっ」

さつきまで『最善だったペース』で走っていた彼女が、破滅的なペースで走ってゆく。

ああ、残酷なことをした。これは悪魔のささやきだ。

彼女は自分のプライドを守るために、破滅のレースに身を投じたのだ。

前側のペースは速いまま。後続が散発的に、不可解なペースで仕掛け続けたせいで息をつく暇もない。

残り800。

最初に崩れたのは逃げウマ娘。最初から飛ばしすぎた彼女たちが真っ先に沈むのは当然のこと。

残り400。

先行組がバテるのを横目に追い抜かず。

ポテンシャルだけなら悪くはなかったはずなのに。

残り200。ラストスパート。

私のささやきを振り払うように駆けていたあの子にも限界がきたらしい。

「はあ、はあっ……！」

私はまだ息を残している。

スタミナだけは鍛えに鍛えた。体力勝負に持ち込めるなら、私は堅実に走れるのだ。

彼女と並ぶ。追い越す。荒い息が後ろに流れていく。

ちよつとした罪悪感と、いつにも増してのしかかる疲労感。

でも、最後の最後、一番最初に私がゴールを切った時。

「私が、1着……！」

その一瞬の高揚だけで、私の全ての鬱屈とわだかまりは、取り払われたような気がしたんだ。

とあるウマ娘から見たナイスネイチャの策略

未勝利のウマ娘は、無様だ。

最初は良かった。

メイクデビュー戦で走って、真ん中よりは上に入れて。平均よりも上の実力があるんだって、浮かれてた。田舎から応援に来てくれた両親たちも笑顔で応援してくれた。

でもこれが二戦目、三戦目も続くと、雲行きが怪しくなってくる。

1着が取れないと次にいけないのに。こんなところでいつまでも足踏みなんてしてられないのに。

なのに、私はいつも入着できるかどうかのところで足掻き続けている。

私は両親にレースの予定を伝えなくなった。

友達に応援に来てくれと言えなくなった。

一緒に未勝利戦で藻掻いていたチームメイトの一人が、私より先に1着を取って……別の練習メニューを与えられたのを知った。

観客の少ないレース場で、顔見知りができた。

近所に住んでいるという子供に名前を覚えられた。

応援された。

私は、最後まで走れて偉いのだという。

……じゃあ、私よりも先にゴールを切った人は、もっと偉いよね。

そうやって子供に当たり散らせるわけもなく、私は笑顔を作って振りまくばかり。

ダンスレッスンをしなくなった。

センターの振り付けは、歌詞は、頭の中から段々と消えつつある。

私はもう、祈るように走ることしかできなくなった。

何度も何度も寂れた未勝利戦に飛び込んで、いつの日か運良く弱いウマ娘たちと巡り合う時がやってくることを願って。

……だから、未勝利のウマ娘は、無様だ。

ある日、いつものように漫然と未勝利戦に挑んでいた時のこと。その日の私もひっそりと単独でレース場に赴き、スタートを待つていた。

自分の惨めな姿を見られたくなくて、観客に愛想良くすることもなく、ひっそりとストレッチをするフリで時間を潰してきた。

ここにいるウマ娘は誰もが壁にぶつかつた人たちだ。空気はピリピリしているし、和やかな空気であるはずもない。勝つのは一人だけなんだ。殺伐と言い換えても良いだろう。

「今日はよろしく！ 悔いの残らないよう、頑張ろうねー」
そんな中、明らかに浮いたウマ娘がいた。

地味な毛色の女の子。ふんわりとしたツインテールを揺らす、どこか幼い雰囲気の子。ゼッケンに名前が書いてある。彼女はナイスネイチャというらしい。

「え……う、うん！ よろしくー！」

声を掛けられたウマ娘は困惑顔で応じている。当然だ。

私たちは運動会の徒競走に出ているわけではない。チャリティーで走ってるわけでもない。

私たちはみんな、勝つためにここにいるんだ。何が「今日はよろしく」だ。仲良しごっこなら他所でやってくれないかな。

まあ、でも、掃き溜めの中を探せばそんなウマ娘もいるのかもしれない。

未勝利戦特有の変なヤツ。そう考えれば、珍しいことでもないのかもね。

……ゲートに入った。

私は気持ちを切り替える。

今日こそいける。いくぞ。

私は追い込み。距離は2400。……やや長い。

けど、ロングスパートしか取り柄のない私にとってはやや有利。

前回と前々回では下位だったから、出場ペナルティにリーチがかかっている。後がない。二ヶ月の出場停止なんてやってられない。

無様な負けはできない。今日で上位入着できれば、またチャンスが

くる……。

ガタン。

ゲートが開いた。

「1着もらったあー！」

ピリピリした場にそぐわない、底抜けに明るい声が響き渡った。

「えっ……！」

三番。ナイスネイチャ。

あのバ鹿そうな子が驚くほど綺麗なスタートを決め、その上スプリンターのような速さで前へ出た。

誰もが慌てる。特に逃げ戦法を得意とするウマ娘達は焦っている。もちろん私も戸惑った。最初は集団の後方に付けようと思っていたのに、不意に始まった最序盤からのハイペースで計画が壊れてしまった。

「はっ、はっ……！」

あつという間に最後尾。追い込みだからそれ自体はいい。まだ始まったばかりだ。

けど、位置が悪い。間延びし切った展開の最後尾では、否応なく気持ちが悪くなる。

絶対にタイムが乱れてる。そうわかっているのに、集団においてかたたくなくて必死に前へ出る。

ああ、最初から急ぐのは苦手なのに。息が乱れると何もできなくなるのに。私の持ち味は余裕を持たせた最後の追い上げにしかないのに。

なのに、少ない観客達に最後尾で突き放される姿を見せたくない一心で、ペースを乱してしまう。

コーナーの先で右に曲がるウマ娘の側面が見える。焦る。

それぞれのウマ娘の順位や展開なんて少しも見えてこない。頭の中でグルグルするのはただ自分が最下位であるという事実と、中盤にも関わらず既にバテ始めた自分の荒い吐息。

いやだ、置いてかれたくない。

ビリになりたくない。二ヶ月も足踏みできない。

今日も観客席にあの子供がいる。努力賞なんて欲しくない。いい加減勝たせてよ。もう何度もやってるんだよ。一回くらい良いじゃない。一回くらい私に譲ってよ。そろそろ私の番が来てもいい頃でしょ。

「貴女は、焦らないんだねっ」

前の方で、甘やかなささやき声が聞こえた。

いつの間にか私の前には、スタート時に先頭を走っていたはずのナイスネイチャがいる。

息も絶え絶えのはずなのに、彼女はすぐ隣のウマ娘に話しかけていた。

「私と一緒にだ。『諦め仲間』だね」

私はそれを聞いた。

「ま、一緒にゆつくり、ゴール、しましよ……」

身の毛がよだつ、諦めの提案。

乗れるはずもない。乗りたいはずもない。

だから、ナイスネイチャを振り切るように強引に前に駆け出したあの子の気持ちは、この私にも痛いほどよくわかる。

私もあの位置でささやかれていたら、きつと同じことをしていただろう。

「あはっ……」

その時。

ナイスネイチャが小さく笑ったのを、私は見た。

……まさか。

まさか、この、この子。こいつ！

あのウマ娘を掛からせるために、わざわざあんなことを!?

咄嗟に見れば、レースは今もなお間延びした展開。しかし前方は無茶なペースの報いを受けるように、失速を始めている。

さつき駆け上がったっていった子のせいで息をつく間もない。このままでは、きつと。

「む、無理……」

残り800。バテきつた子を追い抜いた。

「は、はあ、この、く、そ……！」

残り400。歯を食いしばる子とすれ違った。

ナイスネイチャの速度は上がる。スパートをかけたんだ。

あいつ、息を残してた。一人だけペースを乱さずに悠々と走ってた。

……私も走る。

でも、追いつけない。最初に無茶をした分の疲れが、今になってブレーキに変わっている。

間違いない。このレースは、このターフは最初から。

あのナイスネイチャによって支配されていたんだ。

「私が、1着……！」

ゴール。

1着はナイスネイチャ。

私はどうにか最後までペースを保てたものの、スパートが掛けられずに3着。

……久々の入着。けど、なんとなく、気分は晴れない。

「はあ、はあ、はあ……！」

息が荒い。時々やる3000超えの長距離練習をやった時だって、ここまで疲れはしなかったのに。

……自分のレースができなかったからだ。終始、あのナイスネイチャによつてペースを乱されていたせいなんだろう。

「……よっし」

ちらりと彼女を窺えば、勝利を噛みしめるように拳を握っている。

あからさまに喜んだりはしない、静かな余韻。そこにゲート入り前に見た天真爛漫そうな雰囲気は全く見られない。

……まさか、あの時の愛嬌も作り物だったのか。

声をかけ、肩を叩いた時から既に始まっていたのか。

その時からもう、彼女のレースが始まっていたのだとすれば……。

「……ああ、負けたなあ……！」

私たちはみんな、揃いも揃ってとんだ出遅れだったというわけだ。
……そりゃ、負けるよ。完敗だ。

「あー……悔しい」

でも、久々だな。負けたのを悔しいと思うなんて。

不思議の負けでもなんでもない。負けるべくして負けたのだとわかかってしまったからだろうか。

だからなんとなく、私はその悔しさに不快感は感じなかった。

「……次こそ、頑張るか」

さあ、これから久々のライブだ。

3着か……振り付け、私の体はちゃんと覚えているだろうか。

……私の未勝利戦はこれからも続くけど、そろそろダンスのレッスンもしておこう。

きつといつか、センターの振り付けが必要になる時が来るかもしれないし。

鷹の眼光

「あー、あ、あ、あー……あ、え、い、う、え、お、あ、お……」
鏡の前で発声練習。同時にダンスの確認。

レースで勝利したウマ娘はウイニングライブに出て、観客の前で歌と踊りを披露する。

これはレースとは直接は関係ないものの、お客さんを楽しませるために必要不可欠な要素だ。

未勝利戦に勝利した私はその流れでウイニングライブを披露した。幸い振り付けも歌も覚えていたので恥を晒すことはなかったものの、所々甘い箇所はあつたなど反省している。

あの最強のウマ娘たる皇帝シンボリドルフも、ウイニングライブは疎かにすべきではないと口を酸っぱくしている。レースは走るだけではないということだ。私もイチ競技者として、これからはダンスレッスンもやっていけないといけない。

「……ふいー」

……初勝利の後。

私は友達から労いと祝福の言葉をもらった。

イクノディクタスは私自身よりも大げさに喜んでいたり、ルームメイトのマーベラスサンデーも「マーベラス!!」と拍手までしてくれた。嬉しかった。同時に、それまで友達をやきもきさせていたんだなど申し訳なくも思った。

これからも気を遣わせないよう、頑張らなきゃね。

「失礼します。……おや、ナイスネイチャさん。こちらでしたか」

「お、こんちやー」

噂をすれば、イクノディクタスがやってきた。

彼女もまたライブの練習に来たのだろう。

「ねえねえ、せっかくだから一緒に練習しない？ すれ違うパートの動き、誰かと確認してみたかったんだ」

「是非。こちらからもよろしくお願いします」

イクノデイクタスは非常に勤勉で、真面目なウマ娘だ。

レースのデータを整理するのが半分くらい趣味のようなもので、常日頃からライバルたちの研究に余念がない。私も彼女のデータには何度もお世話になっている。

それでいてトレーニングも疎かにしないので、レースにかける熱意はそこらへんのウマ娘よりも何倍も高い。同じチームながら、すごいウマ娘だよ。

「ここで腕がぶつかりそうですね。振り付けのタイミングを完璧に合わせましょう」

「オツケー。ここを、こうか。一人じゃわからないところだね」

「ええ。しかしナイスネイチャさんの動きは綺麗だと思います。通しであと二度ほど練習すれば、十分かと」

「ん、わかった……よく見てるねえ、色々なところ」

イクノデイクタスは観察眼に優れている。

それはビデオでレースの確認をしている時も、自分が走っている時も変わらない。彼女のコース選びの上手さには学ぶところが多かった。

涼やかな切れ長の目。鷹のような目つきは最初見たときは怖い人かなとも思ったけど、話してみればなんということはない。研究家と努力家を合体させたような、文武両道を絵に描いたような子である。「……あの。無言で見つめられるとさすがに少し気恥ずかしくなるのですが」

「あ、ああごめんごめん！ あはは……いやあ、イクノデイクタスの目って、鋭いなあって。もちろん悪い意味じゃなく、ね？」

「それは本当にいい意味が含まれているのでしょうか……たまにレース中でも、他の人を怯えさせてしまうことがあるのですが」

あらら、結構気にしてるのか。悪いこと言っちゃったかも。

……でも、そうか。レース中に、ねえ。

「走ってる最中に相手が怯むのなら、最高じゃん？」

「そういう考え方もあるかもしれませんが……やや邪道ではないでしょうか」

「んー王道ではなさそうだけど、使えるものは使えばいいんじゃないかなあ。……ムッ！ どう？ この感じ。今の私から威圧感とか感じる？」

試しにイクノデイクタスに鋭い眼光を試してみると彼女はしばらくこちらを見て黙り込んで……。

「……ふ、ふふっ、あははっ」

堪え切れないように笑いだしたのだった。

「ちよっ!? イクノデイクタス!? なんで笑うかなあ!？」

「す、すみません。怖いというより、拗ねているようで……失礼しま……ふふふっ」

……それからごめんなさいのついでに怖い顔のレクチャーなんかにつき合ってもらったりして、久々に楽しく過ごしたのだった。

後からダンスレッスンするために入ってきたウマ娘が鏡の前で怖い顔を作ってる私たちを見てギョツとしてたけど、うん。驚いてくれたのなら多分、そこそこ物にはなったんじやないかな……。

「しかし、邪道か……ま、邪道だよねえ……」

夜のターフを走りつつ、考え事を口に出しながら速度を出す。

誰もいない夜のコースは練習に最適で、何より走りながらの声出しもあまり気にしなくていいので気楽だ。

初勝利のレース。私は併走する相手にささやく事でペースを崩すことに成功した。単純ながら、この手は非常に有用だと感じた。これからもきつと私の武器になるだろう。

だから今やっているのはスタミナのトレーニングでもあり、ささやきの練習でもあった。

走りながら流暢に語りかけ、相手の心を乱す。崩す。

息を吸い、吐きながら声を出す。その際に苦しんだような気配を出さず、余裕を持って、聞き取りやすいように。

「あのー着は、運が良かった……」

未勝利戦は燻ったウマ娘たちの溜まり場だ。

ある意味全員が最初から焦っているようなもので、ペースを崩せる

だけの際は大きかった。

けどこれからは、そんな相手も多くない。

今度は身体的にも精神的にも万全なウマ娘たちを相手に、それを引つ掻き回していかなければならないのだ。そのためにはまだまだ、手札が足りない。

小手先でいい。使えるものはなんでも使う。

イクノデイクタスは鋭い目で威圧するアイデアについて話半分くらいに受け止めていたけれど、私はそうは思わない。

何せ眼光を飛ばすだけなら、ささやきのように自分の息を乱すこともない。下手に消耗せずに見えるのだ。もし効果があるのだとしたら、これほど便利なものもないだろう。

鏡の前で怖い顔を練習したのだから、こっちは本気でやっていた。

絶対自分のものにしてみせる。

「後は、速度だよなあ……！」

そしてまああとは、単純に私の速度。むしろこれが最大のネック。いくら相手のペースを乱せてたとしても、走りの速さはタイムに表れる。そのタイムを確認した時、私が不調な相手より遅かったんじや何の意味もない。

私の絶好調が相手の絶不調を追い越せなければ、私は勝負のスタートラインにも立てないのだ。

だけど私のスピードは伸びない。だから細々とした走法を一つ一つ入念に仕上げ、要所での加速を狙う。

コーナー、登り坂、下り坂。対戦相手が少しでも苦手とするであろう場所で、最善の速度を出せるようにするんだ。

そうでもしなければ、私は勝てない。

「勝ちたい」

また勝ちたい。キラキラが欲しい。

真っ先にゴールした時のあの一瞬を、輝いた高揚を。もう一度掴み取って、噛み締めたい。

「もう一本……！」

私は遅い。柄じゃないのはわかってる。

けど、夢を見たって良いでしょうが。
私が一山いくらの悪役モブのだとしたら、負けるその時までは勝ち気にいるのも「らしい」でしょ？

抜け駆けのトリックスター

勝利したウマ娘は、その勝利数によって次からのレースの格が上がっていく。

私は今勝利数1なので、次に出るのは勝利数1のウマ娘が集うレースだ。

圧倒的な速さで勝利を掴んだ子。

競り合って競り合って、努力の末に一着を取った子。

運が良いのか悪いのか、不思議と勝ってしまった子。

そして私のように、どさくさに紛れて一番を盗み取った子とか。

ここに集うのは色々なウマ娘だけど、誰もが一度は勝利したことがあるのは間違いない。

レースの質そのものは、前回よりもずっと上がっていることだろう。

パドックで勇姿を見せるウマ娘達からは強い熱意を感じる。

なんとというか、負の気迫？ みたいなのがない。すごい純粋な闘志と云うべきか。

私はそこから、未勝利戦のウマ娘達のような焦りを窺えなかった。

「さーて、どうしますかね……」

芝2000。

この前よりも短いコースの上で、私はどれだけの小細工を積み重ねられるだろう。

ライバル達はより強くなり、私の速さはほとんど変わらない。

なんともまあ、考えれば考えるほど嫌になっちゃうけども、考えるだけしか能のない私が思考停止しちゃうわけにもいかないわけで。

とりあえず。まあ。私も、パドックで勇姿を見せよう。

私はステージの上を歩き出し、ジャージの上着を脱ぎ捨ててポーズを決めた。

「おいつすー！ どもー！ ナイスネイチャですー！」

さほど観客の多くないパドックで、アイドルのような振る舞いを決

めた私。

こんなパフォーマンスをするウマ娘もいないわけじゃないけど、私は一度もやったことがなかった。

観客から小さな「おおー」とか「がんばれー」とかが聞こえてくる。普段の私を見てない人からすれば、まあ、元気なウマ娘が来たなっ
て感じなんだろう。

「みんなありがとー！」

別に、ここにいる人たちは私目当てで来たわけでもない。

だけど私は無駄に自信たっぷり存在感をアピールするのだ。

今日の小細工は、私が目立ってないとどうしようもないからね。

「……よし」

ステージから退散すると、愛嬌は消え失せる。

さて。それじゃ今日も頑張つていきますか。

他人の足を引っ張るレース第二弾。

新しい手札の使い勝手の確認作業の始まりだ。

「おーし、やったりましよー。今日勝ったら次は2勝レースだしねえー。さっさと次に行きたいなあー」

ゲート中でも独り言を欠かさない落ち着かないウマ娘。それが私です。

周囲はいつスタートしてもいいように耳に集中してるのに、隣では私が見えたら口を動かしている。落ち着かないことだろう。私だって落ち着かない。けど、やめない。

「バ場が重めだとすぐに蹄鉄緩んじやうんだよねえ……あれどうにか
なんないかなあ……」

これはスタートの直前だ。世間話に乗る相手は当然いない。

「あー！でも聞いた話だと緩むのは取り付けの時の鋏の打ち方に問題
があるって」

ガタン。

ゲートが開いた。

「ふッ……」

瞬間。私は先頭に飛び出した。

それまでの緩慢な世間話を裏切るようなスタートダッシュ。のろまな私が唯一圧倒的に一番になれる瞬間。

「なッ」

「このっ……い！」

ふふ、苛立つてる苛立つてる。

そりやさつきまでバ鹿みたいにくっちやべってた子が一番綺麗にスタート決めたらなんか腹立つよね。話を聞かされてた側は集中できないのよね。

でもスタート前は息も乱れないし、いくら喋っても疲れない。

心の片隅に思い浮かんだ取り留めのない思考を言語に変えて垂れ流すだけ。それで少しでも相手の心を乱せるのなら、このタイミングを使わない手は無いですわ。

「ふッ、ふッ……まあ、今日もするっと一着、もらっちゃいますかね」

ハイペースで先頭を進みながら呼気に言葉を乗せる。

余裕そうな声色と口調。もちろん本当はするっと一着なんか取れてなかったけど、強者感は出てるでしょ？

「させない……い！」

ほら、追いつがってきた。

今日の相手は逃げ3、先行3、差し4、追い込み3。

ギラついた目で猛然とこっちに迫ったのは、今回最も実力があるらしい逃げウマ娘。「ナンカイウインド」。

逃げを得意とするウマ娘は他に前を取られることを何よりも嫌う。それは脚質というよりも、本人の気質の面が大きいと言つてもいい。

私はややオーバーペースを維持したまま先頭をゆく。

抜かされそうになっても上手く左右に揺れ動き、後続の抜け駆けをブロックする。

今回のレースでも全体的なオーバーペースを作りたい。そのためにはすぐに前を譲つてやるわけにもいかないのだ。

スタートは集中して綺麗に頭を取った。

コース取りも最善で自己評価では申し分ない。

……けど、直線であつという間に抜かされるのが私なわけでした。

「ふんッ」

私はコーナー辺りで外から抜かされてしまった。

……けど、ここからよ。コーナーは得意なんだ。

円弧を大きく膨れるように走り、息をつく。ペースも落とす。後は勝手に序盤のペースを維持した逃げ組が全体のテンポを急かしてくる。

先行組も追いつがってきた。もうすぐ後ろだ。彼女らは先頭と距離をつけすぎると追いつけなくなってしまう。自然とその速さは掛かり気味になる。

「ん？　なんか今日、遅めだね」

きよとんとした顔と声で、そんなことをささやく。

誰に対してでもない。別にこの先行集団の誰にも知り合いはないしレースだつて見たことない。

けど私は知った風な口で煽るのだ。

「あー、こりゃ、ナンカイウインドかな」

「……」

ちよつと焦ったか。先行の一人が私を黙らせるように前に出る。

けど他の二人は眉を顰めたものの、今のペースを保持している。

挑発に乗る気分じゃなかったかな？

けど、そうはさせない。

二人の前で息を入れ、進路を塞ぐ。

流石にペースダウンした私を邪魔に思ったか、二人は外から抜きに掛かった。

「速いねえー」

このままでは前に出られる。……というタイミングで、坂が来る。

「はッ、はッ」

「……っ!？」

「ふふ、また追いついた」

私は坂で加速する。坂は得意だ。登るのも降りるのも練習した。

抜かそうと思った相手が加速したせい、二人が焦れる。嫌でしようというの。私も嫌だよ。

「このおっ……」

結果、二人は無理に加速した。このまま私に邪魔されながらささやかれるのは嫌だったのだろう。正直ごめんなさいと思ってる。

「ふーッ……」

下り坂で息を整える。滑るように、勢い任せに降りながらこれまでの無茶して吐き出した酸素を取り戻す。

残り800。

前のペースが乱れ始めた。

逃げのほとんどは坂で明らかに失速。

先行は一度ついた火を消せないまま、並んだ二人が息の入れ時を見失っている。

それに続くのが私と、差しウマ娘。

チラリと確認すると、追い込みは既にバテている。元々速さについてこれないウマ娘だったのだろう。

問題は差しだけど、これもまあどうにかする。

「……」

私はわざとヨレたように走り、一人分のインコースを空ける。

後続の差しウマ娘が餌を見つけたようにペースを上げた。

仕掛け時はここ。そう思ったんでしょ。

でも私は速度を取り戻す。コースもギリギリ閉じる。相手が加速を狙った瞬間に封じ込める。

相手は落胆するだろう。わかってる。だから私は僅かに後ろを向いて、顔を見せた。

「遅い人に行かれると、邪魔になるから」

睨む。凄むような目ではなく、呆れるような、蔑むような眼光。

「なにをっ……私はず」

「ごめんね、先に行くから」

そのまま微加速。コーナーも相まって自然とリードできる。ちようど良く沈んできた逃げ二人を追い抜かし、演出も抜群。

「させつ、るかあつ……!」

残り600。憤った差しが猛追する。この子は感情の勢いだけで最後まで来そうだ。……やっぱりスタミナを削りきるには2000じゃ距離が短い。

「無理しないで。足、動かないでしょ」

「動くつ……!」

「休もう?」

「ふぎつ、けつ……!」

「疲れたでしょ?」

「あんた、なんで、そん、なつ……!」

怒りで我を見失い、走りながら私の口車に付き合った。

敗因があるとすれば、多分そこだ。

私は走りながら喋る練習をした。

貴女はどう? 多分、そんな変な練習はしてないでしょう。

多分貴女、とても真面目なウマ娘だろうから。

「しまつ、……!」

息切れした差しウマ娘を裏切るようにスパートをかける。

残り200。前方からは次々と速度を落としたウマ娘達がやってきて、すれ違う。

先頭にいるのは今回最も強い逃げウマ娘、ナンカイウインド。

けど彼女も今回は余裕そうな雰囲気はなく、序盤のペースをどうにか引きずっているような有様だった。

とはいえ今の今までトップを守り抜いてきた意思の強さと地力の質は賞賛に値するだろう。

こっちも、うん。今日のレースは、少し……喋りすぎた。

息はバテバテ。残すは直線。小細工の手札もほとんどない。

でも、私は私自身に問いかける。

足、動かないでしょ?

休もう?

疲れたでしょ?

そう尋ねるのだ。

答えはすぐに返してやれる。

「ふざっ……けるなあッ！」

誰が折れるか。誰が負けてやるか。誰が諦めるか。

私は絶対に諦めない。誰かに囁かれても、私の体が裏切ろうと、私の精神だけは絶対に諦めたりはしない。

スパートをかけろ。前は一人。邪魔者はいない。

「くっ……う、あああああー！」

ナンカイウインドがこちに気付いた。

向こうも最後の直線で破れかぶれのスパートを決めている。

行かせない……絶対に行かせはしない。

「それ、速くなってないよ……ッ」

「……!?」

ギョツとした顔が横目に見える。

嘘だよごめんね、ほんとは結構速かった。

でも貴女は多分、気にしちやっただらうね。

「あっ」

加速を一瞬だけためらったナンカイウインドを差し切って、私は一番前に躍り出た。

スタートと同じ、先頭に。嘯いていた言葉の通りに。

「やつ、……たあああっ！」

私は再び、一番最初にゴールを切った。

女帝から見たナイスネイチャ

『次の日曜にナイスネイチャ君のレースがある。エアグルーヴ、彼女の様子を見てやってくれないか』

生徒会室での事務仕事が終わりにかけた頃に、会長……シンボリルドルフはそう言った。

気付けば窓の外は暗い。ひとまず今日は区切りということだろう。

『ナイスネイチャ、ですか』

『ああ。何度か我々の仕事を手伝ってもらったこともあるだろう？』

『この前のプールの備品点検もそうだった』

『ええもちろん覚えています』

ナイスネイチャというウマ娘が中等部に所属していることは私も知っている。要領が良く、賢い人物であることも。

後進の育成は欠かせない。当然、私は何度かナイスネイチャの事を気にかけていた。

だからこそ、彼女の戦績が奮わないことも聞き及んでいる。

『最近、ナイスネイチャ君は未勝利戦を突破した。次は一勝レースに出る予定らしい』

『なんと……それは知りませんでした。そうか、彼女がようやく……』

ナイスネイチャが勝利した。それは初耳だった。

トレセン学園内での仕事に忙殺され、情報が入ってこなかったようだ。

いや、しかし……何はともあれ、良かった。彼女もようやく、一歩目を踏み出せたのだな。

メイクデビューから時間が経つにつれて、周囲の友人達は次々に勝利をもぎ取っていく。未勝利のままという状態は、人が思うよりずっと重く苦しいものであったはず。事実、ここトレセン学園でも気に病むウマ娘は後を絶たない。

未勝利戦を抜け出せば、随分と気持ちも落ち着くはずだ。

しかし、何故私に見に行けというのだろうか。

会長も個人的に鼻屑にしているウマ娘はいるが、私に観戦を勧める

ようなことは今までなかったはず。

『たまにでいい。ナイスネイチャ君を気にかけてやってくれないか。あの子のレースを見れば……エアグルーヴ。君にもその理由がわかるはずだ』

会長は窓の側で、夜のターフを眺めている。

『百術千慮……私も直接見たわけではなかったが……彼女の走りは、実に面白かった』

私は中央から離れたレース場にやってきた。

年中行事にも一定の目処が付き、生徒会の仕事も落ち着いた。羽を休めるつもりで足を運ぶには丁度いいタイミングだった。

一勝レースは各地で行われている。人入りは少なく、当然重賞ほど賑やかでもない。

足を運ぶのは出走するウマ娘の関係者か、散歩感覚でやってくる近隣住民たちだろう。

トレセン近郊で行われているレースとは雲泥の差がある観客数に、中央と地方の格差を実感した。この状況が菌痒くも、私個人でどうすることもできないことが悔やまれる。

「おいつすー！…どもー！…ナイスネイチャでーす！」

時折フラッシュの焚かれるパドックに近付くのがなんとなく億劫で、私はそれを遠目から窺っていた。

彼女、ナイスネイチャはステージの上で笑顔を振り撒き、ポーズを決めていた。

それは、なんとなく私のイメージするナイスネイチャとは違った。あまり私も個人的に交流することはないのだが、しかし……彼女はどことなく大人びていて、一步引いて目立たないのを好むタイプの性格ではなかったか。

一勝して気が大きくなったのだろうか。それとも知り合いが大勢来ているのか。だが観客からは仲間内からの囁し立てるような声が聞こえるわけでもない。ナイスネイチャ自身も、観客に目を向けているように向けていない。

結局、ちぐはぐな印象を残したまま彼女はパドックの奥へと消えた。

彼女は私に気付いた様子もなかった。

レースが始まった。

固唾を呑んで見守るという関係でもない。私は少々気を抜いて、その開始を待っていた。

ハツとしたのは、開始と同時に飛び出したナイスネイチャを見たからだ。

彼女は華麗なスタートを決めると同時に、何かを叫んでいた。近くのゲートからはウマ娘達が出遅れ、ナイスネイチャの有利が決定的なものとなる。

「いいスタートだな。しかし、あれは……」

レースそのものは凡庸だと思った。一勝レースらしい初々しい走り。全員が多少前を急ぎ……そこまで考えたところで、首をひねる。

いや。速い。これではかなりのハイペースだ。これはマイルでも短距離でもないはず。

だというのに……先頭をいくナイスネイチャは、速い。

それに釣られるようにして、先頭集団全体が掛かり気味になっていた。

「落ち着け、そのままでは持たないぞ……」

私がペットボトルを握りしめた直後、まるでこちらの思念が伝わったかのようにナイスネイチャがペースを落とす。

段々と落ちる。スタミナ切れにしては速い。落ち着いたのか。

……しかし、牽引した距離は長かった。ここに至って、全体の速さはそう易々と変わらない。

ナイスネイチャが沈んでも、ウマ娘達は引き際を見失ったように足を速めたままだ。

既視感があった。この序盤の焦燥感、牽制は……。

「……ん？」

よく見ると、ナイスネイチャの口元が動いていた。

呼吸ではない。それだけでなく、明確に何かを喋っている。

……驚くべきことに彼女は、レース中に言葉を発していた。

だが走りは疎かになることもなく、コーナーでは華麗に曲がり、息を入れていた。坂での足運びも抜群に上手い。

それでありながら、口元はお喋りに興じているかのよう動き、両目はレース全体を観察するように忙しなく動いていた。

何かをしている。一体何を？

「まさか……挑発か？」

ナイスネイチャに何度も並んでいたウマ娘が自棄を起こしたように早すぎるスパートに入った。

表情には苛立ちと、抜き去ったことによる勝ち誇った余裕が見て取れた。

だが、あのペースでは持つまい。私から見て前方集団のほとんどは壊滅的。

……間違いない。彼女は言葉巧みに相手を挑発し、掛からせたのだ。

「……不思議な走りをする。巧く、器用で……だが、速くはない」

ナイスネイチャは不思議な走りをした。

コースの要所で加速と減速を繰り返し、結果としてレース全体で揺れ動くように進んでいる。絶え間なく動く口元と相まって、まるで走り慣れた者が力を抜いて流しているような、そんな軽薄な印象すら受けた。

だが、きつと違うのだろう。

彼女は本気で走っている。力を抜いているように見えるのも要所での加速技術によって山があるだけで、なだらかな直線ではむしろ苦手とするように必死そうな顔を見せていた。

速度は……ない。彼女には卓越した豪脚も、凄みもない。

だがそれでも本気だった。最後の直線間際で一気に先頭集団を抜き去る彼女の鋭い眼光には、ただただこのレースに投じた魂の片鱗のようなものを感じられた。

「なるほど……これが、ナイスネイチャの走り、か」

彼女は最後の一人と並んだ際にも何かをささやいて、そのまま盗むように一着をもぎ取ってみせた。

最後の最後まで競り合ったせいaka観客の反応は悪くない。だが、レース全体としてペースが崩れたのを疑問に思っているような顔つきもあつた。

……会長が気にかけてほしいと言つた理由が理解できた。

ナイスネイチャ。彼女の走りは本当に面白い。

レース中にいくつもの仕掛けを施し、牽制し、駆け引きし、焦らせ、躊躇わせ……勝利する。誰もが持ち前の脚に全てを託す中で、彼女だけは脚だけでなく、全身を使って無数の技を駆使していたのだ。

走りながらの挑発。睨み。私はそれを卑怯なこととは思わない。その程度のやり取りなど、レース中いくらかでもあるからだ。

だが、ナイスネイチャのようにさまざまな手を一度に使う者は多くない。いや、存在しない。

存在しないのはルールに違反しているからでも、マナーに反するからでもない。

きつと、誰もそれら全てを一度に使いこなせないだけなのだ。

ナイスネイチャは様々な小手先を一つのレースの中で幾度も利用した。

……小手先。小細工。いや、これほどの駆け引きをこなすのは、もはや……。

「……ふふ。面白い奴だ。彼女のごことは、よく見ておくことにしよう」

思いの外、良いレースだった。

それに、彼女の走りの中にはどこか……皇帝の薫陶を感じた。

会長がテイオー以外を最真にするなど珍しいことだが、レースを見ればその気持ちもわかる。

最初は笑いの波長が合っているから気にかけているのかと邪推してしまつたが、うむ。これは反省しなければなるまい。

しかしナイスネイチャ……きつとその道は、修羅の道だぞ。

バクシンの逃げ対策

レースで二連勝したなんて経験、東京に来てからは無かった。

だからさすがの私も少しは浮かれてしまったし、安易に「次の2勝レースもいけるんじゃない？」とかなんとか思っちゃったわけで。

「いやあ、完膚なきまでにボコボコですわ……」

はい。ネイチャ成敗されました。

18人立てレースで結果は6着。なんとも言い難い難い着順だった。まずね、人数が多い。

スタート時に前へ突出する牽制はそこそ上手く決まったんだけど、それ以降はズタバロだった。

私の駆け引きやトリックは個人には有効だけど、大勢がいるとそれら全てに通用しにくいものだったのだ。いやもちろんわかってたんですけどね……。

逃げウマ娘たちは私の小細工が見えなくなるくらいさつさと先に行っちゃやし、かといって中団でまごついていれば最後には後方の追い込み集団にも抜かされる。結果の6着だ。私がやったことは息を切らしてワタワタしながら、中団のウマ娘たちのペースを引つ掻き回すことだけだった。他の人達に塩を送っていただけと言っても良い……。

調子に乗って友達レースに呼ばないで良かった。さすがにこうもメタメタに負けるレースを見てもらうわけにもいかないしね……。

「対策は必須、かあ……」

今の私はプールで泳いでいる。レース後の体に負担の少ない全身運動と心肺トレーニングが同時に行えるので、お気に入り。

夏も終わって利用者が少しずつ減ってきたので、居心地も悪くない。近頃はよくここを利用している。

「それと、やっぱり相手が強くなってるよね……なかなかペースを乱されないというか、賢いというか」

水の中では考え事が捗る。私はこういう時間が好きだった。

ゆったりと壁をキックして惰性で泳ぎながら、天井に吊られた明る

い照明を見上げる。

……眩しい。

「中団後方につけてレース展開を見守るのが常道だったけど……そのせいで先頭の逃げウマ娘にちよっかいをかける機会が減っているんだよね……他の人達を前にけしかけられないと、相手に干渉すらできない」

露見した私の弱点その1。逃げウマ娘に弱い。

とうかこれは元々わかっていた。先頭を切つて悠々と走るウマ娘を邪魔する方法なんてほとんどない。横に並んでささやく？ そんな大道芸ができるなら私は小細工に手を出していない。普通に走るわ。

「かといつて最後方を疎かにしてると、こつちもなー……ロングスパートをかけるステイヤー達のペースの硬さといったら、もうなあ……」

弱点その2。ステイヤーに弱い。

長距離を得意とするウマ娘……ステイヤーは、元々がスタミナ管理に慣れたウマ娘だ。スタミナ管理のできるウマ娘はラップの乱れも少ないし、動じにくい。特に最後尾につける人たちなんかは前側の様子をじっくりと観察できるので、トリックを見破りやすくもある。私にとつて干渉し辛く、乱し難く、それでいて粘り強いという最悪の手合だった。

この二種類のウマ娘が当面の課題になる。けどその二つは一番前と一番後ろにいるわけで。私がレース中に前と後を往復できれば話は早いのもかもしれないけど、まあ無理ですわ。

……同時に解決しようとするのはやめよう。私が焦っても意味はない。

一つずつ問題をクリアしてかなきゃ。

「……ヒントが欲しいなあ……逃げウマか、ステイヤーか……どつちかに詳しい人から、何か……」

「むむっ!? ステイヤー!? 私の事を呼びましたね!？」

「つてうわあ!？」

至近距離から聞こえた声には私は体勢を崩した。水を飲みかけちやつたじゃないの……一体なにさ。

咳き込みながら顔を上げると、すぐ隣のレーンにはいつの間にか澆刺とした雰囲気のマダムがいた。

ああ、有名人だ。彼女の名前は知ってる。彼女は

「サクラバクシンオーです！」

……そう、サクラバクシンオーさん。

「学級委員長です！」

うん、学級委員長という話も聞いている。

トレセン学園で過ごしていれば一日にだいたい一度くらいは彼女の声を聞く。いつも「バクシンン！」と叫んでいるのでとてもわかりやすい。

噂も豊富だ。私は実質初対面だけど、耳に挟んだ話が豊富すぎて彼女からの自己紹介がいらなくらい知っている。

彼女は度を越えすぎたせつかちさんであり、バクシンであり……非常に優秀な逃げスプリンターであるということだ。

……ん？ そういえばさつき……。

「えーっと……バクシンオーさん、ステイヤーでしたっけ……？」

「はい！ ステイヤーです！」

あれ？ そうだったかな？ 彼女は短距離しか走れないって聞いたけど、記憶違い？

私はそういうタイプでもないんだけどな……。

「見たところ何かお悩みの様子。悩んでいる人を助けるのは学級委員長の義務！ その内容が逃げとステイヤーであるならばもう世界を探しても相談に乗れる学級委員長はこの私一人しかいないでしょう！」

「そうかなあ……そうかも……？ あ、私ナイスネイチャっています。ネイチャでいいですよ」

「さあネイチャさん！ ご質問ご要望をなんでもどしどしお寄せください！ さあー！」

うーんすごい勢いだ……面倒見が良くてとても親切なのは伝わる

けど……。

「そうね、まあ……相談してみよう。サクラバクシンオーさんが強いのは間違いないのだし、ヒントが貰えるかも。」

「あの……私、今レースで……他のウマ娘をどうにか遅くできたらなーって考えていて」

「……はて？ 他を遅く？」

「ああつまり、あれです。他のウマ娘を焦らせて、疲れさせたいんです。追い込みや逃げのウマ娘を」

バクシンオーさんは暫し難しそうにギョツと目を瞑った後、カツと開いた。

「出ました！ バクシン模範アンサー！ 答えは簡単、先頭を走ればいいんです！」

「ええ……」

「ネイチャさんが先頭を走れば誰しも慌てることでしょう！ 1着になれるのはただ一人ですからね！ 誰かに先頭を走られると慌ててしまうのは当然のお断りです！」

「お断り？ いやまあ確かにそうですね……んーでもその理屈だと最初の牽制とほとんど変わらないなあ……それに私だいたい中団後方にいるし……できれば中盤や終盤に焦らせたいけど……」

「ふーむ……？ ふむふむ……わかりました！ じゃあ先頭を走っている人達に猛追している様子を見せましょう！ そうすれば焦ると思いますよ！」

さつきから力技っぽいアンサーが多いんだけど本当に大丈夫ですかバクシンオーさん……。

「先頭集団には簡単に近づけないですよ……逃げウマに姿を見せるなんてこともできないし……」

「できますよ！ コーナーです！」

「……コーナー。ですか？」

「はい！ 私も先頭でコーナーを曲がってる時だけは、わりと横目で全体を確認しますから！ 列が曲がっていると後ろが見やすいです！」

……そうか、コーナー。そこなら先頭集団でも、後ろを走るこつち

を確認できる。

確認できるってことは、見えるということ。見えるということは、私からも少なからず影響を及ぼせる。

その瞬間だけでも、スパートよろしく一気に加速する様子を見せてやれば……先頭を走っているウマ娘たちも、焦るかもしれない。

これなら距離が開いていても有効だ。なるほど……！

「ありがとうございます！ バクシンオーさん！ 盲点でした！」

「はっはっは！ レースのことならなんだって聞いてください！ 私は学級委員長ですからね！」

「……じゃあ、せっかくなんで……ところでバクシンオーさん、ステイヤーって言ってましたけど、今まで長距離のレースとか出てらしたんですっけ……？」

「いいえ、出てません！ 短距離とマイルだけです！ ですがそろそろ長距離に挑もうかと！」

「えっ？」

「なので今日からここで、スタミナトレーニングを重点的にやろうとしているわけです！ 出走まであと3日なので、バクシンのトレーニングで間に合わせませす！」

「3日?!」

「それではネイチャさん、ご健闘を！ うおおおお！ バックシーン！」

「うわっぶ……ど、どもでした……」

バクシンオーさんは派手に水柱を上げる激しいバタ足で泳ぎ去っていった……。

ちなみに三日後、バクシンオーさんは学園のコースで1600を走った後、同じ日に本番のレースでも1600を走ったのだそうだ。

長距離とは？ ステイヤーとは一体？

私は深く考えるのをやめた。

とあるウマ娘から見たラフプレーの真相

二勝クラスレース。

最低でも最高でもない。けど、真ん中よりはずっと下のレース。それをよく見るなら、そう。多分、観客たちが将来有望なウマ娘を見出すために足を運ぶレースっていうやつだろう。

通ぶった観客に偉そうな眼で見られながら走らなきゃいけない、クソツタレなレース。

G I からⅢが上澄みだとすれば、ここは底にへばり付いたヘドロの真ん中だ。

「……さて、走らなきゃな……」

私はヘドロの常連。観客が望む『将来有望』ではない、ここらに留まって一年にもなるただの賑やかし。

上澄みになれない、水底で腐った数多くいるウマ娘の一人だ。

勝ち上がれない。一着を取れない。

メイクデビューも1勝クラスも勝ち進んだ。快調だった。ただ、そこからがどん詰まりだった。以降は勝てず、調子が良くとも三着や四着に甘んじる日々が続く。

トレセン学園に入った時は花だった。勝てたし、私は強かった。

けど負けが込み続けると、最初は期待をかけてくれたトレーナーの指導からも熱が失せ、数いるウマ娘達と一緒に放置されたような自主トレを促されるようになった。

単調な基礎トレばかりの日々。掲示板に映らない自分の番号。

焦る間にも季節が一巡りし、戦績が新入生と並ぶに連れ、恥を嫌った古い仲間たちは次第に地方競バへ戻っていく……。

「私は戻らんからね……」

ダートばかりのレースは嫌い。

私は芝に憧れて中央に来た。

ここは泥を被らんでも良い、まっさらなターフ。

……ここに惨めはない。

地方に行ったら私は終わる。私は絶対に諦めない。

「あ……」

ゲートに入る前。レース前に入念に柔軟をするウマ娘たちの中に、見知った顔があった。

年下の混じり始めたライバルたちの中で埋もれるように存在する子。

ふんわりとした茶髪を左右に結ったウマ娘……名前は、ナイスネイチヤ。

「貴女がナイスネイチヤね」

「え？」

気付いたと同時に、私は声をかけていた。半分くらいは勢いだっ

た。
「私はピナクルターキー。モロゾフウオッチの友達……つつても知らないだろうけど。……貴女、1勝クラスのレースで私の友達にラフプレーをしたんだってね」

「ええ……ラフプレー？ さすがにそこまではやってないけど……」
「あの子は氣イ弱いから言わんかったけどさ。私には話してくれたんだよ。ナイスネイチヤって奴が隣で声をかけてきたり、ペースを乱してきたりで集中できなかつたってね」

ナイスネイチヤは困ったように頭を掻いていた。顔立ちも、仕草も、ラフプレーをしそうな感じはない……けど、あの子が嘘をつくとも思えない。本人もすぐに否定しないところを見るに、思い当たるフシはあるんだろう。つまりそういうことだ。

「んー……それは多分、その子が貴女の勘違いじゃないかな？ 私、ラフプレーなんてそんな真似できるほど度胸あるウマ娘じゃないですし。たはは……」

「しらばっくれるのか」

「ネイチヤさんはラフプレーなんてしてないですよー、ええ。……ま、その子のペースを乱したのは間違っていないけどね？」

「な……」

「おかげさまでここにこれたよ。ありがたい話ですなあ」

ナイスネイチャはにやりと笑い、口元をふわりとした髪の中に隠す。

……私は頭を落ち着けた。

ここでのがなり立てたってどうしようもない。

「……あんたは勝たせない。レースで潰してやる」

「あらら、ラフプレー宣言……?」

「そんなことするわけない。徹底的にマークしてやる。今日はアンタに勝ち……絶対に渡さない」

「……へえ」

ナイスネイチャは面白そうに目を細め、唇を撫ぜた。

「んーまあ、やめといた方が良いと思うけどねえ……」

「怖気づいた? 私はやるよ」

「いやそうじゃなくて。貴女は自分のために走ったほうがいいよ。私は一番人気でもないし。もっとマークする相手はいるでしょ。敵討ちのつもりなのか知らないけど、今日の勝負を捨ててまでやることかねえ、それ」

「……」

「それに、私をマークしたって上手く走れないと思うよ。ホント」
「随分な自信じゃない」

ゲートイン。各ウマ娘、枠に入って横並びになる。

緊張の時間。心がざわつく、いつまでたっても慣れない一時。
ガタン。

ゲートが開く。

「……!」

ナイスネイチャが前に出た。速い。けどその姿を脳裏に焼き付けていた私は、反射的に本能で足を出すことができていた。

追いつがる。

……速い。いや速すぎる。他にも沢山有力バがいるのに前を譲らない。
逃げウマ娘か!?

聞いてない。私は差しウマだ。このままだとペースがもたない

……。

「うつ……!?!」

と思つたら、減速を始めた。早すぎる。逃げ……じゃ、ない!?
こちらも合わせるように思わずペースを落とすが、当然後続からの
ウマ娘達が追い越してゆく。焦燥感が募る。どういうことだ? な
にを企んでいる?

「ごめんね。前には、行かせないよ……ッ」
「!」

ナイスネイチャが横に並んだウマ娘に何かを喋っている。

なんだ。手出しはしていないけど……あれは……。

「くっ……!?!」

と思つたら、再びナイスネイチャは加速した。坂の上。普段よりも
パワーのいる走路で逆に速度を増した変則的な動きに戸惑う。

「このペースだと、平年のラップを、下回りそうだね……!」

「くっ……!」

「あの子は速いよ。もうずっと先頭、追いつけないんじゃない……ッ
?」

「そんな……こと、……あああッ!」

愕然とする。

ナイスネイチャが後続のウマと並ぶ度に、近づく度に、それぞれに
何かを囁いている。

暴言ではない。しかし競争心を煽るような、危機感をくすぐるよう
な言葉を巧みに操り、ウマ娘たちのペースを乱している。

「うつ……!?!」

かと思えば、コーナーの始めで急加速。中団後方でゴニョゴニョつ
ぶやいていた所から突然のスパートに、ナイスネイチャをマークして
いたはずの私でさえも出し抜かれる。

「なん、なのよ、もう……!」

その急加速も瞬時に萎む。まるでシャトルランでもするようない
瞬だけの加速だった。

だというのに先頭のペースはそれに釣られたよう速度を増して、バ

群全体が間延びする。全体が焦る。……息が、切れ始める。この私でさえも。

「はあ、はあ……！」

「ほら、言ったじゃない。私をマークしても、無駄だつて」

「うるさい、な……！」

「おしゃべりに付き合うなんて、真面目だね、貴女……私としちや、そういうの、嫌いじゃないけどねッ……」

ナイスネイチャの走りは、変則的すぎた。

多分、そんなに速くはない。けどそれは問題ではない。

彼女のペースはあまりにも不安定で、マークする相手として絶対的に不適合だった。

彼女は速度にムラがありすぎる。坂の上り下りを苦もなくこなしかと思えばその後の直線では緩み、しかしコーナー付近では急激に勢いを増し、器用な足取りで曲がってゆく。

私が苦手とする場所を逆に得意であるかのように走り始める。本来溜めるべき場所で足を解き放つ。

あまりにも無茶苦茶な走りをするウマ娘だった。

「この位置から、追い抜けるんだ……自信、あるねッ……」

「! ……ふっ、ふっ……ッ！」

そんな走りをしながら、彼女は並びかけたウマ娘たちの耳に小さく言葉を囁いてゆく。

その度に相手は勝負を焦るようにペースを早め、無視を決め込もうとすれば前を塞ぐように走り、否応なく前に行きたくなる展開を押し付ける。

嫌なことをするウマ娘だ。嫌がることを熟知している奴だ。

ナイスネイチャ。こいつは……!

「はっ、はっ……！」

「限界、きちやったね? 私とおしゃべり、付き合っちゃったから……ッ」

マークは失敗だった。ナイスネイチャの走りは追従しようと思っ

てできるものじゃない。波の強すぎる彼女の走法は、私の体力を普段以上に強く蝕んでいる。

でも……負けない。

この子は嫌な奴だ。悪いやつだ。卑怯なやつなんだ。

モロゾフウオッチは浮かない顔をしていた。あの子も地方から来たんだ。

あいつは友達なんだよ。私と一緒にでよそから来た子。今年中に勝ち進めないと、あの子も、私だって……！

「モロゾフ、ウオッチ……先行、芦毛、小柄だけどパワーがある……！」

「……！」

「マイル向きだったね……！ 途中、私もちよつと、少し焦ったし……！」

「！」

「あ……！」

ナイスネイチャがスパートを掛け始めた。

私はそれに追いつけない。

すぐに突き放されていく。

彼女は前から崩れ落ちてゆくウマ娘達を追い越し、一気に先頭へと駆け上ってゆく。

まるで一年前と同じ。

私が最初につまずいたその時のように、キラキラしたスターの原石が、流星のように私を置いてゆく……。

「ナイス、ネイチャ……！」

さして速いわけでもなかったであろう彼女は、それでも疲れ果てた私達全てをすりぬけるようにして前に踊り出て、1着でゴールを通過した。

何度も見た景色。私よりも先にゴールするウマ娘の背中。

3着が決まり、4着が決まり……私は5着。

「はあ、はあ……！」

五着。月並みな敗北。いつものような平凡な順位。一年間変わらない、私の現実……。

「……ははっ」

ギリギリ入着だ。私の番号も掲示板に映る。

……けど、掲示板に写ったものを見て、私は思わず笑ってしまった。「ひどいタイムだなあ……」

そこに並ぶタイムは、一位からして既に遅め。大して速いわけでもない、平凡なものでしかなかった。

私は、私達は……そんなナイスネイチャに負けちゃったわけだ。

「どう？ 納得した？」

肩で息をする私の横に、ナイスネイチャがやってくる。彼女も息を切らしていたが、瞳は勝利のせいキラキラして見える。

「……へへ、するもんか……次やったら、負けんからね。絶対に……！」

「そう……私は楽しみに待ってるから、ピナクルターキー。ま、貴女の本来得意とするダートとかマイルじゃ、あんまり走りたくないけどね？」

「……！」

「ライブが始まるから。ここらへんで。じゃー！」

そう言っ、彼女は向こうへ駆けていった。

「……ナイスネイチャな。次からは私も、予習しておくよ。あんたのこと。あんたのレースをさ」

観客の少ないレース場。慣れきった格落ちの静けさ。

……今日は帰ったら、自主トレーニングの内容でも見直してみるか。

ナイスネイチャのイケナイこと

二勝クラスにも勝利し、三勝を掴んだ私。戦法は大きく変わったけど、そのおかげでここまで勝ち抜いてくれたのだ。今や他人の脚を引つ張るこのやり方がマグレだとは言わせない。

とはいえ、勝利の代償はトレーニングの手法が変わっただけにとどまらない。

性格の悪い戦法を常々考えていると、私自身もなんとというか、ちよつと目の付け所がいやいやな感じになっていくわけでした。

レース中に使えるんじゃないかってことを普段から探しているうちに、他人の弱点を粗探しするようになってしまったのは、うん……自分でも地味に辛い変化だった。

良いところを探して「よし！ じゃあ自分も！」ってな感じに高め合える関係って健全だったんだなあとしみじみしちゃいますわ……。

いや、今のやり方でやっていくのが自分には合ってるんだって、わかってますけどね？ 一応……ははは……。

「貴女、ナイスネイチャね。この前のレースではどうも。一着おめでとう」

そして変化といえば、こういう変化もあるわけで。

食堂で程々に食べた直後、私はちよつぴり険のある顔をしたウマ娘に廊下で呼び止められた。

彼女の名前はニシキドライバー。二勝レースで一緒になった差しウマ娘だ。レース中にも何度か前を塞いだり、近くで囁いたりしたのを覚えている。

「あはは、ありがとう。……っていう普通の返しは今では求めてない感じかな？ これ」

「よくわかってるじゃない。あんな……あんなレースで勝つなんて。その前のレースでも同じだったんでしょ。貴女、なんとも思わないん

だね」

「あー……」

ちよつと意外だった。意外すぎて、今結構言葉に詰まっている。別に想像してなかったわけじゃないんだ。

人の足を引っ張るやり方をしていれば、どこからか批判みたいなものが飛んでくることだってある。

けど私は、同じレースを走るウマ娘から言われるとは思っていなかったのだ。

「負け惜しみ……?」

「……ッ」

「ってダイレクトに言っちゃまずいか。……んーでも、他に言葉にしようがないし……ねえニシキドライバー。貴女は納得できなかった?」

「……名前、覚えてるのね。ええ、納得……できなかった。だって、正々堂々としてないし……」

「でも私はルール違反はしてなかったでしょ? ルールの範疇で試行錯誤して、それで私が勝ったの。……これ以上は貴女、良くないよ。わかるでしょ」

ニシキドライバーは唇を震わせている。……性根の真っ直ぐなウマ娘らしい。

あまりにも真っ直ぐなものだから、頭では仕方ないと思っけていても心の方で納得がいかなかったのだろう。……そういうこともあるんだな。気をつけなきゃ。

でも、勝負は勝負。私はそれで勝ったんだ。

既に決着したレースの結果にケチをつけ始めたら、レースに臨むウマ娘としてこの先どんどん辛くなっていくはずだ。私は自分が責められていることよりも、むしろそっちのほうが気がかりだった。

「私は規則に引っかかるような悪いラフプレーはしてないから。土をかけたり、蹄鉄で蹴っ飛ばしたり、ぶつかったりとか、そういうのね。……私はただ、こうして」

「え、あつ、ちよつと……!」

顔を彼女の横に寄せる。

「貴女のすぐ近くでささやいただけ。それくらいなら、悪いことじゃないの」

「や、やめ……」

「今ちよつと嫌な感じがするでしょ……？ 私はただこういう、ちよつとしたいけないうことをレースで失格にならない範囲でやるの……ねえ、わかった……？」

「……」

「わかったなら……あれ？」

顔をどかしてみると、ニシキドライバーの顔は真っ赤に染まっていた。

「わ、わ、わかったけど、やっぱりイケナイことーッ！」

……。

え、ちよつとちよつと！

私今さらつと変なことしちゃったけど！

「ご、ごめん！ そういうのじゃない！ 私そういうのじゃないからー！ 待って誤解してるうー！」

「おい、廊下で騒ぐんじゃない」

「ひええ！ 違うんです違うんです！」

ニシキドライバーに逃げられた上に、その様子を生徒会のエアグルーヴさんに見つかってしまった！

駄目だ終わったかもしれない。こんな冤罪で生徒指導が入るなんてさすがに嫌だよ私も……！

「ひとまず落ち着け。……ナイスネイチャ、だな」

「は、はい。ネイチャです……けど。あのー、今のは本当になんでもないことなので、あまり追求されても……ですね、あはは……」

エアグルーヴ。『女帝』とも呼ばれる孤高のウマ娘。

学園生活でもレースでも誇りと結果を求める、私とは世界の違う人だ。

何度か生徒会の仕事を手伝った時に顔を合わせたことはあるけど、こうして向き合って話すのは初めてかもしれない。いや、初めてでこ

のシチュエーションはちよつと嫌だな……。

「ナイスネイチャ。貴様には少しだけ話がある。……後で生徒会室に来るようにな」

「……はひ」

「返事になっていない」

「はい……」

「どうしよう……」。

ルールの上では問題なくても、天罰みたいなものはしっかりと下るように出てくるのだろうか……。

求められる姿

e. Eclipse first, the rest nowhere

部屋に飾られたその標語は、かつて存在したという一人のウマ娘に対する賛辞であり、事実らしい。

唯一抜きん出て並ぶもの無し。その言葉がトレセン学園の生徒会室に掲げられていることの意味を思うと、この部屋そのものから威圧されているような気になってしまう。

「まあ、楽にしてくれ。今日は仕事を頼もうというわけでもない」
しかし対面のソファアに腰掛けたエアグルーヴさんからは、私に対する気遣いが見えた。

当初は廊下での出来事についてお咎めをもらうのではないかとビクビクしたけど、この感じだとそうではないらしい……。

「遅くなっちゃったが、ナイスネイチャ。三勝おめでとう。一度だけレースを見させて貰ったが、良い走りだった」

「えっ……ありがとうございま……見てたんですか？」

「二勝クラスのレースをな。会長も貴様のことを気にかけているようだったぞ」

「……あはは、私そんな大したもんじゃないですけどねえ……」

「貴様のレースを見てそう思うウマ娘はそう多くないだろう。……見事なものだ。この私をして、ナイスネイチャ。貴様ほど器用には走れないだろう」

どうやらエアグルーヴさんには既に私のスタイルを見抜いているようだ。

まあ、この人ほどの実力があれば一レース見るだけで充分か。だとすると観客の間にもほとんど伝わっていると見た方が良さそうかな。

「……ナイスネイチャ。貴様の走りは見事だ。少なくとも私自身……いや、多くのウマ娘達はそれを否定しないだろう」

エアグルーヴさんが言いにくそうにしている。

さすがになんとなく、話の流れがわかってきた。

「観客はそうは見ない、つてことですかね」

「……ウマ娘のレースは世界中で親しまれている。人気も高いがそれ故に、一部には我々に独自の理想を押し付けようとする者もいる」

「ラフプレーギリギリの戦術を多用する汚いウマ娘。スポーツマンシップに悖る妨害ウマ娘……いやあ、今からでも見出しが眼に浮かぶようですね……」

「……そこまでわかっているなら、楽観視しているわけでもあるまい。……辛い道だと理解しているのだろう」

親身だ。優しいな。エアグルーヴさんは完全に私の立場に寄り添って助言してくれている。

そう。私のスタイルはお世辞にも綺麗なものではない。

ウマ娘達からの理解は得られるだろう。けど、それと多くの観衆に認めてもらえるかどうかはまた別の話だ。

レースはスポーツだ。そしてスポーツには、どうしてか崇高さや清廉さが求められる。走る当人ではなく、それを見る側の人々が求めている。

爽やかに汗を流し、美しく切磋琢磨し、真っ直ぐに成長し、そしてゴールを切る。人々はそんなキラキラしたドラマを求めているんだ。冠を取る瞬間を。レコードを叩き出す瞬間を、誰もが心待ちにしている。

私のような走りはきつと、疎まれるだろう。

いつしかウマ娘界のヒールとして、映りの悪い写真を紙面に掲載され続けるかもしれない。

「実を言えば既に……ナイスネイチャのレーススタイルに対する取材の申し込みが学園に入っている。小さなWEBニュースからの取材だった。あまりに横柄な態度であったから断ったがな。それでもこれから貴様の走りに注目するメディアも増えていくだろう。トレセン側としては、悪意ある取材は拒否できるが、それでも……」

「耐えられますよ」

私は先回りして答えた。

「私は一着が欲しいから」

そう、一着が欲しい。銅でも銀でもない、金色のキラキラが欲しい。そのためならできることをする。なんだってやる。私のスポーツマンシップに反しない限り、あらゆる手を尽くして他人の足を引っ張ってやるのだ。

私の勝利にレコードはいらない。欲しいのはただ、最初にゴールを切る瞬間だけだ。

「それに、メディアとかに注目されないと困るっていいですか……だからできる限り、取材も受けないな……って」

「……無謀だ。貴様はメディアの悪意を知らなさすぎる」

「注目されてなくちゃ、意味がないんです」

テーブルの片隅に一枚のコインを置く。

「む……」

エアグルーヴさんはふとそちらに目をやり……気付いた時には既に、私に出されたお茶の中で一輪の花が咲いていた。

ミスディレクション。視線を誘導する手品の基礎にして、私の小細工の過半数でもある。

「私は弱いです。なんというかまあ、普通に遅いので。……走っても走っても、ほとんど伸びない。タイムが全然変わらない。普通だったらそんなウマ娘は誰もマークしないし、気にも留めません。……そうになると、私の小細工の効力が弱まってしまふんです」

「……あえて悪評の流布を許すことで、注目されたいというのか」

「いつそ乗ってやってもいいですかねえ。演技にはあまり自信ないけど。ははは……」

「本気なんだな」

「まあ……わりと、最初から」

他人の足を引っ張る。そう決めた時からずっと考えていたことだ。考えることだけは得意だし、それだけの時間はあった。覚悟はどうにできている。

「……そう、か」

エアグルーヴさんは私のお茶に挿された花を机の花瓶に戻し、考え

込んだ。

そう長い時間でもなかった。彼女は怜悯そうな目を私に向け、よしと頷いた。

「ならばナイスネイチャ。これからは定期的に私と並走しろ。個人的にトレーニングを付けてやる」

「へえっ？」

驚きすぎて変な声出ちゃったんですけど。

「本気ならば、技術だけではなく基礎にも全力で打ち込め。貴様が遅いと思うならば速く走れるようになるまで、私は付き合っただけでやる」

「え、いやあ……そんな女帝と呼ばれるエアグルーヴさんにそこまで手を煩わせるのは、私ちよっと」

「苦手な部分に目を背けるな。……安心しろ、無駄骨にはさせせん。私も小手先の技に詳しいわけではないが、追いつける相手に対抗する術であれば、多少は覚えがある。少なくともそれだけは、貴様の流儀に反するものでもないだろう」

「！」

後ろから追いつけてくる相手の対策。そんなことにまで協力してくれるなんて。

「そしてナイスネイチャ。一時の悪評に苛まれることは仕方なしとしても、その状況に甘んじるな。貴様が本気だというのであれば、自分の走りが技術の結晶であるのだと……いずれは世間に認めさせ、誇つてみせるのだ」

「……なんで副会長さんは、そこまで私に？ 同じチームでもなんでもないのに……」

「しれたこと」

エアグルーヴさんは少し照れ臭そうに笑った。

「貴様の、……計算し尽くされたあの美しい走りが、不当に貶されるのが我慢ならない。同じウマ娘としてな。……ただ、それだけのことだ」

追い込みへの手立て

副会長さんに気に入られたのか目をつけられたのか。

まあ悪い方に考えなければ多分そのまま気に入られたんだと思うけど、それにしても厳しすぎるシゴキを受けています。ナイスネイチャです。

「タイムが落ちているぞ！」

「む、無理いー……！」

「無理ではない！ 貴様ならばできる！」

「いやもうほんとこれ以上は……！ ダメージが長過ぎるタイプの駄目な筋肉痛がくるやつですって……！」

「そこまで喋れるなら問題あるまい！ さあ、追い込みいくぞ！」

「ひいー！」

エアグルーヴさんの課す特訓は、とにかく走り込むというものだった。

走って走って、限界近くまで走ってそこから更に速度を上げる特訓である。しかもラストにはエアグルーヴさん自ら追い込み役として迫ってくるので、プレッシャーが凄い。

「うわあ来てる来てる……！」

「抜かされるなツ、速度を上げろ！」

「無理無理無理ですって！ これ以上は本当に無理！」

「……っ……息が続くのに、速度は出ない……難しいところだな……！」

もう二週間ほどこんなトレーニングに付き合ってもらっている。

私も、まあ……その、こういう基礎トレーニングをやらなきゃいけないってことはわかってたし、とてもありがたい。

ありがたいんだけど、私の現実突き合わせてしまう申し訳無さも同じくらいあるわけで。

私は良いトレーニングになるよ？ なりますとも、ええ。副会長さんはこういうトレーニングの補助に慣れているのか、一人で色々講じ

るよりもとつても充実してますとも。

でも、エアグルーヴさんの方には……何の益にもなっていないんだらうなど、思ってしまうのだ。

「……ナイスネイチャ。今更ではあるが……このトレーニング中、いつもの走り”をしていないな？」

「え？ まあはい、そりや、まあ」

トレーニングに付き合ってくれてる相手を翻弄するなんてできるわけもないですし。

「そうか……であれば、一度レースでやるように走ってみろ。私は後ろから追い上げる。目標ペースは各区画で一定を指すとしよう」

「？ はあ、わかりました。お願いします」

小休憩を挟んでから、再び走り込みの開始。

けど今度はいつものように。レース中、副会長の脚を引っ張るようにやっていく。

「では、始め」

走り出しはいつものように加速。エアグルーヴさんとの距離を自分から突き放す。

さあ、いつもは作戦を練ってから試合に臨むものだけど、ここからはアドリブだらけだな。

でも基本理念は変わらない。相手の嫌がることをするだけだ。

「副会長さん、ラップタイムは何秒でしたっけ」
「む……」

前の方で相手に聞こえるか聞こえないかの問いかけ。

それなりの速度を出しながら、トレーニングに関係のありそうな言葉で話しかける。自然とエアグルーヴさんは仕方なしに速度を上げ、私のわざと小さく絞った声が聞こえる位置まで急いでくれた。

「今までと、変わらないが」

「ああ、じゃあ速度落としたほうが良いですよね？」

「そうだろうか？ このままでも、いや……」

そこまできて、ようやく副会長さんも気付いたようだ。

はいそうです、もう既に邪魔してます。息を切らせるように話しか

け続け、相手のコースを邪魔して前を塞ぐ。コツは速度の波の中で前を取ることに、相手に文字数の少ない質問ばかりを投げかけることだ。

「なるほど、な……………」

「グルーヴさんは、喋れないですか？」

「なに、私くらいならば、この程度」

「まあ、得手不得手はありますからね……………」

「……………言うじゃないか。だが、この程度なら……………ツ!?」

言葉数多く吐き出して、相手の肺が振り絞られたその瞬間を見破り、加速する。

「……………」

深い息を入れようとした寸前での急加速に、背後から慌てた気配が漂ってくる。

まだまだ。これくらいでは終わらせない。このペースを保ったまま、前を塞ぎ続けて……………!

「ふツ……………」

「つてうわあー」

と思ったら即抜かれました。

後少して前を譲らないまま勝てるかなーと思ったら、まあ最後の最後のスパートでやられましたとき。……………うーん、駄目だな。やっぱり地力の差が違う……………。

「はあ、はあ……………ナイスネイチャ。今は……………そうだな。私も初めて経験する、貴様の走りだった……………」

「……………ひよつとして、不愉快でしたか」

「いや。感銘を受けたよ。なるほど。これは確かに“素質”だな。ただ黙々と走らせるよりもずっと可能性を感じるのも無理はない」

「あはは……………基礎を疎かにしちやいけないっていうのは、わかってるんですけどね……………」

副会長さんは息を切らしながら、スポーツドリンクに口をつけた。これで今日は終わりなのだろう。私も今日はしんどかった……………。

……………コースの外側に、ちらほらと学園生の姿が見える。エアグルー

ヴさんが走っているからか、ここ数日で遠巻きに見ている人が増えたのだろうか。

「学園内にも」

私の隣で、ぽつりとそう語り始めた。

「……貴様の走り方について、とやかく言う者はいるだろう。きつとゼロではない」

「まあ、少しは。そうですねえ」

「こうして練習中に私の姿を見せることで何か変わればとも思うが……結局の所、結果は貴様自身がレースでもぎ取っていかなければならないものだ。邪魔をするだけでなく、その邪魔によつて結果を出すウマ娘なのだと、まずは学園内に理解を広め、証明してこい。……三勝クラスは、レベルも高いぞ」

できるのか？

エアグルーヴさんはそう言いたげにニヤリと微笑んで、汗を拭いた。

「はあ、もう。やりますよ。やったりしますよー、もう。ここまでたくさん面倒見てもらったら、負けられないな……」

「追い込みに対する動きは、今ので拵めただろう。私がアドバイスするまでもなかったかもしれないが……」

「いやいやそんな！ 大きなヒントをもらえました。……すごい感謝しています。ありがとうございます、副会長さん」

「ふ。こちらこそ、なかなか経験できないやり取りを学べた。実りはあったぞ？ だから、あまり卑屈になるんじゃない」

うわっぷ。

……顔に新品のタオルを投げ込まれた。

「トレーニングがしたい時はまた呼べ。こちらも生徒会とチームの活動で忙しいが……可能な限り、時間は作ってやる」

「……本当に、ありがとうございます」

「なに。後進の育成は女帝の責務だ」

女帝エアグルーヴ。

……積み上げた実績とか、就いてる役職とかじゃなく。

やっぱり凄いウマ娘なんだなど、私は再確認した。

レース前の警戒心

当人である私が言うのもあれかもしれないけど、三勝クラスのレースに出バする子たちは大体、実力が拮抗している。

なんというか、層が厚いんだよね。

みんなそれなりに実力があるし、それなりに走るんだ。

レースを見ると出走人数は毎回15人を超えている印象だし、展開も混戦が多い。

それまでにかけられてきた篩によって、粒のサイズが揃ってきたんだろう。速いっっちゃ速いけど、みんな同じくらいのスピード感だ。

混戦になるのはまあ、私にとつては有利かな。互いの距離が近いほどトリックや駆け引きは仕掛けやすいから。

それでもこのレースに臨むのはデビューから何年も経っている子も多く、ほぼ皆が走り慣れている。おかげでデータは揃ってるけど、走り慣れている相手のペースを果たして崩していけるかどうか。

他人の足を引っ張る私のスタイルが通用するのか、試されるレースになりそうだ。

「どもー、ナイスネイチャでーす！」

パドックに立った私は愛嬌を振りまいておく。

さすがにこのくらいのレストランともなれば観客も多く、既にライブ前のような賑やかさが見られる。

私の仕上がりを見る観客たちからはちらほらと疎らな声援と、ほんの僅かなざわめきが。

……なるほど。どうやら私の情報も少しは流れているようだ。

好意的なものかどうかはだいたい怪しいけど、話題が広まるのは大歓迎。記事にしてくれたって構わないよ。……でもあまり可愛くないアングルの使わないでね。

「はあー」

ゲート前。息を吐くと白い呼気がふわりと広がり、曇天の下に溶けてゆく。季節はもうすつかり冬だ。

芝2000、右回り曇り重め。

16人立てレースで、走者の傾向は多分逃げ2、先行5、差し6、追い込み3……かな。

途中で作戦を変えてくる人は何人かいるかもしれないけど、他の人らの直近のレース内容が混戦ばかりでよくわからないんだよね……。

まー、何にせよ私は臨機応変に戦っていく必要があるんですが……。今回は内枠取れて良かったよ。私は内枠絶対有利なところあるから非常に助かる。

「ナイスネイチャだ……」

おや、私の名を呼ぶ声が。

どこか警戒するようにポツリと呟いたのは、今回二番人気の逃げウマ娘、スリップギヤード。同学年の芦毛の子だ。

ほとんど話したことはないけれど、走りっぷりは何度か見たことがある。前を走っていても、しつかり後方を警戒できる。位置取りを変えて器用に塞ぐこともしばしば……なかなか強かな子だ。

「スリップギヤードだっけ？ そうそう、ネイチャさんですよー。今日のレースはよろしくお願いしまーす」

「……レース中に妨害する。……って」

スリップギヤードはそこまで口に出して言葉を止めた。

私が目を細めたのを見て言い淀んだか、自制したのか。

気が付けばゲート前の他の子たちも、私達のやり取りを遠巻きに気にしているようだ。

……おお、これはなかなか。既に私、意外なくらい警戒されてるじゃないですか。

これってまさかもう共通認識？ 妨害ウマ娘として周知されてる感じ？ ……悪くない。悪くないシチュエーションだ。

「ふうん？ アタシはこれでも真面目に走ってるんだけどなー……傷付くわあ……」

「あ、いや。違うの。……ごめんね、ナイスネイチャ」

「そんなに言うなら、見せてあげよっか？　　『そういう走り』」
「……え」

私は結んだ髪を指で遊ばせながら、不敵に笑ってみせた。

「いやー、なんかスリッパギヤードの調子が良さそうだし、一着狙える仕上がりじゃん？　　まだデビューしたてなのに、これまで快調に進んできたしさあ……や、すごいけどね。でもさすがに、今日は前を譲れないじゃない？」

「！　邪魔……するつもり？」

「あはは、人間きが悪いよお、スリッパギヤード。……今日は寒いから、怪我したら痛いよ？　　気をつけて走ろうね。お互いにさ」

なんかもーすごい悪いことしそうな奴のセリフじゃんって自分で笑いそうになるこれ。

けどそんな私の薄い苦笑いをどう受け取ったのか、スリッパギヤードは「信じられない」とこぼしてさっさとゲートに入ってしまった。他のウマ娘もちよつと嫌なものを見るような目をこちらに向け、各々ゲートに入っていく。

……やっぱり誤解が広まってるな。私のレース内容は見てないけどレースの噂だけが先行してる？　　……あり得る。ウマ娘達にも先入観が入ってそうだ。これはちよい予想外かな。いや、今のは私のハツタリも少し悪質だったかも。……さじ加減が難しいよ。

まあ、それでも走っていれば理解はしてもらえるか。

結局のところ、結果を出さなきゃ認められないのは誰もが同じなんだ。

それに、嫌われたっていいじゃない。

仕込みの観点で言えばこれは上々。走る前の牽制として見れば、今日は十二分に毒が巡っている。

あとは走り始めた身体に毒が循環するのをじっくり待つだけ。

開始前の静寂が横一列のゲートに舞い降りる。

次の一瞬にも始まる戦いに、ひりつくような集中が空気を満たす。

「あ。そういえばみんな、靴紐とか気にしないんだね？」

私のその一言に、張り詰めていた空気に一瞬の乱れが生じた。

ガタン。

示し合わせたようにゲートが開く！

「緩んでたら危ないよッ！」

「あっ」

「このッ」

「やられたっ！」

盛大に何人かが出遅れる形で、私を先頭としてレースが始まった。
靴紐？ ただのハツタリよハツタリ！

スリツプギヤードの泥試合

メイクデビューでは鮮やかな勝利を収めた。

とはいえほんの6人立てのレースだ。他もそう変わらない。デビューで初白星を掴んだ人は少なくないだろう。

それでも、デビューから続けざまに連勝できるウマ娘はというと、もつと減るんじゃないかと思う。

私はデビューからいきなり3連勝を果たし、当初は期待の新人として小さな記事にもなったものだった。WEBニュースにもなったしインタビューも……何行か載せてもらえた。

嬉しかった。元々走るのは得意だったから。

誰にも前を譲らない自分の走りに、より強い自信もついた。

勝ったからって油断はしなかった。むしろこの勢いに乗るために、より一層トレーニングにも励んだ。

けど、それから勝てなくなった。もう二連敗してる。

……前を譲らない走りが私の持ち味だったのは、逆を言えば前を走られた時に崩れやすいからだったのだ。

競り合いの経験が少なくて、圧に弱い。元々気弱な性格だとは自分でも思うし、そのせいで負けているんだと思う。

致命的な弱点だ。中途半端に速かった私は、自分よりちよつと速い子が現れるこの時になってようやく、欠陥に気付かされた。

……私は気弱だ。だからこそわかる。このままではいけない。

このまま自信を失ってズルズルと気持ちを引きずってしまえば、それこそ取り返しのつかないことになる。自分の心だ。自分が一番よくわかってる。

連敗したのは勝ち星を焦ったせいだ。

トレーナーに言って、レースプランを詰めてもらったせい。

それでも再起不可能なメンタルになるまえに、三勝クラスでも勝ち星を掴みたい。その方針に変更はない……。

……周りはみんな、強いや。

私は、今まで私が一番速いんだって思っていたけど。そんなのはただの思い込みだった。

三勝クラスには私と同じくらいの子が大勢いる。その実力止まりのまま何年も苦闘し続けている子も多い。生半可な努力では覆せないウマ娘ばかり。

私はここから抜け出したい。ここを勝って、オープン戦に乗り込んでやるんだ。

そしてもう一度、ニュースで私の名前を流してやる。WEBニュースだけじゃない。スポーツ新聞にも雑誌にも、いつか必ず……。

レース当日。

私は知ってるウマ娘に出会った。

「ナイスネイチャだ……」

ナイスネイチャ。ポリュームのある髪を左右で結んだ、どこか可愛げな雰囲気のある子。

けどその見た目とは裏腹に、少し汚い手を使うウマ娘であることを私は知っている。

彼女のことはWEBニュースで記事になっていた。

なんでも、レース中に他のウマ娘の邪魔ばかりして走りを妨害するのが得意なんだとか。

そんなの反則じゃって思ったけど、記事の最後の方には一応反則はしていないようだが……？ と書いてあったので、上手くやっているんだと思う。

そんなナイスネイチャが、同じレースに出ている。

「スリップギヤードだっけ？ そうそう、ネイチャさんですよー。今日のレースはよろしくお願ひしまーす」

「……レース中に妨害する。……って」

「ふうん？ アタシはこれでも真面目に走ってるんだけどなー……傷付くわあ……」

「あ、いや。違うの。……ごめんね、ナイスネイチャ」

「そんなに言うなら、見せてあげよっか？ “そういう走り”」

「……え」

本当は普通のいい子なんじゃないか。記事は間違いなんじゃないかと思った。

でも、ナイスネイチャは不敵に笑っている。

「いやー、なんかスリップギヤードの調子が良さそうだし、一着狙える仕上がりじゃん？ まだデビューしたてなのに、これまで快調に進んできたしさあ……や、すごいけどね。でもさすがに、今日は前を譲れないじゃない？」

私の情報を知っている？ ……怖い。

と、というか。私は別に一番人気ではないし。……ナイスネイチャが変なことを言うから、周りも私を意識し始めた。やめてほしい。

「邪魔……するつもり？」

「あはは、人間が悪いよお、スリップギヤード。……今日は寒いから、怪我したら痛いよ？ 気をつけて走ろうね。お互いにさ」

……怪我を匂わせるような言葉。心配している風に取り繕っているけど、どこまで本当かなんてわからない。

もしもレース中、危ないことを仕掛けてきたらどうしよう……。

私はゲートに入っても、強い不安に心を乱されたままだった。

……いけない。綺麗なスタートが切れないと先頭が取れないのに。

集中しよう。気持ちを切り替えるんだ。私ならやれる。一步目を大事に……。

「あ。そういえばみんな、靴紐とか気にしないんだね？」

……えッ!? まさか!?

こいつ、靴に何か……!

「緩んでたら危ないよッ！」

「あっ」

「このッ」

「やられたっ！」

いや違う！ やられた！ ただのハツタリだ！

悔しい気持ちをバネにして遅れてスタートを切る。

……バ鹿だ私！ 他の人の靴に細工する時間も素振りもなかった

じゃん！ どうして相手の言葉なんかには耳を貸した!?

「蹄鉄は、平気かなっ?」

「うる、さいっ!」

「そんな手に、もう、乗るもんかっ!」

前をナイスネイチャが走る。……逃げだ。聞いてない。この子の事はネットで調べたけど、少なくとも逃げとは書いてなかったはず。

私は5番目につけている。……速い。出遅れたとはいえ、ナイスネイチャが速すぎる。

でも、あの子に前を譲らせたくない。そんな気持ちが私たち全員のペースを速め、焦らせた。

「ここからは、ギャードの時間、かなっ……!」

コーナー前でナイスネイチャが減速した。垂れ込むナイスネイチャは内側を遮り、私達の進路を大きく妨害する。……邪魔な子だ。レース中も減らず口が止まらない。

……耳を貸してはダメだ。ナイスネイチャは後ろに下がった。ここで前に出る!

そう、私の持ち味は逃げ足。後ろを気にせず前だけを見て快調に走るのが私の長所なんだ。

だからここで、先頭に!

「……っし……!」

少しだけ脚に鞭を打って、強引に外から抜け出した。

ここからコーナーで減速しつつ脚を溜めて、次の直線でもう少し引き離せば!

「させないっ……!」

「!」

いや、追っ手が迫ってる!

さっきのナイスネイチャの言葉に唆されて、私のマークに来た……!?

このペースのままだとコーナーで息を入れるなんて……。

「逃げるつもりがないなら、さっきと追い抜くよッ!」

……! コーナーに入ってナイスネイチャが加速した!?

視界の端に姿が見える。コーナーリング上手すぎ……いやそれどころじゃない、もうスパートかけてきてる！ このままじゃやられる！ 息は入れられない、そのまま逃げよう！

「はっ、はっ、はっ……！」

コーナーは過ぎた。もう後ろは見ちゃダメだ。心が削れてしまう。このまま勢いで坂を登って、下りから直線でリードを広げるんだ。そうすれば……。

「あれ、前行かなくて、平気なのっ……？」

「うるっ……さっ！ー！」

……後ろが騒がしい。さっきからずっと話し声が聞こえる。

ぼそぼそとした囁き声だけど、それに憤る大声が時折響いている。ナイスネイチャだ。私にはわかる。声をかけて揺さぶってるんだ。でもそうはいかない。私は逃げウマ娘。ずっと先頭にいる限りあの子の声なんて……。

「坂、苦手なんだね？」

「!?」

いや、いた。ナイスネイチャがまた近くまで来ている！

どういうこと?! 最初からずっと浮き沈みの激しい走りばかり

……いや考えちゃダメだ、走れ！ 抜かされるな、前を譲るな！

「はあ、はあっ……！」

息が荒い。スタートから一度も息つく暇がない。このままじゃゴール前でベストコンディションを保てない。

でも後続はすぐ後ろだ。手を抜けばすぐさま追いつかれ、バ群に飲み込まれる。……競り合いに弱い私は、そうなったら二度と浮き上がれない。

だから走るしかない！ ダメだとわかっているのに！

自分の走りとは程遠いのに！ トレーニングで培ったものが何一つ活かせていないのに！

「ほら、最後のコーナー、ここで決めるよ……っ！」

背後から迫るナイスネイチャのプレッシャーが、追い立てられるように散発的なスパートをかける他のウマ娘が、私の走りを潰していく

……！

「はあ、はあっ、はあっ……！」

ラストの直線。本来なら残した足でコーナー終わり際からスパートをかける場所。

でも今日の私に、その余力はない。オーバートレーニングをした後のような倒れるギリギリの疲労感が脚と肺を苛み、前に加速する力を奪っている。

まるで初めて2000mに挑んだ時のような壮絶な重だるさ。湿っぽい芝が蹄鉄に絡みつくかのよう。

「それ以上の無理は、危ないよっ……！」

ナイスネイチャだ。すぐ後ろまできてる。

こっちは荒く息を吐き出すので精一杯なのに。なんでそんなに喋れるの。

「休んでいいよ、ねっ……？？」

「うる、さい……！」

ああ、思わず言い返してしまった。そんな余裕なんかないのに。息を、息をしなきゃ。肺に空気を……。

「じゃあねっ！」

「……！」

ナイスネイチャが抜け出した。加速して、私を追い越した。呼吸を整えるので必死だった私には、すぐさまそれに対応できない。やられた。してやられた。

ああ、でも。

「私が、勝つッ……！」

ナイスネイチャ。

私を追い越す貴女の、誰よりも必死そうな横顔は。

記事に書かれていたような悪い子なんかじゃないんだと、そう思えてしまったよ。

「はあ、はあ、はあ……！」

ゴール。私は二着。

私は堪らず芝の上に転がり、熱い体を冷やした。

……今日もまた勝てなかった。自信、あつただけどな。

「よし……よしっ……い！」

ああ、ナイスネイチャ。嬉しそうだね。貴女の姿を見てからこっちはズタボロだよ。

酷いことばかりだ。出遅れるし、ペースは乱れるし……習ったことを何一つ活かせなかった。トレーナーから怒られても仕方ない走りだったな……。

でも……貴女はきつと、全部狙ってやってたんでしょ。

そうでなきや今、2000mなんて走り慣れてるはずのみんなが……今こうして、揃いも揃ってダウンしてるはずがないんだから。

「……スリップギヤード、大丈夫？ 立てる？」

ゲート前での不敵そうな素振りとは打って変わって、ナイスネイチャは心底心配そうに私に手を差し伸べている。

……そこに邪なものは感じられない。

きつとこっちのナイスネイチャが本当なんだろうなと、なんとなくわかった。

「……ありがとう、ナイスネイチャ。でも、一度だけこれやらせて」

「え？」

私は差し伸べられたナイスネイチャの手を拒むように、力なくペチンと叩いた。

「貴女の走り、むかつく。集中できないんだもん」

「あ、あはは……狙ってますんで……やり方を変えるつもりはないけど、ごめん……」

「……でも、強いのはわかった。してやられたっていうか……負けちゃったよ。おめでどう」

私は一度叩いた手を握り直し、少し強めにギュツと握った。

「ん。ありがとう」

「……また貴女と……やあ、でも……うん、走りたくないなあ」

「あははっ、やっぱり？」

「うん。だから先に、オープン戦で暴れててよ。そこで目立ってさ

……記事にも載ったりしてさ……手の内を研究されちゃえ。私はそれを
見て、勉強して……そうしたらまた、貴女と戦うから」

「……これってネイチャさん、応援されてます？」

「……うん、一応ね」

ナイスネイチャはどう返したものと、困ったように笑っていた。

……よし、少しだけやり返せたから、今日はこれでよしとしよう。

ナイスネイチャ。私もいつかオープンに出るから。

その時は絶対に負けないよ。

今後の方針

私は三勝クラスのレースに勝利した。

小細工戦術。自分の中では既に確固たるものではあったけど、このクラスのレースで通用するなら間違いはないと思う。

対戦相手は皆とても速いウマ娘ばかりだったけど、レース前から注目されていたせいとか、それまでのレースよりもずっとトリックは仕掛けやすかったように思える。

懸念の一つだったスリップギヤードの走りにも良い感じに牽制できたし、コーナーで焦らせることもできた。

追い込みウマ娘たちに睨みをきかせて封じることがもできた。試合展開は概ね、思うようにコントロールできた……はず。

……それでも、エアグルーヴさんが言うように基礎トレーニング。疎かにしていたらこの結果にはならなかったようにも思う。

細工は流々。それも大事。けど最終的にものを言うのは自分の走りなのだ。レースなんだからそれは当然。……これからもちゃんとトレーニングしていかないとなあ……効率が悪いとわかっていても……。

「レースを見て驚きました。話には何度も聞いていましたが、ナイスネイチャさんの走りがあればどの……なんとさえいいか」

イクノデイクタスが言い淀む。

彼女はつい最近になって私のレースを見たので、きつと衝撃を受けたことだろう。私も私で自信満々に「こんな走りをしてるんだ」とは言えなかったので、驚かせる結果になっちゃったんだけどね……。

「やっぱ、汚い走りだっと思って思う？ ははは……」

「いえ、そうではなく。どちらかと言えば美しいのではないでしょうか。筆舌にし難くはありますが」

部室に置かれた中古のテレビ。そこには私の走ったレースが映し出されている。

こうして第三者の目線でレース展開を見ると、内容の荒れっぷりが凄まじいのがわかる。

ケーブルテレビのキャスター上がりらしい実況者の人も、私に引つ掻き回されたレースの内容を見て困惑している様子だった。

「しかし外から見ても、ナイスネイチャさんの走りの力はなかなか見えてきませんね。私もナイスネイチャさんの説明があつてようやく得心がいったくらいですから」

「あー、横から見たんじゃわかりにくいと思うよー。空撮でもしなきゃ何やつてるかはわからないんじゃないかなあ……」

「逆に言えば、外側からは研究されにくいということではありますよね。一緒にレースしたウマ娘にしか、実際の脅威や対策は取り難い。

……強みだと思えます」

「へへへ、強みつて。褒められてる？」

「褒めてますよ。……私が真似しようとしても、きつと上手くいかないでしょう。尊敬します。さすがはリーダーです」

「よせやいよせやい」

イクノデイクタスは真顔でしれつと褒めてくるから困る。冗談めかす言い方をしないからたまに小っ恥ずかしくなっちゃうよ。

「……正直、安堵しています。デビュー直後はナイスネイチャさん、思い悩んでいましたから。吹っ切れたのは、このスタイルに変えたからなのです」

「ん。自分の中でも自棄っぱちな賭けではあつただけだね……でもま、上手くいって良かったよ。心配かけたね、イクノ。これからはイクノとも一緒に走れるよ」

「……二、三勝した辺りでオープンに出られなくもなかったとは思いますが」

「まあねえ。けど段階と場数を踏みたかつたんだよ。こればかりは色々試していけないと見えてこないものもあるしさ」

イクノデイクタスの言う通り、クラスを飛び越えて格上のレースに挑むこともできなくなかった。

けどそうするには私のデビュー直後の戦績にはキズがあつたし、私

自身も実力を試すのに着実にステップを踏んでおきたかった。

「無名なままいきなりオープンに出ても、誰も注目してくれないかもしれないしねえ。そうなったら牽制も駆け引きも上手く決まらないかもしれないし」

「なるほど。レースの前から仕込みは始まっているということですね」

「ほら、映像のこここの部分……あつ過ぎちゃった。ここ。こここの仕掛けも私を意識する子がいたからプレッシャーを掛けていけたしね」

「遠目で見ても動揺していますね……」

イクノディクタスは頭がいい。

こうして解説を交えて話せば、レース談義は何時間でも続けていられる。

多分向こうも同じようなことを考えているのだろう。だから私たちだけのチーム、〃カノーパス〃の部室はほとんど作戦会議室のようになっている。

「……しかし、ナイスネイチャさんの戦術。強力とはいえ、これは……尚の事、トレーナーがつかなくなりそうですね」

「ああ、やっぱりイクノディクタスもそう思う？ ……ごめんね、私移籍……っていうか脱退しようか？」

「とんでもない！ トレーナーがいないのは今更ですし、脱退されても困ります。私はナイスネイチャさんがいたからこそこのチームに入ったのですから」

「おおー……ついに告られちゃったかー」

「貴女のトレーニングプランや指摘は学園のトレーナーにも比肩し得るものと、私は強く確信しています。何より現状の、私たちでトレーニングプランを構築できる状態の方が都合が良いというのもありますしね」

「ははは、私たちって自由だからねー……」

そう、私たちだけのチーム〃カノーパス〃にはトレーナーがいない。

トレーナーのやるべきことを私とイクノディクタスが兼任してい

る形だ。

とはいえイクノディクタスの管理能力はそこらへんのトレーナーよりずつとしっかりしているし、私も自分で出走申請やコースの利用申請を出している。

トレーナーがいれば諸々全部やってくれるんだろうけど、私がこんなスタイルだからね……トレーナーになってくれる人が新たにできるかどうかでいうと、まあ絶望的だよね……。

まあいいんだけどさ。どうせトレーナーがいても「基礎トレーニン グしろ」しか言わないだろうし。

私だってトレーナーの立場だったらそう言うわ。諸々足りてないんだからみっちりやらせる。それに結果が伴うかでいうとアレだから、塩梅が難しいんだけども。

「ナイスネイチャさんは次のレースは何を予定していますか？」

「んー、まあクラシック路線だし順当に……若駒ステークスに挑んでみようかなって思ってる。強敵が多そうだけど、オープンだしね。腹は括るよ」

「若駒ステークス……」

イクノディクタスがパッド端末で検索をかける。

出走登録を見ればまあ、見えるはずだ。あの名前が。

「……トウカイテイオー、ですか」

トウカイテイオー。

私と同じクラスでありながら全く別次元の走りをする、全勝中の超キラキラウマ娘だ。

強いか弱いかで言うと、強すぎてまず勝てない相手と言っちゃっていいだろう。彼女の走りはあまりにもモノが違いすぎる。

ウマ娘を素質で語るなら、その頂点に立つのがトウカイテイオーだ。……まあ漫画とか遊びの話とかはちよくちよくするし仲は良い相手なんだけどさ。僻みはあるよね。うん。

「勝ちを狙うならレースそのものを避けるべき、ですが」

「クラシック路線で行くって決めて、最初から弱腰なもの……ねえ？」

これからのレースでは強敵ばかりが立ちはだかる。

もう自分に向いている条件だけを選び好みし続けてはいられない。なら余裕がある今のうちに、とびきり強い相手とぶつかってチャレンジしてやろうというわけだ。

「……打倒トウカイテイオー。良い響きです。これは、今すぐにでもトレーニングしなければなりませんね」

あつ、イクノの目に炎が宿った。

「早速始めましょう。ナイスネイチャさん、私が並走を務めます。必ずや若駒ステークスで貴女の強さを証明してみせましょう」

「あはは……イクノさんは本当に、見た目とは裏腹に体育会系ですなあ……」

「もちろんです。トレーニングとは突き詰めて考えれば、根性論ですからね」

イクノデイクタス。知的な切れ長の目と野暮ったい眼鏡のウマ娘。しかし中身はなかなか暑苦しい熱血ウマ娘なのであった。

恒星の如きキラキラ

トレセン学園には授業がある。一般的な学園と比べて時間は短めだし、進級もそう難しいものではないけど、赤点なんて仕組みもちやんと設定されている。

私たちの本分はレースにある。が、学生の本懐というものも一応、ちゃんとするわけでした。

「わけわかんないよー!」

クラスの中ではこうして、テスト前に喚き始めるウマ娘も当然いるのだった。

レースの才能と勉強の才能が一致するとは限らないからね。

「だから言ったじゃんテイオー。授業中にぼーっとしすぎだつて」

「ううう……だつてトレニングの疲れで……」

「レースに力入れるのもわかるけどさあー。さすがに授業中に寝続けるのもどうかと思いますよー? それじゃわかるものもわかんなくなるつて」

私は今、トウカイテイオーと喋っている。

彼女とは次の若駒ステークスで戦う間柄だけど、普段の仲はそう悪くない。普通の友達として世間話をするくらいの関係だ。

「ネイチャは良いよね、頭良くてさ……普段からテストの点高いし」

「僻むな僻むな。ほらノート、見ておけばギリ明日までには間に合うんじゃない?」

「うわぁありがとうナイススネーチャン!」

「ナイスネイチャね」

トウカイテイオーはなんというか、未っ子気質な感じがする子だ。

甘え上手と言うべきかなんというか。頼まれるとついつい手を貸してあげたくなっちゃうんだよね。

よく会長さんと一緒にいる姿を見かけるけど、あの人と並んでいるとまるで姉妹か親子のようにも見えてしまう。

普段はそんな姿を見せているだけに、レースになった時のトウカイテイオーはまるで別人だ。

「うおおおっ！　ここだあつ！」

「無理いー！」

午後の授業、クラスごとの体育枠として行われている合同練習にて。

トウカイテイオーは自身の才能を遺憾なく発揮する。

柔らかな体、しなやかな筋肉。走ることにについて最高の性能を発揮する肉体は、まさしく走りの才能を体現していた。

6人立てで行われるこの模擬レース、とはいえ手を抜いて走る者はいない。

誰もが本気で駆け抜ける中で、トウカイテイオーはまさに抜きん出て速かった。

「へっへーん。どう？　900mだけどボクも結構速くなつたでしょ」

「やるじゃんトウカイテイオー！　さすがはターボのライバル！」

「ライバル？　ボクと勝負するつもり？　負けないよ！」

そう。天才という言葉を使うのであれば、トウカイテイオーはまさに天才だった。なにせ肉体のモノが違う。しかも本人にトレーニングの意欲があつて走るのが楽しいときた。トドメにダンスや歌も上手い。嫉妬するのもバ鹿らしいくらいの完全無欠キラキラウマ娘だ。

「次、ナイスネイチャさんの番ですよ」

「おっと。ういーっす、いきまーす」

キラキラウマ娘はこの時点で既に色々なメディアに露出している。

次の若駒ステークスの前評判でも話題はトウカイテイオーで持ちきりだ。私も多少は白星を重ねてきたけれど、それでも話題の全てはトウカイテイオーに搔つ攫われていた。まあ、わかるけどね。あの子の走りは本当に美しいから。

「スタート！」

意識外で告げられた開始の合図に、無意識下で準備していた脚が素早く動く。

地面を蹴り込むよりも先に前に突き出した脚が重心を素早く手前に移動させ、誰よりも速いスタートへと踏み切らせる。

「はっ、はっ、はっ……！」

距離は900。短距離だ。最初から最後まで全力を出しても問題ない距離。それだけに、駆け引きのしようもない。

強いて言えば一っだけのコーナーでなんとか練習の成果を出せるかどうかってところか。それだって、手前の直線の終端で大体の格付けは終わっている。

「やった！ 一着！」

はい、これ私じゃないです。私の四つ前にいる子のセリフです。

「だっ、はあ……！ 無理無理……追いつけない……！」

私は5着。手を抜いてると思うじゃん？ 全力なんですよこれ。

こんなもんなんですよ、私の実力なんてのは。

……いや、やろうと思えばそりやできますよ？ スタート前におしゃべりしたりだとか、揺さぶりかけたりとかは。

でもさすがにここにいるのはクラスメイトだし？ 模擬レースだし？ そんなところでわざわざ手の内を晒した上で関係を悪くしちゃうのもどうかと思っただけですよ。だから普通に走ったんですよ。

まあもちろん、走りそのものは全力だったけど……はあ。

「はいまた一着——！」

「ぐえ、ぐええ……ターボエンジンが……！」

私が現実には打ちのめされている間に、何故か二周目のレースを始めていたトウカイテイオーが再びゴールへとやってきた。

そこそこ抜いて走っているんだろう。彼女は爽やかに汗をかいてはいても、息は荒れてはいなかった。

ツインターボは……うん。お疲れ。

「ねえねえ、ナイスネイチャはどうだった？ ボクは一着！ 二回ともね！」

「ネイチャさんは5着ですよ。いやあ……さすがトウカイテイオー、短い距離でも数バ身も差をつけるなんて、キラキラしてますなあ」

「ふっふーん。ボクは次の若駒ステークスに出るからね！ このくら

いの距離はヨユーで2回分走れなくちゃ！」

お、若駒ステークスの話か。やっぱり意識してくれてるのかな。「そうだ。レースは来年だけどネイチャも見てくれる？ ボクが1着取るところ！」

……ってオイオイ、テイオー。もしかして私が若駒ステークスに出るの知らないのか。知らない……んだろぅなあこの感じだと。

まあ、出走登録は私が後だったから仕方ないんだろぅけどさ……これはこれで眼中にない感が出てて、少し複雑だわ。

「……1着取るとこ、ね。いいじゃん、私もレース場に行くよ」

「ホントに!? テレビとかじゃなくて?」

「もちろん現地でね。他にも人はいるからテイオーが1着取れるところを見れるかどうかはわからないけど……応援してるよ。テイオー」

「? ありがとう！」

無邪気な笑顔。無邪気なお礼。

……ふうー。

なんだか私、やる気が出てきちゃったなあ！

帝王の余裕

「普段は話しやすく、気のいい友達だったのに、いざレースになるとそれまで見せたこともない熱っぽい眼差しとささやきで翻弄してきて、かと思えばまた再び学園に戻ってみると何事もなかったかのようによく普通の友達として振る舞うものの、どうしてもレース中に見せるSっぽい雰囲気忘れられないせいでもう普通の友達としては見られなくなってしまうポニーちゃんが日に日に増えていくナイスネイチャ」

「……」

トレセン学園の生徒からの希望や要望を集めるため、生徒会はアプリによる目安箱を作り、そこで様々な生の声を集めている。

人知れず壊れていた備品や目立たない場所で欠けていたタイル、畑の近くに作られた落とし穴に対する苦情、食堂に和菓子を追加してほしいという要望、新しいトレーニング機材に関する提案、突然現れて背中を蹴ってくるウマ娘に対する苦情などなど。

エアグルーヴは空いた時間を見計らっては、目安箱に投函された様々な提言を確認し、有用なものについては生徒会の議題として上げることも多かった。

が、生徒の中にはこの目安箱を己の情熱、あるいは趣味の捌け口か何かと勘違いしている者もあり、エアグルーヴとしては正直に言うてやめてほしかった。

やめてほしかったのだが、いざ本人にやめろと問い詰めても「私のリビドーが抑えきれなくて」などと意味不明であり、実際に手の震えや激しい妄想による禁断症状が抑えきれないようだったので、現在では「目安箱に吐き出す程度なら害もないか」と前向きに諦める事になっている。

「エアグルーヴ、どうした？　浮かない顔をしているようだが」

「いえ……目安箱に怪文書が投函されていただけでしたので。削除し

ました」

「怪文書？　そうか。問題がなければ良かった」

シンボリルドルフは暇を見てはエアグルーヴの仕事を手伝おうとするが、こればかりは外に出すわけにはいかない。

過酷な仕事に携わるのは自分だけでいい。エアグルーヴは女帝として、決意を新たにしたい。

「ところで、ナイスネイチャのことですが」

「ああ、彼女もついにオープン戦に出るらしいな。一時はどうなるものかと思ったが、スランプは脱したらいい。喜ばしいことだ」

「……しかしそのオープン戦の相手は、トウカイテイオーですがね」

「ナイスネイチャが上を目指すのであれば、遅かれ早かれち合うことにはなっていただろう。それに、後から出走登録を入れたのはナイスネイチャの方だ。彼女もある程度の覚悟は決めているはずさ」

シンボリルドルフにとって、トウカイテイオーは自分の身内にも等しいウマ娘だ。

生徒会長である以上は依怙鼻肩はしないつもりでいるが、応援したい気持ちとしてはどうしてもトウカイテイオーに比重が傾く。

もちろん、ナイスネイチャも可愛い後輩として目をかけてはいるのだが。

シンボリルドルフが窓に寄って外を見ると、ダートコースの上をナイスネイチャが走っている姿が見えた。

学園が終わって日が暮れる頃になっても、彼女は身体が壊れないギリギリを見計らいながら走り続けている。

努力の量だけならばナイスネイチャも引けを取らないだろう。それでも、差が生まれるのがこの世界だ。

「テイオーはこれまで負けることなく走り続け、その強さを示し続けてきた。しかしウマ娘の強さとは、ただ速いだけのものばかりではない。柔能制剛。ナイスネイチャのように巧みな技を操るウマ娘ともぶつかるだろう。あるいはナイスネイチャにとっても、テイオーのよくな天才との戦いは初めてかもしれん。……レースは真剣勝負の場だ。しかし、きつと若駒ステークスは両者にとって切磋琢磨に値す

る、成長の場となるかもしれない」

「……会長はどちらが勝つと思われませんか？」

「レースに絶対はない……と言いたいが、まずテイオーが勝つだろうな」

それは鼻根目を抜きにしても尚、即答できるものだった。

エアグルーヴもナイスネイチャに対する思い入れはあったが、そうだろうかと頷くしかない。

それほどまでに、トウカイテイオーとナイスネイチャとの間に横たわる溝は広く、深かった。

「カイチヨーいますかー」

「おや」

「噂をすれば、ですネ。入って良いぞ」

扉の外から聞こえたのはトウカイテイオーの声だった。

シンボリルドルフを迎えにきたのだろう。時間が合う日はよく二人は帰路を共にするのだ。

「カイチヨー、迎えにきたよっ」

扉の向こうには、満面の笑みを浮かべるトウカイテイオー。

初めて会った時から背丈は伸びたが、シンボリルドルフに懐く子犬のような姿は小学生の頃から変わっていないようにも感じる。少なくともシンボリルドルフにとって、トウカイテイオーはいつまで経っても可愛い後輩だった。

「ああ。丁度仕事も終わって、エアグルーヴと話していたところだった」

「ふーん、なんの話？」

「テイオーの話さ。来年の若駒ステークスを楽しみにしているとね」

「っへへー、任せてよ！ ボク、ラクショーで勝っちゃうもんね！」

あくまで若駒ステークスは皐月賞への踏み台。トウカイテイオーにとってはそうなのだろう。彼女の實力であればそう考えるのも当然ではある。

しかしエアグルーヴにとって、テイオーの浮かれようは少々行き過ぎているように思えた。

「トウカイテイオー貴様、油断しすぎではないか。余裕と油断は似て非なるもの。楽勝かどうかは勝ってから言うことだ」

「うえ……はあい……」

「それに、若駒ステークスにはナイスネイチャも出走する。あまり臆抜けた走りをすれば、彼女に差し切られるやもしれんぞ」

「……ナイスネイチャ？」

トウカイテイオーのぽかんとした顔を見て、二人は首を傾げた。そしてすぐに思い当たる。

「テイオー、知らなかったのか。確かナイスネイチャはテイオーと同じクラスだったはずだろう」

「えー、知らなかった……というか、ネイチャってオープン戦に出るの？ そんなに勝ってたんだっけ……」

「呆れた。同じクラスのライバルのことも知らずにいたのか？」

「だ、だってネイチャとは漫画とかスイーツの話しかしないし……ボクだって初耳だよお」

ナイスネイチャとは、トウカイテイオーにとってクラスの友人でしかなかった。

走りについてはほぼ何も知らない。授業の一環である合同レースでもパツとしない走りしかしないので、ライバルという意識も全くなかった。

クラスで一番頭が良くて、漫画の話では気が合う。その程度のものだ。

「見てみる」

シンボリルドルフは薄暗い窓の外に顎を向け、トウカイテイオーに示す。

トウカイテイオーが何事かとコースを見ると……しばらくして、そこを走るウマ娘の見慣れた鹿毛に気付いた。

足場の悪いダートを黙々と走るナイスネイチャ。

近くにはチームメンバーもおらず、トレーナーの姿もない。彼女はたった一人でトレーニングを続けている。

「彼女の走りは面白い。若駒ステークスでは、きっとテイオーも驚く

ことだろう」

「……ふーん」

「少しは油断も消えたか？」

「油断なんてしないよ！ ボクは、ボクが一番だつてことを走りで証明するだけだからね！」

トウカイテイオーは不敵に笑う。

ともすれば傲慢に、生意気に。

だがその笑みが強者の特権でもあることを、エアグルーヴは理解していた。

それだけに、ナイスネイチャの先が思いやられてしまう。

小手先の努力を崩すのはいつだって、純粹に強大な力なのだから。

マーベラスな祈り

「マーベラーズ!!!」

「うおわっ!?!」

早朝、いつもの目覚ましで飛び起きた。

私の寮室の目覚ましこと、マーベラスサンデー。彼女は何故か毎朝「マーベラス!」と叫んで起きるのだ。寝てても起きててもびつくりするやつである。

できれば今日みたいな休みの日はゆっくりさせてほしい……。

「あー……おはようマーベラス。今日も朝から元気だねえ……」

「ネイチャもグツモーニン! 今日サンデー! 日曜日ってとつてもマーベラーズ!」

「マーベラスだねえ……」

マーベラスサンデー。彼女を表現するなら元気の塊だ。その一言に尽きる。

レース中はちよつとだけスンとしてるけど、それ以外はほぼ今みたいなマーベラス状態。一緒にいると元気の余波で吹っ飛ばされそうになる子だ。

「ネイチャは今日は何するの? またレース? おでかけ? おやすみ? それともく……?」

「マーベラらないよ。今日は映像でレースを振り返ってみて、作戦を立てるつもり。最近ずつとこれだけだね」

「サンデーなのに休まないんだ! ネイチャってとつても頑張り屋さん!」

「あはは、頑張り屋にでもならないと、私みたいなのは速くなれませんからなあ……ちよつと音出るけど、許してね」

「マーベラーズ!!」

レース研究も大事だけど、今日が休日であることを忘れちゃいけない。

連日のトレーニングで疲れた体を癒すのもまた自己鍛錬の欠かせ

ないステップの一つだ。

だから休養日の研究こそ、こうしてベッドの上でだらだらとスマホ鑑賞するスタイルに落ち着いている。働かせるのは頭だけで充分なのよ。

見るのは当然、トウカイテイオーのレースだ。

彼女がどこでどんな位置につけるのか。どこで加速し、どこで息を入れるのか。サンプルがあまり多くないせいで絶対と言えるような予想は立てられないけど、策謀の一助にはなってくれる。積み重ねていけば結果にも出てくるはず。

「しかし、はつやいなあ……」

で、冷静にテイオーのレースを見てみると……可視化されるのは圧倒的な実力だ。

なあにこいつ。G1ウマ娘じゃん。勝てん勝てん。はい負けました。そうやって白旗振るのが最も合理的に思えてしまうほど、彼女の實力は抜きん出ている。

ストライドがありえないほど広くせに脚の戻りが早い。小柄なはずなのに、それを感じさせない走り。速度に乗ったテイオーを捉えるのは、うん。私には無理だな。追いつける気がしない。

何度もトウカイテイオーのレースの検証はしてるけど、行き着く結論はだいたいいつも同じだ。

ラストスパートをかけられる前になんとかしないと負ける。

「なんとかってなんだろうなあ……」

そのなんとかっていうのが最大の問題だった。

なんとかって何よ？ いや、キックでも入れていいならできるかもしれないよ？ でも普通に反則だし。けどそのくらいのことをしないと、レース中にラストスパートをかけないなんて事は起こりえないし……。

……私、実質不可能なことを変にこね回して考えているだけでは？

そんな思いが頭を過ぎるも、考えを捨てた瞬間に私の存在意義がなくなりそうで、やめられない。

どうする。どうすればトウカイテイオーを止められる……？

「ネイチャはレースのことでお悩み？ それともお友達のことでお悩み？」

「ん。友達……は特になあ。今はレースで頭いっぱいー」

「だったらワタシにマーベラス☆ きつとアナタもマーベラス★」

「マーベラスするかあ……じゃあ聞いてほしいんだけど……もし前の方に速い子が走ってるとしてさ、マーベラスならどんな風に追い越す？ あ、前の子は自分よりも速いとしてさ。……前提がすぐく厳しいのはわかってるよ。もちろん」

「フムムム……」

マーベラスサンデーは珍しく神妙な顔で目を閉じ、考え込んだ。

「マーベラス☆模範サンデー!!」

そしてキラキラな目をくわつと見開いて、ベッドの上に立ち上がった。

……なんかその答え方、前にどつかで見た気がするんだけど。気のせい？

「自分より速い子じゃ追いつけないね☆ でもレースは何が起こるかわからないんだから、ネイチャは絶対に諦めちゃダメだよ★ マーベラス!!」

レースに絶対はない。諦めないのが大事。うん、いい言葉だ。

戦術としての実用性があるかはさておき、大切だよね……。

……あれっ、これってただの慰め……？

「レースでは何が起こるか分からないのはまあそうだけど、圧倒的な実力差があるとどうしてもなあ……」

「それならネイチャがマーベラスになれば良いんだよ☆」

「私が……マーベラス……」

マーベラス。驚くべきさま。感嘆すべきさま。奇跡的で素晴らし
いさま……。

「すぐに消えちやう流れ星にお祈りするには、じつと夜空を見上げて
なきやダメなんだよ★ 時々偶然夜空を見上げるよりも、夜空を見上
げてじつと待ち構えていた方が、お祈りが通じる確率が高いよね☆

マーベラスな奇跡だって、きつとそう！」

「……祈るにしても、やり方があるってことか……」

たしかに、受け身にしたって色々やり方がある。

どうせ無謀なことをするのなら、より自分から動いてみなきやダメだ。

マーベラス……驚き……うん、相手が驚くようなことがあれば、少しは加速を躊躇わせることができるかも……。

「相手の意表をついて、驚かせる。反射的に身体の自由を奪う。そうすればきつと、速度は落ちる……そういうことでしょ？ マーベラス」

「ううん？ ワタシは星にお祈りして、レースの時に奇跡が起きればいいなーって思っただけ☆」

「……そっか！ マーベラス！」

「マーベラス☆★」

私は色々どうでもよくなって、寮の一室でマーベラスサンデーと一緒に謎の踊りを始めた。

うん。まあ、テイオーを驚かせる作戦もありっちゃありだよな。

不確定だけど、そんなの元々だ。低い確率にすがってみるのも悪くない。

「あつ☆ ネイチャ見て見て！ ホワイトクリスマスだよつ☆」

「……あ、ホントだ」

気が付けば、窓の外には雪が降っていた。

クリスマス。もうそんな季節だ。……私たちの部屋のクリスマスらしい装いといえば、窓の近くのポインセチアくらい。

レースに夢中で、すっかり疎かにしてたなあ。

「ネイチャもクリスマスくらい、遊びにいこーよ☆ 今日のお祈りは、絶対にマーベラスだよつ★」

「……あはは。確かに！ どうせ祈るんなら、今日しかないかもね」

せっかくのクリスマスなんだ。今日くらいレースのことは頭の片隅に置いて、楽しむのもいいよね。

「んじゃあ、遊びに行っちゃいますかー！」

「マーベラーズ!!」

テイオーの若駒ステークス

今日は待ちに待った若駒ステークスだ。

ボクにとって今回は皐月賞の前哨戦というか、予行演習みたいなもの。ぱぱーつと勝って、また四月までにトレーニングを積まなきゃいけない。

新年の空気がようやく馴染んできたとはいえ、まだまだ京都は人が多い。始まるまでに観光しよっかなーと思ってたけど、早々に諦めちゃった。

仕方ないとはいえウマ娘レーンの少ない街並みはウズウズしちゃうなー……。

距離は2000。良バ場。人数も9人立てで、今日はとても走りやすそうだ。

枠番は8枠8番。結構外側だけど、埋まるほどの人数ではないから中盤以降いくらでも巻き返せるはず。

対戦相手も特に心配はない……と思ってる。ボクの走りなら今日はヨユードだね。

……いや、カイチョーからは一人だけ。ナイスネイチャには気をつけろって言われてたっけ。

「おいつすー。いやー、今日は寒いねー」

7枠7番、ナイスネイチャ。ボクのクラスメイトであるそのウマ娘は、奇遇なことにボクの隣のゲートに入ることになっていた。

もさもさした柔らかそうなツインテール。さっぱりした口調と話しやすい性格。そのわりに、クラスでも飛び抜けて優秀な頭脳。それが、ボクにとつてのナイスネイチャの印象の全てだった。つい最近までは。

「おはよ、ネイチャ！ 手加減はしないよ！ 今日もボクが勝つかからね！」

「おやおや、テイオーは自信たつぷりですなあ……さすがは今年の皐月賞最大の有力株。私みたいなモブウマ娘なんかは、頭に絆創膏でも

貼って背景で転がってた方がお似合いそうですわ」

ただの友達。

けどそんな印象は、ここしばらくの間に吹き飛んでいる。

カイチョーが意識してたからなんだろうって思ってた。調べてみたら、すぐに答えは出てきた。

検索すれば噂じみたものはいくつか記事になっていたし、トレセン学園の友達も知ってる人は知っていた。

ナイスネイチャは反則ギリギリの戦術を駆使して走る、外道ウマ娘なんだって。

「ゲドウネーチャン！」

「……ツツコミどころが複数あるとやり辛いんですけど！」

「あはは！ でも、ネットで調べてみたらそう書いてあったからさ！ 酷いなーって思ったけど、ボクちよつと笑っちゃった！」

「ほんとひどいなー……けど私のこと調べてくれてたんだ。私って意識されてる系？ ちよつと恥ずいなー」

ネットでは散々言われてたし、一緒に走ったことある人からも話を聞いた。……今、ネイチャは冗談めかす風にからからと笑ってはいるけど、実際その噂は間違っていない。らしい。

ボクも気になってネイチャのレースをビデオで見たけど……うん。多分妨害っていうか、似たようなことはやってるんだと思う。みんなのペースは乱れていたしね。

けど、ボクは知ってる。

ネイチャはただ妨害するだけのウマ娘じゃない。トレーニングも欠かさずにやってる、すごく真面目なウマ娘だ。

意識し始めてからはトレセンでもネイチャの姿を度々見かけてた。彼女は放課後なんかは特に黙々とダートやチップコースを走っていることが多いし、プールでもよく見かける。最近はダンスのレッスナルームもよく利用してるって聞いた。ライブの練習にも真剣……つまり、本気で勝つつもりがあるってこと。

さつき控え室でカイチョーからアドバイスをされた。自分の走りをしろって。

……カイチヨーもネイチャの走りがどんなものなのか、わかってるんだと思う。

それに気づいていれば、ボクは大丈夫だ。

ナイスネイチャは確かに頑張り屋だし練習熱心だけど、模擬レースで実力はわかってる。

ボクがボクの走りを見失わなければ、変わらない。ヨユーで勝てる相手で、レースだ。

「ナイスネイチャ。ボクはネイチャの作戦には引つ掛からないよ」

「……ふーん？ 随分自信有り気じゃん？」

「ボクは無敗の三冠ウマ娘になるんだ。きつと、ううん。絶対に、今日のレースよりずっとずっと強い相手と、これから戦うことになる。……だから本気で走る。油断せずに、次の皐月賞と同じくらい本気で、勝ちに行く」

ヨユーは力の差。その大きさは、ボクが振り絞る本気の証だ。

ナイスネイチャ、ボクに隙は無いよ。残念だけだね。

「……そつ。……三冠ウマ娘ねえ。やっぱりテイオー、会長さんを意識してるんだ」

「当然！ いつかはカイチヨーの記録も追い抜いちやうけどね！」

「さつき最終コーナーのあたりで見かけたけど、やっぱりテイオーのこと見に来てくれてるのかねえ……くう、私も生徒会の仕事手伝ってたのに……」

「え、カイチヨー向こうにいるの？ いつもと違うけど」

「いや私に言われても知らないって。近くでテイオーに声援でも聞かせたいんじゃないの？」

そろそろレースが始まる。

ほかのウマ娘たちも続々とゲートに入り、勝負の始まる空気になりつつある。

ヒリヒリする。……でも、嫌いな空気じゃない。

「けどさ、テイオー。さつきから圧勝するような口ぶりにいるけど……私達だってタダで負けてあげるわけにはいかないし……そもそもテイオーに負けてあげるつもりはないからね？」

「……」

ネイチャがそう言うと、ひりついた空気がボクの周りに立ち込めた。

内枠からプレッシャーが噴き出し、熱さを感じる。

……他のみんなを巻き込むように言って、ボクをマークするつもり？

……望むところだよ。このくらいの圧力に勝てないようじゃ、三冠ウマ娘になんてなれないからね。

「ここでテイオーに勝てば、皐月賞でも勝てる。やるぞ、私！ いやみんなも頑張るか。でも負けないからね！」

……。

「作戦は……テイオーの後ろにつけて、最終直線で差し切ってゴールが一番かな？ テイオーを倒して時間通りに晩ご飯を食べれば今日は上々……今夜はにんじんハンバーグ！」

にんじんハンバーグ……。

いやネイチャうるさい！ 喋りすぎだよ！ 集中力がなくなるんだけどっ！

ガタン

「あ」

「ふっ！」

ゲートが！ で、出遅れたあ！

ナイスネイチャ！ ちよつとさあ!?

「想像以上に、小ずるいんだけどツ!」

「はっはー！ 騙されたなー!」

先頭をナイスネイチャにレースが始まった。

ボクは後ろからの出だし。プラス外枠というなんとも歯がゆいスタートだったけど……。

……絶対に勝つ！ 負かす！

いつも以上の気合いでもって、若駒ステークスを全力疾走できそう

だ
っ
た。
。

ネイチャの追い立て・テイオーの追い込み

△ ⑦ ☆ ⑦ △ ナイスネイチャ △ ⑦ ▲ ⑦ △

スタートは上々だ。

テイオーはまんまとスタートダッシュに失敗し、冷静さを失った。思った通り、テイオーは搦め手に弱い。というか、あまり慣れてない。今も遅れを取り戻そうと足を早めているけど、そんな精神状態にこそ付け入る隙ができるのだ。

「おっと、内には入らせないよ……！」

「くっ……！」

私がテイオーの一つ内枠であったことが幸いした。小細工をするならこれほど理想的なポジションもそうそう無いだろう。

ペースの速い逃げウマ娘に並びつつも、テイオーの左前に陣取ったまま、位置関係をキープ。内に入れさせない。

後続は大本命のテイオーが近くにいることもあってか、私が仕向けなくとも彼女に強烈なマークを張っている。ありがたいね。

理想はこのままコーナーにもつれ込むまでテイオーを内に入れな
いこと。

その流れで私はコーナリングを決めて、有利を稼ぐ。

京都レース場の坂は私にとって得意要素だ。今のところ運は悪くない！

「テイオー相手に、そのくらいのリードで平気かなっ……？」

「っ……！…る、さいっ……！」

テイオーを意識しつつ、並走する逃げウマ娘にささやきかける。

元々ペースは良かったものの、焦ったのか少しだけ掛かった。距離が離される。

私はそのままペースをわずかに落とし、後ろのテイオーと先行組二人の針路の邪魔をする。相手は主にテイオーだ。テイオーの内入りが防げるなら最悪もう一人はスルーでいい。

テイオーは苦しいというよりは苦々しいという表情。苛立ってるね。他のウマ娘たちも内に入れさせるつもりはないようで、結局コーナーにまで横並びは続いていったが。

「！……っ、だあつ！」
「うえ」

徹底したマークも完全ではない。他のウマ娘達の隙間を見つけたテイオーが、ここぞとばかりに前に出た！

軽やかな足取り。低く、大きなストライド。速い。内に入られる。そのままテイオーはコーナーに差し掛かり、3番目につけた。やばいやばい。

「あーあ、やつぱり今日も、テイオーが勝つのかなっ……!?」
「！……また、喋って……！」

私はコーナーの内側を柵ギリギリのところまで寄せるように走り、どうにかテイオーに追従する。他の先行組や差し組も位置的に離れてはいない。声は届く。

「なんてねっ……テイオーの無敗を終わらせるのは、この私だよっ！」
「……！」

テイオーを睨み、寄せる。コーナーの内外差と私の全力でどうにかテイオーに並べているが、逆に言うところだけやって並べるだけ。本格的に才能の差を感じる。これじゃ直線勝負になったら勝ち目が無い。どうにかしなきゃ。

けど私の挑発と眼光にテイオーも焦ったようで、意固地になってペースを上げた。言い方は悪いけど結構チヨロい。負けず嫌いなところは怖くもあるけど扱い易くもあるな。

さてここからだ。
向こう正面の直線に入ると私は息を入れるように速度を落とし、テイオーの横から離脱。代わりに後ろのウマ娘達に仕掛けることにした。

「臯月賞への切符、ここ以外だとキツそうだねっ……」
「はっ、はっ……！」

「けどテイオーなら、大差勝ちしそうだし……私らには、無理かな……っ」

「負け……るかあっ!」

「させないっ……!」

ささやく。煽る。急かす。

若駒ステークスに出るウマ娘はみんな皐月賞を意識してる。

テイオーとの実力差は当然わかってるだろう。けど、それでも彼女たちの諦めきれない気持ちだっただって大きいに違いない。

「くっ……!?!」

先頭の逃げウマ娘を捉えたテイオーが、私によって掛かったウマ娘たちに追われ、焦る。続けざまのスパートや追い越しはキツいだろう。

散発的に追いたてる相手に、苦戦しているのがわかる。

テイオーにスタミナはない。多分私よりも。それは肉体面で私が唯一優っている部分だ。

若駒ステークスは距離2000。中距離。テイオーの得意なところだけど……それだっただって、テイオーは最初から最後まで全力疾走できるわけじゃないんだ。テイオーを疲れさせてやれば、勝機は見えてくるはず!

「絶対負けないんだからっ……!」

テイオーが他の娘に先頭を譲った。が、その子も無茶な加速でヘロヘロだ。きつと最後まで持たないだろう。それでもテイオーの走りや塞ぐことができれば紛れはあるかもしれない。みんなもそこに賭けているように思えた。その心理は利用できるか。

テイオーは三番手。私はその少し後方で五番。

全体に団子状態。誰が勝ってもおかしくない状況だ。

しかし最後のコーナーに差し掛かると団子もひとまず崩され、隙が生じる。

テイオーはここで仕掛けるだろう。崩れた団子の狭間を狙って抜け出し、一気に先頭へ躍り出るはず。そうなれば終わりだ。

彼女が疲れ切っているかと思えば、現状そうでもない。バテは期待

できない。自分の手札と勝ち筋が刻一刻と目減りする。
だから。

私は、仕掛けることにした。

◎ ⑧ ◎ ⑧ ◎ トウカイテイオー ◎ ⑧ ◎ ⑧ ◎

なんて走り辛いレースなんだ。

スタートした直後からそう思っていた。

良馬場の2000ならいつも通りだと思ってた。けど全然違う。
まるでいつものレースとは別。未知の戦いだった。

原因はわかっている。ナイスネイチャだ。ナイスネイチャは常に誰かに喋りかけ、コースを塞ぎ、牽制し続けている。それが多分、レースを滅茶苦茶にしているんだ。

コーナーもうまく曲がれないし追い抜いた後も何故か後ろから無茶な追い越しを仕掛けてくる。変なのがネイチャだけかと思えば、ネイチャのせいで他のみんなまで変になってるみたい。おかげでこっちは脚を溜める暇もない。荒れたレースだ。

けど、それでもここまでボクは前をキープできた。

本当はもう少し手前で先頭に出るつもりだったけど、このコーナーは仕掛けるチャンス。前は二人だけ。やりようはいくらでもある。ここから前に出て直線で一気に抜ければ、ボクの勝ちだ。

無敗の三冠ウマ娘になる。他のみんなも必死だけど、ボクだって同じだ。

負けるもんか。

バテた逃げの子がヨレて、コースが生まれた。ここだっ！

踏み込むチャンス！ 今……！

「駄目だテイオー！ まだ仕掛けるなッ！」
「!?」

聞こえたのは、後ろ。歓声の中に紛れたカイチョーの切迫した声。

どういうこと!? ここじゃない!? 何かの罠……!?

「そこで仕掛けたらッ……私が勝てないからさあッ！」

「……！」

低かった声色が、その途中で甘やかに変わる。

声の主人はすぐ後ろにいた。それは今まさに、真横に並んでいる。鋭い眼差し。悪そうな笑み。

ナイスネイチヤだ。

ネイチヤが……！ 声真似で、騙したのか！ このボクを！

「くっ……！」

コーナー終わり。あとは直線。なのに、今の一瞬で目の前にあったコースが塞がった！ 横にずれようにも、そこはネイチヤにがつしりマークされている……まずい、このままじゃ抜け出せない！

塞いだ前も沈んできてる。垂れてきたら防ぎようがない。スパートもできなくなる……！

「臯月賞の切符、私が貰うよ、テイオー……！」

ああ、すごいな。まんまとしてやられた。

カイチョーから言われてたのにな。自分の走りをしろって。こういう事だったんだな……。

「あ、あれっ!? そんなに沈む……！」

脚を緩める。塞がれたインコースを諦め、大げさに脚を溜める。

急激な減速にネイチヤのマークも外れた。

……油断してないはずだったけど、認めるよ。ボクは油断してた。

色々やられたし手のひらの上で転がされたことも、恥ずかしいけど認める。

でもね。でもね、ナイスネイチヤ。

「それでも勝つのは……ボクだあっ！」

直線から大外に回って、加速する！

最初からこうすれば良かったかもしれない。誰も邪魔しない外側につけて、自分の走りを貫く！ これなら誰にも止められることはない！

「さ、さすがにそれは無理いー！」

ナイスネイチヤを抜かす。逃げウマ娘を抜かす。最後で頑張っていた先行ウマ娘も追い越す。

！
軽やかに、速やかに。誰も邪魔しない直線上で、一気に引き千切る

「やつ、たああああ！」

そのままゴール！

終わってみれば1バ身のギリギリのところだったけど、どうにか最後に全員追い抜けた！

「へへっ……ぶいっ！」

大きな歓声が湧き上がる。みんながボクの勝利を祝福してくれている。

見上げれば、ゴール前の二階席にカイチヨーの姿が見えた。

うんうん、そうだね。やつぱりカイチヨーはそこらへんにいるよね。へへへ。

「……もうっ！ ネイチャ！ カイチヨー二階にいるじゃん！ 何がコーナーの前なのさっ！」

「む、むりい……」

結局ナイスネイチャは4着だった。

最初から最後までレース全体を騒がせたくせに、終わってみればそんな順位。

……けど、久々にレースでヒヤっとしたのは事実。

速いか遅いかでいうと遅いんだけど、ナイスネイチャ……ボクの記憶には、改めて深く残るウマ娘だった。

スキルポイント大作戦

『トウカイテイオー 若駒ステークス1着!』

レース系の雑誌を開くと、そんな文字が踊っている。大きな文字だ。見逃すサイズではない。

オープン戦ともなればこうやってデカデカと紙媒体にも映るんだなあ……。ネット記事だけじゃない。お年寄りから小さな子供まで、幅広い人達に周知されるわけだ。

主にトウカイテイオーが。そして時々、私も。

「あああー負けたあー……」

ナイスネイチャ、成敗。そんな感じの文言も、たまーに記事の中に混じっている。

まあほとんどテイオーのことしか書いてないんですけどね。悪目立ちした私の走りについて言及してるようなのも、まあ結構ある。やっぱりみんなよく見てますわ。

とはいえ、うん。私についてはいいんだ。いくらでもヒール扱いしてくれていい。問題は私が負けたっていう事実。それが重くてね……。

「元氣を出してください、ナイスネイチャさん。結果は惜しかったですが、いい走りでしたよ」

「ありがとうイクノ……でもいい走りですわあああー……」

「駄目そうですね」

「私は駄目なウマ娘ですわー……」

そう、四着。四着なのだ。そしていい走りだったのだ。私は。

作戦は上手くいった。レース展開も最高だった。小細工もぶつ刺さりまくってた。はず。

が、最終的にずるずると抜かれ、追いつけずに四着だった。これが何を意味するのかと言うと、私が遅かったという無慈悲すぎる結論が出てしまうわけでした。

「結局トレーニングするしかないじゃあああん！ やっぱりそうなん

「じゃあああん！」

「九割以上のウマ娘に当てはまる、当然の対策法ではあるんですけどね」

何が辛いつて、運も技も全て最善に運んでこの結果だったことだ！

この四着という結果は単純な私のスピード不足！ 猛特訓するしかないんだよ！ これはもう！

「えーなになに。 ナイスネイチャはレース中、些細な妨害とも呼べる小細工を幾度も繰り返したが、それによってトウカイテイオーに勝つことはおろか、三着に入ることでもできなかった。最初から真面目に一位を目指していれば結果は変わっていたかもしれない」だってさ。うっさいわ！ 真面目にやって一位が取れるなら私だってさっさと取ってるわい！」

雑誌をペチーンと床に叩きつける。ヒール扱いを気にしてないと言ったな。嘘ですわ。やっぱちよつと気にするわ。自分が気にしていることを逆撫でされるとやっぱちよつとは心にきちゃうわ。

いや、こういうメディアにはあまり触れないようにしたほうが良いっていうのはわかってるんだけどね。初のオープン戦ということもあってちよつとエゴサしちやっただよ。もうやらないことにしよう。心の毒だ。

「……はあー。トレーニングは積んだんだけどな。これでもまだまだ、届かないってことか……」

練習不足。トレーニング不足。

……それが結論だ。認めたくないけど揺るぎはしない。実力が伴っていないかったのは事実だ。

でも、私はこれでもレースの日までは真剣に、ずっと努力を重ねてきた。

故障には気をつけつつ、朝から夜まで延々と。効率よく効果的に。……それでもタイムは、あんまり伸びてくれないのだ。最初にぶつかった壁がまた立ちはだかってきた。どうすりゃいいってのよ、こんな。

若駒ステークスはオープン戦だ。けど、ただのオープン戦でしかない

い。

トウインクルシリーズにはもつともつと上がある。そこには、若駒ステークスで出会った相手よりも強いウマ娘がゴロゴロいるだろう。わたしがそこに切り込むには……まだ、何もかも足りていない。主にスピードが。

「大きな課題ですね」

「大きすぎて胃もたれしそう……」

「とはいえ、私には現状のナイスネイチャさんの方針が間違っているとも思えません」

普通ならもつと走り込みしろってアドバイスしか出てこないと思うんだけど、それでもイクノデイクタスは私の現状のスタイルを否定はしなかった。

「……そう？　イクノはそう思う？」

「ええ。確かにトレーニングは必要ではあるとは思いますが、ナイスネイチャさんの肉体的な限界……とは言わないまでも、伸びしろが晩成型で非常に緩やかである可能性はあります。だとすれば、無理に高強度トレーニングを続けて打開を臨むよりは、ナイスネイチャさんが得意とするレーステクニクを磨く方が活路は拓けているように思えてなりません」

「……人からそう言われると、励みになるなあ。ありがとう、イクノ」
私に合ったやり方のほうが活路が拓ける、か。

……他人からそう認めてもらえると、嬉しくなっちゃうな。

イクノがチームメンバーでいてくれてよかったよ。本当に。

「なのでナイスネイチャさん。レースに出ましよう。とにかく何度も何度もレースに出て、実戦で技と勝負勘を磨くのです。それが一番だと思います。いつそのこと本番のレースを走り込みトレーニングだと思いいこむくらい、場数を踏むべきかと」

が、イクノさんの出す結論はだいたいこんな感じの根性論に落ち着いてしまうから不思議だ。

分析とかデータ収集は得意なのにね。結局は滅茶苦茶トレーニングするか滅茶苦茶レースに出るかのどっちかになるよねイクノさん。

しかしレースに出まくる、か。

……乱暴っぽい理論のようにも思えるけど、案外悪くないかもしれない。

実際、私の牽制やトリックは前提として、真剣に走っている対戦相手”がいる状態で初めて真価を発揮するし、機能するのだ。小細工方面を伸ばすにしても、場数を踏んで腕を磨くのは今後必須になってくるだろう。現に私はそうやって小刻みにレースに出ることによって、妨害じみたテクニックを育んできたのだから。

「レースに出まくってスキルを磨く。ついでに身体も鍛える、か。……言うは易しだけど、私の場合はこれっきゃないかもね」

「おすすめます。場数を踏むことで初めて閃く発想もあれば、身につくスキルもあるでしょうから」

スキル……良い響きだ。スピードでもパワーでもない概念である辺り、私にとってはまだ希望がありそうな感じがする。

色々と試行錯誤をしてみるとしよう。一時的に速度を増すような小細工だつて、見つかるかもしれないしね。

「……ところで」

「ん？」

「ナイスネイチャさんがレース中に、生徒会長の声真似をしたというのは本当ですか？ 一緒に走ったウマ娘が噂しているようなのですが」

あらら。他の人も聞いてるもんなー。広まるよなーそりゃ。

「うん……まあ、最後のコーナーでね。テイオーのスパートを躊躇わせることができるかもーって思つて。『勇往、邁進ッ！』……こんな感じ？ 実はそんな似てないけど」

「いえいえ、似てますよ。びっくりしました。レース中では気付き難くもなるでしょうし。……どこかで練習をしたのですか？」

「うん。ダンスレッスンで一人で部屋を借りてる時にね。音は外に漏れない部屋だし、色々試してたんだ」

テイオーなら会長さんの声に引つかかってくれる可能性は高い。

引つかからないまでも、ほんの一瞬だけ躊躇ってくれるのも値千

金だ。二度通じる小細工じゃないけどね。

「……生徒会長が言いそうにない言葉を喋ってみてくれますか」

なんか神妙な顔でリクエストされたんだけど。まあいいけどさ。

「えーじゃあ……ゴホンッ。……うむ、美味すぎて手が止まらない。パクパクだな！」

「ぶふッ」

あ、ウケた。

いやでもさすがにもうレース中に声真似は使わないからね、多分。

栄光へのダブルジェット

私はとにかく、たくさんのレースに出ることにした。

朝起きて牛乳飲んで朝食食べて牛乳飲んで体操してレースしてお昼ごはん食べて牛乳飲んでレースして晩ごはん食べて赤مامシドリ
ンク飲んでレースしてシャワー浴びて寝るといふ毎日の始まりである。

『セーフクラウン逃げる！ セーフクラウン逃げる！ しかし伸びない！ ナイスネイチャ抜いた！ ナイスネイチャ先頭に立った！
一バ身……差をつけてゴール！』

何度も何度もレースに挑む。今はまだ重要なのは経験を積むことだと割り切つて、それでもひとつひとつを本気で走る。

強い人もいれば弱い人もいる。ただ、やっぱりテイオーほどのキラキラウマ娘とは出会わない。当たって砕けるな気概で挑んだわりには、私はなかなか悪くない勝率で連戦を駆け抜けていた。

『一着はナイスネイチャ！ なんとも荒れたレースになりましたが、最終的に一着をもち取つたのはやはりこのウマ娘だった！ ナイスネイチャの出るレースは荒れる！ そしてナイスネイチャは荒れたレースで勝つ！ ターフに波乱を呼ぶこのウマ娘、果たして次のレースでは何が起こるのかー!？』

……で、まあ勝利した時のお客さんの反応はというと……歓声はそーでもないって感じですねえ。

実況の人も正統派のウマ娘を褒めるといふよりは、こう……ヒール感のある奴が勝つたーみたいなの盛り上げ方だし。

いや、いいんですけどね。むしろ反響は思っていたより大人しいくらいだと思つてる。

「ナイスネイチャが勝ったか……」

「どうして審議も点かないんだ？」

「絶対に何かやってるのになあ」

「あれは反則ってわけじゃないんだろ」

多分、もつと人気のウマ娘が出てくれば変わってくるんだろうな。今はまだオープン以下のレースばかり。再び大舞台に立てば、お客さんの反応も変わるはず。当然、一緒に走るウマ娘の強さも……。

まー、次の小目標は小倉記念。八月のレースだ。時間はたつぷりある。

焦らず急がず、私なりの速さを求めていくとしよう。

「考えてみれば当然なんだけどさー、やっぱり他の子にマークされてると速さは出し辛いよね」

「そうですね。こちらの動きを意識されると、途端に走り難くなります。強敵が多いという意味では少々複雑ではありますが、レース当日の人氣が低ければより動きやすいかと」

「上手い人はレース展開も上手いけどね。まあでもスルーされるって意味じゃプラスかー」

我々チームカノープスは総勢二名。

リーダーである私ナイスネイチャと、副リーダーのイクノデイクタスだ。

トレーニングを終えた後は部室に籠もって作戦会議やレース鑑賞をするのが通例である。

色々なヒントを貰えるので結構ためになる時間だ。

二人きりのチームは静かだけど、お互い気が合うので悪くない。

「私達のトレーニングも、二人じゃなくて三人とか四人とか……もうちよつと張り合いのある人数がいいよねえ」

「一応、チラシは掲示していますが……効果はないようですね」

けどたまには、新しい部員が入ったらなーって思うこともあるけどね。

その方が場所とか機材の申請が通りやすいっていうし。

「欲しいなあ、新メンバー」

「欲しいですね、新メンバー」

でも私の風評がこのザマじゃなあ……。

トレーナーだつてついてないし、人数少なすぎだし。

「なーんて、こんなチームに入ってくれるようなおバ鹿なんて居ないかぁー……ハハッ……」

「たのもー！」

その時、バーンと大きな音がして、入り口が開放された。

立っていたのは小柄なウマ娘、ツインターボ。

「……えつと？」

「ターボ、カノーパスに入る！」

……。

私とイクノは顔を見合わせ、頷いた。

「待ってたよツインターボ！ いやー、カノーパスに入るとはお目が高い！」

「素晴らしいご慧眼です。歓迎いたします」

「ふっふっふん。ターボが来たからにはもう安心！ チームカノーパスの伝説は今日から始まるっ！」

特に何の前触れもなく、カノーパスに頼もしい大型新人が加入したのであった。

ツインターボは私のクラスメイトだ。

だからよく知ってるし、話すことも結構ある。

もちろん模擬レースだつて一緒に何度か走ったことがある。

彼女が得意とするのはマイルの逃げ。でもそんなこと関係なしに色々なレースに挑む。中距離でも長距離でもお構いなしだ。

けどそれ以上に特徴的なのが、ツインターボはただの逃げではなく大逃げをするウマ娘だということ。

彼女はペース配分というものを知らないのか覚える気が無いのか、とにかく最初から全力で走る。だから最初の方はまるでヤバい速さのウマ娘が現れたように見える。

けど半分くらいを過ぎるとだいたいいつもスタミナ切れを起こし、ゴール前では長距離マラソンでもやってたのかつてくらい、見る影もなくへろへろになっている。

たまーにターボのペースに吞まれて一緒にへろへろになっているウマ娘もいるけど、なかなか悲惨な光景が作られる。でも傍から見ている分には面白い。

「ネイチャ、またテイオーと勝負するんでしょ？」

「え？ うー、うん？ どうかね」

とりあえずお茶とお茶菓子を出して歓迎したところ、ターボはそんなことを訊ねてきた。

確かに一度負けたけど、もう一度勝負してみたいとは思っている。けど誰にも言っていないし予定があるわけでもないんだけど……。

「じゃあターボと一緒に チームカノープス、みんなでテイオーにリベンジだー！」

「おー」

「おーってイクノ、まだテイオーと戦ってたくない？」

「これからレースがかちあう日は来るでしょう。それに、目標は高くて悪いことはありません。良いではありませんか。打倒トウカイテイオー」

んー……まあそうだけど……そうかも……。

「よーっし！ それじゃあ早速トレーニングを……あれ？ ねえねえネイチャ、カノープスのトレーナー今どこにいるの？」

「この前死んだよ」

「ええええええっ!？」

ハハッ、めっちゃ驚いてる。

「それ嘘ですよ」

「なんだ嘘かあ……」

「トレーナーは最初からいないのです。私とナイスネイチャさんがトレーナー業を並行して行っているので、現時点では特に必要としないという感じですね。とはいえ、効率が良いとも言えないのです」

「まー、色々な申請は大丈夫だから。任せてもらえるなら私らでやっちゃうよー。二人も三人も変わらないしねー」

「そーなの？ 良かったー！ ターボそういうの全然わからないから

！」

胸を張って言うことではないけど、うんうん。素直なのはいいことだぞターボ君。

「打倒トウカイテイオーか……」

となると、私の大目標はトウカイテイオーに勝つてことになるのかしらねえ。

……うーん。大きな目標だ。けど、夢は大きいほうがやる気になるね。

篡奪者の対抗意識

打倒テイオーに向けて、私達のトレーニングも本格化……すると思いきや、元々私とイクノの方針は定まっていたので特に日々に代わり映えはしない。

それでもチームにツインターボが加わってくれたことにより、いつも以上にやりがいのある走りができるようにはなった。

「ターボに続けええええー！」

「無理だっつーのー！」

いやでもやっぱかなり極端だわ。

ターボ最初から全開で走るんだもん。私が牽制するまでもなく最初からフルスロットルなんだもん。駆け引きの練習には全くならないわコレ。

けど、スタートは良い。それは認める。

ペース配分はちよつとアレすぎてコメントを差し控えたいレベルなんだけど、出だしの加速に限って言えば私でも舌を巻くほどの上手さだ。

私もスタートは集中してるし出遅れなんてほぼしない。だから最序盤はほぼ先頭に立ってるんだけど……ツインターボと走る時は、それが結構怪しくなる。

「う、おおおおっー！」

だからスタート時点は結構ムキになってしまう。対抗意識が芽生えるとどうかなんというか。

ある意味、これは逃げ馬を徹底的にマークするトレーニングにもなっているのかもしれない。そう考えると悪くないが。

「はあ、はあ、はあ……ターボに……続けえ……」

「スタートだけなんだよねえ……」

1000メートルを越えた辺りですぐにこうなってしまうのはどうにかならないもんですかねえ……。

まあ、私は面白い練習になってるからこれもアリではあるんだけど

さ。

チームとしての練習はそんな感じだ。

チームの外、つまりトレセン学園の他の場所では……またちよつと別の変化があった。

「あ、ナイスネイチャ……おはよ」

「おーっす、おはよーっす」

それは主に、私に対するクラスメイトとか……他の友だちからの視線とか、そういうやつだ。

脚を引つ張る戦法をメインに据えて走り始め、色々と結果を出し始めた私。それ以前は結構空気っていうか、レースについてはあまり聞かれないし意識されないウマ娘だったんだけどね。近頃は周りもそうはいかなくなったのか、色々と変化が生まれている。

全体的には、まあそうね。友達の一部がちよつと疎遠……になったかな。多分だけど。

別に大っぴらに嫌われているわけではない。どこかよそよそしくなったような子が増えたっていうだけ。イジメとかもないしね。

多分、雑誌とかWEBニュースとかでの私の評判を見てそうなるんだと思う。

メディアだけで私を見ると、今の所は結構ヒール扱いされてるからねえ。

「ネイチャおはよー!」

「おー、テイオー。おっはー」

それでもあまり面と向かって批判されたりしないのは、こうしてトウカイテイオーのようなキラキラウマ娘と普通に友達関係を続けられているから……なんてことも、要因としてはあるのかもしれない。

若駒ステークスが終わった後、私とテイオーの関係はほとんど変わることはなかった。

正直テイオーから嫌われてもいいやつてくらいの気持ちで色々な小細工を弄したんだけど、レースが終わった後もテイオーはよそよそしくなることもなく、友達のままだった。

むしろ一緒のレースを走ったことで、以前よりも親密になったかもしれない。それまではレースを介した付き合いをすることがなかったからね。

「ネイチャャさー、今日この後みんなでカラオケ行くんだけど。ネイチャ予定入ってる？　ちよ、ちよつとボイトレみたいなこともやる予定があつてさー」

「あーごめんテイオー。私今日は副会長さんにトレーニング見てもらうことになってるから無理だわ」

「ゲツ、そりや無理だね……」

「また今度誘つてよ。レースも多いし都合が合うかわからないけど、前もつて言ってくれれば空けとくからさ」

「う、うん」

仲は良い……はず。なんだけどたまーにちよつとテイオーがキョドるのはなんなんだろう。

そこらへんは私の目を以てしても見通せないですわ。

向こうからも結構話しかけてくれるし、嫌われてる感じではないんだらうけど。

「そーいやテイオー、今度の若葉ステーキス出るんだつて？」

「あ、知ってたんだ？　うん、そーだよ。ボクにとっては臯月賞の前哨戦だね！　もちろん油断はしてないけど！」

「テイオーそう言つて結構油断するからなあ……」

「しないー！」

してるつて。や、油断してなくても引つかかりやすい性格してるのかもしれないけどさ。

「まあでも応援してるよ。距離も得意だろうし9割方いけるっしょ」

「本当に？　へへへ、ありがとー！　でもボクは10割方勝つもんねー！」

「ここら、油断油断」

「これはヨユーというものだ！」

「くそお、実力に裏打ちされたビッグマウスだなあ……羨ましい……」
「へへへ」

テイオーはあまりレースに出走しない。とにかくトレーニングを積んで、ここぞというレースに出走するタイプのウマ娘だ。

まあ私とイクノディクタスがレースに出過ぎてる場所はあるんだけどね。こつちと比べちゃいけないか。

「……ねえ。ネイチャも皐月賞に出るの?」

「ん。そのつもりではいるんだけどねえ……まだちよつと厳しいかなあ」

「怪我、はしてないよね」

「いや全然。単にまだ決めかねてるだけ。大きいのだとG3辺りで小倉記念はもう出るつもりでいるんだけどね」

私も結構無謀なプランは組むんだけど、それでもまだオープン戦にすら勝てていないのだ。

なのにいきなりG1レースに飛び込むのもどうなんだっていう気持ちが大きくて、出走するかという気持ちにまで至ってない。

今までもかなり段階を細かく刻んで上のステージに挑んでいるからね。

「……走ればいいのに。皐月賞」

「え?」

「ネイチャなら走れるじゃん」

テイオーは冗談めかして言っただけだった。目が本気だ。

「あー……そう? かなあ……」

「ボクは待ってるよ。またネイチャと走れるのをねっ!」

……主人公だなあ。

「今度は騙されないし、最後までずっと突き放して勝ってみせるから」
真っ直ぐで、いつでもキラキラしてて。

一度勝った悪役相手にも手を差し伸べる。そんなのもう主人公じゃん。

「……言ってくれるねえー?」

「! わ、ひゃ」

私はなんとなくそんなキラキラウマ娘のオーラに負けたくなくて、テイオーのすぐそばに顔を寄せた。

そんな真正面から「挑戦状を拾え」って言われたんじゃ、こっちだつて黙ってるわけにはいかないでしょ。

「だったらテイオーが取る予定の無敗の三冠……ゼーんぶ私が奪っちゃうから」

「……！」

テイオーにだけ聞こえるように宣戦布告をささやく。

ほんとは周りに聞かれても良い。けど、テイオーにさえ届けばそれで十分だ。

「じゃあね。トレーニング行かなくちゃ」

「う、うん」

よし。久々に燃えてきた。

今日の副会長さんとのトレーニングは極限まで自分を追い込めそうな気がする。

ああ、やっぱり目標は大きい方が良い。

打倒トウカイテイオー。目指せクラシック三冠。

それがどれだけ果てしない目標だとしても、考えるだけで心が震えてくるよ。

蠢惑の一匹狼

臯月賞に出るため、私は俄然トレーニングに励んだ。

いや、トレーニングというのは正確じゃないか。正しくはレースに励んでいる。

とにかくレースだ。実戦を積まなきゃいけない。実戦で走り、戦略眼と一緒に身体も鍛えるつもりでいく。

誰かに頼まなくても他人が本気を出して実戦形式で追い切りしてくれるのだ。これ以上のトレーニングは無いだろう。

もちろん、私もただの練習のつもりで挑んでいるわけではない。毎回勝つつもりで挑んでいる。

どんなレースでも最後まで絶対に手は抜かないし、諦めない。いや、頭で“ごりやもう無理だわ”って悟っちゃうようなレースはあるけども。

おかげで勝負勘は鍛えられている。実戦を積んだおかげで戦績もいい感じだ。注目度が上がれば私の作戦も立てやすい。

「ほらっ、急がなくていいのっ……？」

「うる、さいっ……！」

「皆先にいっちゃってるのっ……」

「……ッ！」

ムキになって走る子の後ろ姿を見てほくそ笑む。

私の戦術は、今や誰もが知っているだろう。悪目立ちはしているからね。

だけどわかっているからといって、実際のレースで自分の心を制御しきれるかと言えばそうではない。

興奮状態で100%自分の心を制御できるような精神力の強いウマ娘ばかりではないし、仮にささやきが通じなかったとしても、コースを塞ぐという直接的なブロックを続ければ否応なく相手の取れる手段は限られてくる。

近頃はレース前に“私は絶対に心動かされたりはしない”でも

言いたげな顔をして私を見てくるウマ娘も増えたけど、引つ掛けやすさで言えば、まあ、うん。あまり変わらないのが現実だ。

『ナイスネイチャ、一着でゴールッ！』
それに。

仮に一度私と対戦したことがある子が相手だったとしても、負ける気はしない。

私は何度もレースに挑み、新しい戦法を幾つも身に付け、吸収している。

手を変え品を変えは私の得意とするところだ。

二度目三度目の対戦があったとして、私は何度だってその子を騙してやる。

「いえーい！ 今日ギリギリ一着うー！」

笑顔で手を振りながら駆ける私に降り注ぐのは、歓声と、ちよつぴり多めのブーイング。

だけどこれでいい。嫌われ者になろうと私は一向に構わない。

キラキラが。一着が取れるのなら。他人の声なんて、些細なものだよ。

「とはいえ」

ブーイング上等。そのスタンスに嘘はないんだけども。

「トレセン学園くらいでは普通に青春してたいよねー……」

別に私は根っからのヒールってわけでもないし、一人が好きなのわけでもない。

人とお喋りするの大好きだし、遊ぶのだってそうだ。

最近のレース中は一匹狼を気取って走ることも多いけど、交友関係を全部積極的に打ち捨てたいとまで思ってるわけじゃないのよ。こんな私でもね。

「これを、こうして……よし、いい感じじゃん」

だから行事とかは今まで通り、ちゃんとかなす。

イベントがある時はしっかりイベントに乗っかって、みんなと同じ時間を共有して、ワイワイ過ごすんだ。

明日のバレンタインデーもその一環。

三角コーン型の人参チョコを、オレンジとグリーンフィルムで先端から包む。

すると、ちょうどオレンジとグリーンの色の境目あたりをリボンで結ぶことで……人参っぽい包装がされたチョコの完成だ。ちっちゃい人参みたくて結構かわいい。

リボンの色も赤と緑で私っぽいカラーにしてるのがちよつとしたこだわりである。

「美味しく作れたし、受け取ってくれるといいな」
そう！

仲良くするならお菓子をプレゼント！ これぞ王道！

物で釣るのは基本よ基本！ 友チョコ万歳！ 企業戦略？ その誘い乗った！

これでちよつと疎遠気味な友達もある程度戻ってくるかもしれないし……うん！

「あとは明日のお楽しみね……マーベラス、明日の朝ちゃん起こしてよね」

「うーん……もう食べられないよお……」

「おやすみっ」

私は期待と不安を半々に抱きつつ、ぐっすりと眠りこけたのだった。

バレンタインデー。

一応トレセン学園には男性職員やトレーナーもいるから、まあそういう人に気があるなら渡しても良いんじゃないっていう日ではあるんだけど。

基本的にウマ娘しかいない学園なので、この日は実質友チョコ交換会の日だ。

私も例年は親しい友だちからいくつか貰っている。でも今年は……どうだろうか。

数が露骨に減っていたらちよつと凹むかもだけど……今日はむし

ろ、こつちが沢山チョコを用意したからね。先手を打って仲良しこよし大作戦にしてやるんだから。ふふふ……。

「あ……ナイスネイチャ」

「おー、おはようおはよう。ちようどいいところに。実はねえ……」

「あの……ほら、これ」

「え？」

差し出されたのはラッピングされたチョコレート。まさかの先手を打たれた形だ。

「あげる……」

「え……ほんとに？ いいの？」

「駄目ならあげないし」

「ありがとう！ やー、嬉しいわあ……じゃあ私も、これ。はい！」

「えっ、くれるの……？」

「もちろん！ 人参のフレーバーがちゃんと出るように作ったんだから、味わって食べてくださいなー」

「……うん、ありがとう！」

友チョコ交換した子はこころなしに嬉しそうな足取りで去っていった。

……いや、よかったあ。案外私も嫌われてるわけじゃないのかな……？

「えっと、ネイチャ。今平気？」

「え？」

「ナイスネイチャ、ちよつと。これ……あげるから」

「え、ああうん」

「ナイスネイチャ！ チョコあげる！ 受け取って……ください！」

「あ、ありがとう……」

「ほらっ、これあげるからっ。中にID入ってるから、後で味の感想聞かせてよね」

「え？ ああうん、はい……」

……???

なんか多い。いやなんかかなり多いんですけど？

おかしいな。人参ネイチャチョコを配るから結構大きめの袋を用意してきたのに、皆からもらうチョコで袋が溢れそうなんだけど。大丈夫これ。いや大丈夫じゃないわ。こんなの食べきれないって。

「ど、どういうことなの……?」

もしかして……。

最近沢山レースに出て勝ってるから、それで注目されてる……のかな？

……そっか。私も結構、話題のウマ娘になってきたってことか。

「皐月賞……ますます負けてられないね……!」

テイオーへのリベンジ、果たさなくちゃ。

中山レース場への備え

皐月賞は目前だ。

数多のレースを走って技に磨きはかけたし、ライバルたちのレースや動向は逐一チェックしている。

それでも私が勝つにはもうあと一押しでも二押しでもしておきたい。

「ここが近所でも最大の蹄鉄売り場ですね」

「おおー……」

そういうわけで、私は決戦のための蹄鉄選びに乗り出した。

GIレースは勝負服を着なきゃいけないのでいつもと走りの感覚が変わるのは当然だけど、それならいつそ蹄鉄も変えてしまおうという結論に至ったのだ。

「やー、イクノさんがいると助かりますなあ」

「蹄鉄選びに関してはお任せを。怪我を防ぎレースで最大のパフォーマンスを発揮できるものを見つけ出しましょう」

イクノは蹄鉄にも結構こだわるタイプなのでありがたい。

私は服もこういうのも適当なの使っちゃうから、全然詳しくないんだよね。

ちなみにツイインターボは店の入り口あたりのワゴンに積まれた膝サポーターをみよんみよん伸ばして遊んでいた。

楽しいかいターボさんや。ターボさんが楽しいなら私はいいと思うよ。

「なるほど、ネイチャさんは鉄製でしたか……アルミではなかったのですね」

「うん。長持ちするからこれでいいかーって……はは、適当に決めました」

シューズに装蹄する蹄鉄は色々な種類がある。

街中を軽くランニングするなら軽くて柔らかいものが人気だけど、私たちのようなレースをするウマ娘にとってはかなり本格仕様の蹄

鉄が必要……らしい。

一番重要なのはなによりもサイズと形。シューズや足の形に合っていないと怪我の原因になるそうなの。

次に重要なのが、材質だ。

「レース向きなもので言えば、まず間違いなくアルミ製ですね。摩耗が早くパワーが出ないと言われることもありますが、こまめに取り替えば劣化の問題はクリアできます」

「あくまで消耗品と割り切るってことかー」

「そうですね。とはいえ、鉄製のものと比べて芝への食い付きが弱いという指摘もあながち的外れでもありません」

「イクノはどっち使ってるの?」

「私の場合はアルミですね。やはり足に直接かかる重量は無視できませんから。ネイチャさんもアルミにすれば、多少は足の回転が上がるかもしれません」

悲報、私わざわざ重い蹄鉄で走っていた模様。

まあその差も大きなものではないんだろうけど……スピードが私の課題である以上、ここは貪欲に速さを求めていかないとね。

「じゃあ軽めのアルミのやつに……」

「ですが、鉄製でも例外はあります」

「うあん。なにになに、何があるの?」

「肉抜きした薄型のものであれば、鉄製であつても軽さとパワーを両立できるのです」

イクノが手に取ったのは、普段私が使っているものよりも少しスマートで、穴や窪みの多い蹄鉄だった。

「おっ?…これは軽い……」

比べてみると、なるほど。アルミの蹄鉄とほとんど変わらない重さのように思える。

アルミが強度を持たせるために塊にならざるを得ないのに対し、鉄だところこういう細工ができるってわけね。

「ただし、この軽量蹄鉄は劣化が早くメンテナンスに手間がかかるというデメリットがあります。値段も安くはありません」

「……あー、みたいだねえ。そっか、軽くした分脆くなるし、錆もつきやすいのか。泥とかも細かいところに入りそうだし……」

特に洗うのが面倒臭そうだ。錆も目立ってきたら強度の不安もあって使いたくなくなりそう。製品としての寿命は短いだろうなあ。

「これにするよ」

けど即決だ。短期間でもパフォーマンスを出してくれるならそれが良い。

「よろしいので？」

「うん。皐月賞は短めだからね。足回りは本気で整えないと、絶対に勝てなさそうだから」

「……ええ。相手はトウカイテイオー。ベストな条件で挑むべきでしょう」

中山レース場はラストの直線こそ短めだけど、下り坂が緩やかなせいで私の強みが活かせなくなる。向こう正面では平坦な直線がネットクになるだろう。そんな不利を埋めるためにも、蹄鉄だけでもこだわらなくちゃ。

「そう高いものではないので、ついでにアルミの厚いものと薄いものも買っておきましょうか。実際につけて走ってみて、感触を確かめてみるべきです」

「うん、そうするよ！」

「あ、お店のカードはこちらを使ってください」

「了解っすー……えーと合計で……あ、今回の買い物にあと千円プラスでスタンプ全部埋まるっぽいよ？」

「なっ……ど、どうしましょうか。他に買うものは……」

いやいや、そんなテンパらなくても。買うものがないなら無理に買う必要はないとネイチャさんは思いますけどね。

「ねーねー二人とも、これ見て！ ターボこれ買う！ このサポーター買うー！」

イクノが悩んでいる間に、ターボがワゴンのサポーターを三つ掴んでやってきた。

どうやらセットでお買い得になるらしい。

膝のサポーターなんてどこで使うんだろって思うけど……。

「今回はナイスターボ！」

「……ツインネイチャ？」

いやそういう言葉遊びのつもりではなかったんだけどね。

皐月賞の地固め

中山レース場。

天気は曇り。バ場は稍重。

フルゲート18人……GI、皐月賞。

会場は、パドックに入る前から既に沢山の人で埋め尽くされていた。

とはいえ、まあ、見慣れない景色ではない。

テレビの中継を見ていれば重賞での観客の多さはわかるもんだし、東京に来てからは何度もレース場に足を運んで実際の走りを見ている。

だから人が多いのはわかっていて、心構えもしっかり固めてきた。……それでも、いざ当事者になってみると……結構緊張するもんだわあ。

「ナイスネイチャさん」

ズン。と肩に重さが加わる。

イクノデイクタスが珍しく、ボデイタッチで励ましてくれたらしい。

「貴女ならいけます」

「……ありがと。イクノデイクタス」

「ふふん。ターボが代わってもいいよ?」

「ばーか。私の晴れ舞台なんだから、ちゃんと見てなよ。ターボ」

廊下を歩き、芝の上に出ると……歓声はより一層、強いものになった。

そこに交じるブーイングじみた声も目立つけれど、それに勝るほどの……音圧。

皐月賞。クラシック三冠の最初の一つ。

モブキャラには似合わない晴れ舞台に、私は今、立っている。

「ああ……曇りなのに、眩しいや」

雲の向こうに太陽が見える。直視しても誰も文句を言わないくら

いの控えめな輝き。けど不思議と、私にはそれがキラキラして見える。

……集中していこう。

皐月賞は生半可な集中力で勝てるレースじゃないんだ。本気で挑んでいけ。私。

「ネイチャ」

「ん、テイオー」

私達が入場したよりも大きな歓声に迎えられて、トウカイテイオーはターフに入ってきた。

白と青の軍服のような勝負服。帝王の名に相応しい、とても凛々しい姿だった。

「ネイチャの勝負服……可愛らしい感じなんだね」

「あはは……他の子と比べたら結構地味めになってるんだけどね。ありがと。気に入ってるんだ」

私の勝負服は、赤と緑をメインにしている。

ポインセチア。あるいはクリスマスカラー。胸元のリボンが特にお気に入りだ。勝負服は自分の希望も結構通るもんだね……ダメ元で言ってみて良かったわ。

……けど。

「この服を着たからには、私は勝つつもりで走らせてもらうんでえー……よろしくね。トウカイテイオー」

「！……うん！ けど、ボクだって一着を取るつもりで走るから！

ネイチャはその後でゴールしなよ」

「言ったなあ？」

「言ったよお？」

「ふーん……じゃあ賭けしよっか」

「賭け？」

トウカイテイオー。キラキラウマ娘。皐月賞最大の強敵だ。

まだゲートインすらしてないけど……彼女に関しては、今からでも牽制しておいた方が良さ。

「私が負けたら、そうね……トウカイテイオーの言うこと、なんでも

ひとつだけ聞いてあげよつか」

「え」

「逆に私が勝ったらさあ。トウカイテイオーになんでも一つだけ命令させてよ。どう？」

「め、命令かあ……」

「あれ、自信ない？」

そう言うともツとするんだよね。わかりやすいんだ。

「勝つのはボクだから関係ないよ。ネイチャこそ良いの？ ふふーん……なんでもつてことは……なんでもだよー？」

「もちろん。テイオーこそ、どんなに恥ずかしい命令でもちやんと聞いてもらうからね」

「は、恥ずかしいって何させる気なのさー！」

「そりやまあ……ねえ？」

髪で口元を隠して不敵に笑ってみせるけど、そんなの全然考えてもいない。

勝った時のことは勝ってから考えればいい。今私に必要なのは、少しでも他人のコンディションを不安定にさせることだ。

「もう……ほんとネイチャはレースの時、意地悪になるんだから……！」

テイオーは少し怒ったように、動揺したように立ち去っていった。

悪くない。今日のテイオーはなかなか不安定気味だ。

「運は向いてる……」

重要なのが枠番だ。

なんと今回、テイオーは18番からスタートになる。

大外からの出走は結構なハンデになるはずだ。私は2枠3番で内側も内側。個人的にマークしてる強敵は近くにいないけれど、その分周囲のウマ娘を「けしかける」ことは簡単そうだ。

……芝2000メートル。長いようで……短い。とても短い。

テイオーの得意な距離っていうのが厄介だ。仕掛けるにしても時間とタイミングが限られる……そんな中で、有効な手を打ち続けなければならぬ。

私の勝負服は地味だ。地味だけど、それだけにレース中は「溶け込む」はず。

何度も何度も仕掛けよう。しつこく。執拗に。

大きさなくらいそこまでやってようやく、私の勝機が見えてくるんだ。

「おいつすー、ナイスネイチャでーす！ 今日皆よろしくねー！」

ゲート前に集まって皆に声をかけると、訝しむような、警戒するような視線がこちらに向いてくる。

ひーふ……うん。全員警戒してるね。当然か。一見さんはいないってことね。

けどそれも織り込み済み。私のすべきことは変わらない。

「今日はトウカイテイオーが一番人気だからなあ……相手は大外とはいえ、どう走ったものか……」

出走前にはとにかく喋る。集中を乱す。ついでに私以外のライバルを意識させる。

「ブレスオウんだンスの末脚を考えるとあまりペースを抑えたくもないし……サーザンスキーを前に行かせたら厳しくなりそうだし……まあ一番はテイオーのマークかなあ……」

人気のウマ娘の名前を上げて周囲に警戒させる。

名前を使われた子はギョツとしてるけど、ごめんね。実際ライバルになり得るから邪魔はするよ、もちろん。

「とにかく前だ。前に行かなきゃ勝負できない。それは間違いない……。しつかりしろ、私！」

ゲートに入っても大きさなくらい独り言を垂れ流す。隣のアナザージューが迷惑そうにしてるけど気にしない。私の独り言を聞け！

「まず最初に内側取って……あつ、この手もありかな……？」

一人一人、ゲートに入っていく。閉まる音で残り人数をカウントする。最後の一人が入ったら臨戦態勢だ。そこに集中力を使う。

「泥が跳ねて目に入ったら痛そうだなあ……きつとまともに走れなくなっちゃうくらい」

「……！」

足元の重い芝を踏み固める。無いよりはあったほうが良い程度の地固め。気休めでも良い。初動だけでも速くするために。

「皆も気をつけないと、今日は思わぬ怪我とか——」
開く。開くぞ。

ガタン。

さあ来た！

「臯月賞、いただきッ！」

「ッ！」

「くっ……！」

数人の出遅れ横目にいつもの好スタートを切り、私は臯月賞の暫定一位に躍り出た。

問題はこれを、ゴールで再現できるかどうかだ。

くすんだ色の食い下がり

△ ③ ☆ ③ ? ナイスネイチャ △ ③ ? ③ △
いいスタートが切れた。

ゲートで牽制はしていたけど、どれだけ効いたかはわからない。
多分出遅れもそんなに多くないだろう。皐月賞に挑む子達はさすがにレベルが違う。

けど、最初の直線には坂がある。

ここでちよつと加速しつつ、後続のライバル達を邪魔してやろう。
前をキープしつつ後ろの気配を探り、コースを塞ぐ。この辺りで抜かされそうになるけど、この速度差は良い蓋になる。

「くっ……い！」

坂では上手く左右に動けない。坂はまっすぐ登るからこそ「普通にキツイ」だけで済むのであって、少しでも斜めを意識すると途端に「ありえないほどキツイ」ものになるのだ。

コースの切り替えが結構難しい場所でこそ、前を塞いだ時の影響は大きい。

「後ろ来てるねえ、ここで足踏みしてて、平気かなっ……?」

「……ッ！」

さすがに後続から抜かされ始めると、今度はマーク相手に張り付いてからのささやき。

煽るような言い方だけど、これは自分への独り言でもある。

思っていた以上に他の子が速くて大変なのだ。もつと引つ掻き回さないと取り返しがつかなくなる。

「テイオーきてるよっ……い！」

1コーナー。前は五人。テイオーがきてるのは嘘じゃない。私はテイオーと同じ中団に控えているからよくわかる。でもここで加速する気はないだろう。ちらつと横を見るとテイオーが「まだいかないけど」って不服そうな目をしてた。

けど、さすがに皆テイオーを意識しているのか。コーナーに差し掛

かって少し速度を入れ始めた。

当然私もここで加速。今日はコーナーで休む予定も余裕もない。

「ホントにテイオー仕掛けてんじゃんツ……!」

少し高めの声が、焦ったような言葉を吐き出した。

私のいつもの声ではない。けど、他の人の声ではない。

適当に声を変えて作った、赤の他人の声。色々と練習して自分なりに生み出した、〃走りながらも負担なく出せる他人の声真似〃だ。

居もしない私以外の誰かの焦り声を聞き取って、先行組が加速する。

丁度私もコーナーで猛追し始めたし、迫る足音で危機感も芽生えただろう。いい感じに仕上がってる。悪くない。

「ふツ……!」

「!」

先行組に並びかけたところで、テイオーの前を塞ぐ。コーナーの終わりに差し掛かる直前で減速させる。もつと集団の後ろ側に押し込んでやるんだ。

「邪魔……!」

「そりゃ、邪魔してるもん」

左に一人。抜かれそう。少し寄せるか？

いやテイオーが右狙ってる。こっちは譲れない。

「前は悠々と走ってるねっ……ここはもうみんな、追いつけなさそうっ……!」

「その手に、乗るわけないじゃんツ……!」

私の言葉に引っかけかり、一人が強引に前へ出た。

その手に乗るかって、別に〃諦めさせる〃ために言ったわけじゃないんだ。貴女みたいな子を引っ張り出すために言ったんだよ。ありがとう。逃げと先行組を脅かしてスタミナを削つといてください。

「直線、苦手なんだよなあ……っ」

向こう正面に入って直線へ。

ここが最大の難所だ。

なにせ私は直線で何も出来ない。単純にスピードで劣る分、駆け引

きが難しい。

ここでのコース取りが最重要。ここでテイオーを自由にさせたらそれだけで終わる……！

加速と減速を何度も切り替える。

抜かれては追い越し、追い越されては抜き返す。

速い子の前を取って壁になり、全員のペースを少しでも乱す。

背後で、隣で、ささやきかける。焦燥と敵愾心を煽り、判断力を奪う。

前は五人……いや七人。団子状態に近い。テイオーは私と同じ位置に沈んでいる。私にとってはいつもの位置で、テイオーにとっては焦れるポジションか。

最終コーナーが近づく。レースの終わりも近い。

スタミナはまだ、ある。何度も何度も小手先の技を使ったけど、どうにか残ってる。

他の子はどうだ。中にはバテた人もいるかもしれない。

けど楽観はできない。スタミナ削りに全てを賭けるのは愚策だ。ここからは相手の速度を落としていかない。

ターフビジョンが目に入る。今の位置関係が俯瞰で見える。

……なら、動きはここから、まず……。

決まった。

「お先にッ！」

コーナーに入った瞬間、私は本格的に前へ出た。

ゴールまで少し距離はあるけど、緩めの下り坂でスタミナを回復しながら駆け下りる。

足元悪めの、少し傾斜したコーナー。ここではそう簡単に身動きは取れないしスピードも出せないはず……！

一人抜いた。二人抜いた。疲れ切ってる人たちだ。遅かれ早かれ沈んでいただろう。

でも前はしぶとい。しかも後ろから奴がきてる……！

「させないよッ！」

トウカイテイオー。

もう上がってきてる。速い。なんだよその脚。ここは私の得意な場所なのに。

大きなストライドが伸び伸びとターフを蹴っている。……下りは平地よりも走りやすいのか！

「テイオーに前は譲れないなあッ」
「！」

食い下がる。インはこっちのものだ。ここでテイオーが膨らんだ分のロスが最後の頼みの綱か？ そうとも思えない。このくらいじゃ勝てない。

本格的な速度に乗る前に前を塞ぐ！ もっとゴール手前でやる予定だったけど今しかない！

「大外、テイオーきてんじやんツ……！」

他人の声真似で前側のウマ娘を焦らせる。

外側への意識を刷り込まれた彼女たちは直線前で少し広がり、外からの抜け駆けを牽制するような動きを見せた。

そう、テイオーは一番人気。一番のライバル。クラシック最初の一冠を逃せないのは皆同じ。テイオーを止めないと負けると誰もが理解してる。

だからそうせざるを得ない。無意識でもそう動いてしまう。

そして広がって横並びになると前へ出るのをためらい始める。後ろをブロックする陣形を崩すくらいならここで一息いれるべきではないのかという思いが加速への意思を鈍らせる。

ここで、私が行く！

「一番は私のものだあッ！」

坂の直前でスパートかける。コーナーの終わり間際に出来た一人分の隙にねじ込んで、一気に先頭集団に並ぶ！

本当は坂路で出したかったけど、もう今しかない！

ここでテイオーを突き放せ！ 直線とはいえ坂だ！ 得意な場所なら勝負できる……！

「うッ……！」

勝負できる。はずだった。

はずなのに。

速度が出ない。スタミナはある。なのに前に出られない。

私は必死だ。必死だけど、横に並んだ子たちも同じくらい必死だ。

それだけじゃない。後ろから猛追する子も諦めていない。誰一人勝負を投げ出していない。

誰もがスタミナを切らしバテている。

それでも根性で走ってる。キツくて遅くなるはずの坂を、私の想定する以上の速度で登っていく。

残り200メートル。テイオーに先へ行かれた。

抜かされる。テイオーでもない子にさえ捉えられる。

キラキラだった私の順位が色あせていく。

「負けるか……！」

トレーニングは積んだ。実戦も何度も経験した。色々なものを擲ってこの舞台に立った。

スピード不足を克服するために色々試した。いろいろ考えた。あらゆるものを見直した。

上の舞台では、そんな努力さえ全て誤差だともいうのか。

「ハア、ハア……へへっ、一着！　まずは……一勝だっ！」

空気が震えるほどの大歓声の中で、トウカイテイオーは人指し指を掲げていた。

多くの子が疲れ切っていて、彼女でさえ例外ではないはずなのに、その笑顔は……主人公のようにキラキラと輝いている。

「ふう、はあ……くそっ……！」

私は五着。

入着だ。初のG1レースで掲示板入り。

でも……これは、私の求めていたものではない。

「私はっ、「着が……ッ！」

俯けば見えるのは自分の勝負服。晴れ舞台に相応しい晴れ着。

……この服に、相応しいだけの走りができなかった。

「……まだ、足りないってのかよッ……！」

私の阜月賞は終わった。

熱いまなざし

皐月賞を終えた直後は、そりやもう落ち込みましたとも。ええ。最後の最後に皆のスパートについていけず、力負け。横並びからは絶対に敵わないという事実を押し付けられたようで、凹みっぱなしでしたとも。

けど……まあ、負けは珍しいことではないし。

少し時間を置いて振り返ってみれば、むしろ皐月賞で5位入着は結果としては上出来ではあったのかなと思いついた。

やっぱり2000メートルっていうのが厳しかった。

レース後は相応に皆バテきつていたけど、有力ウマ娘たちの一部はスタミナを削りきれずにラストスパートを許してしまった。これはさすがに距離の問題が大きんじゃないかと思っている。

あと距離に対して人数が多すぎた。フルゲート全員にトリックを仕掛けられる時間なんて無かったし、中には完全ノーマークだった子もいる。

実際、今回私より上に入賞した子は人気低めの子が多かったしね。

……まあ、ね。そりや、私が遅いのが全ての原因ではあるんだけどさ。

遅いのを今になって悔やんだところで意味のない話だし、考え方をちよつと変えてるだけではあるんだけど。

こういう部分からメンタルを持ち直していくのはきつと、大事な作業なんだと思ってる。個人的にはね。

巷では周囲を引っ掻き回す私の走りについて色々言われていることもあるようだけど、そういう意味では五位入着って微妙な線かもしれない。

なんだかんだで掲示板入りだし、とはいえその中でも一番下だし……。

……おし。切り替えていこう。

負けは負け。私がすべきことはどう足掻いても小細工だけなんだ

から、また今日からトレーニングに集中しなければ。

「ネイチャ。約束は覚えてるよねー?」

奮起した私の前に、良い笑顔をしたトウカイテイオーが立ちはだかった。

……約……束……?」

「あ。あー、そうだあー、帰って空手の稽古の時間だあー……」

「ネイチャが約束破ったって言いふらしちゃおっかなあー」

「あーもうはいはいわかりました覚えてますう!」

ちっ。トウカイテイオーめ。レース直前に交わした約束のこと、しっかり覚えてたか。

あと何日かこそそしてればバレないもんだと思ってたのに……。

「ボクの言うこと、何でも一つ聞いてくれるんだったよねー?」

「ぐう……ネイチャに二言はない……!」

「さつきはぐらかそうとしたくせにさあ……ま、いいや。それじゃネイチャ、今日この後時間あるでしょ?」

「まあレース後だし休養は長めに取ってあるから、時間はあるけど……」

「じゃあ一緒に遊びに行こうよ!」

「遊び?」

「前は断られちゃったしき。そのくらい良いでしょ?」

まあ、別にそのくらいは構わない。

テイオーと遊ぶのは普通だしね。二人だけで出かけたことは無い気がするけど。

「よし、それじゃあカラオケいっくぞー!」

「カラオケかあー、好きだねえ」

こうして私はテイオーと一緒に遊びに出かけることにしたのだった。

テイオーは皐月賞に勝った後、それはもう色々なところから取材を受けて忙しそうにしていた。

臯月賞ウマ娘だ。しかも無敗ともなれば、ファンも増えるし期待だつてされる。メディアもこれからのテイオーの動向はしつかり見とおきたいところだろう。

元々キラキラウマ娘だったテイオーだけど、最近はより一層キラキラしてる。

友達とはいえ、私が隣を歩くのはちよつと場違いなんじゃないかって思うことがある。……考えすぎなんだろうけどさ。

「いえーいー」

テイオーは歌が上手い。ダンスも上手い。何よりとても楽しそうにしている。

こうしてカラオケで歌っていても、パフォーマンスを欠かさない。ウイニングライブのお手本にされるだけあつて、やっぱり凄いわ。テイオーは。

「ほらほらネイチャも！ デュエットこっちの歌つてよ！ 知ってるでしょっ？」

「えー？ 私こっちの男パートかー、知ってるけど」

無敗のウマ娘だけど、三着の振り付けもちゃんと覚えてるし完璧に踊ってみせる。

笑顔は絶やさず、常に明るい。

……臯月賞では本当に極端にテイオーをマークしたけれど、それでもこうして私と一緒に遊んだりできる。凄いよね。全然怒らないんだもん。私は内心、さすがにそろそろテイオーから苦手意識持たれるかなって思ってたから、こういう……何気なく遊びに誘ってくれるところに救われる。

「あー歌ったあ！ ネイチャも歌うまいよねー」

「あはは、テイオーほどじゃないよ。練習はしてるけど、人並みですわ」

ひとしきり曲を歌い終わったら、ドリンクバーでまったり。

テイオーが調子に乗って五時間パツクなんて選んだもんだから時間ダダ余りよ。二人で五時間は厳しいって。

「……ネイチャはさ。大変だよね」

「ん？」

どしたの急に。

「ほら。ボクも初めてG1に勝ったからさ。取材とかも多かったし……自分がどう見られてるのかって、ちよつと気になったりしてさ。トレーナーからはあまり気にしないほうが良いって言われてても、どうしても見ちゃうんだよね」

「あーわかる」

私も前に「もう見るのはやめよう」って思ったけど、どうしても折に触れてチラツと見ちゃうわ。

ていうかトウカイテイオーだったら悪いことなんて書いてないだろうし、見てもいいと思うんだけどなあ。

「……やっぱりネイチャも自分の事とか、見たりするんだよね。そういう所だと、ほら……結構酷い書かれ方、してたから」

「あーそうね、最近すごいよねえ……私も見ちゃいますよ。他の子のレースとか動向を探ってるんですけど目に入っちゃうから。いやー、私つてば完全にヒールが板についてきましたわ」

逆に私くらい開き直ったスタイルでいると、けちよんけちよんに言われていてもそれはそれで楽しめるんだけどね。

「その、さ。ネイチャは辛くない？」

「辛くないよ」

私は即答できた。

まあムカつとなる書き方してる記事はたまにあるけどさ。

「私はさ、キラキラが欲しいんだ」

「キラキラ……」

「二位でも三位でもない、一等賞。そのためなら出来ないことはすっぱり諦めるし、私に合った一番いいやり方を見つけてみせる。友達の弱点を粗探ししても、他人の脚を引っ張ってでも。当然、それで人から何かを言われても。それでキラキラが掴めるのなら……」

天井を仰ぎ、回っていない小さなミラーボールに手をのばす。

「……そのためなら私は、どんな悪役になっても構わない」

悪評も逆風も、全部ひつくるめて私の走りだ。それはもう覚悟して

る。

「正攻法ではない邪道を進むと決めただ。後はもう皿までモググしてやりますよ。」

「……っ、強いなあ、ネイチャは」

「まあそこまでやつても五着だったけどねえ」

「強いよ。……それに、記事を書いている人は知らないけど、ボクたち一緒に走ったウマ娘はちゃんとわかってるよ。ネイチャの走りの技術も、レースにかける想いも」

「やめてよ。そんな主人公みたいな顔して主人公みたいなこと言うのはさ。」

「私悪役だよ？ 消滅しちゃうよ？」

「ボクは、ネイチャのこと認めてるから。応援するし、何かあったら力になるよ。……でもそっか。ネイチャがあまり気にしてないなら良かったよ」

「あー主人公してるなあ……まあ、ありがと。私もウマ娘だし迷うことはあるから、嬉しいよ」

「まつすぐだなあ。トウカイテイオー。」

「本当にもう、私には勿体ないくらい良い友達だよ。」

「……じゃあさネイチャ。次は日本ダービー出てみない？」

「は、はあー？ ダービー？ なんでまたそんな大舞台に……」

「皐月賞走ったなら当然じゃない？ 怪我も無いでしょ？ だったらボクはまたネイチャと勝負したいんだけど」

「……日本ダービー。ウマ娘にとって憧れのG1レースだ。」

「正直、私は場違い感あるんだけど……考えてなかったわけじゃない。2400メートルはきつと私の得意な距離だしね。」

「……なんとなくダービーに出るって口に出すのが私らしくなくて恥ずかしいなって思ってただけ。」

「よーし……じゃあ命令！」

「えっ」

「日本ダービーでボクともう一度勝負だ！」

「……命令はもう使ったじゃん！ カラオケ！」

「ふふん、カラオケはただの遊びだもんね。まだ命令使ってませんでしたー」

「ぐぬぬ……！……ふーん、そこまで言うならやってやろうじゃん。2400は私の得意な距離だもん。今度こそテイオーのこと、たくさん邪魔して負かせてやるんだから」

「……！」

ちよつと座る位置を詰めてやると、テイオーがぎよつとしたように尻尾を立てた。

「ね、ネイチヤって本当に意地悪するよね……！」

「当然じゃん。人の嫌がることを考えて、ねちつこく弱点を調べるのが最近の私のスタイルだもん」

「……で、でもボクの弱点、そんなに見つけれられるかなあ？　ネイチヤがボクに勝てる未来なんて見えないけど……？」

そんな挑発するような言い方されたら、私もムキになっちゃうんですけど。

「……最近の私、人の嫌がることを探すのが得意だから」

「あつ、ちよつと何つ……ネイチヤ……!?!」

テイオーの肩に手を置いて、ずいっと正面に回り込む。

そのままテイオーの膝に座って、じー……つと、見つめる。

「あ、だからあ、こういうのは……」

「へー、意外。テイオーこういうの慣れてるかと思ったけど……正面からじつと見られるの苦手なんだあ」

「……全然、平気だよっ」

今更キリツとさせても、眼の動きで動揺してるのはわかる。

肩をそつと触られるのも少し抵抗があるのか、落ち着かない様子だ。

……ああ。あのトウカイテイオーが。皐月賞を取ったキラキラウマ娘が、私を前にしてちよつと弱っている。

そんなテイオーを見てるとなんだか……仄暗い楽しみを覚えてしまいそう。

「じゃあさー……テイオーが他にはどんなことをされたら苦手なのか

……教えて欲しいなあ」

「そ……そんなの、ネイチヤが調べてみたら良いじゃん……？ そんなすぐに、わかるものじゃないと思うけどね……！」

負けず嫌いな奴。でも。

「そこまで言うなら調べちゃっても良いんだ……？」

「……！」

少し垂れ気味になった耳の近くに顔を寄せる。

「どういう声が苦手……？ 小さい声？ 大きい声……？」

「ッ……！」

「高めの声？ 低めの声……？ あ、低めの声で反応したねえ。〴〵こういう声が苦手なんだ〴〵……？」

「あ……ネイチヤっ、ちよつと、そんな近くで……！」

「ほら、もつと教えてよ。テイオーの弱点。大丈夫、痛いことはしないからさ、安心して……？」

「う、あう、うああ……！」

「じゃあ次はねー……テイオーのどこを暴こうかなあ……」

それから結構な時間、私はやけに強情なテイオーを動揺させたりからかったりして、彼女の幾つかの弱点や苦手なことを引きずり出すことに成功した。

「も、もう。本当に酷いよ、ネイチヤ……！」

「あはは。私の勝ち」

終わった後にはテイオーが涙目で静かに怒ってたけど……うん。

こういう走りをしてから、人が戸惑ったり動揺するリアクションを見るのが楽しみになってしまったかもしれない。

「……またテイオーのこと、困らせていい？」

「え、えっ!? そ、そんつ……別に今回も困ってないし……いくらでもすればいいんじゃないっ……？」

いや、本当に負けず嫌いだなあ……。

今年の皐月賞を振り返るスレ

392 : 名無しの野次ウマ ID : O s 6 8 m r a 2 n
トウカイテイオー1着!

393 : 名無しの野次ウマ ID : N l E e r 9 t D V
圧倒的だったな
他のウマ娘と比べて最後の伸びが違いすぎる

394 : 名無しの野次ウマ ID : L z j 4 t s J a g
ブレスオウんだンス惜しかった
やっぱりトウカイテイオー強いわ

395 : 名無しの野次ウマ ID : T m 7 l c T p T z
サーザンスキー後半バテたなあ

396 : 名無しの野次ウマ ID : E g h 6 s O K v m
あからさまに邪魔が入ったからね……

397 : 名無しの野次ウマ ID : y l G n 2 T N J N
なんでナイスネイチャは失格どころか降着にすらなんねーんだよ

398 : 名無しの野次ウマ ID : D 8 V q K l C 4 U
皆走りづらそうにしてたなあ

まあナイスネイチャが出るレースはみんなそうなんですけどね
初見さん

399 : 名無しの野次ウマ ID : 7 T R v n o l U y

またスレの流れがナイスネイチャ賛否議論になるのか……
既に専スレ立ってるんだからそっちでやってどうぞ

400 : 名無しの野次ウマ ID : ID g R h c V M V
ナイスネイチャはレースどころかスレまで荒らす

401 : 名無しの野次ウマ ID : A C Z 8 g j q C O
>>400

俺らが勝手に荒れてるだけやで

402 : 名無しの野次ウマ ID : A R i x 7 J u r p
最終直線までは結構良い位置につけてたけどなー
ナイスネイチャ伸びないんだよなー

403 : 名無しの野次ウマ ID : i u J S S Z 3 R O
>>402

あれだけ妨害のために加速と減速繰り返してたらスタミナ切れる
でしょ

たまには真面目に走ってほしい

404 : 名無しの野次ウマ ID : A W I X Z G 9 h j
>>402

末脚が全く無いんだよな……

ナイスネイチャの出てるどのレース見ても最後は全然伸びてない。
けどバテてるかっていうと違う気もする

405 : 名無しの野次ウマ ID : W Z l p + b 9 G 7
トウカイテイオー今まで無敗じゃん

ダービーも連覇したらすごいな

406 : 名無しの野次ウマ ID : 8 7 B s y M I O h
テイオーステツプかわいい

407：名無しの野次ウマ ID：lIvAijPPV
ナイスネイチャは今度ダービーに出てくるの？
正直テイオーのタイムに傷がつくからやめてほしい……

408：名無しの野次ウマ ID：iWxPBR4OI
>>407
あれも戦術の内だから受け入れろ
俺は海外のレース見てるみたいで結構楽しんでるよ

409：名無しの野次ウマ ID：pZ+rMmeCe
前にも言われてたけどさ、ナイスネイチャが誰かを勝たせるために
妨害やってるって話はマジなのかな

410：名無しの野次ウマ ID：OlczlPNpy
>>409
またその話題か……
少なくとも日本では勝つために走らないウマ娘は失格扱いになる
ナイスネイチャは今までのレースの傾向を見ても自分で勝ちを取
りにいってるから失格にはならないし、妨害っていうのも一応ルールの
範囲内でやってるから降着にもならない

411：名無しの野次ウマ ID：nyvOczRbh
>>410
あれだけ何度も前を塞いで減速繰り返してるのに失格にならない
の？

412：名無しの野次ウマ ID：OlczlPNpy
>>411
今まで審議も戒告も入ってないから全然セーフよ
ウマ娘が途中で垂れ込むことなんていくらでもあるからな
滅茶苦茶邪魔してるように見えるけど斜行とか致命的な反則はし

てないぞ

413 : 名無しの野次ウマ ID : nIU1CfzXS

後ろに眼でも付いてるのかつてくらいピッタリなタイミングで
コース塞いでくるんだよな

レースの技術は頭一つ以上飛び抜けてると思う

414 : 名無しの野次ウマ ID : d751nbDP6

反則じゃないのはわかったけどナイスネイチャに出走してほしく
ない……

応援してるウマ娘が邪魔されて失速していく姿を見るのがキツイ

415 : 名無しの野次ウマ ID : dupo9S10w

>>414

気持ちはわかる

負けるにしても全力出して負けてほしい

416 : 名無しの野次ウマ ID : iT65dcyZl

ナイスネイチャがレース中に喋ってるってマ?

417 : 名無しの野次ウマ ID : AISMWPWza

>>416

映像見ると他の子の近くでなんか口パクパクしてるから喋って
るのは間違いない……はず

418 : 名無しの野次ウマ ID : VvihZ3s4C

酸欠かな?

419 : 名無しの野次ウマ ID : oXgPH1jQA

喋りながら走ってるくせに最後まで息が保つって普通に化け物
では?

4 2 0 : 名無しの野次ウマ ID : w O l r o v B n I
喋りかけるのって違反じゃないの？

4 2 1 : 名無しの野次ウマ ID : 3 v a N H n 2 I X
>> 4 2 0

だから違法じゃねーって

レース中に酷い暴言を吐いたら後で処分が下る場合もあるらしいけどな

4 2 2 : 名無しの野次ウマ ID : 9 o f m E I R J c

前にナイスネイチャと戦ったウマ娘にレース後インタビューした記事読んだけど、喋りの内容はあくまで戦術的なものだったらしい「ここで行かないと間に合わないぞ」とかそういう

4 2 3 : 名無しの野次ウマ ID : E x y N M U 8 C 4

>> 4 2 2

引つかかるもんなんですかね……？

4 2 4 : 名無しの野次ウマ ID : C H A h l w r G z

>> 4 2 3

実際引つかかるウマ娘もいるからそういうもんなんですよ

レース中は一生懸命だろうし、判断力も万全じゃないんだろう

実際ナイスネイチャのレースを見ると掛かり気味に走るウマ娘がかなり多い

4 2 5 : 名無しの野次ウマ ID : 3 7 4 Q T S V c Q

今回テイオーがずっとマークされてなければレコードも狙えたかもしれないのにな

はークソ

4 2 6 : 名無しの野次ウマ ID : n w n c V 2 o 1 N
うんち!

4 2 7 : 名無しの野次ウマ ID : w Y t V I d + q a
まあナイスネイチャも色々言われてるけど、ダービーに出るとした
ら真面目に走って全力を出してほしいよな
ダービーだけは荒らさないでほしいわ

4 2 8 : 名無しの野次ウマ ID : d 4 M Q e S B C W
いつそ出走しないで欲しい……

4 2 9 : 名無しの野次ウマ ID : s A C y J r c c K
>>> 4 2 8
アンチスレでやってどうぞ
俺はナイスネイチャの走りは嫌いじゃない

4 3 0 : 名無しの野次ウマ ID : u m E 3 O N R + r
出走本数自体はありえんほど多いから知名度は高いんだよなあ

4 3 1 : 名無しの野次ウマ ID : w T D K Q s v D L
またナイスネイチャの話してる……

4 3 2 : 名無しの野次ウマ ID : s u q K r C Q c O
ナイスネイチャのウマツター、最近ずつと事務的な報告ばかりで
つまらん
サクラバクシンオーを見習え

4 3 3 : 名無しの野次ウマ ID : e x d S / W B J n
>>> 4 3 2
比較対象が特殊過ぎる

434 : 名無しの野次ウマ ID : 2 g q L s o i p M

でも邪魔されまくったトウカイテイオーとナイスネイチャって、
レース終わった後別に遺恨あるような感じは出てないよな

435 : 名無しの野次ウマ ID : M f J f 9 H p R L

>>434

そりや表に出してないだけでしょ

あんだだけ妨害してたら裏では絶対バチバチやってるよ

436 : 名無しの野次ウマ ID : A g n e s D g t l

私達には見えないところで二人が秘密の関係を……？

437 : 名無しの野次ウマ ID : Y Z c W y k e n 2

>>436

お前何を言ってるんだ？

438 : 名無しの野次ウマ ID : O R j N 2 l u P 3

今年はテイオーもいいけどメジロ家もなかなか

439 : 名無しの野次ウマ ID : v U D w G + O 4 /

レースが変な荒れ方しなければなんでもいいや

440 : 名無しの野次ウマ ID : E g 8 s c e A d 6

にくま大明神

441 : 名無しの野次ウマ ID : I n b k q h 6 e e

なんだ今の

チーム・デネボラのトレーナー

427：名無しの野次ウマ ID：wYtVId+qa

まあナイスネイチャも色々言われてるけど、ダービーに出るとしたら真面目に走って全力を出してほしいよな

ダービーだけは荒らさないでほしいわ

「……やれやれ。外野の意見はいつだって脳天気なもんだな」

少しでもライバルの情報を漁るために、普段なら巡回しないようなサイトにも指を伸ばしてみたが、やはり匿名掲示板というものは参考にならない。あまりにもノイズが多すぎる。

だが怠るわけにもいかなかった

俺の担当する「チーム・デネボラ」は、次のダービーで「ナイスネイチャ」と当たるだろう。普通のウマ娘相手ならばここまで執拗に調査などはしないが……「ナイスネイチャ」となると話が変わってくる。

「トレーナー」

「おお、リオナタール」

走り込みを終えたリオナタールが戻ってきた。

今年から入った我らがチーム・デネボラ期待の新星だ。

次のダービーのために調整を続けているところだが、トレーニングは何でも真面目にこなしてくれるおかげで仕上がりは現時点でも悪くない。

年末の故障で少し予定は狂ったが、それ以降は問題らしい問題も見当たらない。青葉賞も順当に勝ち、今ではダービーでの有力候補の一人として名前も上がっている。トレーナーとしては育てがいのある時期だ。

「トレーナー……ちゃんと見てましたか？ 私の走り」

「見てたよ。半分くらいな」

「専属トレーナーなんですからしつかり見てください。悪い癖です

よ。トレーニング中も食事中もずっとスマホばかりいじっているんですから」

「悪い悪い。こっちも敵情視察があつてな」

「スマホで敵情視察ですか……」

「いい時代に生まれたもんだと思つているよ。逐一ビデオを貸し借りしなくても簡単にレースが見れるんだからな」

チーム・デネボラを率いるにあたって、俺は情報を何よりも大切にしている。

もちろんウマ娘自身の努力や頑張りも必須のものだが、トレーナーとして支えるのであればより実のある方向性からサポートするべきだというのが俺のポリシーだった。

「……敵情視察は、トウカイテイオーですか」

リオナタールの表情が曇る。

……そうだな。トウカイテイオー。あのウマ娘は……恐ろしい。皐月賞ウマ娘ということもあるし人気があるのは当然だが、それを抜きにしても彼女の輝きが褪せることはないだろう。

リオナタールも速く強いウマ娘だが、世間の話題でいえばほとんどがトウカイテイオーに奪われていると言つても過言じゃない。

意識するなという方が無理か。

とはいえ、トレーナーとしてはトウカイテイオーだけに固執してほしくもないのだが。

「調べていたのはトウカイテイオーじゃない。ナイスネイチャだよ」

「……ああ、ナイスネイチャですか……」

「あからさまに嫌そうな顔をするな？」

「いえ、嫌いというわけじゃないんですが……最近雰囲気がちよつと、なんといえますか。苦手で」

「ふん？ 走りではなく雰囲気だけか？」

「……どっちもです」

「正直は美德だな」

ナイスネイチャ。クラシック級に突如として現れた……ある意味で巨大な新星だ。

彼女は一部においてはトウカイテイオーよりも有名だろう。

レース中は常に前を塞ぐように走り、集中を乱すささやき戦術を使い、とにかく様々な手を使って他のウマ娘達を“遅くする”。

「ナイスネイチャの走りは恐ろしいな。最近はよく彼女の走りを研究しているが、調べれば調べるほどに異質さが見えてくる」

「……前を塞いで垂れてくるのが恐ろしい相手です」

「そうだな。しかもそれが“一度きりじゃない”。何度も何度も前に出では、何度だって垂れ込んでくる」

ナイスネイチャの異質さとして、レース中に何度も加速と減速を繰り返す点が挙げられる。

速度の安定しない波のある走りが、何度もコースを塞ぐ蓋戦術を可能としていた。

「たまに、模擬レースと一緒に走ることがあります。そういった練習ではあのナイスネイチャも“そんな走り”はしないようなのですが……知っている方としたら、塞がれるのが嫌で前を急いでしま……」

「掛かり気味になる、か」

「はい。ペースを保てなくなります。彼女がいると」

幸い、ナイスネイチャはそこまで速くない。

模擬レースを見て見間違いかとも思ったがどうやら実際にそうらしく、スピードそのものは全く大したことがないウマ娘だった。

だから前を塞がれないように強めに前を取れば、ナイスネイチャから入る邪魔は最低限で済む。

しかしその代償は必然的に上がるペース。同じことを考える者たちとの遭遇戦じみた不本意な競り合い。

ナイスネイチャから逃げた先で引き起こされるスタミナの削り合いが、結果としてナイスネイチャの利になってしまうのだ。

「ダービーは長い。トウカイテイオーも第一仮想敵として見るのは変わらないが、ナイスネイチャからも目が離せないな」

「……皐月賞、五着でもですか」

「ああ。この際ナイスネイチャの戦績は重要じゃない。あのウマ娘の

対策を怠ると容易に出し抜かれるぞ、リオナタール」

伊達にナイスネイチャも多くの悪名で呼ばれていない。

彼女の走りにかかれれば有力なウマ娘が大きく順位を落とすことなど珍しくないのだ。それは、これまでの彼女のレースから見て取れる。

「ナイスネイチャは人気上位の相手をよく研究してる……俺とは気が合うタイプだな」

「トレーナー」

「冗談だ。だが、ダービーでは気をつけろ、リオナタール。予言するが彼女はお前の走りもマークするだろう」

「……！ トウカイテイオーではなく、私を……ですか」

「ああ。多分だがナイスネイチャはそれをやってのける。一つのレースで何人もマークするなんて芸当が、あれにはできる」

皐月賞の映像を見返していて愕然としたよ。

ナイスネイチャは目が八つくらい付いてるんじゃないかってほど視野が広い。

基本的にはテイオーにぴったしだったが、レース中はずっと他にも牽制を仕掛けているようだった。

ダービーは芝2400。距離が長ければその分、バテた時のダメージが大きくなる。

トウカイテイオー相手に余裕のない走りですべて勝てるとは思えない。勝ちを狙うなら必然、スタミナを削ってくるナイスネイチャへの対策を立てなければならなかった。

「前を塞がれた時のために追い抜きの練習もこなしていくぞ。ダービーでは絶対に緊張するだろう。混み合った中から冷静に脱出するスキルを磨いていけ」

「はいっ！」

ああ、実に素直で良いウマ娘だ。

手のかからない子を物足りないなどと言う物好きなトレーナーもいるが、やはり彼女は俺と相性が良い。

それと比較すると、ナイスネイチャは……ああ、まだ専属トレー

ナーがついていないんだったか。あの子の専属は大変そうだ。

まだトレーナーのいない小さなチームでやっているらしいが、そろそろ子どもたちだけのチーム運営にも無理が出てくる頃だろう。会議でチーム・カノープスのトレーナーに関する話題も上がっていたっけか……。

……あのナイスネイチャのトレーナーか。

いやあ……面白いウマ娘だとは思うんだが、さすがに世間からの風当たりを考えるとどうしても……手を出す気にはなれん。

とはいえトレーナーがつかないままにいるのも可愛そうだと思う。

新米トレーナーでもなんでもいいから、誰か担当になってやればいいと思うのだが。

……保身を優先する俺が言えたことではないか。

組織から来た男

私達のチーム、カノープス。

未だにメンバーは三人だし、私もイクノも諸々の手続きはしつかりやれるので、今まではトレーナー無しでもどうにかなったんだけど……。

最近ではイクノも調子を上げてきたし、私もG1レースに出るようになったこともあつてか、取材の申込みが結構来てたりする。

コースやトレーニンググループの使用申請とか出走手続きなら個人でもできる範疇だけど、近頃は勝負服の原案やり取りだとか取材対応だとか、ちよつと想像できてなかった煩雑なやり取りが多くて忙しくなっていた。

正直私、自分がこう、今みたいにバンバン取材を受けるような立場になるとは思ってたからね……そんなに勝てるわけでもなかったから。うん。

今はまだ一部の信頼できる記者さんに対応してるだけで、他はシャットアウトしてもらっている状態だ。

けどそれも時間稼ぎにしかならないようで、ゆくゆくは専属のトレーナーをつけて業務の肩代わりをしてもらわないと駄目だと、たづなさんから注意された。

もちろん、トレセン学園側も私達カノープス……というか私を取り巻く悪評とかについてはわかつているので、トレーナーさんの方が寄ってこない状態なのは把握されている。けどまあ、私達も個人で自由にトレーニングプランを組める現状に甘えてトレーナー獲得に向けて積極的に動かなかつたのも事実なわけで。

これから更に忙しくなればトレーニングに差し支えてくるだろうし、何より私やイクノのわがままにツインターボを巻き込んでしまうのは気が咎める。

結局、私はたづなさんに「自主性を重んじてくれるトレーナーさんをお願いします」とだけ要望を出しておいた。

トレーナーさんの意向でまた私の走りのスタイルを変えられるとね……うん……さすがにやっていけないので。

けど私の悪評と二人三脚でやってくれるトレーナーさんがいるとも思えないんだよなあ……。

そう思つて、ネイチャさんとしてはあまり期待はしてなかったのですが。

「えー、カノープスのみなさん、はじめまして。今日付けでチーム・カノープスのトレーナーとなりました、南坂みなみざかです。よろしくおねがいします」

「トレーナー!? 生きてたの!? 良かったあ!」

「ええ……ツインターボさん……ですよね? 僕は特に生死の境を彷徨つた覚えはないのですが……」

なんかうちにトレーナーが生えてきました。

「よろしくおねがいます。イクノデイクタスです」

「ターボはツインターボだ!」

「ちよちよちよ。待つて待つて。たづなさんに頼んだのが昨日なのに……なんで早速トレーナーさんが出てくるわけ……?」

「ナイスネイチャさん。挨拶も無しというのはさすがに……」

「あ、一応カノープスのリーダーやってます。ナイスネイチャです。どうぞよろしく……」

「ああ、いえいえ。南坂です。今後ともよろしくおねがいます」

南坂さんは優しい目をした、とても温厚そうな若い男の人だった。

包まず言えばイケメンである。イケメンじゃない人とイケメンな人のどっちが良いかと言われたら誰だつてイケメンが良いと言うだろう。なのでそれはいいとして。

「えーと……トレーナー? でいいのかなあもう。トレーナーはどうしてうちのチームに?」

あヤツバ。なんか面接みたいな言い方しちゃったし。

「はい。僕はまだこの中央トレセンにやって来たばかりなのですが、まだ誰も担当ウマ娘がいなかったんです。そこに昨日、駿川さんからカノープス専属の打診がありました。新米トレーナーでよければ是非お受けさせてください、と……あ！ もちろんこれまでのチーム・カノープスのやり方について大きく変更するようなことはしませんから、ご安心を」

おっと、随分と真つ当な理由でうちに来てくれたんだ。

しかもこれまでのやり方にも理解を示してもらえてるってことなのかな？ だとしたら願ったり叶ったりじゃん。

……でも本当に理解してるのかな？ 私の走りを知らずに担当になるんだとしたら、そこは可哀想な気もする。しっかりと確認しておくかあ。

「えーと、トレーナーになってくれるなら正直すっごい助かるんですけど……本当に大丈夫なんですかねえ？ ほら私、あんまりいい噂とか無いですし……」

「ナイスネイチャさんの噂や評判についてはもちろん聞き及んでますよ。有名ですからね」

「……知った上で？」

ちらりと顔を見上げてみると、南坂トレーナーはやはり優しげに微笑んでいた。

「専属トレーナーになることを決めたのは昨日ですが、チーム・カノープスの走りは前々から個人的に応援していたんですよ。……僕はトレーナーになるのですから、気兼ねする必要はありませんよ」

あらやだ……心までイケメンじゃないの……。

「よろしくおねがいしますッ！」

「はい。これから一緒に頑張っていきましょう」

こうして私達のチーム、カノープスに専属のトレーナーさんが加わったのだった。

南坂トレーナーが入ったことで、私とイクノの肩の荷は一気に降った。

なにせ今までやってきた事務作業のほぼ全てをトレーナーに託せるようになったのだ。生まれた余裕は決して小さいものではない。

「し、しかしお二人とも随分多く出走されるんですね……怪我だけは注意してくださいよ？」

「大丈夫大丈夫。私は絶対に怪我だけはしないように走ってるし、イクノもそこらへんのマネジメントは凄いから」

「目指せ故障ゼロ。我々の目標の一つです」

ある意味でそんな考え方が無意識のうちに「速度のブレーキ」になっっているのかもしれないけど、怪我をしては元も子もないのは確かだ。

レースの出走回数は多いけど、身体を壊さないように気を遣っている。これでもね。

「なるほど、だったら安心ですが……今後は本番のレースだけでなく、トレーニングでもレースをしてみるのはどうですか？」

「トレーニングでレースねえ……あ、模擬レースとか？」

「学園の方でも授業の一環として模擬レースをすることもあると思いますが、それとは違ってチーム合同で行う模擬レースなどです。本番と違って移動の時間も削減できるし、トレセンの強いウマ娘と実践形式で競い合うこともできますから。決して無駄にはならないと思いますよ？」

……なるほど、他のチームと合同の模擬レース……。

確かにそれなら本番と変わらない状態で走れるかな？ 駆け引きを試すことだってできそうだ。

「それと包み隠さず言えば、カノープスも本格的にチームとしてやっていくのであれば、そういった別チームとの付き合いを増やしていくのも重要ですから。もちろん、僕は皆さんの判断を尊重しますが……」

「ナイスネイチャさん。私はトレーナーの意見に賛成です。学園のコースで実戦さながらのレース経験が積めるのであれば拒否する理由もないかと」

「ふふん……？ つまり……ターボが勝つってことか」

他の二人も意欲的だ。当然私も乗り気である。

「うん、良いんじゃないかな。チーム合同の模擬レース、面白そう。トレーナーさんにおまかせしても良いかな？」

「はい。……あ、何か他のチームについて希望があれば今のうちに聞いておきますけど」

「希望かぁー、別にどんなチームでも良いんですけどねえ。副会長さんにお世話になってるからリギル……はいいや、流石に相手が悪すぎるか。……私らの実力に合った感じであればどこでも良いです、あはは」

「なるほど。では、いくつかのチームに打診しておきますよ。希望があれば複数のチームと一緒に走りたいですね」

うんうん、どうせ実戦形式でやるならフルゲートで走ってみたいもんね。

いやあ、トレーナーがいるとやっぱり違うなあ。捗るというか、本当に助かるっていうか。

もっと早くたづなさんに泣きついてれば良かったかもしれんね。

重くはないはずの合同模擬レース

トレーナーにお任せしておいたチーム合同模擬レースの開催は、驚くほどスムーズに決定した。

距離は1600メートルで18人立て。参加することになった6チームそれぞれから三名ずつ選出してよいドンだ。

同じチームから三人が出るものの、別にチームでの勝利を目指そうとかそういうレースというわけではなく、あくまで個人種目。手の内が割れてる同じチームメンバーとも一緒に走ることで、それはそれで刺激になればということだけでも。

いや、それはいいんだけどね。

日程とかもびつくりするくらい近いところで決まったんですけどね。

「結構知ってる子が多いなあ……?」

「どれどれ、ネイチャ見せて。……うーん、ターボ知らない!」

うちのママなトレーナーさんが一応はとプリントしてくれた模擬レースの出走表には、かつて走ったことのあるウマ娘の名がちらほら交じっていた。

ハイテクカイホウ、ニシキドライバー、スリップギヤード、ピナクルターキー、モロゾフオッチ……。

他にも私が負けたことのある逃げウマ娘や追い込みウマ娘もいる。一部知らない子もいるけど大体知ってるわ。なんでだろ。

「それはおそらく、ナイスネイチャさんへのリベンジマッチということもあるのでしょうか……」

「それかあー、まあ無くは無さそうだけど」

「それ以上に、一度走ったからこそナイスネイチャさんの走りの脅威をより強く意識するようになったのではないでしようか」

「ふーん……より良い対策を立てるために一度模擬レースでぶつかってみる、ってことかな」

まあ私も色々なレースにバンバン節操なく出走してるからね。ありえない話じゃないか。

それにしても、チーム合同だとコース利用の申請も取りやすいのはなるほどって感じだね。今まで人気のない所で走ることが多くてターフはそこまでだったから、今後もトレーナーさんには助けられそうだ。

そして模擬レースの当日。

平日の授業終了後、まだ外の明るいうちに私達はターフの上に戻ってきた。

「距離は短めですが、ゲート訓練もできるのは嬉しいですね」

「まあ、そうねえ。ていうかしつかりゲートも使うんだねえ。すつご」

「うー、ゲートは別にいらないんだけどなあ……」

「まあまあ」

模擬レースは実戦形式なので練習用のゲートも借り出しての本格的なものだ。

服装こそ体操着だけど、それぞれちゃんとゼッケンもつけている。ゼッケン持ちが18人もいるとさすがに空気がパリツとしてきますねえ。

集まった他のチームの人達は真剣な表情でアップしている。

そのチームのトレーナーさんも、激励したり小声で作戦を伝えていたりと色々だ。

「……ナイスネイチャ……また一緒に戦えるなんてね」

「今度こそ……絶対に」

「大丈夫。平常心……ただの模擬レースだもの……」

「ハア、ハア……！　じゆるツ……！」

そして何より……感じる。ウマ娘たちのヒリつくような視線を。

「今回はマークされそうですね。ナイスネイチャさん」

「されるかなあ……いや、されそうな雰囲気だけど。私の走り方を知ってるならマークなんて難しいだけだとわかってるはずなのに……」

「今回は模擬レースなので、駄目を承知で試してくるかもしれませんよ」

「なるほど。試してくるパターンも無くはないか……」

「……なんか二人とも、作戦会議してるみたいでカッコいい！ズルい！ターボも参加する！」

「いや、作戦会議っていうか一応今回も個人競技なんだけどさ……ターボはいつも通り全力で逃げるのが一番じゃない？」

「私もそう思いますよ」

「わかった！よし、完璧な作戦だ……！」

せやろか……？

まあまあ、ツインターボにとってはいつも通りの走りが最善な気がするよ実際。

……ていうか私とイクノは慣れてるからいいけど、他の子達は大丈夫なのかな。

前でターボが爆逃げしつつ、後ろでは私が小細工を仕掛けてるのつてすごい気が散りそうなんですけど。私だったら絶対に走りたくないですわ。

「三人とも、怪我をしないようにだけ気をつけてくださいね」

「はい」

「もちろんです」

「うん！」

そしてうちのトレーナーさんといえば、作戦会議自体にはあまり参加しない。

初対面の時に言ったように、走り方そのものにはあまり干渉しない主義のようだ。放任と言ってしまおうと少し感じが悪いかもしれないけど、カノーパスにとってはそんな気風が結構ありがたかったりする。

「……しかし、模擬レースだっていうのになんというか……観客が多いですなあ」

努めて視界に入れないようにしていたんだけど、ちらりと顔を向ければ……座席には結構な人数の観客が座っている。

ほぼ皆ウマ娘のほずなのに、観客の数は下手をしなくても模擬レースに参加するチームよりも多そうだった。

……あつ。しかもテイオーいるじゃん。何してんのテイオー。
ちよつと手を振ってやると、テイオーは苦笑しながらパタパタと手を振り返してくれた。

……まあ、これまで沢山のレースに出てるから今更研究されたところでどうってことないですけどね。

「ん？ ……げえ、よく見たらリギルの人も何人かいるし……」

「本当ですね。エアグルーヴさんの姿も見えます」

「うわあ本当だ。ええー……私達くらい模擬レースまで見に来るのかあ。やつぱ強いチームの人って違うなあ……」

今回の模擬レースに参加するチームはどれも超最前線で活躍する……というほどのチームではない。オープン戦くらいを基準に選んだとトレーナーは言っていた。

なのにあの観客席の賑わいよう。うーん……合同の効果もあるのかな。おそるべし。

「あああ……！ わ、私がこんな場にいるのはあまりにも……あまりにも不釣り合いッ……！」

ていうかさつきからハアハアジュルジュル言ってる騒がしいウマ娘がいるんだけど彼女は平気なのだろうか。

私が視線を向けるとスツと白目を剥いて停止するから直視するのもちよつと怖いんだけど。

「ああ、彼女はアグネスデジタルさんですね。彼女はリギルのエアグルーヴさんからの推薦で今回の模擬レースに参加することになったようですよ」

「へえ？ 副会長が」

トレーナーさんは事情を少しばかり知っていたらしい。

アグネスデジタル。まだ一緒に走った相手ではないので詳しくは知らなかったな。

「僕も詳しくはないのですが、なんでも〴〵そんなに長文を何度も送りつけてくるなら一緒に走ってしまえ」とかで、強引に参加させたよう
で」

「ちよつとよくわかんないっすね」

「実を言うと僕もよくわかりません」

まあいいや。副会長さんのことだしこれも悪いことではないんだろう。

私は私で、このレースをいつも通り、本気で走り切るだけだ。

距離が短いのは難しいところだけど、逆に良い経験になるかもしれない。頑張っていきましょう。

勝利のための布石

ウマ娘たちがゲート前に集まり、一人一人本番さながらに入ってく。

私は6番。最初の直線は短くコーナーが近い。こうなるとどっちつかずの番号は結構周囲の動きに翻弄されがちだけど、今日の模擬レースに限って言えば私が翻弄する側だ。

「まあ本番ってわけでもない模擬レースだし、ゆるーくやっていきましようねー」

「え、あ、うん……」

ゲートの裏が閉じる音をカウントしつつ、いつものお喋り。隣の子は話しかけられて身構えてるけど、それはそれで効果があるだろうし構わない。

出走まであと10人。

「ナイスネイチャ。私、貴女に何をされても負けないから」

「ん？」

「コポオ」

そうしていると、二つ隣のゲートから言葉を返された。

ニシキドライバーだ。相変わらず敵愾心が強いと言うかなんというか。

ゲートはあと……7人。

「模擬レースだからって絶対に負けてやらないよ」

「私も」

「本気で行くからね」

「ナイスネイチャさん。言うまでもありませんが、同じチームとはいえ私も本気でお相手します」

「ドプフォ」

ふふふ、いいじゃん。みんなやる気十分。そうだね、模擬レースなんだから本番相応にやってもらわないと私も困るよ。

イクノと本番さながらのレースっていうのも悪くない。

あと4人。もつと会話に熱中させて出遅れ増えないかな。

……ていうか既にゲート内で過呼吸っぽい子がいるんだけど大丈夫？

スタート前に脱落してるわけ？ なにゆえ？ ……アグネスデジタルだっけ。ひとまずマークは外しておくか……。

まあいいや。とにかく、仕込みからやっていこう。

「ふーん……皆私に勝てると思ってるんだあ……けど、一着は無理だと思っけどねえ」

「何よ、そんなこと……」

「だって今回、私達チーム・カノープス期待のエース……ツインターボがいるんだもん」

「……ツインターボ？」

「ふっふっふ……」

私が思わせぶりに言うと、皆の注目がターボに向かう。

ターボは不敵な笑いをして悠々とゲートインしたけれど、さっきまでさんざん入りたがらなかったのを私は知っている。かつこっけんな。

「そっか。まだみんなツインターボを知らないのか……あー、残念だったねえ。まあ、皆もすぐわかるよ。サイレンススズカと戦ったウマ娘たちと同じように……ね」

意味深に語り、最後のゲートが閉まる。

不気味な沈黙と緊張感の中、イクノディクタスだけが小さく苦笑していた。

ガタン。

ゲートが開いた！

「よーいドンー！」

「ターボが一着だあああッ！」

逃げウマ娘四人の中で、私とツインターボがハナを切る。

本当は完全に先頭に出たかったけど……やっぱターボのスタートダッシュは速いなあ！

「なっ」

「くっ……」

焦るのはターボ以外の三人の逃げウマ娘達だ。私がスタートダッシュすることはわかっていただろうけど、ツインターボが一気に前を取ることはイメージでできなかったらしい。

しかもターボはそれだけじゃない。最初からペース配分を考えない全力疾走でスタートを切る。そこに「あの」サイレンススズカの脅威を重ねるかどうかはわからないけれど、無視はできないだろう。

逃げ4、先行6、差し5、追い込み3。

1600は正直キツイ。色々仕掛けるにはあまりにも短すぎるせいで。それでもターボがいるおかげで、今回は逃げウマ娘の対策を薄くしてもなんとかなりそうな気がする。上手くいけば先行組も潰せるかも。

先行のモロゾフオッチ相手はマイルだと厳しいか。いやターボのスタミナ殺しに賭ける？ それよりは同じ差しのピナクルターキーとニシキドライバーを牽制しておくか。

「ほら、前が開いてる。ターボの勝ちは、間違いないんだよっ……」

「……」

「ふん、そんなの……引つかからない……」

マイルは短い。しかし、今のペースは明らかに速い。早くも先頭のターボによって、レースが縦長になってゆく。

私の近くささやきを聞かされている二人も、この小細工を耳に入れないようにしようと頑張ってはいるようだけど、先頭のペースが明らかに速いのは事実だった。

私はレース中に結構嘘をつく。だけど今回に限っては嘘じゃない。

実際、ツインターボがハナを譲らず真っ先にゴールすることだって……まあ、あり得ない話じゃないんだ。

「ほおら、急げ急げっ……」

「ううっ……もう、このおっ！」

「フオカヌポウ」

一人がレース展開の速さに焦れて、無理めに前へ駆けた。

けど私自身も他人事じゃない。実際にスパートを早めないと負けるかもわからない距離だ。

「ほら、イクノもそろそろ、走らないと……ッ」

「……！」

「デュフッ」

念のためにイクノデイクタスにもささやいてみたけど、ダメだ。さすがにタネが割れすぎてるし反応がない。

彼女はコース選びのセンスも良いし視野も広いので、構うだけ無駄骨か。ターボと私の戦術を網羅してる彼女が今回一番の強敵なだけに、どうにかしたかったんだけど。

「なによこれッ……速すぎ……ッ」

先頭は早くもスタミナ切れを起こし始めた。ターボの逃げを普通の逃げと勘違いして追従していた子の二人が失速する。あれはもう末脚どころじゃないね。

堅実なもう一人、スリップギヤードはやや後方を走っていたけど、最初のうちにターボに付き合った距離が長すぎてバテている。スタミナはある方だけど、さすがに序盤にペースを崩したらキツイでしよ。前を取られる心理的負担だっただけいはずだ。

「さて、そろそろいつちやおうかなあ……!?!」

残り500。ここからスパートをかけてもおかしくない距離。

ハイペースでやや調子が狂っているとはいえ、追い込み勢は既にロングスパートをかけ始めている。でも今回はさすがにペースを乱されたか、私が前を塞いだり睨みをきかせるうちに沈みがちになっていった。

でも最終コーナーは私の得意な場所だ。ここで一気に捲くりあげて……突き放す!

「うおおおお……ターボが……一着……」

「お先にッ! ラチにぶつからないように気をつけてッ!」

今の一言で若干外に膨れればコースを塞げるか? 望み薄か。

すぐ近くにはイクノも迫っている。ここからは一人一人追い抜きつつ、一気にゴールを目指す闘いだ。

「くっ……！」

私がイクノに勝てる要素があるとすれば、前を塞いでの完封くらいだろう。なにせイクノは私よりも速い。コーナーでは有利が取れるので一気に前に出て、あとは前を死守する他ない。

「勝ちます……！」

気がつけば残り200。スタミナ切れを起こした無残な逃げ先行組みを追い越しつつ、ゴール板を目指す。

けど背後のイクノの気迫がヤバい。作戦も割れて通じなくてしかも速いって、軽くどころかかなり絶望的な相手だ。

けど諦めない。

スパートで興奮状態にあるからこそ、小細工を叩きつけてみる価値はあるはずだ……！

「だめ、イクノ！ 後ろから凄い追い上げてきてる！」

「通用、しません……！」

「本当！ 広がらないとこのままじゃ二人とも……！」

「正々堂々ッ！」

いややつは通じないか！ そりゃそうだわ！ 私の考えた作戦半分以上話してるもんなあ！

ダメだ、あと100。イクノに抜かされる……！

「あああああッ！ デザートの箱推しッ！ 特上フルコース！ こんなのもう……キエエエエエッ！」

「うっわ」

と思ったら更に大外からヤバい形相のウマ娘が猛スピードで追いついてきた。

思わず身が竦むような猿叫びみた奇声と、一瞬だけ見えた横顔。

それはスタートから早々に息を荒げていたのでマークを外していたウマ娘……アグネスデジタルだった。

「んほおおおお！」

「ええ……」

「なんとという速さ……！」

最終的にアグネスデジタルは私とイクノの二人をぶつちぎり、一着

をもぎ取っていった。

私は三着。はい、イクノさんにも負けましたとも。

「はあ、はあ……キツ……なにこれ……」

「しんどい……」

「想像してたのと、違うレースだった……」

終わってみれば、模擬レースはスタミナ切れの悲惨なウマ娘が死屍累々とターフに沈んでいた。

私も結構しんどかったわ。知らずのうちにターボの勢いに引っ張られたかもしれない。

「ぐへえ……」

ちなみにターボさんは1着。まあ、頑張ったよ。うん。

コースの外からは大勢の見学者から惜しめない拍手が送られ、模擬レースだっていうのにちょっと本番さながらの嬉しさや悔しさがこみ上げてくる。

あーあ。どうせなら一着取りたかったなあ……。

「……しかし、アグネスデジタルかあ。最初の過呼吸っぽい仕草も、私の裏をかく布石だったのか、それとも……」

そして件の一着を取ったアグネスデジタルはといえば。

「しゅき……」

そこらへんに転がってるウマ娘たちと同じように、ターフの上で安らかに眠っていたのだった。

しかも胸の上で手を結びながら。

……うん。やっぱりよくわかんない子だわ。

泥をかぶる覚悟

皐月賞は最も速いウマ娘が勝つレースだと言われている。

これに負けるのは、まあわかる。私は速くないから。言い訳を更に積み上げるなら距離も不利だった。

けど次のレース。日本ダービーは、最も運の良いウマ娘が勝つと言われている。

実際にそうじゃないのは皆わかっている。くじ引きで決まるような単純なものではない。

この「運」というのは、かつては本当にクジ運だったのだという。今でこそ18人立てのレースだった日本ダービーも、一昔前は20人以上で走っていたらしい。それほど多ければ、枠番での有利不利がわからさまになってくるのだから領ける話だ。

今日における「運」は、皐月賞からの日数の短さについてよく言われている。

たった一月程度だ。皐月賞の疲れを抜くのがせいぜいだし、いざ鍛えようと思ったってそのくらいじゃウマ娘の肉体も大きくは変わらない。むしろ激しいトレーニングは調子を崩してしまうだろう。

それだけなら、皐月賞で勝ったウマ娘がそのまま勝つように思えるけど……そこは、日本ダービー。やっぱり少し違うらしい。

距離の差。

一生に一度しかない晴れ舞台への思いの差。

……様々な要因が重なって、レースは荒れる。

「荒れるレースでこそ、付け入る余地はあるってもんだけど……」
本番まで後少し。

そんな中、ライバルたちの走りを探察し、研究していると思うのは……それぞれの想いの強さだ。

彼女たちは本気だ。

日本ダービーに文字通りレース生命を懸けている子だっている。

そんな彼女たちの肉体に、精神に、付け入る隙を見出すのはとても難しい。

「……さーて、どうしましょうかねー……」
焦る。

2400だ。皐月賞より400長い。けど、だからといってライブルがその400でバテてくれるわけではない。

当然ながら、レースに出る子は完走できるように仕上げてくる。

私は……削りきれのだろうか。皆のスタミナを。小細工で。小手先の技で。

この前の模擬レースの中で改めて感じたのは、私の「個体」としての弱さ。

私は弱い。積み上げた小細工を崩す圧倒的な末脚にやられて、私はそれを改めて悟った。

ウマ娘として、私は弱い。

全体で見ればきつとそうじゃない。でもレースにおいては、そんなことは慰めにもならないだろう。

弱い私が強い皆に挑むには、もっともつと武器がいる。牙がいる。武器が欲しい。

いや……。

「……相手の弱さが欲しい」

今更になつて主人公ぶるんじゃないよ。

私はヒールなんだ。

正統派のウマ娘じゃない、邪道のウマ娘。

悪役が追い求めるのは、専用の強い必殺技ばかりじゃない。

主人公キラキラを蹴落とすための、ずる賢い策略だ。

「……」

観客席から見下ろす夕暮れのターフの上で、トウカイテイオーがチームの皆と走っている。

完成された広いストライド。風のような速さ。

鬼気迫る表情に油断はない。走りに瑕疵はない。

頭の中で何度自分の走りを重ね合わせても、私の残像は何度も何度も彼女に置いていかれてしまう……。

完全無欠のヒーロー。

皆のスター。

きっと次のレースでも……。

「……ああ……」

トウカイテイオー。あの子を蹴落としたい。

負けたい。私よりも後ろでゴールさせたい。

「……ははは」

……性格、悪くなっちゃったなあ。

トウカイテイオーのこと、大事な友達だって思っているのに。

それだつてのに、私は彼女をどう蹴落としてやろうか、どう調子を狂わせてやろうかと考えている。

いいや、彼女だけじゃない。

ダービーに出る他の子たちのデータだつて、弱みを探るために調べたものばかりだ。

みんな一生に一度の晴れ舞台のために真つ当な努力を続けている。邪道を突き進んでいるのは私だけ。

勝つても負けても、どちらにしても。きっと私はヒーローたちに、晴れ舞台に、真つ黒な泥を塗りつけてしまうのだろう。

「最高じゃん……」

なら、泥だらけにしてやれ。怖気づく必要はない。

キラキラするために他の皆が泥を被らなきゃいけないなら、被せてやればいい。

どうせ私が勝つためにはそれしかないんだから、悩む必要なんかない。負けた時のことなんて考える意味なんてないだろ。今更。

「絶対に勝つ」

なりふり構うな。

私の勝利のために、全員を負かせ。

遠目に映る練習風景を見て、私は拳を固く握った。

「容疑者はっけーん」

「……………ん？」

よくわからない声に振り向いてみると、……………そこには、グラサンとマスクを装着したゴルシっぽい誰かが居た。

あと、見間違いないかなければさっきまでターフを走っていたはずの、同じチームのウマ娘も……………。

「ウオッカ、スカーレット」

ていうか、なんでみんなグラサンとマスク……………。

「やっておしまいー！」

「えっ」

「おう、ゴールドシップ！」

「任せなさい！ ゴールドシップ！」

「ちよわ待てなにく、ウワーツ!？」

私はズタ袋を被せられ、ロープでグルグル縛られ、堂々と誘拐されたのだった。

……………まさか、私以上の邪道に手を染める奴らがいたなんて！

「さあ、もう言い逃れはできねえぞ」

「いやあの、眩しいんですけど……………」

卓上ライトが眩しいっす。

「カツ丼食うか？」

「いまお腹すいてないんで……………」

「カツ丼食えよ！ 知らねえのか刑事の自腹なんだぞテメー！」

「いや本当にお腹すいてないんで！ ていうか食べさせるつもりならせめて縄解いて！」

今、私はチームスピカの部室に拉致され、ゴールドシップからの取り調べを受けている。

いやわからん。取り調べなのかコレ。カツ丼食えしか言われてないからなんもわからんっす……………。

「なあゴールドシップさあ。俺も勢いで手伝っただけさあ、本当にナ

イスネイチャのせいなのかよ」

「知らね。なんとなく拉致った」

「はあ!? そんなことでアタシを手伝わせたわけ!」

しかも身内で何か揉め始めたんですけどー。

……噂には訊いてたけど、チームスピカ。賑やかだなあ……主に
ゴールドシップが。

「いやー、あのさあ……そろそろどうして私が誘拐されたのかについて教えてもらえないかなーって……」

「なんでって、そりゃあ……なあ?」

「アタシに振らないでよ……ほら、あれよ。トウカイテイオー」

「テイオー?」

テイオーが一体どうしたっての。

……まあ偵察はしてたけど。そんなの皆やってることだし……。

「被告ナイスネイチャ。おめーにはトウカイテイオー脅迫の容疑がか
けられている」

「いやいやいや、脅迫なんてしてないですし」

「カツ丼キング盛りが良いか?」

「丼のサイズはどうでも良くて! いやほんと私トウカイテイオーに
何もしてないですから! なんで私が疑われてるのさ!」

「マジで? そうか……いやあ、なんかさっきナイスネイチャがす
げー悪そうな目でテイオーにメンチ切ってたからさ。近頃テイオー
が変にソワソワしてるし、ナイスネイチャのせいかなーって思っ
てよ」

「推定無罪でとりあえず解いてくれない?」

「チツ、しゃーねーな。キング丼を用意できなかったこっちの落ち度
だ」

「だからいらんて」

とりあえず私の拘束は解かれた。やれやれ。

ウオツカとダイブスカーレットの二人は気まずそうに冷や汗を浮
かべながら鼻の下を擦っている。

素知らぬ顔してるけど共犯ですからね二人とも。

「んじやあ次の犯人を捕まえてくるかあ。誰かにカツ丼食わせて食レポ貰わねーとこのままじゃ引き下がれねえよ」

「まだやるの!? もうトレーニングに戻りましょうよ! アタシは手伝わないからね!」

「だったら俺も戻らせてもらうぜ。カツ丼はスペ先輩に食ってもらえよ」

「なんでい二人ともノリ悪いなあ。おれあ一人でもホシ追わせてもらうぜ」

「……しかしいざ解放されると、うーん……テイオーがソワソワしてる、か……」。

私のせい? も……やっぱある、かも?

けど、ソワソワしてる。落ち着きがない。心に隙があるのなら……」。

「……本番前に、テイオーにちよつかいかけてみるのも悪くないかな。」

二人きりの魅惑のささやき

「おうテイオー。鉄火丼食うか？」

日本ダービーが間近に迫る中、ボクの日課は最終調整のための軽いトレーニングが中心だった。

普段だったら皆のトレーニングが終わる頃には結構お腹も空いてるんだけど、動かない分カロリーもそんなに使わないみたい。

自分のトレーニングそっちのけで何故か酢飯を炊いていたゴールドシップは、ボクのために鉄火丼を作ってくれていたみたいだ。

気持ちは嬉しいんだけどねー。

「今は別に食欲無いからなあ。ボクよりもスペちゃんにあげなよー」

「そうか……いつかテイオーにも食ってもらえるような丼物作ってるからな」

「ゴールドシップさん！ありがとうございます！ ハムツハフハフツ」

「うおおおスぺいつの間！？」

皐月賞に勝って、次は日本ダービー。

大きなレースが目前になって、チームの皆がボクを気遣ってくれているのがわかる。

ゴールドシップはあんなだけど、マックイーンもスペちゃんも事ある毎に「調子は大丈夫か」って訊いてくるんだ。

ボク自身は全然なんともないし、むしろ絶好調なんだけど……。

……最近のボクの様子がおかしく見えるのは……間違ってるわけじゃない。

「あつははー、それでターボが一回転してさー」

「ふふ、そうなんだ。賑やかでいいね」

大きなレースが近づいてくると、クラスの中の様子もちよつとピリつとする。

出走する子は当然、出ない子だってなんだかソワソワする。それが

日本ダービーという大きな舞台だから。

そんな中、レースに出る当事者だつていうのに……ナイスネイチャの様子はいつもほとんど変わらない。

クラスの子と一緒に喋って、あははと笑って。何事もない様子で、気のいい友人でいる。

……ナイスネイチャ。

この前まで、ただ少し話したりするだけの……普通のクラスメイトでしかなかったウマ娘。

今度のレースでも一緒になる……というのもあるけれど。ボクの中で彼女の存在は大きなものになりつつある。

「……」

ほら。出た。

さつきまでただ談笑してただけだったのに。

相手の子が他の誰かと話し始めたのを横目に見て、その顔が……にんまりと。

普段は見せないようなものへと変わる。

「……えいつ」

「ひゃっ!？」

別の子と喋っていたウマ娘の背を、ナイスネイチャが指でつつつとなぞり、擦った。ただそれだけ。

「あはは、ごめんごめん」

「……も、もう。ナイスネイチャったら」

ただそれだけのちよつとしたイタズラなはずなのに。

「そういう反応が見てみたくてさ」

「っ……意地悪、だよ……」

「ごめんってばー」

ナイスネイチャの見せる表情が。うつとりとした、何か……色つぽい雰囲気だ。

どうしてか相手の心を、揺さぶってしまうんだ。

ネイチャは変わった。

急に……ではない。少しずつ……毎日、少しずつ変わっている。絶対にそう。

確かに以前もちよくちよく変な嘘を吹き込むこともあったけど、近頃は色々な子に……意地悪なことをしている。

別にいじめとか、陰湿なことをしてるわけじゃない。ちよつとしたイタズラ。

「ひっかかったー」とか、そういつて笑って終わっちゃうくらいの、小さなことばかり。

けど……そうやって色々なウマ娘に意地悪をする時のネイチャの表情や雰囲気は……レースの時に見せる、あの感じに似てて。

そんな雰囲気に当てられてか、イタズラされた方もちよつと戸惑うことが多い。

ネイチャはそんな相手を見て……楽しそうに目を細める。

「はあ……」

プールでゆるく泳ぎながら、最近持て余している感情を整理する。体の調子は良いのに、心がちよつとだけ整わない。ボク自身もそれはなんとかしたかった。

そして原因はわかってる。

「ああ、もう……どうしてネイチャのこと……」

ネイチャだ。彼女の顔が忘れられない。事あるごとに、女の子の……悪戯っぽい笑みが頭に浮かんでしまう。

女の子に恋をしてるわけじゃない。そんなわけないはずなのに……クラスでネイチャを見るたびに、ドキドキしてしまう。

思い出すんだ。レースの時、すぐ近くでささやきかけるあの声を。

カラオケで……ボクに、乗っかって。楽しそうな顔でイジワルし続けた、あの顔を……。

「ああ、もう、いけない……!」

「なにがいけないの?」

「うひゃあ!」

かけられたのは今まさに想像してたネイチャの声だった。

「ネ、ネイチヤ!? プールにいたんだ……」

「うん、まあねー。レース前はさすがに重トレーニングできないし。テイオーもでしょ」

「う、うん」

そっか。ナイスネイチヤも泳いでいたんだ。静かで気づかなかつたな。それだけボクもぼんやりしてたってことなんだけど。

「まーあんまり長く続けて体を冷やしちゃってもあれだから、私はそろそろ上がるけどねー」

……こうして話している分には、普通なのにな。

クラスで一緒に話す、極々普通の友達。

ボクの気にしすぎなんじゃないかって、思いかけてしまうほどに。

「どうしたのテイオー?」

「あ、ううん。ボクもそろそろ出るよ。トレーナーからも長居は良くないって言われてるしね」

「そっか。じゃあ一緒にシャワー行こうよ」

「おっけー」

トレセン学園のシャワールームは結構豪華だ。

なによりプールと一緒に温水が出るのが嬉しい。小学校の頃は冷たかったし、水の量も少ないしで、全然別世界みたい。

今は他に使ってる人もいないし、ボク達だけの貸切り状態。なんかか得した気分。

「ねえテイオー。最近落ち着かないみたいだけど、何かあったの?」

「えっ」

ほんの僅かな仕切りがあるだけの隣から、そんな声をかけられた。

「いやあ、テイオーのチームの子がさ。なんだかテイオーがソワソワしてるっていうから。調子悪いのかなーって」

「い、いやあ……ソワソワとか、別に。調子も悪くないよ?」

「……」

ひよっこりと、隣からネイチヤの顔だけが出て、こつちを見た。

目が合う。じーつと見られる。なんとなくそれが居心地悪くて、視

線をそらしてしまった。

「あー、何か隠してるなあ？」

「そんなこと、ないよ。別にボク普通だし……」

「教えてよ」

「え、あつ……ちよつと!？」

白を切ろうとしたけど、ネイチャはしつこかった。

そればかりか、ボクの浴びているシャワーのところまで入ってきて

……!

「私、テイオーのことが心配だなあ……」

ボクは、ナイスネイチャに壁際に押し付けられていた。

「あ、やあ、その……本当に調子悪いかじゃなくてえ……」

「なくて？」

顔が近い。シャワーを浴びてほんのり紅潮した顔が、じつとボクのことを見つめている。

だめだ。その顔で見られると、ボクは……。

「テイオー、今も何か隠してる」

「隠してないよ……」

「教えて？」

優しく首を擦られる。頬に手を添えられる。

ああ、駄目だ……カラオケの時と同じだ。こうしてネイチャに触れながら訊かれると、本当のことを言わなくちゃって……。

「ネ、ネイチャのこと……考えてたから……」

「……私？」

キョトンとした顔をされた。

「だって、ネイチャが……最近、ボクのこと意地悪するし……それで……」

「あ、あー……そういう……? そつか、私かあ犯人……あはは……」

「あつ……でも別にネイチャがそういうことするからって、ボクは悪いとは思ってないよっ? むしろ、その……あ」

「むしろ？」

さつきまであははと普段通りに笑っていたネイチャの表情が変わ

り、ボクに向けられる。

「むしろ……何？」

「や、今のは……」

聞かれた。聞かれちゃった。どうしよう。

「ねえテイオー？ 私に意地悪なことされると……悪くなくてさ。どうなの？」

「あつ……ネイチヤ。駄目……ここ、シャワールーム……誰か来たらっ」

「私達だけだから。答えて。ね？」

ネイチヤの顔がすぐ側まで近づく。

彼女の脚がボクの脚の間に割って入る。

手首を押さえつけられて、動きを封じられて。声だけが……。

「……恥ずかしいよ……」

「ん？ 恥ずかしいの嫌い？」

「……キライ……じゃ、ない……」

「……もつと。正直に言つて」

ああ。すぐそばで、低い声出されたら、ボク……。

「ナイスネイチヤに……イジワルなことされるの……す、好き……」
言つちやつた。

「あ、あああつ……！」

言つちやつた。人に聞かれた。ネイチヤに聞かれた……！

「ふ、ふふ……あはっ……！」

「ネ、ネイチヤのせいだぞつ……ボク、ボクは普通だったのにつ！ ネイチヤがイジワルして、それからボク、なんだかこうというのが……！

ああ、ボク何言つて……!？」

ぎゅつと、ネイチヤがボクの手首を握る力が強くなる。

普段からは想像できないような乱暴な仕草に、彼女から与えられる痛みに思わず小さな声が漏れる。

「そっか。そうなんだあ……テイオー、そういうのだったんだあ……」

「やだ、見ないで……」

「こつち見て」

「やだ……」

楽しそうに、それでいて爛々としたネイチヤの目が、じつとボクを見つめている。

困っているボクを、あの時みたい……。

「私さあ……そこまで詳しくないけど、テイオーのそういうのってさ……」
「M」とか、そういうやつだよねえ……？」

「うううう……！ だって、ネイチヤがあ……！」

「テイオーのことを話してるんだよ？ ねえテイオー？」

「やだ、やめて……」

恥ずかしい。自分でも気づかないフリをしてたのに。勘違いだっ
て思おうとしたのに。

温水シャワーのせいじゃない。体が熱い。恥ずかしくてもう、どう
にかなってしまいそう。

「ああ、もう……駄目じゃんテイオー、そんな顔したら……」

「あっ……」

そんな時、ナイスネイチヤがボクの体を優しく抱きしめた。

さつきまでの乱暴なのとは違う、優しい抱擁。親しい友達や、家族
にするような……。

「大丈夫だよテイオー。私はテイオーがそういう趣味でも軽蔑しない
し、誰にも言わない」

「……本当？ 変だっと思って思わない？ き、気持ち悪いとか……」

「思わないよ。私の中でテイオーは変わらないよ。私にとって、トウ
カイテイオーはトウカイテイオー。それは何があつたって変わらない
い」

ネイチヤの手が優しく背中を擦ってくれる。穏やかな声がボクを
認めてくれる。

それは……最近までどこにも出せなかったボクの感情を、解きほぐ
してくれるもので。

「軽蔑しないし、誰にも言わないよ。安心して？ テイオー」

「ナイスネイチヤ……」

「だから……」

「ネ、ネイチヤ……？ あの、ちよつと……」
「ふふ……」

ボクを抱きしめたまま、ネイチヤの力が強くなる。
出られない。……無理やり力を入れれば出られるけど、抵抗できない。

彼女に抵抗しようと思えない。

「テイオーが、そういうこと」が好きだったらさあ……私がテイオーのこと、もつともつとイジワルしてあげる」

「な、何を……いつ!？」

ギョツ、と。ボクの尻尾の付け根が、ネイチヤに握られた。

「あ、駄目、ネイチヤ、尻尾はあ……!」

「良いんだよテイオー。本当に嫌だったら強引にでも抜け出せば……私はそれを止めないから」

「だめ、そこ、神経が集まっているからあつ……」

「けどテイオーは、そういうの」が良いんだよね？ 私にイジワルされて、困らされて……嫌って言いながら、されちゃうのが」

「違うの、違うからあ……!」

尻尾の裏側のすべすべした場所を、ネイチヤに掴まれる。

普段誰にも触らせないような所をゴシゴシと擦られて、慣れない刺激に足腰が震えてくる。

「あ、あぁーっ……!」

「大丈夫。痛いことはしないから。ただ……テイオーに刷り込んであげる。私が近くにいただけで、今日のことを思い出しちゃうくらいにね……!」

「もうやめて」。離して。

そう叫んで、いつでも突き飛ばせる。

でも、できない。ネイチヤとの関係がギクシヤクするだとか、そういうことじゃなくて。

恥ずかしくて、擦ったくて、イジワルなことをされているのに。さ
れているのに、ボクは……。

「やだあ……顔、見ないで……!」

拒否できない。したいと思わない。

こんなこと、絶対におかしいことなのに。変なことなのに。

「駄目、もっと見せて……」

「ああ……」

彼女の低い声でささやかれるだけで、ボクは何もできなくなってしまう。

サイバー上の徹底マーク

「なんだ夢か……」

目が覚めると朝だった。

向こうのベッドにはマーベラスサンデーがスヤスヤと眠っている。

「いやーすごい夢を見ちゃったなあー……って、夢なわけあるかあ！」

枕に顔を叩きつける。呻く。うわあああああ！

「やったなー私……やっちゃったなー私……」

昨日。私はプールで出会ったトウカイテイオーに目をつけて……ちよつかいをかけてやることにした。

トウカイテイオーは仕上がりも良いし、日本ダービーでは万全の状態で挑んでくる。だから……今までになく卑怯とわかっていながらも、彼女の精神を強く揺さぶってやろうかと思ったのだ。

けどトウカイテイオーは少し強めに迫ってみるだけで狼狽えるし、訊けば素直に答えるし……私に意地悪されるのが好きとか言っちゃうし。

私も私で、それを聞いてエスカレートしちやっただころもある。少しのちよつかいどころか、とんでもないちよつかいをかけてしまった。

……私、テイオーにMだとかなんとか色々言っちゃったけど、私もね……普通じゃないよね……テイオーがMなら私Sじゃん……いや最近なんとなくわかってはいたけど。

他人にちよつかいかけたり意地悪すぎるのが楽しくなっちゃって。

それに……トウカイテイオーがあんな顔をするものだから、ついエスカレートして。

本番前の布石にしては少し楽しみすぎちゃったけれど……まあまあ、やりすぎるくらいのが良いでしょ……うん……。

私が近くにいるだけで、あるいは少し声をかけるだけで“ゾクリ”ときせる。

実際にできるかどうかはわからない。わからないけど……1%でも可能性があるなら積み上げなくちゃね。

……これからの学園生活で、テイオーと顔合わせるのが少し気まずくなったとしても……。

「マーベラス!!!」

「うわっはあ!？」

目覚ましが鳴り、また今日が始まった。

「それでは、チームカノープスの定例作戦会議を開始します」

「よきたー」

「作戦ならターボにまかせろー!」

「僕も参加なんですな……」

いつもの部室で作戦会議が始まった。既に日本ダービーが明後日に迫っている。

体を使うのもほどほどに、今はもう作戦会議と天気のご機嫌伺いばかりだ。

「といってももう話すこともほとんどないんだけどねー」

テーブルの上には既に出走予定表と、それらに対する作戦がびっしりと書き込まれたプリントがばら撒かれている。

昨日の時点で出走するウマ娘が確定し、不透明さも消えた。なので昨日のうちにさっさと作戦を練り上げて、あとはどこまで詰めれば良いんだらうって状態にいるわけ。

「一番懸念すべきは言うまでもなくトウカイテイオーですね。次点で……リオナタール、シガールブレードといったところでしょうか?」

「ターボが出たらターボが一番すごいよ」

「ミスターシービー先輩とマルゼンスキー先輩も目をかけてるんだよねえ。しかもテイオーは会長さんと仲良しでいるし。いやー、怖いメンツですわ」

そんな中で走らなきゃいけないっていうのもプレッシャーだけど……。

「ナイスネイチャさんはトウカイテイオー以外で気になっているウマ

娘はいますか？」

「そりや、みんな気にしてはいるけど……うーん、特にリオナタールかな。正確にはリオナタール陣営……チーム・デネボラだったかな。あそこがちよつと怖いなーって思ってる」

「ネイチャに怖いものってあるんだ」

それってどういう意味かね、ターボさんや。

「チーム・デネボラですか……あそこは獅子堂トレーナーでしたね。僕も同じトレーナーとしてたまに話すことはあるのですが、あまり愛想の良い方ではないですね。もちろん、悪い方ではないのですが」

「トレーナーさんがそう言うのは珍しい気がしますね」

「いえ、本当に悪い方ではないんですよ。ただ、話している時も常にスマホを見ているので、とても愛想が悪いように見えてしまうだけで。トレーナー歴も十年近くだそうですから、とても博識なんです」

ずっとスマホ片手に喋ってるのかー。変わってるなあ。

「いやー、そのトレーナーさんね。私のウマッターとウマスタグラムのアカウントをフォローしてるから、ちよつと怖いんだよね。プロフィールにチーム・デネボラのトレーナーやってるって書いてあんの。すごいわかりやすい」

「なるほど……目をつけられているわけですか」

「しかも昨日の15時、出走決まった直後あたりに。無言でスツとフォローされてビビりましたわ」

何より私をフォローする前に、最近やった模擬レースで一緒に走った子たちも軒並みフォローしてた。明らかに私周りのデータを取りに来てる感があつてすごい怖いよ。

「ターボもそのトレーナーフォローしよつと。なんとなく」

「では私もフォローします」

「何故……」

「うわあ一瞬でフォロー返ってきた!? やるなデネボラトレーナー！」

「あ、こちらからです。……もしや今もずっとスマホを眺めているのでは」

相手のトレーナーがバックアップに回って、私の対策を講じる。それは結構ドキドキするんだよね。

走ってる最中のウマ娘とはわけが違う。きつと本番では私の作戦を破る方法や心構えが用意されてあるんだろう。

「でも結局、レースはトウカイテイオーを中心に進むんだろうなあ……」

「……それは間違いないでしょう。皐月賞を取ったトウカイテイオーですから」

ライバルは多い。私よりも強い走りをする相手は何人もいる。みんなこれまで輝かしい戦績を築いてきたウマ娘たちだ。

模擬レースや練習中にも、その輝きは少しも陰っていない。けどそれ以上に、トウカイテイオーのキラキラが強すぎる。

レース本番は彼女を中心に進んでゆくことだろう。だからこそ……私はテイオーに楔を打ち込んだ。

主軸だからこそ、崩れた時の影響は大きくなる。そこから上手く抜け出してゆくのが私の戦法であり、きつと唯一の勝ち筋だ。

「あ、デネボラのトレーナーに『ターボと勝負しろ！』って送ったら『予定が合えばな』って返ってきた」

「わっ、獅子堂トレーナーからメールが来ました。……これターボさんの模擬レースの打ち合わせじゃないですか。ターボさん、落ち着いてください。早急に決められては困りますので……」

「ターボは逃げも隠れもしない！」「せめて日を空けてください……」

本番は5月26日。

天気予報は快晴だ。

少なくとも今の時点では、まだ。

全員にとっての晴れ舞台

日本ダービー当日がやってきた。

いつか来る、いつかこの日がやってくると思つて過ごしていたら……本当にやってきた。そんな日だ。

G1レースの中でも……最も。そう言つて良いくらいには有名で、栄誉ある舞台クラシック三冠の二つ目。

日本ダービーが今日、始まる。

「もう作戦会議は必要ないですね？」

「ターボも出たかつたなあ」

勝負服に着替え、いざターフへ。観客の犇めくそこへ向かう通路の前には、私のチームメイトとトレーナーが勢揃いしていた。

イクノディクタスもターボも、私と同じように気負つてはいない。静かに背中を押してくれるのが心強かった。

「ん。もうやるべき事はだいたいやつたし……他に下準備があるとしたら、他のライバルがいるターフの上だからね。早めに行かせてもらおうかとー」

「ナイスネイチャさん、僕たちは一番前で応援していますからね」

「はいよー。……ありがと。んじゃ、いつてくるね」

私は皆に手を振りながら、快晴の戦場へと駆け出していった。

すごい歓声だ。

ウマ娘の祭典で盛り上がる何十万もの人々が、入場する私達に応援の声を投げかけてくれる。

まあ、私に対しては結構ブーイングっぽい響きもあるんだけど、それでも一部といえば一部だ。負けじと応援してくれる物好きな人もいて、捨てたもんじゃないと思える。

『2枠3番、ナイスネイチャ』

名前を呼ばれ、パドックへと躍り出る。

うっわ、すごい人。モデルにでもなったみたい。

「おいつすー、ナイスネイチャでーす！ 今日もがんばりまーす！」

ポーズを決め、明るく挨拶。

うん。……うん。間近で人の顔を見ると、結構ブーイングもはつきりわかるね。

でもブーイングに対抗するように大きな声で声援を送ってくれる人たちは大きな励みだ。くれるっていうならありがたいかもらっておう。

「ナイスネイチャ……」

「ゲート近いんだよなあ……どうしょ……」

「今日はハナを譲れないのに……」

で、ゲートの近くではライバルにめっちゃ警戒されまくってる。

声をかけられると調子を崩されるかもしれないでも思っているのか、さりげなく私から距離を取ろうとしている子が多い。というかこれ、向こうのトレーナーの指示なのかもしれない。あいつには近づくなっていう。

んーでもまあ、距離を取るってことはそれだけ意識しちやってるってことだから、既に術中に嵌っているとも言えるよね。本番はゲートが開いた後だ。そこから私の存在をより強く思い出させてあげよう。

「ナイスネイチャ」

「ん。テイオー」

大外のテイオーがようやくパドックからこっちにやってきた。

盛り上がったのだろう。それはさつき聞こえてきた大きな歓声でよくわかる。

……うん、調子も良さそうだ。良いことだけど、参ったなあ。前に結構揺さぶったつもりなのに、まだいつもの調子でいる。

私に自分から声をかけるくらいだ……こりや厄介。

「テイオーは大外だけど、大丈夫ー？ 距離もあるし、結構キツイんじゃないー？」

「ふふん。ワガハイほど強ければどれだけ外でも平気なのだ！」

いやほんとそれなんだよね。強がりでもないから困る。

テイオーの枠番は端も端だけど、それを感じさせない走りをいつも見せてくる。

ポジション取り上手いからなあ……どうしたもんか。

「それに、ネイチャの方こそボクと距離があるせいで計画狂ってるんじゃない?」

「ぐっ……まあちよつと仕掛けにくいかなーと思ってるのは事実だけどねえ……」

私は3番。テイオーとはあまりにも距離が離れている。しばらく走って集団が均されるまではお預けになるだろう。

けど、足の遅い私にとって内枠はそれだけで有利ポジション。先の方でどのみちテイオーとかち合うことにはなるだろう。言葉には出してやらないけど、実際あまり気にしてなかったりする。

「はーあ……出だしからテイオーのすぐ近くで走りたかったなあ……そうすれば……」

「そ、そうすればって……」

髪をいじりながら少し近づくと、テイオーは苦笑いしながらさりげなく距離を取った。

んーさすがにレース前には無理か。まだ少し私への苦手意識のようなものは感じるけど、掘り下げるのは今じゃなさそう。

ウマ娘も次々にゲートに入り始めている。……テイオーだけじゃない。他の子にも牽制をかけなきゃ。私もさっさと準備を始めないとだ。

けど、その前に。最後に一つだけ。

「……そうだテイオー。今日のレース、どうしよつか」

「え、どうするって?」

「勝ったら、相手になんでも命令できるの。今日もやろうよ? それとも、自信ない?」

「……ふふふっ、やっぱりネイチャはまたボクに勝つつもりでいるんだね。良いよ? どうせ今回もボクが命令しちゃう番だけどねー!」

よし、乗ってきた。まあこれも取っ掛かりってことで。

私としてもやる気は出る。

「それじゃ楽しみにしてるから。……ふふ、テイオーにどんな命令しちゃおっかなあ……」

「……！ もう……さっさとゲート入ろうよ！」

「はいはい」

さて、いよいよだ。

集中しろ。集中。ゲートの開放に神経を寄せつつ、口を回せ。

「一生に一度だけの舞台……まさか私みたいなウマ娘がこんな晴れ舞台に出られるなんてねえ……今でも驚いてばかりだよ」

ファンファーレが響く。映像で何度も何度も聞いたそれ。

勇猛で、荘厳な始まりの音。私にとっても神聖で、特別な前奏曲。

「そんな舞台に出られるんだったらさあ、何か『誰もやったことのないコト』をやらかしてさー、目立ってみたい気持ちも出てくるよねえー？」

「……！」

ああ、このファンファーレに言葉を被せるなんて。自分でも最低だと思おうし心苦しい。

でもこれが大切。これがなきや私のレースは始まりさえしないのだ。

「皆にプレゼントしてあげる。自分の力を出しきれずに終わる、悔しい敗北をね」

空気に緊張と怒気が交じる。

全員がゲートに入る。

「一生に一度の日本ダービー、消化不良で終わっちゃうね？」

さあくるぞ。始まるぞ。集中しろ。

——ガタン

「お先に失礼っ！」

「！」

「……ッ！」

ゲートが開け放たれ、誰にとっても譲れないレースが始まった。

開始たったの二十メートル。私はまだギリギリ、先頭だ。
少なくとも始まったばかりの、現時点では。
この優位を切り売りして、勝ちに行く。

日本ダービーの繰り上がり

? ③ ☆ ③ ? ナイスネイチャ ? ③ ? ③ △

出だしは好調。前に誰もいないターフは実に気持ちいい。

このまま日本ダービーのハナに酔いしれていた。けれど、そこで得られる陶酔は刹那の快樂。やるべきことを一つでも多くこなさなければ、私に勝利はない。

すぐ真後ろ、というよりほぼ真横に逃げウマ娘が並んでいる。

スタートダッシュの優位性なんて数秒も持たない。ある意味で私以上に先頭であることにこだわる必要がある彼女たちだ。多少無理してでも序盤の前は強奪しておきたいところだろう。

だからこそ、牽制は仕掛ける。

「おっと、ごめんねっ……！」

「くっ……！」

幅寄せ。塞ぎ。違反を取られないギリギリのところ、相手を焦らす。

逃げ作戦を打つ相手にとって肝心なのは最初だ。最初にペースを崩されればそれは最後まで尾を引くことになる。

スタミナの消耗が激しい逃げにとってそれは致命的。けど、先頭を譲ったら作戦そのものが瓦解する。だから彼女たちは嫌でも私に付き合わざるを得ない。

が、それも長くは持たない。私はすぐに抜かされ、ずるずると下がっていく。

でもこれでいい。逃げウマ娘への牽制は最小限に留めても問題ない。

というか、そっちに拘っている暇がない。

「ふっ、ふっ……！」

トウカイテイオー。彼女がインに寄ってきた。

今回のレース、最大の敵は彼女だ。テイオーを沈めないことには一

着なんて夢のまた夢。

「ほら、テイオーきてるよっ……!」

「……!」

二冠が欲しいか、テイオー。欲しかったら奪ってみなよ。

でもね、ここにいてる皆がそれを狙ってるんだ。

易々と手にできるとは思わないでよね。

「邪魔……っ!」

「ふふ、ひつどおっ……!」

平坦な直線を抜け1コーナー、テイオーはここをスツと入って前目に付きたい。けどさせない。2コーナーまでの下り坂で加速するのは目に見えてるからだ。ここで進入を塞いでリードを保つ。

「あらら、先急ぐんだ、遅いもんねえ……!」

が、テイオーは邪魔できても他の子のマークが緩む。

シガールブレードが前に抜けた。他にも続々と。ちよっぴり焦る。

けど良い。テイオーさえ前につけなければ及第点。

それに、他の子も完全に冷静なわけじゃない。少しでも私から邪魔されないよう、前を急ぎすぎてペースを崩してる。

「その位置じゃ、テイオーには勝てないよっ……!」

焦らせる。急がせる。

そして第二コーナー。ここで前にいく!

下り坂で加速するコーナーは外に振り回されやすい。必然的に内は空きやすくなり、そうでなくても速度は落ちる。

私が全体でタイムを伸ばすにはここしかない!

「前行かないなら、私に譲ってよねッ!」

元々全体のペースは悪くなかった。でもそれを侮るように騙り、先行組に並びかける。

「くっ、来ないでよ……!」

「一緒にゴールしよう? ね、約束っ……!」

「嘘つき……!」

当然嘘よ。勝つのは私だけでいい。

向こうもそれはわかってる。付き合っていられないだろう。だか

らこそペースを崩す。

とにかくささやく。相手の頭の中に私を差し込んで、思考をにぶらせる。

レース前に組み立てていた作戦を忘れさせ、勝負好きなウマ娘としての本能を露出させるのだ。

そうすれば、相手は沈む。

理性が溶ければどうともなる。

「ああ、もうっ……っ！」

掛かった。ここで息を入れないとキツいのよね。

私は逆にわざと脚を緩ませ、掛かった子との相対速度を更に開かせる。

先頭の逃げの子はギョツとする。とてつもない速さでくる子がいる。テイオーにも躊躇いが生まれる。ここで抜いては掛かった子と同じようになるのではと。

実際はそんなことない。抜くなら今だった。私はただ、休んだだけ。

……それにしても。

「リオナタール、そろそろ来るねっ……」

本来はもつとマークしているはずだった一人、リオナタールが常に後ろにつけているのが不気味だ。

手出しが難しい位置。ひっそりと息をひそめ、展開を窺っている。

……いや、来た。

やり辛い。私が休んだ瞬間に外から上がってきた。ここから前につけるつもりか。させたくないけど、今はタイミングが悪い。

いや、全部作戦通り？ 読んでいたな、デネボラのトレーナー。

向正面から残り1000。登りの多くなるここからロングスパートをかければいけると踏んだか。前半に邪魔されず悠々と走れるからこそできる走りだ。

間違っていない。私を早々に突き放しながらテイオーに勝つなら悪くない。

良いじゃん、上手いよ。

でもね。

「テイオー、尻尾見せすぎ」

「……ッ！」

テイオーのすぐ近くで、低い声で語りかける。

「わざとやってるっ……?」

彼女の落ち着きを奪う。返答はないけど、走りの精彩に響くものはあるはずだ。

「レース中に、いいの……?」

そこまでささやきかけると、テイオーは振り払うかのように加速した。

丁度私のブロックも緩めていたところだ。位置も悪くない。前を狙うなら不可ではないタイミングだった。

私としても今譲るのは少し惜しかった。けど。

「……!・ ティオーッ……!」

全てはリオナタールとかち合わせるため。

テイオーは最大の脅威だったけど、結果としてノーマークになり続けたリオナタールを放置しておくのは危険だと私は判断した。

ロングスパート前唯一の短い下り坂、そこで休ませない。私にできる最高級の悪あがきだ。

「あーあ、二人とも掛かっている……っ……あれは、終わりだね……!」

3コーナー曲がって最終コーナーへ。大擲。ここが勝負。

近くにいるウマ娘の加速を躊躇わせる。逆に私は速度を上げていく。

最後の直線は長い。登りもあるけどそれを越えたらあとは平坦だ。ここで弄する小細工はほとんどない。

走れ。このコーナーが最終直線のつもりで全力で走れ。

疲れ切ったライバルたちを追い抜いていけ。スタミナは残っている。

テイオーも万全ではない。まだ先頭にいない。

コーナーは得意だ。私も先頭争いに参戦できる。

「はっ、はっ、はっ……！ 塞いでるよ、それ……！」

急坂の前で睨みを利かせる。萎縮した相手が速度を落とす。

勢いがないと登りがキツくなるね。彼女は終わった。

さあラストだ。坂は得意だ。加速しろ。

横に散らばった彼女たちを遮るものはほとんどない。己のスタミナとスピードだけが武器だ。

そのスタミナを私は削った。削ってたんだ。

「はっ、はっ……！」

バテる子はいる。減速して沈む子は多い。

でも全員じゃない。まだ残ってる。削りきれなかったスタミナの持ち主が、減速することなく私の前を走り続けている。

「止まれ……！」

私は……祈った。

彼女たちが減速することを。疲れ果てて下がってゆくことを。

祈りは牽制にも何にもならない無様な声にしかならなかった。

「っ、と……！」

トウカイテイオーが横にヨレた。が、すぐに立て直した。

その後の走りに曇りは無い。祈りなんて彼女には通じないのだ。

「トウカイ、テイオー……ッ！」

「見ててね……カイチョーッ！」

ああ、離れていく。トウカイテイオーが大外から。

どこにあったのかもわからないスタミナを引き出して。才能そのものである美しい走りを見せながら。

トウカイテイオーは大歓声に祝福される中、一着でゴールした。

「はあ、はあ、はあ……そうか、駄目かあ……！」

私は……四着だった。

皐月賞では五着。距離が400伸びて有利なはずなのに、結果はこれ。

じゃあ次は？

もっと距離の伸びた菊花賞では？

その時の私は、またほんの少しだけ成績を伸ばして……今度は三着？

「二着、駄目か……」

入着はできた。

私は健闘した。

ただ、それだけだった。

トウカイテイオー

私のチーム、デネボラのトレーナー……獅子堂トレーナーは言った。

『ナイスネイチャの妨害……いや、この言い方は人聞きが悪いか。そうだな……デバフ』とでも言おうか。これはな、リオナタール。俺から見たところ、『自分よりも前の相手』が主な攻撃対象になっている』

獅子堂トレーナーは普段はずっとスマホだけを見ているような人だけど、情報収集能力は高い。彼の立てる作戦には私も一定以上の信頼を置いている。

だから、この日本ダービーで彼の出す指示を疑う必要は少しもなかった。

『リオナタール。お前の脚質は差し……それも、レース中に自在に変えられるタイプの差しだ。ダービーでは後ろにつけて、後半から前につける。どうせ序盤の全体のペースはナイスネイチャに乱されるんだ。それまでは存分に脚と息を溜めて……後半に追い込んで、差せ』

果たして、獅子堂トレーナーの言葉は現実のものとなった。

前半は息を潜めて脚を溜め、後半に少しずつ解放し、解き放つ。

作戦は決まった。面白いほどに。

……唯一の誤算は、そんな私の全力でさえも、トウカイテイオーに届かなかったことだろう。

「はあ、はあ……！」

トウカイテイオーが手を……二本指を掲げ、ダービーの勝利を誇っている。

……強かった。あまりにも。

まさか、最後の最後であれほど伸びるだなんて、誰が想像できる？ 私も瞬発力には自信があった。トウカイテイオーがマークされているのであれば、それを容易に上回れるだろうと考えていた。なのに。

間違いだった。……トウカイテイオーは強かった。

私は二着。負けた。僅差……ではなかった。圧倒的に、負けてしまった。

……恐ろしい。まさか、あれほどの脚を残していただなんて。レースの展開は全て後方から見えていた。

それは……私から見て、トウカイテイオーを主役と呼ぶにはあまりにも異様なレースだった。だからこそ、チャンスがあると思っただ。

ナイスネイチャの『デバフ』は全てのウマ娘の調子を崩していたはず。

彼女の仕掛けるそれはあらゆるウマ娘の精神を乱し、スタミナを削っていた。相手に悪手を掴ませるための誘導を全てこなしていた。

中でもトウカイテイオーは特にその被害者であったはず。

最初から大外で、内に入れず、前を塞がれ……彼女は調子を出せないはずだったのに。

最後の最後で全てを出し抜いてみせた。

完敗だ。地力の差を見せつけられてしまった。……悔しいけれど、あの子は強い。認める他にない。いつそ、清々しいほどに。

「はぁ……はぁ……」

ナイスネイチャは消沈していた。

無理もない。あれだけの難解な技を繰り出してもなお勝てなかったのだ。後ろから見えていた私には彼女の気持ちはよくわかる。

……四着。口惜しいの一言では言い表せない敗北だったことだろう。

「2400じゃ足りないか……いや、技術不足か。まだ……」

……いや。

わからない。私には彼女の気持ちは、とてもではないけれど……わからない。

彼女の走りは何だ？

どうすればあいつた走りができる？

それは……ウマ娘の本能をねじ伏せた上で可能な走りなのか？

レース中、あの子は。ナイスネイチャは一切の「本能」を発露させていなかった。

威圧感も圧迫感も無い。淡々とした演技と騙し、それだけが……彼女の側にあつたのだ。終わった後の冷静な振り返りだからこそ、それがわかる。

……どうして耐えられるの？

ただ、走ることに全てを投じようとする衝動を抑え込んで……なぜ、理性的でいられるの。

結果として、彼女は敗者ではある。

だけど、私にはトウカイテイオー以上に理解できない存在だった。

「ネイチャ、……ボクの勝ちだよ」

「あー……あちゃあ。やっぱり駄目だった。……おめでとう、トウカイテイオー。日本ダービー制覇。これで……二冠目も取っちゃったね」

「うん。三冠までリーチだ」

意外なことに、トウカイテイオーとナイスネイチャは仲が良いらしい。

そういえば、同じクラスなんだっけ。関わらないようにしていたから、詳しくないけれど……。

「私も結構なあ……自信、あつただけだなあ……」

「ナイスネイチャのおかげだよ」

「……私の？ 何が」

「ナイスネイチャが、始まる前から。ボクを調子を崩そうとして。……勝とうとしてた。本気で。ボクは、なんかさ。そんなナイスネイチャの想いが……嬉しかったんだ」

「……なんなんすか、それ」

「そのまんまだよ。本当に嬉しかったんだ。ボクと本気でぶつかってくれる、ネイチャのことがさ」

「……ちよつと、わけわかんないなあ」

ナイスネイチャはどこか居心地悪そうに頬をかき、トウカイテイオーは逆に清々しそうな笑みを浮かべている。

「ふふん。それじゃあ、早速使わせてもらうからね、ナイスネイチャ。約束っ」

「約束……あー、はいはい。わかってますう、もうしらばつくれませんよー」

「当たり前じゃーん。……命令はねえー……次の菊花賞もさ。出てきなよ。ナイスネイチャも」

「……ばーか、最初からそのつもりだったの」

菊花賞、か。

トウカイテイオーにリベンジするなら、それしかないか。

再びナイスネイチャが出るのであれば、その対策もまた練らなくちゃいけない。

トレーナーと要相談かな。

や、その前に……ウイニングライブか。

センターを飾れなかったのは残念だけど、仕方がない。着替えておこう。

「はい、ネイチャ成敗されましたー」

「ネイチャも強かったよー!」

「……ん。ありがと、ターボ」

「ええ。いい走りでした。惜しい結果ではありましたが……」

「ねー。それねー。三着に入っただけじゃ踊れたのにねー」

私、ナイスネイチャさんは四着。あえなくダンス圏外となりましたとさ。

まあ、掲示板には載ったし。晴れ舞台の結果としては悪くはないん

だけどき……。

勝ちたかったよ、普通にね。

「まだ次があります、頑張つていきましょう。ナイスネイチャさん」
「はいはい」

トレーナーも元気づけようと励ましてくれるけど、うん……さすがに今日中には立て直せないメンタルですわ。

今日のところはずっとレース内容が頭の中をぐるぐるして、一人反省会状態になりますんでね……。

切り替えもそう早くできるわけじゃあないんですよ……。

「あつ！ ライブ始まる！ おのれトウカイテイオー……次のダービーはターボが勝つてやるからなあ……！」

「次のダービー……トウカイテイオーは出ませんよ？」

「出す！」

「ええ……」

満員の観客。神々しいライトにステージが照らされて、今日の主役たちが踊り始める。

ウイニングライブ。勝者に許された歌と踊り。

……ははは。やっぱりテイオーの歌は上手いなあ。ああいうのを見ると本当、ああいう場所にふさわしいんだって思……。

……。

……あ？

「テイオー？」

「？ どうか、しましたか」

ステージ上で踊るトウカイテイオーに違和感を覚える。

いや、違和感というよりは……これは。

なんで。いや。そんな、嘘でしょ。

「なんで、『それ』、杖にしてるの……」

「……？」

トウカイテイオーは控えめに踊り、それを補うように激しく謳っていた。

まるでマイクスタンドを杖代わりに、自分の片脚を庇うかのよう
に。

今年の日本ダービーを振り返るスレ

392 : 名無しの野次ウマ ID : FQVlt p + I 5
トウカイテイオーおめでどう！

393 : 名無しの野次ウマ ID : V 0 gTh J T O r
二冠達成めでてえ！しかも無敗！

394 : 名無しの野次ウマ ID : l v e d y B I C K
昨日仕事で現地で見れなかったよテイオー
生で見たかったああああ

395 : 名無しの野次ウマ ID : u t + d M Y y 7 D
ワシは休みじゃグフフ

396 : 名無しの野次ウマ ID : p X T r + r 9 c L
テイオーの圧倒的な一番人気よ
観客席も歓声やばかったなあ：途中から無音になったけど

397 : 名無しの野次ウマ ID : + U i C 8 V K 9 T
>>>396 耳鼻科行ってどうぞ

398 : 名無しの野次ウマ ID : x J 4 W Y I p + L
大外で勝ったウマ娘はいないって言ったよね!? あれはなに!?

399 : 名無しの野次ウマ ID : B R w n t 9 u J V
>>>398

トウカイテイオーのポテンシャルが成せる技：当然の結果です
いやそれにしても最後の直線はやばかったね、みんなスイスイ追い
越していったもん

400 : 名無しの野次ウマ ID : fCquTfz1+
リオナタールくるか? と思ったけどテイオーはやっぱり違ったわ
一人だけ走り方が違うっていうか

401 : 名無しの野次ウマ ID : hVd+RvvTh
ナイスネイチャの邪魔が入らなければレコードもあつたかもね

402 : 名無しの野次ウマ ID : AtjOv9I4a

>>401

また君か壊れるなあ

アンチスレの勢い伸びてるんだからそっちでやってきてどうぞ

403 : 名無しの野次ウマ ID : Wo1+LNGTO

まあでもアンチとか抜きにナイスネイチャも惜しかったよな、四着
だし

404 : 名無しの野次ウマ ID : D40boe1Z1

最後いつもバテて伸びないから

あんな走りしてりやそうもなる

405 : 名無しの野次ウマ ID : L3MNYDXM3

俺が見た感じスタミナ切らしてるようには見えないけどね

どの距離でも3ハロン毎回あんぐらいの速さだし

406 : 名無しの野次ウマ ID : 0eZGz7w58

またナイスネイチャで荒れようとしてる…

407 : 名無しの野次ウマ ID : Y2Qf4vOyM

>>406

俺たちが勝手に荒れてるんやで

408 : 名無しの野次ウマ ID : g V X A F q 6 9 g

∨ 407 ナイスネイチャが日本ダービーに出るのが許せない。
なんで他の子の走りを邪魔する奴が出走できるんだよ。

409 : 名無しの野次ウマ ID : j G U A t R + W R

トウカイテイオーのステージ良かったなあ

今回ダンス控えめだったけどやっぱり歌上手だよ

410 : 名無しの野次ウマ ID : 8 P X i b S Z N 4

可愛い曲も似合うけどかっこいい曲も良いよね

411 : 名無しの野次ウマ ID : p u 8 q d c c E 9

シガーブレード次頑張ろう、良かったよ

412 : 名無しの野次ウマ ID : F c 6 N 2 x z Z X

ナイスネイチャが出ると逃げ作戦はほぼ潰されてる気がするな
……いや、トウカイテイオーがいる時点でナイスネイチャ関係なく勝
てなかったんだろうけど

413 : 名無しの野次ウマ ID : e 7 F / f l g I v

>> 412

ペースを崩されると厳しいんだろうね……スタートで前を取られ
るとどうしても焦るし、日本ダービーだとプレッシャーもあつたん
じやないかな

元々のポテンシャルがって言われると何も言えんけど

414 : 名無しの野次ウマ ID : 8 C q q n 5 z x F

走ってる時に喋りかけてくるんだっけ？ ナイスネイチャ

そんなの無視してりゃいいのにな。勝手に酸素無駄にしてくれる
んだから逆に有利でしょ

415：名無しの野次ウマ ID：CCNo6Wn8

>>414 酷い罵倒とか侮辱とかを言ってくるらしいです。ナイスネイチャは本当に酷い発言ばかりしています。調べてみてください。

416：名無しの野次ウマ ID：HAYPNfLs s

>>415

おはまともキッズ

巣にお帰り

417：名無しの野次ウマ ID：g c D h 8 c e L E

荒れるんだからナイスネイチャの話はもうやめてくれよ、トウカイテイオーのお祝いをしようぜ

418：名無しの野次ウマ ID：FFDh8zKpA

昨日ビール5本空けて盛大にお祝いましたよ

電車の中酒臭くてみんな飲んでたんやなって

419：名無しの野次ウマ ID：81VQsa e Y +

号外のトウカイテイオーの決めポーズかつこよすぎて思わず切り抜きしたよ

420：名無しの野次ウマ ID：p x 4 S T j H s S

大外でこれだけ走れるなら長距離もいけそうだよな

気が早いけど菊花賞が楽しみだわ

421：名無しの野次ウマ ID：9ZorbRPox

対抗がないって言ったら他のウマ娘に失礼かもだけど事実テイオーだけ抜きん出てるよなあ

422：名無しの野次ウマ ID：／cFp x T 4 l +

不調なトウカイテイオーがナイスネイチャに徹底的にマークされた上でリオナタールが最初から最後まで快走すればあるいは

4 2 3 : 名無しの野次ウマ ID : l B b n 7 k T Z S

いやナイスネイチャ菊花賞にも来るの……？

4 2 4 : 名無しの野次ウマ ID : w Z w v E J G z G

>> 4 2 3

そりや来るでしょ。皐月賞5着、ダービー4着、色々言われてるけど狙える子だよ。

4 2 5 : 名無しの野次ウマ ID : Q r k C Z l s 7 z

スタミナあるからダービー以上の走りを見せてくれそうだよな

4 2 6 : 名無しの野次ウマ ID : c m v T Y R 2 U 2

>> 4 2 5

だからナイスネイチャは最後にバテてるって言われてるじゃん

4 2 7 : 名無しの野次ウマ ID : P h U 9 d 5 S W u

>> 4 2 6

それってあなた方の感想ですよ？

4 2 8 : 名無しの野次ウマ ID : w g H w t N I A 4

やめーや

4 2 9 : 名無しの野次ウマ ID : h 8 H N l 7 X P m

けど実際どうなんだろうな

皐月賞でもそうだったけど、ダービーでもゴールした後みんなバテバテだったじゃん。ナイスネイチャが色々やった影響もあるよなこれ

距離3000mになったらどうなっちゃうんだ

430 : 名無しの野次ウマ ID : FTj sk p b e r
故障者出そう

431 : 名無しの野次ウマ ID : Fj + Z O E m B K
縁起でもないこと言わないでくれえ
クラシックで潰れるウマ娘を見るのは辛い

432 : 名無しの野次ウマ ID : w Q d M y H f S 8
ほんとな : 将来有望な子が走れなくなるのはつれーわ

433 : 名無しの野次ウマ ID : D F i G O y y n K
言えたじゃねえか

434 : 名無しの野次ウマ ID : 2 + R 4 K I N 4 w
聞けて良かった

435 : 名無しの野次ウマ ID : P l O l M q e l y
なんだこの流れ

436 : 名無しの野次ウマ ID : V h y Q K u e d 5
無敗の二冠かー……シンボリルドルフ以来の無敗の三冠来ちやう
かねえ

菊花賞の客入りどうなっちまうんだ……？ 有給取つても入れる
かな？

437 : 名無しの野次ウマ ID : k D O W y n P f l
ワイ無職 低みの見物

438 : 名無しの野次ウマ ID : M G e u M K Z D e
今から菊花賞の話は気が早いだろw

いや気持ちはわかるが

4 3 9 : 名無しの野次ウマ ID : n 9 v 9 v 2 r 1 D
待って速報でた

4 4 0 : 名無しの野次ウマ ID : 4 C H B A d k V y
地震とかどこの田舎だべ

4 4 1 : 名無しの野次ウマ ID : X v l j 5 c u C 8
>>>440
お里が口から出てますよ

4 4 2 : 名無しの野次ウマ ID : e W P 6 C G U Z I
いやトウカイテイオーこれ

4 4 3 : 名無しの野次ウマ ID : c c E 7 r l h X D
嘘でしょ...?>

4 4 4 : 名無しの野次ウマ ID : I T w U S c 8 b h
なになに、地震? じゃなくてなにかあつたの?
うちテレビないからわからん。ウマッターもガチャ報告しか流れ
ん

4 4 5 : 名無しの野次ウマ ID : A O v g W 5 E + F
トウカイテイオー故障

4 4 6 : 名無しの野次ウマ ID : X G o s t 8 R O A
は?

4 4 7 : 名無しの野次ウマ ID : l N 4 y P f v u d
いやいやご冗談を

ご冗談ですよ？

448：名無しの野次ウマ ID：pQHfDjV63
トウカイテイオー骨折 速報だからまだ詳細は出てない

449：名無しの野次ウマ ID：X96c4tGPA
ええええええええええええ骨折ってなにいいいいいい

450：名無しの野次ウマ ID：kqFtLkXRt
ヒビ？ ポキっていった？ てかそもそも脚？

451：名無しの野次ウマ ID：xcAISwCq9
なんもわからん落ち着け
でも脚ならやばいな

452：名無しの野次ウマ ID：cd4uaixSw
ほら、だからナイスネイチャは出したら駄目なんだって！

453：名無しの野次ウマ ID：2aqubPYGu
菊花賞まで治るの？ 心配……

454：名無しの野次ウマ ID：uYt+MYAZy
病院で診察は受けたんだよね？ 詳細はトレセン学園からの会見
待ちになるか……

455：名無しの野次ウマ ID：OHjYOOiFQ
ナイスネイチャの妨害がトウカイテイオーを怪我させたんだ

456：名無しの野次ウマ ID：98lctb6MN
>>455

まだ何も情報出てないだろ。憶測で言うのやめろよ。

457 : 名無しの野次ウマ ID : 0H1jOkf8H
ナイスネイチャのせいなの？ ごめん速報見ても何もなくてわか
らない

458 : 名無しの野次ウマ ID : +j9eGsrR+
トレンドにナイスネイチャが上がってきた：

459 : 名無しの野次ウマ ID : +sJAx8DmE
決まりだな

460 : 名無しの野次ウマ ID : euE7Yt1NQ
>>>458

デマが広がったただけだろう。まだ何も発表されていないんだから
誰にもわかりっこない。

俺たちはただトウカイテイオーの復帰を祈るだけだよ。

461 : 名無しの野次ウマ ID : 7DofTORdZ
ナイスネイチャさん工作お疲れ様ですwww

462 : 名無しの野次ウマ ID : IcMYA8rjB
>>>461

アンチスレに帰れよ

463 : 名無しの野次ウマ ID : pyJ037Nkn
どこで折った？ 最終直線？

でも走り切ったってことはヒビくらいで済んでるのか…？

464 : 名無しの野次ウマ ID : K13TH0eTU

ウマ娘の怪我はヒトと少し違うし、わかってないことも多いから専
門家じゃないとなんともな…：

すぐに治るくらいのヒビであってほしい

465 : 名無しの野次ウマ ID : f1TD3FvYR
最後のところでナイスネイチャがトーカーイテイオーに暴言をゆつて、トーカーイテイオーを無理に走らせました。
動画が拡散されています。少し調べてみればわかります。
犯人はナイスネイチャです。

466 : 名無しの野次ウマ ID : W1zLb4BM2
巢に帰れ

467 : 名無しの野次ウマ ID : yGyr3wrlc
ライブの時あまり踊ってなかったのってそういうことか？
トウカイテイオーお大事に：無事でいてくれえ

468 : 名無しの野次ウマ ID : sh7ykTKtE
なんでトウカイテイオーが骨折しなきゃいけないんだよ
普通もつと違う奴だろ

469 : 名無しの野次ウマ ID : nmHz2Pt+w
骨折って数ヶ月で治るもんなの？ 骨折したことないからわかんない

470 : 名無しの野次ウマ ID : fVh8xylkb
繋がってもその間トレーニングできないブランクのがキツいだろ
これ……

471 : 名無しの野次ウマ ID : eWjj+udHg

>>470

菊花賞出られないってこと？

472 : 名無しの野次ウマ ID : M I V E L O q I F
トウカイテイオーの出来ない菊花賞なんて何が良いんだ……

473 : 名無しの野次ウマ ID : y + T M Q F 2 / +
>>>472

他のウマ娘が出るだろうが！

474 : 名無しの野次ウマ ID : A Z v Z E r x H M
でも本命不在はちよつと盛り下がるな

475 : 名無しの野次ウマ ID : j f w m B Y 0 3 I
トウカイテイオーが出られなくなったのにナイスネイチャは出てくるの？

476 : 名無しの野次ウマ ID : o L q 5 Y I O Y J
出るも出られないも決まってるしみんな気が早すぎる。落ち着け

477 : 名無しの野次ウマ ID : b L 2 K P 9 I z 3
ナイスネイチャがレース後にトウカイテイオーと話してる動画上がってたね

何話してるのかは見えないけど、さて……

478 : 名無しの野次ウマ ID : a s I o B W g 7 e
レース後なんだから話くらいするだろ。元々そんなに仲悪くないって言うし

479 : 名無しの野次ウマ ID : l m X t c X K 4 i

嘘乙

トウカイテイオーとナイスネイチャは裏では物凄く仲悪いつて記事に書いてあったよ

480 : 名無しの野次ウマ ID : rWgU9Ix7w

>>479

ソースはサンデーターフか？

デマでしょ。トウカイテイオーのSNS見ろよ

481 : 名無しの野次ウマ ID : BoUCgbNiX

やだあああトウカイテイオーの三冠見たいいい

482 : 名無しの野次ウマ ID : bIka02YWx

ナイスネイチャのウマツターもウマスタもだんまりか？

めっちゃリプライ来てるぞ

483 : 名無しの野次ウマ ID : UfDzKKIY2

>>482

一部の頭おかしい人たちでしょそれは

それにもともとナイスネイチャは数ヶ月前から更新頻度落としてる

484 : 名無しの野次ウマ ID : lhcxdJkIR

>>483

さすが詳しいですねナイスネイチャさんwww

485 : 名無しの野次ウマ ID : tPL4cTt/n

アンチスレ賑わいすぎて溢れ出しやがった……さすがに酷すぎる

486 : 名無しの野次ウマ ID : 8hYp8OEPz

レース中に走行妨害もしてない、暴言の類が審議に上がってないし警告も出てない。冷静に考えればナイスネイチャは何も悪くないってことはわかるだろ。

487 : 名無しの野次ウマ ID : 5EEWEFnOK
トウカイテイオーが脅迫されてるって噂もあるけどね

488 : 名無しの野次ウマ ID : 4IEbnpLQP
デマを真実のように騙るなよ

489 : 名無しの野次ウマ ID : MJsrivbw9
一部のウマ娘からはウマッターでナイスネイチャを擁護するつぶ
やきが上がってるな

490 : 名無しの野次ウマ ID : v5N11oYvL

>>>489

反応が早くて逆に怪しいっすね

491 : 名無しの野次ウマ ID : GGjyKIKk7
もう構うのやめよう、何言っても無駄だ

492 : 名無しの野次ウマ ID : u16PRDfVg
もともと1にスルーしろって書いてあるからね

493 : 名無しの野次ウマ ID : TtY09ndsM
いやーー待ってよートウカイテイオー菊花賞出てよーー

494 : 名無しの野次ウマ ID : hW3vmtIyQ
リハビリ含めると菊花賞はちよつと……どうだろうね

495 : 名無しの野次ウマ ID : KtRfEOkzd
テイオー無しだと本命リオナタール？

496 : 名無しの野次ウマ ID : IB9jqZdf
そうなるだろうね

追い込みできるなんて知らなかったけど、あれだけペースキープができるなら菊花賞でも力は出せそうだ

497：名無しの野次ウマ ID：rfwzpx/a
んーけどトウカイテイオー居ないなら今度のは有給使うほどではないかな……？ 遠いし

498：名無しの野次ウマ ID：wjlikpe/
京都レース場ってだけで盛り上がり欠けるもんな

499：名無しの野次ウマ ID：jycsf6yuk
>>>498
氏ねどす

500：名無しの野次ウマ ID：GWRj5jgya
>>>499
はい開示

501：名無しの野次ウマ ID：y0/Fu73Zs
トウカイテイオー不在濃厚だからって露骨に盛り下がるなよ……
俺は逆に一強が居ないならそれはそれで楽しみだよ

502：名無しの野次ウマ ID：a0Vuiq4W/
菊花賞でテイオーステツプが見たいんだよ俺は

503：名無しの野次ウマ ID：+xfvOj3Mm
俺だって見たいよ

504：名無しの野次ウマ ID：nCf/849QX
私も

505 : 名無しの野次ウマ ID : M c e G f + A 6 8
オデモ

506 : 名無しの野次ウマ ID : A E B 1 3 m M V /
ワイトもそう思います

507 : 名無しの野次ウマ ID : F K R 3 E x x W g
誰だよ

508 : 名無しの野次ウマ ID : V D u f g Y 6 N J
駄目だ、デマまとめサイトの記事が拡散されまくって酷いことにな
ってる

ナイスネイチヤに対してみんな酷すぎるだろ

509 : 名無しの野次ウマ ID : 8 6 0 H 1 L O T 8
普段まともな人がナイスネイチヤのデマ記事に踊らされて酷い事
言ってるの見るのがすげえ辛い

510 : 名無しの野次ウマ ID : B E 7 9 H e 1 m Y
言えたじゃねえか……いや本当に辛いなそれは
さすがに今回の騒ぎはライン越えてる人たち多すぎるでしょ

511 : 名無しの野次ウマ ID : 4 7 8 / P H 7 W
ナイスネイチヤは悪くない。あの子は誰よりも必死に走ってる

512 : 名無しの野次ウマ ID : Z t p R S q / k o

>>>511
必死なら他人の邪魔していいの？

513 : 名無しの野次ウマ ID : B Z H B d M A J 5

>>>512

それが戦術なんだよ

514 : 名無しの野次ウマ ID : P e K 5 b + e N D

>>513

相手を故障させれば勝てるもんな その通りですわ

515 : 名無しの野次ウマ ID : C m W e J X k x 0

触るなよ

516 : 名無しの野次ウマ ID : x I y 6 k 4 b A D

知り合いの元G3ウマ娘の人に話聞いたんだけど、ナイスネイチャの走りつて経験者からするとあり得ないほど上手いんだって

517 : 名無しの野次ウマ ID : X m L S H x p O 6

ウマ娘視点だとよくそう言われてるよな

518 : 名無しの野次ウマ ID : I i / A w s z Q i

でも上手いならもつとこう……速いじゃん？

519 : 名無しの野次ウマ ID : x I y 6 k 4 b A D

>>518

速さが無いのが惜しいって言ってたよ

それ以外のレースの技術は信じられないほど上手なんだってさ

520 : 名無しの野次ウマ ID : e 6 F j y h H / s

ナイスネイチャの出身校に居た子も毎回お手本のように走るってコメントしてたね

あれなんのインタビュだったかな？ 忘れた

521 : 名無しの野次ウマ ID : V T q t T R S m b

これからナイスネイチャを狙ったインタビュが増えそうだよ

なあ……心配になる

522 : 名無しの野次ウマ ID : p m C g 2 s u 6 y

>>521

やましいことが何もないなら心配する必要ないよね？

つまりそういうこと

523 : 名無しの野次ウマ ID : D E / X v 6 t l i

>>521

わかる。また変な問題が起きないといいんだけどな

524 : 名無しの野次ウマ ID : J c z A G N w f K

>>521

俺たちにできるのは冷静に情報を待つことだけだよな

それができないバカが多すぎる

525 : 名無しの野次ウマ ID : 8 8 M b 7 F 6 5 V

髪切るの大失敗した上に悲しいニュースが来てとてもしんどい

……良いレースだっただけに余計に……

526 : 名無しの野次ウマ ID : o s + H F 8 A W M

>>525

わかります……けどショートカットもいいと思いますよ？

527 : 名無しの野次ウマ ID : Y I M d 8 t / H X

うちの従姉妹が元競走ウマ娘なんだけど、趣味でレース映像の分析
やってて、そんな中でもナイスネイチャのコーナリングは絶賛してた
なー

さつきもシニア級G1ウマ娘の走りとの比較動画送ってくれて、ナ
イスネイチャの技術が高いってことはなんとなくわかった

528 : 名無しの野次ウマ ID : AirshaK46

>>527

へえ、その比較動画ちつと気になるな

見せてもらえるか？

529 : 名無しの野次ウマ ID : deNeVTran

>>527

同じく興味があります。良ければ見させてください。

530 : 名無しの野次ウマ ID : YIMd8t/HX

>>528

>>529

門外不出って言われてるからそれは無理

ごめんね

531 : 名無しの野次ウマ ID : AirshaK46

>>530

そうか、それなら仕方ねえや

気にしないでくれ

532 : 名無しの野次ウマ ID : Olqm9dwUM

トウカイテイオーが心配で替え玉3回しか喉を通らねえ…

533 : 名無しの野次ウマ ID : U8KrXZiRY

>>532

オグリキャップさんですか？ サインください

534 : 名無しの野次ウマ ID : LqGnOlFmD

あーアーンチスレの勢いトップに並んでウゼエ

535 : 名無しの野次ウマ ID : EZoY5ZV9g

URAの詳細な発表が待ち遠しいな、ほんとに

536 : 名無しの野次ウマ ID : Y c W N u j v k q
今北産業

537 : 名無しの野次ウマ ID : T S 5 2 0 j p 5 /
>>>536
おじいちゃんそれなあに？

538 : 名無しの野次ウマ ID : M p N N v 6 f I l
>>>536
トウカイテイオー
骨折
続報を待て

539 : 名無しの野次ウマ ID : o Z T U L G B n K
>>>536
ナイスネイチャ妨害
トウカイテイオー骨折
大炎上

540 : 名無しの野次ウマ ID : C 8 L + e G t F B
今更だけでもうダービーを語る雰囲気じゃなくなっちゃったなあ

541 : 名無しの野次ウマ ID : y x C o t j K F G
さすがにね……

542 : 名無しの野次ウマ ID : / P 9 v J U 4 T B
いや、怪我は怪我として、レース中の良かった点や悪かった点を振り返るのはまた別でしょ

543 : 名無しの野次ウマ ID : A5yyIh7Dg
気持ちはもう菊花賞なんよ……

544 : 名無しの野次ウマ ID : yrOZg+1ZT
安田記念「」

545 : 名無しの野次ウマ ID : z2rsxxFSO
宝塚記念「」

546 : 名無しの野次ウマ ID : aXmqqs / l
スプリンターズS「」

547 : 名無しの野次ウマ ID : fR7sgEq2n
秋華賞「」

548 : 名無しの野次ウマ ID : Yixng9ofh
にくま大明神「」

549 : 名無しの野次ウマ ID : GDOLNHfaX
なんだ今の

あらゆる意味での注目株

トウカイテイオーが骨折した。

そのニュースは瞬く間にメディアを通じて人々の間を駆け巡り……二冠制覇のお祝いムードは一夜で終わってしまった。

私はずっと先に心配したのが、トウカイテイオーのメンタルだった。

彼女は無敗での三冠制覇に強い執念を抱いていた。今でもきつと変わらないだろう。いや、今だからこそ、よりその想いは強くなっているかもしれない。

：折れてるって言われるし、注射されるし、散々だよ

：久々に全力出しちゃったからかなあ？ とにかくボクはしばらくゆっくりするつもり

メッセージでお見舞いの言葉を送ってみたところ、返ってきたのは軽めのノリだった。

面と向かって声を聞けば彼女の内心も少しは察することもできるだろうけど……今はまだ、そつとしておこうと思う。

トウカイテイオーにも、自分の感情を整理する時間が必要なはずだ。

というか、私は私でそれどころじゃないかもしれない。

「遺憾ッ！ 一部ネットにおけるナイスネイチャへの誹謗中傷は目に余るものがあるッ！」

「は、はあ、そうですか」

私は今日、トレセン学園の理事長室に呼び出された。

部屋にはうちのトレーナー他、たづなさんと会長さんも同席している。

五者面談かなー？ と現実逃避したいけど、この感じだと逃げられない面倒事なのは間違いなさそうだ。

「学園側としましては、SNSで自分の評判を調べる俗に言うエゴサーチというものを推奨してないので……こうして間接的にもナイスネイチャさんにお伝えするのは、その、憚られるのですが……」
「いやいや、たづなさん。私も現代っ子ですからもちろん知ってますよ。少しも耳に入れないわけにもいけません。あれですよね？」
私がトウカイテイオーの骨を折ったーとか、そういう騒ぎの「憂慮ッ！ 我々はナイスネイチャの精神面に悪影響が出ないものかと心配しているッ！」

しかしいつ聞いても元気だなあ、理事長さんの声。

それに私のメンタルの心配って。こっちはむしろトウカイテイオーの方が心配なんですが。

「あー……そりゃ的外れな意見を目にする私もムカツとしたりはしますよ？ けど私の走りがヒール扱いされるのは今に始まったことではないですし……正直、今回も勢いあるなーとは思いますが、そのくらいです」

「僕もトレーナーとしてナイスネイチャさんのメンタル面も定期的にチェックしていますが、彼女も決して強がっているわけではなく、今もあまり無理はしていません」と思います」

どういうチェックをしているのかは謎だけど、近くで私を見ているトレーナーさんもそう言うのだ。

実際に私は普通である。

なんだ、じゃあこの話はおしまいね！

と、ならないから今こうして偉い人たちが顔を突き合わせているんだろう。

机の上の資料がチラツと見えてるし……あー、もう嫌だなー……。

「ふふ……ナイスネイチャ君。そう露骨に嫌そうな顔をしないでくれたまえ」

いや、でもねえ会長さん。

嫌なものは嫌なんですよー……。

「さて、本題なのだが……トレセン学園側としては、メディアへの対応は基本的に今まで通り。つまり、ナイスネイチャ君の過度な露出を避

ける方向でいく方針に変わりはない。のだが……しかし、現状のままではナイスネイチャ君の間違ったイメージが野放しになってしまう。君の走り方に各がつくことは避けたいんだ」

「汗顔ッ！ ぐくぐく一部ではあるが、UR A内部にもナイスネイチャの走りについて苦言を呈する者がいるッ！ それらは本当にごく僅かな者達なのだが、コメンテーターとして活動する者もおり発信力が皆無というわけではないッ！ 今回我々はその一部の不屈き者を撃つするため、一計を案じることとしたッ！」

で、その一計とやらがこの机の上の資料、と。

「ナイスネイチャさんには是非とも、この特別番組の取材を受けていただきたいんです。これはナイスネイチャさんの世間における悪評を取り除くためでもありますし……必要な労力だと考えていただけたら、と……」

少し申し訳なきようにたづなさんが提案してくる。

が、うん。もうここにいる人たちはみんな分かった上で私に提案してるんだろ？ うなあ……。

トレーナーも苦笑いだし。

いやわかるよ？ わかりますよ？

ここで私の誤解を払拭する番組が放映されれば的外れな中傷も大きく減るだろうし？

それにまつわる面倒なクレームの電話とかお手紙とかも無くなりますからね？ 私目線でもやらない手はないと思いますよ？

けどね……。

「……あああつ！ でも私が主役の特別番組とかほんとつ……無理iiiiiiii！」

「ナイスネイチャさんは変なところでシャイですな……」

「懇願ッ！ ウマ娘の間違ったイメージを払拭するため、力を貸してもらえないだろうかッ！」

「わかってますう！ 出るのがみんなのためなんですう！ でも私の番組とかそんなの、つあーッ！ 絶対お母さんに録画されるやつじゃーん！」

しかも三位以内にも入っていないウマ娘のドキュメンタリーっておかしいでしょーが!

番組内で私どんな顔したら良いんだってば!

〃G1に勝つ秘訣? それはもちろん……常に冷静に、ですかね……〃

勝ってないし! せめて勝ってから番組作ってくれし!

ぬあああああ!

「破釜沈船。手間をかけることを申し訳なく思うが……トレセン学園のためだ。やってくれたまえ、ナイスネイチャ君」

「私からも、是非ともよろしくお願いします」

「ううっ……こちらからもよろしくお願いしますう……」

ここまで周到に用意され、偉い人たちから頼まれてしまっただけでも断ることなどできない私なのであった。

気は進まないけどね……。

「えー。ターボはねえ。いつかナイスネイチャがやると思ってたよ」

「そういうドキュメンタリーじゃないわッ」

「うぴっ」

デコピンくらえ!

「普段は真面目な方でしたので、まさかあのような凶行に及ぶとは……」

「イクノも悪ノリすなッ」

「痛ッ」

全くもう! 私は特別番組なんて出たくないのにさあ!

「いてて……でも良いなあ、ナイスネイチャ。特別番組ってことは、ナイスネイチャが主役のやつなんでしょ? あ、同じチームだしターボも映るかなあ」

「映るんじゃない? 同じチームだし、そういう練習風景を撮らないと尺足りないでしょ……番組自体40分以上あるらしいし」

「ながっ! 映画じゃん!」

「ショートムービーですね」

「私のどこにそんな語るところあるんだって話ですよ……」

今日のカノープスは外が雨ということもあり、作戦会議という名の愚痴披露会である。

ダービーでも四着だったし、散々三昧ですわ。にんじんジュース飲まなきややつてられん。

「ふむふむ……なるほど。資料を見た限り、非常に真つ当なメディアを集めているようですね。少なくとも今噂になっているような書かれ方はしないはずですよ。ナイスネイチャさんにとっても、それは望むところなのでは？」

「そりゃまあねえ。……けどなあ、あまり手の内を晒したくないっていうのもあるしい……もちろん細かい部分は出さないつもりではいるけど……」

「名声よりも勝率優先、ですか」

「当たり前だよお……」

名声なんて最初からドブに捨ててる私だ。

正直に言つてこの特別番組とやらで名誉回復を望む気持ちはこれっぽっちもない。私自身、自分の走りが悪役じみていると思つているし、正道でないのは事実だからだ。

特に走りやトレーニングを研究されるのは厄介すぎる。番組もそこまで深く掘り下げないとは思うけど……見る人が見れば、つていうのはあるからなあ……。

「しかし、ナイスネイチャの走り、その技術面に焦点が当たる事を私は嬉しく思いますよ。同じチームメイトとして、誇りたい気持ちがありますから」

「ターボも！ ナイスネイチャのかっこいいところ、テレビで見たいな！」

「ぐう、眩しい……悪役にその手の純粋な眼差しはやめてくれー」

「ふふ。覚悟してください。もし私がインタビュウを受けることがあるなら、その際はナイスネイチャさんのこと、褒めちぎりますから」「ひえー」

なんて酷いチームメイトたちだ！

「うん。まだあまり話してはないけど、これくらいの撮影が続くようなら気楽ですわ」

「ターボもインタビューの内容考えなくちゃだめかなあ……うーん……」

「気が早いって」

日本ダービーの疲労を抜くために、トレーニングは控えめに。

それでも少しでもスピードを底上げしたいので、全く気は抜けない。

トレーナーの近くに記者さんが追加されたからといって、私のすることは変わらないんだ。

そう、たとえトウカイテイオーが負傷したとしても。

勝ちに行く。そのために、全霊を尽くす。それは決して変わらない。

「ナイスネイチャさん。先日行われた日本ダービーを振り返ってみて、どうでしょう？ 四着という結果でしたが……」

初夏のちよつとしたレースを目前にして身体を調整していたところ、珍しく匹場さんが私に質問を投げかけた。

まあ私の特番なんですね。ナイスネイチャの謎を追う！ みたいな隠し撮りでもないんだから、こういうインタビューが来るとは遅かれ早かれわかっていただけでも。

いざカメラを向けられると結構恥ずかしいなあ……。

しかし、日本ダービーねえ。もう終わったことだから……なんて言えればストイックなイメージを出せたのかもしれないけど。未だにあのレースは私の頭から抜け落ちていない。

「二着を目指して戦略を練り、本気も出してたんですけどねえ……現実にはああいう結果に終わりました。いやー、みんな速かったですねえ。特にトウカイテイオーは」

匹場さんの表情が少しだけ曇った。気がした。

「ナイスネイチャさんは日本ダービーでも、その前の皐月賞でもトウカイテイオーのマークを徹底していましたね。やはり、彼女が一番の

ライバルになると?」

「ええ、それはもちろん。まあ、五着と四着なんで、対等なライバルかっていうと私なんかまだまだなんです。……トウカイテイオー対策無しには絶対一着を取れない。そのつもりでマークしてました。他の子も何人かそうだったんじゃないかなって思います」

良くも悪くもトウカイテイオー中心のレースだ。

レース中は他の子と示し合わせるまでもなく、トウカイテイオーのコースを阻む作戦がいくつか合致した。まあ、それでも勝てなかったんだけど。

……カメラの外でターボが、ターボもトウカイテイオーのライバル! “とかなんとか言ってる。今は静かにおし。

「トウカイテイオーは……天才で、努力家ですから。私みたいなのが追いつくには、努力に努力を重ねるしかありません。それと、努力を裏切らせないための工夫も」

努力は裏切ることがある。期待外れな結果を出すことがある。

それは努力の使い方が悪いせいだ。無能なトップに有能な部下は従わない。

負け続きの頃の私はその辺りを受け入れることができなかった。工夫はいくらでもしたけれど、それでは足りないのだと認められなかった……。

「……ナイスネイチャさんの工夫といえば。レース中の、さまざまな……トリツキーな動きなどが話題となっていますね?」

今なら胸を張って認められる。

「はい。私の武器です」

「……私もかつて、小さなレースで走っていたことのあるウマ娘なので、レースについては他の記者よりも理解があると自負しています。ですがそれでも、お恥ずかしいのですが、ナイスネイチャさんの走りについてはまだ十分に理解できていないのです。取材を通じて……ナイスネイチャさんの武器である走りにスポットライトを当てても、大丈夫でしょうか?」

「良いですよ」

私は即答した。匹場さんは少し驚いたようだった。

「30分や40分の番組で特集されたところで……きつと、私の対策なんて立てられませんからね?」

カメラに向かって怪しく微笑み、私はいかにも強そうなオーラを放ってみせた。

……。

「今のどうでした?」

「はい、完璧です! いや、さすが中央トレセンのウマ娘といえますか。表情の作り方も受け答えも素晴らしいですね。これならイメージ通りの番組にできるかと思えますよ」

「よっし……ありがとうございます!」

とまあ、こんな風にインタビュも一気に全部喋るものではなく、少しずつ折に触れて話して、それを記録、最後に編集で使ったり使わなかったりする。今のドヤ顔だっという放映前になってみれば没になるかもひれない。そう考えるとある意味地上波に流れるよりも恥ずかしかった。

「しかし……よろしいのですか。ナイスネイチャさん。この特番は、ナイスネイチャさんの正しいイメージを伝えるためのもの。とはいえ、あまり、その。貴女の走りを細かく解説するのは、不利になってしまうのでは?」

「そんなの大丈夫!」

ターボが回ってないカメラに視線を向けて元気よく答えた。

「大丈夫、ですか?」

「だってターボ、ナイスネイチャから教えてもらったけどよくわからなかったもん!」

「偉そうに言うことじゃないぞー」

「一朝一夕で身につくことではありませんからね。何より、レース中にそこまで意識を割けるかという前提もあります」

「……確かに。ナイスネイチャさんの走りは、非常に綺麗ですものね」

あはは、そんなに褒められてもねえ。

でも実際、私の解説とか分析があるからってどうにかなるとは思っていない。

そもそもこれまでのレースで散々ネタはばら撒いてきた。研究しようと思えば画面越しに研究する人だっているだろう。

それをわざわざ周回遅れで発表するにすぎない。隠しても意味のないことなら、大っぴらにして世間での評判に変えた方がまだマシだ。

元の性格だって広まってるだろうしねえ。今更私がヒールぶっても意味は薄いのだ。

だから……もし、これから私がメディアを戦力に組み込むのであれば。

今までとは違う切り口から細工を仕込む必要がある。

そしてこの特番の取材は、絶好の好機だ。

遅いウマ娘は練習上手か

私がかつて、競走ウマ娘だった。

走るのが好きだった。

トレセンは中央ではなかったけど、それでも重賞を一つ取れるくらいには本格的に取り組んでいたし、今でも人生で最も濃密な日々だったと振り返れる。

四年ほど走り続けて残せた結果は、そのくらいだけど……私は自分なりの全力は出せたから、引退を決めた後に悔しさや悲しさは残らなかった。

卒業後もレースと関わっていたくて、色々勉強した末にテレビ局に勤めることにした。

ウマ娘の体力とレースの知識は現場仕事にはとても向いていたので、即戦力扱いされたのが良かったのかもしれない。若い頃から経験を積めた私は、ちよつと有名なウマ娘リポーターの地位を得るまでに至った。

今ではウマソウルから受け継いだ名前を控えて、匹場として仕事をこなしている。

ウマ娘のレースを見るのはとても楽しい。

ターフの上を走ってゆく彼女たちを見るだけで、若かりし日のあの熱い心が呼び覚まされるかのよう。

コースの外でカメラを向けたり、実況や解説を挟むことしかできない自分をむず痒く思うこともたまにはあるけれど、ウマ娘の走りを見て研究するという楽しみを味わえるだけでも、私は強く満たされた。

あるいは、私は自ら走るよりもそうして、他人のレースや走りを深く掘り下げることの方が楽しめるのかもしれない。それは、引退して初めて気付く自分の一面だった。

大きな声では言えないけれど、仕事が終わっても独自にレースの研究なんかには勤しんでいた。

別にトレーナーを志しているわけでもないけれど、自分なりに集めたデータを深掘りし、研究し……その内容をあまり詳しくない家族にだけお披露目するのが、私の趣味だ。

会社の高性能カメラと編集機材があつてこそその趣味である。頼まれても外には出さない代物だ……。

そんな私が今最も注目するウマ娘が、目の前のコースを走っている。

「綺麗……」

マイクを手に行っているのに思わずそう呟いてしまうほど、芝を駆け彼女のフォームは美しく、整っていた。

かつてトレーナーに指導されていた頃の記憶が蘇る。

優秀なトレーナーとはいえなかったが、自分のトレーナーは平凡なりに熱心で、常に読み古した指導書を持ちながらトレーニングを見てくれていた……。

私から見て、ナイスネイチャのフォームはお手本、あるいは理想に近い走りを体現しているように見える。

手はこう振る。脚はこう動かす。ここで膝を伸ばす。ここまで蹴り抜ける……。

坂路に差し掛かれればその時の最善を。コーナーまでやってくればその時の正答を見せてくれる。

今はトレーニング中で、そう全力を出しているわけでもないのだから。それでも、走りの精度には素晴らしいものがあつた。

「はあ、はあ……いやー、厳しいなあ……」

「タイム、良くなってますよ。お疲れ様です、ナイスネイチャさん」

「ん。ありがとう、トレーナー」

ナイスネイチャのトレーニングはこれといって変わったものはない。

指導内容も普通だ。中央トレセンにしてはむしろ穏やか過ぎるくらいだろう。

ナイスネイチャの走りの極意は、レース本番に発揮される。

それまでのトレーニングは……退屈なまでの基礎トレーニングに

費やされていた。

休憩を挟み、再びナイスネイチャが走り出す。

彼女は良いスタミナを持っている。へこたれない根性も備えている。

しかし……。

遅い。

もどかしい程に、ナイスネイチャは遅かった。

レースを離れて何年も経つ私が思わず親近感を覚えてしまうくらい、ナイスネイチャにはスピードという、持っているべき武器がなかった。

きつと地方でなら強かった。レース運びの上手さも相まって、敵はいなかったはず。

けど中央ではそうはいかない。ナイスネイチャのスピード不足は致命的な問題だ。

だから、彼女は補っているのだろう。

自分の持つていないスピードという名の才能を、他のあらゆるもので……。

「……ひっば 匹場さん。いかがでしょう、ナイスネイチャさんの走りは」

私が複雑な想いであるの子を見つめていると、チームカノープスの南坂トレーナーがひっそりと声をかけてきた。

「実を言えば僕はトレーナーを始めてまだ浅いもので……彼女の走りに関して、何も効果的なアドバイスをしてあげられないのです」

「……私も多くのウマ娘を取材してきましたが、コーチではありません。個人的にもお力添えしたくはあるのですが、不用意な発言は彼女の走りの邪魔をする可能性もあります」

そう言うと、南坂トレーナーは苦笑を浮かべた。

「……彼女の走りは、美しいと思います。まるで、そうまるで……これ以上は、改善の余地が見られないくらい」……」

それは過酷な現実だ。

成長限界。

年齢的に本格化が終わったわけではないだろう。まだ衰えること

はないはずだけど、しかし……競走ウマ娘の中には、成長の只中でも硬い壁にぶつかる者もいる……。

どうしようもなく硬く、分厚く、越えられようもない壁。

……素質。才能とも呼ぶべきもの。

「でも。そんなナイスネイチャさんは良い成績を残しています。皐月賞では五着。ダービーでは四着。……一部の世間ではそれを冷笑的に評価する向きもありますが、クラシック三冠の舞台でこれはとてもすごい事です。同じコースを走るウマ娘は18人近くもいるのですよ。」

「ええ、僕もそう思います」

「普通、ナイスネイチャさんのスピードでそこまでの結果を出せるウマ娘は……いません。少なくとも私は取材したことがない」

だから考えてしまう。期待してしまうのだ。

もしも、ナイスネイチャが。平凡な速度のウマ娘が、G1を取るようなことがあれば。

その結果はきつと、大きな意味を持ち、レースに大きな変革を齎し得るのではないかと。

「僕は楽しみにしています。世間がどう言おうと、ナイスネイチャさんが菊花賞で一着を取るのを」

「……世間は揺れますね。間違いなく」

「まあ、その前にこなさなければならぬレースがたくさんあるので。ははは……」

しかし、本当によく走るウマ娘だ。

聞けば菊花賞までに六回以上はレースに出走するつもりなのか。それで怪我をしないつもりなのだから恐ろしい。

……俗説によればトウカイテイオーは、脚を犠牲にしてあの瞬発力と速度を生み出している……のだと言われている。

その考えになぞらえればナイスネイチャは遅いから怪我をしないとわれがちだけど、現実はそうではない。

速かろうが遅かろうが怪我する時はする。

……どうか、身体を大事に走ってほしい。

真面目な顔でターフを走るナイスネイチャを見ながら、私はそう
祈った。

雨の日のスタミナイーター

カメラに撮られながらのトレーニングの日々が始まってしばらく。トウカイテイオーが早くも退院したという知らせを聞いた。

まあ骨折といっても開放骨折とか複雑骨折ではなかったそうだから、早めに出てくるのはわかっていた。そういう意味では本当に良かったよ。

「いやー、たくさん注射されて参ったよー。みんな容赦なくプスプス射つしきー」

クラスに戻ってきたテイオーは人気者だった。

元々明るくて好かれるタイプだったし、今のクラシック戦線の最先端を走るウマ娘だ。久しぶりに戻ってくればもみくちやにされるのも当然だった。

思えば、ダービー終わった後すぐに病院に行ったきりだもんね。みんな直接のお祝いの言葉も言えてなかったから、これでようやくって感じか。

「おつすーテイオー。歩いてても平気なのー?」

「あ、ネイチャ。うん、松葉杖はいるけどねー。まだトレーニングはできないけど、できることからやっていくつもり。寝てばかりいたら全身が鈍ってきちやうもんね!」

「相変わらずキラキラしてるなあー……」

めげない。折れない。本当にトウカイテイオーって主人公みたいだ。

片足が折れていても尚……。

「んー……」

「な、なに。ネイチャ」

じつとテイオーの折れた脚を眺めてみる。けど、それを見ても私の中にある嗜虐心が煽られることはなかった。

「ううん、なんでもない。安心しただけ」

「もー、変なのー」

良かった。どうやら私は、深く傷ついたテイオーを見て喜ぶような

最低なウマ娘ではなかったようだ。

トウカイテイオーの困った顔を見るのは好きだけど……うん、そうだよ。こういうのじゃないよね。

……いや、そういうのじゃなくてもどうなんだ？

よく考えてみたら普通にヤバイ奴なのは、私。

「さーて……雨の日だし、ちよつと走っておくかあ」

何言ってるのかわからないことを言っていると思うけど、至って真面目です。

レースはなにも晴れの日ばかりじゃない。泥濘みの強い日もあれば、雨が降っている時も、雪の時点でさえ出走することもある。

トレーニング中は風邪のリスクもあって怖いしわざわざ雨天でやることなんてないんだけど、こういう場所でしか積めない経験値やヒントだってあるはずだ。少なくとも私自身はそう思っている。

あと何より、コースがガラガラだから一番いいところ走れるんだよね。

洗濯物とかは大変だけど、この梅雨時。こうして走ってみることも重要だ。

「ほっ、ほっ……」

ぱらぱらと雨が降る中、ほとんど誰もいないコースを走っていく。

驚くべきは、この程度の雨なら走る人も完全にゼロじゃないってことだ。今も私以外に一人走ってる。私が言うのもなんだけど、結構物好きなウマ娘だ。

水を含んだ芝を踏みつけるたび、バシヤバシヤと音がする。

一歩一歩が不安定で、足を取られる感じ。嫌な重バ場だ。

それに耳を打つ雨も、目に入る雫も厄介だ。私の走りは色々と考えなきゃいけない事が多いのに、これらは私の集中力をそこそこ乱してくる。他の人も同条件と思えばあれなんだけど、自分が最善の状態で走れないというのはやっぱりどこか不安になるものだ。

「……しっ」

腕を後ろに振りつつ……水しぶきを飛ばすイメージ。

なるべく自然に、それでいて指向性を持たせて。

脇見をしながら確認してみると、飛沫は五時方向に勢いよく弾けていた。

……うん。これが目に入ればそこそこびっくりするだろうし、怯むだろう。

「んーでもやっぱこれは危険すぎるかなー……」

走りつつ、腕の振りでも自然に後ろに飛沫を飛ばすテクニク。

やってみると案外使い物になるからびっくりだ。けど、全力で走ってる最中にいきなり目に水が入るっていうのは……レース中は砂や泥がかかってくることも多いけど、わざとはやっぱ違うよなあ。

似たようなもので尻尾の振りで雫をバシッと飛ばすやり方も考えてはみたけど、うん。これは危ないから無しの方が良いな。

目潰しは私のスポーツマンシップには反する。そういうことにしておこう。

「……んー……？」

だから走りながらコースを回っていると、後ろからウマ娘の気配が近づいていることに気づいた。

振り向くと、そこには長い黒髪のウマ娘。どこか焦点の合わない目でこちらを見据え、黙々と迫っている。

……そういえば、彼女はずっとこのコースにいた気がする。

ダラダラと走っているけど、もう3000近くは走っているんじゃないかな。

よくそんなスタミナが持つというか、この雨の中よくやっているというか……。

見たところ高等部のウマ娘のようだけど、こっちもそろそろ体を温めたくなってきた頃合いだ。

コースを邪魔をする練習も兼ねて、せつかくだから張り合わせていただこう。

ギアを入れ、コースを曲がる。

前を譲らない走りを始めると、後ろからの彼女も合わせるように速度を上げてきた。

他人の足音が一人分しかないと、その気配がよくわかる。

今までさんざん走ってきたはずなのに、結構速い。あと負けず嫌いな性格も出てるかな。

私は内ラチから0.9人分のスペースを空けるように、それでいて閉じたり開いたりでわざとらしい“隙”を見せつけながら進んでゆく。

“内から抜けそう”という希望を捨てさせず、外から挑ませない。明らかに実力差のある相手を後ろに封じ込めるためには、こういう駆け引きも必要だ。

直線に出たら足音に注意しつつひたすら前のコースを塞いでいく。後ろは見ずに、自然と塞ぐイメージだ。少しでも左右にブレたと思ったらほぼ同時にスツと動く。

私の苦手な直線で少しでもリードを保つにはこれが一番だ。

おっと、足音に焦れつたさが混じってきた。

それと……なんだろう、なにか、背後から怒りというか、強い感情が叩きつけられているような……。

「!?」

と思ったら、すぐ真後ろから全力のスパートをかける足音が響いてくる!

追突する気!?! そこまで怒らせた!?! ていうか危ない……。

「……え?」

後ろからぶつかられる、と思ったら。

足音は既に止んでいた。

立ち止まった? と思つて振り向いてみると……そこには誰もいない。

「は? え? あれえ?」

おかしい。さつきまで確かに走っていたはずなのに。間違いない、足音もしたし、駆け引きだつて……。

「な……なんだろうなあ……一気に疲れが出てきた……」

いつの間にか屋内に戻つていった? 単純に私の気のせい?

……考えてたら、どつと疲れに襲われた。

雨に濡れ続けたせいか肌寒いし……私もさつきと中に入って、体を拭いておこう。シャワーも浴びないとね……。

「あ」

屋内に入り、ぎつとタオルで体を拭いていると……窓際に、長い黒髪ノウマ娘が立っていることに気が付いた。

確か、マンハッタンカフェさんだったかな。高等部の……。

さつきは雨の中でよく見えなかったけど、ひよつとして私の後ろを走っていたのってこのウマ娘なのかな？

……いや、違う。似てる……気はするけど、マンハッタンカフェさんは全然濡れてないし、さつきからずつとここにいた感じがする。手の中にはカップもあるし。

「貴女は……さつきまで、外で……走っていた子ですね」

「あ、はい……ナイスネイチャ、ですけど……」

ぼそりと喋るウマ娘だ。なんとというか、独特な雰囲気。

『『お友だち』が……珍しく、躍起になっていました』

「……？」

「ナイスネイチャさん、〴〵さつきの〴〵で……疲れていますよね。今日はまだ、ゆっくりした方が……良いと思いますよ」

「え、あ……どうもです……？」

不気味だけどこか優しく微笑んで、マンハッタンカフェさんは廊下の向こうへ去っていった。

……お友達とは？

いや、けれど確かに結構疲れている気がするし……今日はマンハッタンカフェさんの言う通り、早めに休んでおくでしょう。

風邪を引いたら体調を取り戻すのに何日も無駄にしちゃうしね。

「んー……後ろから気配を出して、ゾワツとさせて疲れさせる……いや、でもどうやるべきか……」

うーん、このアイディアはトレーニングに活かせるかもしれない……。

生足魅惑の夏ウマ娘

夏合宿、というものがある。

夏場は照りつける日差しもあって、走るウマ娘も観る観客もしんどい思いをする。なので夏は大規模レースが少ない。その分、時間を合宿なんてものに使えるわけですな。

ウマ娘としては長めに休息期間を取ったり、逆に鍛え込むのにも活用できる。

いっそのことバカンスとトレーニングを両取りしようってことで、海で合宿するチームも多いわけだ。

私達チーム・カノープスもその例に漏れず、この7月から海に行こうってことになったのだけど……。

「ぜんぜん違うじゃん!」

カノープスの狭い部室で、ツインターボは泣いていた。

「書いてたよね?!」　「カノープスの夏合宿はハワイです」　「って!」

そう。合宿について皆で話し合っていたところ、順当に地味で無難な海水浴場とホテルで決まり……となったところで、ターボが突如狼狽えだしたのだ。

どうやら私達がトレセン学園の掲示板に張り出しているカノープスメンバー募集のポスターに書いてあることを期待していたらしい。

「ああ……ターボよく見なよ。募集ポスターのここ」

「……………」

丁度部室にも一枚貼つてある。私がハワイ云々が書いてある場所を指差すと、ターボは前かがみになって腕を組み、目を細めた。

「むむむ……えーとなになに……」　「参　合宿はハワイ　……※のつもりで海を楽しんでいくつもりです」　「……なにこれ文字ちっちゃ!?」　「詐欺じゃんこんなの!」

「人聞き悪いなあツインターボ……小さくてもちちゃんと書いてあるんだから合法なんだよ?」

「悪質なのは間違いありませんけどね。生徒会に報告されたら間違い

なく注意は来そうです」

逆に言えばそれだけあのポスターが目立ってないってことなわけですよ、イクノさん……。

「うつつ……ハワイ楽しみにしてたのに……」

「なにターボ、ハワイ目当てでカノープスに来たの？」

「違うけど……どうせなら行きたかったもん……!」

「おーよしよし、泣きやめターボ」

「ははは……行きたくとも、現状のカノープスではハワイ合宿の予算を都合するのも難しいですから、諦めましょうね……」

トレーナーの言う通り、カノープスはまだまだ弱小チームだ。

というより正式人数である五人が揃わないと本格的なお金も下りないというね。

ハワイはまだまだ先の話ですよ。これからの活躍次第で、ありえないってこともないんだけどね。

「それに、今回行く予定の海水浴場もトレセン学園でもよく利用されているところですし、宿もいい雰囲気のホテルですよ」

「トレーナー……それ本当……?」

「ええもちろん。ホテルは露天風呂付属の温泉付きです」

「温泉!? やったー!」

「うべっ」

喜び跳ね上がったターボの手が私の額に直撃した。超痛い。

「ぐええ……」

「天罰でしょうか?」

「温泉温泉ー! やるじゃんトレーナー! ハワイはまた今度ね!」

「ははは……ありがとうございます。ああそれと、今回の夏合宿に關してなのですが……」

ああ、トレーナーがこっち見てる。私関連か。

「ナイスネイチャさんの取材を担当する匹場さんも、数日ほどこちらに同行するようです。合宿でのトレーニング風景を取材し、それewithとまず撮影は終わりだそうですねよ」

「ああ、そうなんだ……うえー、水着撮られるのなんかヤダなー」

「まあまあ……それですね。合宿の取材に……こちらも数日だけではあるのですが、トウカイテイオーさんも同行することになります」

「えっ、なんで？」

素で声が出た。

なんでトウカイテイオー？ スピカ裏切った？ もしそうだとしたらまたゴールドシップに拉致られそうで怖いんだけど。

「トウカイテイオーですか……」

「ええっ、トウカイテイオーくるの!?! もしかしてカノープスの偵察!?! ……むむむ……ターボたちの作戦が丸わかりに……」

「いやそれはないでしょ。作戦も」

「退院したとはいえ、まだまだトウカイテイオーさんも療養期間ですから。トレーニングを自粛している間、ナイスネイチャさんの番組の取材に協力してくれることになりました」

ああ……だからトウカイテイオーが来るわけか。

私がトウカイテイオーを怪我させたとかいう噂や、不仲説とかも広まってるらしいし。それを解消するために、私とテイオーが仲良くしてるシーンでも撮っておきたいんだろう。なるほどわかりやすい。

まー実際、テイオーとはよく話すし、仲良いしね。ターボだってそうだ。

……ここで無意味な誤解を解いておくのも悪くない。……けども。

「んー、わかりましたけどね……でもそれってテイオーの方は納得してるんですかねえ。だって向こうの、スピカも合宿あるだろうし」「こちらに同行するのは数日だけですから大丈夫だそうです。ご本人も、向こうの沖野トレーナーも快諾してくれましたよ。数日だけ頼むよ」とのことでした」

「あれま」

スピカの沖野トレーナーか。

……あのトレーナーも飄々としてるけど、かなりやり手だよな。

悪い人じゃないのはわかるけど、あまり練習風景を見られたくないタイプのトレーナーだ。走ってる時のウマ娘を見る目がなんか熱っ

ほくてアレだし。

「カノープスの夏合宿、賑やかになりそうですね」

まー確かに、賑やかにはなりそうだな。テイオーも足が折れたくらいでじつとだんまりしてるタイプじゃないだろうしね。

けどテイオーを巻き込んでしまったようでちよつと申し訳ないな……後でお礼言つとかないと。

「ではカノープス次の議題に移ります。ズバリ、夏合宿のバーベキューで何を焼くか」

「ターボしいたけが良い！」

「私はぎんなんかなあ」

「では私はししとうで」

「何故ラインナップが居酒屋のおつまみ……？　それより、皆さんそろそろトレーニングを……」

こうして夏に向けた準備は整っていくのだった。

……ま、その前にまだいくつかレースに出るんですけどね！

無垢な信頼

トウカイテイオーがチームカノープスの夏合宿に短期間だけ同行する。

その話題は、トレセン学園内でも驚きと納得の半々で受け入れられた。

まず、トウカイテイオーはカノープスではない。

今最も勢いのあるスピカのメンバーでありながらも、骨折という大きすぎる故障。別チームと行動を共にするという珍事は内情を知らない者に「すわ移籍か」という想像を抱かせるには十分なものであった。

とはいえトウカイテイオーとナイスネイチャの仲や、ナイスネイチャに対する風当たりを知る者達にとっては、そう驚くべきことでもない。

二人は同じ学年、クラスであり、よく話すし仲も良い。ナイスネイチャの一部悪評を解消するために、仲の良さを外部に見せつけるのは悪くない方法であった。

スピカトレーナーの沖野としても、現状のトウカイテイオーはまだトレーニングに参加させることもできず、持て余し気味だ。

チームメンバーの練習風景を見せ続けるのも精神面の鍛錬としては悪くないが、やりすぎは酷であろうし、何より本人が退屈すぎる。

それよりは菊花賞に出走する予定のナイスネイチャの元に送り込んでやる方が気も紛れるし、参考にもなるだろう。向こうの風評改善になるともなれば断る理由もなかった。

「ま、短い旅行のつもりで行って来い。ナイスネイチャの走り方は俺でもハツとするものが多いからな。トレーニングを見学しているだけでも収穫はあるはずだ」

「うん。ネイチャの取材に映るのがメインではあるけど、ボクは偵察のつもりで行くつもり。あ、もちろんカノープスに移籍はしないから安心してよね！ トレーナー！」

「おいおい……冗談でも移籍なんてやめてくれよ？　今のテイオーはマックイーンと一緒にうちのエースなんだから」

「にっっ」

現在、チームスピカにおけるトウカイテイオーの方針は菊花賞への出走を目標としている。

トウカイテイオーの骨折に伴い秋レースへの出走は不安視されているが、それは事実である。実のところ沖野トレーナーから見てもトウカイテイオーの怪我の完治の見込みはあまり高くない。

だがそれでも、テイオーの抱く“無敗の三冠ウマ娘”への夢を叶えるために全力を尽くしている。

今回の夏合宿への参加も、多少はそれを狙ったことだ。

効果がどれほどあるかは定かでないが、海水浴は元々潮湯治と呼ばれる古い医療行為の一つでもある。また、水泳は骨への負荷の少ない運動だ。

脚を治すためならなんでも試したいスピカ陣営にとって、今回の小旅行は決して無駄な時間つぶしというわけでもないのである。

「そうでしたわ、テイオー。カノーパスといえば私の同室のイクノデイクタスさんもいらっしやるのでしよう。夏の間は顔を合わせる機会も少ないでしょうから、時々ビデオ通話で挨拶させてくださいね」

「マックイーン。ああ、そうだった？　あの眼鏡で目がちよつと怖い子だよ。うん、いいよ。そのくらいお安いご用だよ」

「別にイクノデイクタスさんは目が怖いわけでは……」

「まあトレーニング時間外なら構わないが、向こうのチームの邪魔をすぎないようにな」

「わかってるってば」

「……それと。マックイーンと似たようなものになるが、向こうではシンボリルドルフにも連絡を入れてやれ」

「……え、カイチョーに？」

テイオーは目を瞬かせた。

「そうだ。お前も無意識なのかもしれないけど……怪我をしてか

ら、シンボリルドルフを少し避けているだろ？ テイオーが生徒会室に足を運ぶ頻度が減って寂しそうにしているって、おハナ、あー、とある情報筋から聞いててな」

「バレバレですわね」

「う……そ、そつかあ。いや、避けているわけじゃなくて、なんか……骨折してるから……うん、避けてるかも……」

無敗の三冠ウマ娘。それはシンボリルドルフと同じ軌跡であり、昔から続くトウカイテイオーの目標だ。

テイオーは常にその夢を掲げ、シンボリルドルフも己の後を追うテイオーを親のような目で見守ってきた。

そんな最中の骨折だ。今こそ前向きに構えようとはしているが、治るかどうかわからないこの怪我であることは事実。そのことがトウカイテイオーからシンボリルドルフと顔を合わせることにためらいを生じさせていたのである。

「今回のカノープスへの同行は、ルドルフが考えたことでもあるんだ。テイオーのためになるからと、信じて送り出したわけだ。だから向こうに行ったら少しくらい、現状報告してやれ」

「……うん。わかった。ありがと、トレーナー」

トウカイテイオーは気恥ずかしそうに頭を掻きながら頷いた。

メジロマツクイーンはそんな彼女を横目に、小さく笑うのだった。

「トウカイテイオーをチームカノープスの合宿に……何もトラブルが起きなければ良いのですが」

生徒会室にて、今日の仕事を終えたエアグルーヴとシンボリルドルフは向き合ってお茶を飲んでいた。

「トラブルか。エアグルーヴも反対というわけではないのだろうか？」

「ええ、それは……近頃のナイスネイチャへの謂れなき中傷は目に余るものがありますから。そのためにトウカイテイオーが動いてくれたのは喜ばしい限りですが……海水浴場とはいえ、海。ウマ娘とはいえ自然の力には抗えませんが……慣れない場所でトウカイテイオーが怪我をしないかが心配です」

「ふふ、そうだな。……だが、怪我を完治させつつ菊花賞への体作りをこなそうともなれば……多少の無茶は必要だ。骨を痛めないよう、肉体に負荷を掛ける。そんなリスクを背負わなければ、仮に出走はできたとしても勝利までは望めないだろう。テイオーはきつと、それも覚悟の上だろうさ」

「……悔しいでしょうね」
「……」

シンボリルドルフは答えず、静かに紅茶を一口飲んだ。

「……それよりも、私としては取材の方が心配だよ」

「情熱ターフでしたか。あそこはかなり配慮の行き届いた取材をする所だと思いますが……？」

「いや、トウカイテイオーが無理に出しやばらないかが気がかりだね」
「ああ……」

苦笑する二人が思い起こすのは、いつか撮影したトレセン学園の入学案内動画だ。

案内動画の撮影中、テイオーは常にカメラ目線で何度も映りたがったせいで、結局その映像はお蔵入りとなってしまった。

元々目立つことを労とせず、好むタイプのウマ娘だ。今回の取材でその悪い癖が発揮されなければ良いのだが。

「まあ……これまでの取材経験で、多少は大人になっているもの信じましょう」

「うむ、そうだな……テイオーもまるきり子供というわけではないだろうし……ナイスネイチャと同室でも、はしゃぐようなことはないだろう」

「……ん。テイオーはナイスネイチャと同室なのですか？」

「ああ、そうだ。カノープスと合流すると人数の都合でそうなるらしい。共に同じ部屋で過ごす仲間となれば、それも良い取材材料にはなるだろう」

「……」

「……どうかしたか？ エアグルーヴ」

「ああ、いえ……」

エアグルーヴは眉間に皺を寄せ、考え込むように唸っている。

「最近目安箱に投函されてくる怪文書にはいくつか……ナイスネイチャとトウカイテイオーに関するものがあつたので、不覚にもそのことを思い出してしまっただけです」

「ああ、いつもエアグルーヴに任せている目安箱の処理か。……また何か、中傷を含む内容だったりするのかな？　だとしたら……」

「いえ、決してそのようなことは。……ないとは思うのですが……」
「煮え切らないようだね」

「……トウカイテイオーとナイスネイチャが、ふとした拍子に意味深な目配せをしている時がある、とかなんとか……そのようなことが、いくつかの怪文書の中から読み取れるといいますか……」

「目配せ？　……ふむ、なんだろう。まあ、友人同士色々あるのだろう。暴力やいじめでない限りは、こちらから無闇に掘り起こすこともあるまい」

「……ええ、仰る通りです。あんなものを考慮に入れてしまったとは、一生の不覚……」

「ナイスネイチャは今でこそ世間からの中傷に晒されているが、私から見れば品行方正なウマ娘だ。状況が落ち着けば、ゆくゆくは手伝いだけでなく正式に生徒会に迎え入れたいほどだよ。そんな彼女がテイオーに粗暴な振る舞いをするとは思えない」

「全くですね。ナイスネイチャは、とても真面目ですから」

「きつと合宿中は、彼女がテイオーにいい影響を与えてくれるはずさ」

シンボリルドルフは夕暮れ時の窓を見やり、そこに幼い頃のトウカイテイオーの姿を思い描いた。

自分の後を追い、走り続けてきた愛らしい後輩。

背丈こそまだ小柄ではあるが、走りの質では比肩するほどにまで飛躍した彼女。

シンボリルドルフは、信じて送り出したテイオーが今よりも更に立派な姿になって戻ってくることを願っている。

夏合宿が始まった

ついに始まりました、夏合宿。

いやー、ネイチャさんもね。もう海なんかにつつつを抜かす年齢じゃないですよと思ってたんですけどね。直前になると急に思い出したように楽しみになっちゃいましたね。

思わず前日に色々現地で使う化粧品とか小物を買っちゃいましたよ。ええ。

ちよつとばかし夜更かしたせいかな、眠いのなんの。

おかげでトレーナーの運転するマイクロバスでうとうとしちゃったり。

「ちよつと……ちよつとネイチャ……！ 寄りかかりすぎだよ！」

「ふあ……あー？ ごめんテイオー、私寝てた？」

気がつくと隣の座席のテイオーにもたれていたりして。ごめんごめん。

「ホテル到着までまだ時間がかかりますから、寝てしまっても構いませんよ。乗客が心地よく眠れるのはドライバ―の名誉みたいなものですから」

「そうなの？ じゃあターボ頑張つて寝るね！」

「ターボさん。あまり今寝すぎでは夜眠れなくなりますよ。そうなれば響くのは翌日の朝です」

「むーん……じゃあ起きてる！ 別に眠くないし！」

いや眠くないなら無理して寝ることないですよターボさん。

そんなことを考えていると、私もまた眠気が……。

「ふああ……ボクも昨日眠れなくて……ちよつと眠ろうかなあ」

私はトウカイテイオーのあくび交じりの言葉を聞きながら、眠りについた。

「海だー！」

で、まあ特にトラブルもなく無事に到着しましたと。

思っていたよりごぢんまりとした、けれど綺麗そうな雰囲気のホテル。

すぐ目の前には海岸と砂浜。

トレセン学園御用達の合宿地に到着である。

「トレーナー、海はいつ入れるの!？」

「え？ そう、ですねえ……初日ですから大目に見たいところではありませんが……あくまで合宿ですからね。気を緩めないためにも、まずは部屋と施設の確認、そして併設コースで軽く走ってみましょうか」「えーっ！ 海泳げないの!？」

「ははは……そのかわり、併設コースはほぼ貸し切りで走れますよ?」

コース貸し切り。その言葉にツインターボはごねるのをやめ、葛藤するように唸った。

「んー……んー……! 走れるなら問題無し! ターボ走りたくなってきた!」

「素晴らしい心意気です、ツインターボさん。後ほど私とレース形式で走りましょう」

「うん!」

「いや、そのレース形式とまでは……」

賑やかな我がカノープスの面々はいつも通りだ。

……夏合宿。この期間で私もすっかり力をつけていけないとね。

海に浮かれてばかりもいられない。トレーナーの言う通り、気を引き締めていかないと。

「むー」

「……どしたの、テイオー」

しかしさつきからトウカイテイオーが不機嫌そうなのはなんなんですかね。

「合宿場所……スピカの行くところよりずっと綺麗じゃん……!」

「へー、テイオーのとは違う感じなんだ?」

「無性に悔しい……!」

「まあまあ、ここにいる間はテイオーも綺麗なところで楽しめるところでござん」

そう言いながら、私はテイオーの肩にそつと手を置いた。

「あつ……」

「せつかくなんだし、ゆつくりしていこうよ。ね？」

「……まあ、うん……そのつもりだけだよ」

しおらしく頷くトウカイテイオー。

……柄でもないのに。私の前で素直になる彼女を見ると、なんだか……いや。

「さ、荷物置きに行こう！ この後トレーニングするなら、早めにしないと！」

今はトレーニングのことを考えよう。

気を緩めず、真剣に。とにかくそれこそが第一なんだから。

一通り見たホテルの設備はなかなか良いものだった。

お風呂は大浴場が一階に、食堂も近くにある。ふるーい感じのゲームセンターもあったけど、懐かしいのがいっぱい並んで少し興味をそそられた。旅館つて大体ああいうのあるよね。

他にもエステとかカフェなんかもあったりして、その場所も覚えておく。バーなんかもあるらしいけどトレーナーはああいうところ行くんだろうか。うちは実家がスナックだったけど、バーとスナックつて何が違うんだろう……。

「こちらの二部屋が皆さんの部屋になりますね。302と303、それぞれ二人部屋になります。鍵はこちらのカードキーになりますから、それぞれで持つていてください。無くしたらいけませんよ？」

部屋のカードキーはそれぞれ一枚持てるので、無くさない限りは締め出されることもないから安心だ。

ちなみにトレーナーの部屋はちよつと離れたところにある一人部屋らしい。

一人で寂しくないかとターボが憐れんでいたけど、私たちと同室になるわけにもいかんでしょう。

「荷物を置いて準備を整えたら、二時にフロントロビーに集まってください。軽いトレーニングとして併設コースと砂浜の感触を軽く確

かめたら、今日はそれで終わりにしましょう」

「砂浜！ 砂浜も走って良いんだ!？」

「海には入らないので、ジャージですよ?。」

「イクノデイクタス！ 早く早く!。」

「はい、速やかに準備を整えましょう」

「ターボさんや、カードキー忘れちゃいけないよー」

さて、私たちも自分の部屋を確認しないとね。

「じゃあ、入ろうか」

「うん。……わあ、中も結構綺麗だなあ。つてあれ!? 外にお風呂ついでるんだ!？」

入ってすぐ、テイオーが部屋の向こう側にあるものを見つけ驚いている。

「どうやらこのホテル、部屋の外に一人用の露天の壺風呂があるらしい。」

屋根と壁でわりとしっかりガードされてるから露天というほどあまり風情はないけれど、覗きとかはされにくそうで嬉しい。

「しかもベッド……ボクの時は布団だったのに……」

「あはは……まあまあ、旅館はみんな大抵布団だしさ」

「おかしいなあ……トレーナー、ちゃんとスピカのお金とか貰ってるのかなあ……ここまでくるとボク、妬みとかより先に心配になってくるよ……」

ちなみにこれは後から聞いた話だけど、スピカのトレーナーさんはしっかり使うべきところにはお金を使ってるらしいです。安心。

用途は効果的な食事やら備品やら。特にチームの遠征費を全くケチっていないのはすごいと思う。少人数とはいえ応援や偵察はしっかり全員連れて行くとか。そりやお金も消えますわな……。

「……ここで、しばらく寝泊まりするのなあ」

広めの二人部屋を見回して、トウカイテイオーがぽつりと呟く。

「うん。しばらく……私と二人きりだね? テイオー」

「……!。」

私が彼女に微笑みかけると、テイオーはあからさまに動揺してみせ

た。

……ああ、やめてよテイオー。そんな顔しないでっば。

「ふ、二人きりだけど……ナイスネイチャ、あまり……その、変なことはしないでね?」

「へえ……「あまり」、なんだ? 少しだけなら良いってこと?」

「や、違っ! そうじゃなくて!」

「ふふふ、テイオーってば慌てすぎ」

私はテイオーのすぐそばまで近づいて、彼女の脚にそつと指先を触れさせた。

「あつ……ちよつと……」

「テイオーの怪我、まだ怖いしね。ちゃんと治るまでは、あまり無理に動かさない方が良くもんね」

「……うん」

「合宿中に悪化したら大変だもん、私も気をつけるようにする。だからテイオーも、あまり脚が悪くなりそうな所歩かないようにね?」

「わかつてるよ。ネイチャ達には絶対迷惑はかけないから。ボクは今回、ほとんど見学だけしてるつもり。後々、少し海に入って歩くくらいはするけど……」

「うん。無理しないで。私、テイオーと一緒に勝負するのを待ってるんだから」

それは私の本音。

テイオーは私の言葉に、僅かに目元を潤ませたように見えた。

「うん。……うん。ボク、治すよ。必ず脚を治して、必ずみんなと走ってみせる。それで……三冠ウマ娘になってみせるんだ」

「……へえ?」

ふーん三冠。菊花賞も勝ってみせるって?

自信満々なのはいいけど、ちよつと……。

「テイオー、ちよつと生意気」

「あつ……!?!」

ぎゅつと尻尾を掴み、軽めに握る。

それでも他人に尻尾を掴まれるのは慣れないのか、テイオーの身体

がビクリと強張った。

「ネ、ネイチヤ……だからボク、脚怪我してるってえ……!」

「尻尾は骨折してないでしょ？ ほら……テイオーの尻尾、真っ直ぐでこんなに綺麗」

「あひッ……!?!」

根本から先の方までスルスルと抜き上げると、テイオーは脱力する
ように近くのベッドに倒れ込んでしまった。

よし、こつちがテイオーのベッドね？ 決まり。

「ネイチヤ……尻尾だめ……!」

ああ、もう。

ダメとか言ってるくせに、そんな目で私を見上げちゃってさ。

わざとやってるの？ テイオー。絶対わざとでしょ。

わざとなんだとしたら……この前のシャワールームよりもいつぱい、テイオーのこと意地悪してあげなきゃいけないじゃん……。

高揚する。

潤んだテイオーの瞳を見ると、歯止めが利かなくなりそうになる。

……けど。今は。

「……それじゃ、荷物も置いたしそろそろエントランス向かうか?」

「……え?」

「え? じゃないでしょ。もうすぐ約束の時間だもん。合宿なんだし、トレーニング第一で動かないと」

「あ、うあ……うん、そうだね……トレーニングしないと……」

顔を真っ赤にしたテイオーが、ベッドの上でどこか残念そうに眩いている。

「……だから」

私は彼女の耳元に口を寄せ、低く囁く。

「今日の夜、部屋に帰ってきたらさ……二人きりで遊んじゃおう?」

「……ッ!」

「それじゃ、先にエントランスで待ってるから」

羞恥で動けなくなったテイオーをよそに、私は先に部屋を出た。

彼女もしばらくしたら気持ちを立て直して出てくるだろう。
……トレーニングに集中するための合宿。だけど。
それ以外の時間に息抜きするのは……自由だよね？

待ちわびるお一人様

ナイスネイチャはテレビ局の匹場さんという人と一緒にターフを走っている。

最初に2000ほどナイスネイチャが走って、途中から匹場さんが合流する形。匹場さんもかつてレースで走っていたらしいけど、結構なブランクがあるはず。それなのにナイスネイチャの走りに食らいつける辺り、凄いと思う。

「走りながら喋る時は、息を吐くタイミング。これが重要です……！」
「はっ……はっ……！」 す、すごいですねっ！ 私、とてもっ、このペース……喋れなッ……！」

「いや、でも凄いですよ、匹場さんっ……喋りながら走れる人、なかなかいませんからっ……！」

「はぁ、はぁ……！」

ボクの役目は、二人が走る様子をカメラで追いかけることだった。追いかけると言っても、走るわけじゃなくて。ただ、三脚？ みたいなので固定されてる大きなカメラを覗きながら、二人をファイインターに収めるだけ。

どうやら番組はナイスネイチャの走り方をじっくり取材するみたいで、走ってる時のお喋りについても焦点を当ててみたいらしい。匹場さんが直々に走りながらインタビューをして、どんなものかを確かめようってことみたい。

音声は二人がつけてるピンマイクが拾ってくれる。今のボクには聞こえないけれど、番組が仕上がったら今何を話しているのかもわかるんだろう。

ま、だいたい何を言ってるのかはわかるけどね。

……安定した走り続けながら話しかけて、相手の集中力を乱す。なんてことない小手先の技みたいと思われがちだけど、やられると結構辛いんだよね、これ……。

ネイチャは特に、なんていうか……時々、とんでもないことを言っ

たりするしさ……。

「大丈夫ですか？ まだ走れますか？……？」

「はっ……はっ……はいッ……！」

「と、まあそんな風に思わず答えちゃうと、辛くなるんですよ……！」

「うおおあ……なるほどッ……！ 辛いです……！ ひい、もう無理……！」

あ、匹場さん垂れ下がった。

1000メートルくらいかな。現役クラシックのウマ娘のペースに合わせて喋りながら走るの難しいよね。それでもよくやった方だと思うけど。

「はあ、はあ……ふーッ……芝結構固めだけど、まあ悪くないかな……特別、変な感触つてわけでもないし……！」

「お疲れ、ネイチャ。匹場さんと何話してたの？」

「んー、インタビュー？ あはは、テレビに私のあの声流れるのかなー、キツいなー……！」

……こうして話していると、ナイスネイチャはいつも通りだ。

普通の友達。普通のクラスメイト。

変な意識をする相手じゃないって、思えるのに……。

……今日、この取材とトレーニングが終わったら、ボクは……部屋に戻って、そうしたらネイチャは……。

「テイオー、カメラちゃんと撮ってくれた？」

「えっ。ああうん、もちろん！ ずっと真ん中に収めてたよ！」

「そっか。いやー付き合わせて悪いねー」

「ううん。こんな大きなカメラなんて触ったことなかったし、結構楽しいから平気だよー！」

「はあ……はあ……どひい……ナイスネイチャさん……トウカイテイオーさん……あ、ありがとうございました……！」

あ、匹場さん戻ってきた。すごい汗かいてる……取材ってこんなに大変……なわけないよね。頑張るなあ……。

「良い映像と音声撮れていたと思います……はあっ……今日は、こ

れでオツケーです……！ 部屋に戻って編集しないと……！」

「お、お疲れさまでーす……」

喋りながら走ったり、機材を抱えて往復したり……ウマ娘はターフの上じやなくても、こんなハードな世界があるんだなあ……。

「お二人共、取材は終わったようですね」

「あ、トレーナー。ターボたちは？」

「ツインターボさんは砂浜を少し走ってくるそうです。イクノディクタスさんも見張っててくれますから、もう少ししたら戻ってくるかと。ナイスネイチャさんは一足先にシャワーなり浴場なりで汗を流されてはいかがでしょうか？ 夕食までは時間がありますが、食堂に集まるまでに身体を休めておいたほうがいいですよ」

「んー、いや。ターボたちと一緒に入るよ。せっかく初日だしね、一人は寂しいもん」

今日のネイチャは合宿初日だけど、結構重めのトレーニングをこなしていたと思う。

彼女の練習風景はとても参考になった。スピカのメンバーも良い走りをするけど、ネイチャにはチームの皆にはない「巧さ」がある。眺めながらイメージトレーニングをするには、結構最適な相手なのかも。トレーナーの言ってた通りだね。

「温、泉！ 温、泉！ 温、泉！」

そうこうしているうちに、ツインターボたちも戻ってきた。……いつ見ても元気だなあツインターボ。

夏空はまだ赤くなりきつてはいないけど、練習を終えるには良い時間だ。

「温泉いってご飯食べるぞー！」

「おー」

「はいよー」

「トウカイテイオーも温泉入ろう温泉！」

「ええ、ボクは……汗も全然かいてないしなあ……ご飯食べてからにしようかな」

なんとなーく、カノープスの皆に遠慮してる風な感じで断つちやつ

たけど。

……無理だよ。一緒にお風呂なんて。

だって、ナイスネイチャもいるんだよ？ ネイチャと一緒にいるのに……ああ、もう。別におかしなことじゃないのに、どうしても意識しちやうて……。

こんな調子で一緒に温泉入ってたら、絶対顔とかにも出ちやうもん。

「あれ？ テイオーは一緒じゃないんだ。……ま、いいけどね」

「あはは……」

一瞬、ネイチャの目に悪戯っぽい光が浮かんだ。……ような気がした。

それからカノープスの皆が温泉に行く中、ボクは部屋で日課にしている脚のマッサージと筋トレをやることにした。

折れた脚はあまり激しい運動はできないけど、他の部位だったら鍛えられるし、疎かにしてちやいけくない。

治った後に少しでも早く調子を取り戻さなきゃいけないんだ。まだ走れないけど、この筋トレは走ると同じくらい大事なこと。

真剣にやればじんわりと汗も出てくる。お風呂に行かなくて良かった。

「ふっ、ふっ……！」

焦れたい。心が燻ってる。

けど我慢。今はボクにできることだけをやればいい。

結局、ボクは夕食の時間になるまで黙々とトレーニングを続けた。

……そして、夜がくる。

怖いような、ずっと……期待していたような。

ナイスネイチャとの夜が、来ちやう……。

二人の小休憩

筋トレした後は部屋付きのシャワーを軽く浴びて、それから食堂でご飯。

ネイチャとはたまに学園の食堂で一緒になることもあるけど、他のカノープスのみんなとは珍しい気がする。

「今日ね、砂浜でたくさん走ってみただけだねえ……ターボはダートでも走れそうな気がする！」

「なるほど、芝だけでなく柔らかなダートコースを併用することで身体への負担を極力抑えつつトレーニング量を増やすということですか」

「砂浜もいいけどねえターボ。あまり傾斜のついたところで走ると変な癖がつくかもよー？」

「ええっ！ そうなの!?!」

「嘘だけど」

「嘘じゃんー!」

夕食は合宿初日ということもあってかちよつと豪華。

海鮮と、小鉢がいっぱい。……けど、味がよくわかんない。

ボクの隣の席ではナイスネイチャがチームのみんなと談笑している。

いつものように。……ボクは平静を装うだけで精一杯なのに。

……もしかして、ボクをからかったただけ？

今回、その……変なことをするって、言っただけなのかな。

……ナイスネイチャだし、あり得る。

考えすぎだ。もうやめよう。ボクらしくもない。

その後、カノープスの皆は別室でチームのミーティングを始めた。

これからのレースの予定、それに合わせた合宿中のトレーニングの打ち合わせ。あと注意事項とか、色々。

さすがにその場にボクがいるわけにはいかなかったから、先に部屋

に戻らせてもらった。他のチームがどんな作戦を立ててるのか、気にはなるけどねー。

部屋の明かりもつけないままベッドの上にうつ伏せに倒れ込んで、スマホを見る。

……みんなからメッセージ来てる。向こうはどんな感じか？ つて。

スピカのみんなに料理と海の画像を送ると、羨ましそうにされたり、スピカの合宿場は大丈夫なのかと面白半分な反応が返ってきた。うん、全然違うよね……。ボクはあの古い旅館もそんなに悪くないと思ってるけどさ。

でも、なんだか新鮮だなあ。ボク一人だけこうして遠くから近況報告するなんて。

海外遠征してるスズカもこんな気持ちなのかな？

「あつ、そうだ。カイチョーにも送らなきゃ」

ふと、トレーナーの言ってたことを思い出す。

カイチョーがボクのことを心配してたつて。……うん。最近あまりカイチョーと話せてなかったけど……。

避けてちゃダメだよ。それはボクの弱気の表れだ。

ボクの怪我は治る。治す。そうして、菊花賞でも勝つ。

その意気込みを、カイチョーにも見せてあげないと。

「わっ、カイチョー早っ！」

スピカの皆にも送った画像をカイチョーにも送信すると、ほとんど合間を開けずに通話がかかってきた。

「もしもし……」

『やあ、テイオー。そっちはいい景色だな。……ん？ 随分と部屋が暗いな。何も見えないぞ？』

「あはは……電気消してるし、毛布被ってるからじゃないかなあ。うん、カノープスの皆は優しいし、快適だよ。他のチームの練習風景を見学するのも、悪くないしね」

カイチョーはもう学園を出て、帰り道を歩いているみたい。

生徒会って大変だなあ。カイチョーと一緒にいるのは好きだけど、

生徒会に入るのには面倒くさいや。……そもそもボクだと入れてもらえなさそうな気もするけど。

『それは良かった。他人の走りを観察すると普段一緒に走る相手とは違った感触を得られる。他山之石……とは少し意味も違うが、自分に無い技術を積極的に取り入れてこそ、己を磨く事に繋がるものだ。これは時間がいくらあっても足りないからね。テイオーもそちらでは、見学に尽力すると良い』

……気遣われてる、んだらうなあ。

学ぶことは沢山あるから。だから大丈夫。そう励ましてくれていい。

……やっぱりカイチョーは優しいや。

「あ、あのね。カイチョー。その……」

『ん？ なんだい、テイオー』

お礼を言わなきゃ。それから、今までそっけなくしてたことも謝らないと。

でも、いざこうして面と向かって言うとなると、ちよつと恥ずかしさが……。声も尻すぼみして、なかなか出てこない。

「あのね……ボク……」

『うん』

優しいな声。急かさず、嫌な顔もせずボクを待っていてくれる。

「ボクねっ……」

「なーんでテイオー、私のベッドで寝転がってるのかなあー？」

「んひいっ!？」

その時。ボクの尻尾がギュツと、遠慮なく握られた。

『テ、テイオー？ どうしたんだ？』

「あ、や、その……」

「こっちは私のベッドなのにさあ……毛布に頭突っ込んで、なのにお尻だけ外に突き出して……これってさ。『お願いします』ってことだよねえ？」

「違っ……!？」

ナイスネイチャだ……!？」

ボクの尻尾を握ったまま、ボクに覆いかぶさって来て……！

「もつとじわじわと困らせてあげるともりだつたのに……こんなに期待して待ち構えられたらさ……応えてあげたくなくなっちゃうじゃん」

「あつ、やつ、だめつ……カリカリしないで……！」

尻尾の裏側を爪で優しくカリカリされる。むず痒くて、熱くて、声が抑えられない。

『な……ナイスネイチャの声が、聞こえたが……一体、何を……』

「ち、違うの。なんでもないから……！」

カイチョーにバレちゃダメ。聞かれたらダメ……。

ダメなのに……ネイチャの爪が、優しく、ボクの尻尾を……！

「ほらほら、なに声抑えてるのー？ テイオー、我慢しないで出しちゃって良いんだよー？」

「や、やだ……今はっ……！」

『何をされて……テイオー、大丈夫なのかっ？ そこで一体、ナイスネイチャと……』

「だ、大丈夫だからっ……大丈夫なのつ。ネイチャは……」

「反応悪くてつまんないなあ……いつまでも意地張ってないで、素直になりな……よっー！」

「ん、ああっ!？」

！
根本から一気に擦られ……！ やだ、それ、ゾワツとしちゃう……

『テイオー……!?!』

も、もうダメ。もう通話なんてできない。

ネイチャに意地悪されたら、ボクはもう、ボクじゃなくなっちゃう……！

「はっ、はあつ……カイチョー……ごめんね……」

『な……！』

「通話、切るね……あ、やあつ……！」

ゾワゾワする感覚に耐えながらなんとか通話を切る。

すると……ボクを抑えていたものが、一気に決壊したような気がした。

「ああつ……！　ネイチヤ、尻尾はダメだつてば！　そこ触られて良いウマ娘なんて、いないのに……！」

「ああ、良いなあその声……それだよテイオー、その声を聞かせて欲しかったの」

毛布を剥ぎ取られ、ネイチヤが覆いかぶさってくる。

「恥ずかしそうにしながら、必死で抵抗する時のテイオーの声……私、すごい好き」

「……！」

ボクの顔のすぐそばでネイチヤが囁く。

尻尾をやわやわと握ったまま、遊びながら。

「でも、テイオーも『これ』好きだもんね……？　私に尻尾をいじられて、意地悪されて、恥ずかしくされちゃうの。前に言ってたもんね……？」

動けない。脚を動かせないとか、そういうのじゃなくて。

ネイチヤに抑えつけられた場所で、逃げ出せない……。

「世間では王子様だなんて言われてるトウカイテイオーが、私に意地悪されて嬉しそうにしてるなんて……みんな信じないだろうなあ。ね、どうしょつか？　合宿中にインタビューで、テレビの前のみんなに教えてあげちゃおつか？　テイオーはそういうウマ娘なんですつて」

「や、やだっ!?　ダメ！　そんなの絶対ダメ！」

「カメラの前で私に尻尾をいじられながらね、テイオーが嬉しそうにしちゃうの。みんなびつくりするよね……？」

「やだ、やだあ……！」

「そっか、嫌か……」

ああ、意地悪なこと言われて、尻尾を弄られてっ……！

もう、頭がどうにかなつちやいそう……！

「じゃあみんなには内緒にするからさあ……私の前でだけ、たくさん見せてよ。テイオーのそういう姿」

「はあ、はあつ……ナイスネイチヤの前で……？」

「そう。私にだけ。だったら良いよね？　テイオー。良いって言って

「？」

「あ……」

ネイチヤにささやかれる。

ボクに拒否権なんてないのわかってるくせに。頼むような口ぶり
で。

なにより、ボク自身も……。

「う、ん……良いよ……ネイチヤに、だけなら……」

認めてしまう。受け入れてしまう。

変なことなのに。絶対、普通のことじゃないはずなのに。

「……あは。テイオーってやっぱりマゾってやつだ」

「ちが、そんな……！」

「違くないよ。ほらっ、こうしてちよつと握るだけで……！」

「いつ……!?!」

「テイオー、すごく嬉しそうな顔してるもん」

「え……や、やだ。顔見ないで！」

思わず顔を背けてしまう。上から抑えつけられてたら、そんなのほ
とんど無意味なのに。

「それに枕の上、テイオーの涎ですごい濡れてる。うわぁー、まだ一日
も寝てないのに汚しちゃって……」

「う、うう……！　こんなの、おかしいのに……！」

「良いじゃんおかしくても。私とテイオーだけの秘密なんだからさあ
……今日は二人で一緒に、おかしくなる？」

「あ……」

ネイチヤの低くて甘いささやきが、思考力を溶かす。

彼女に支配されて、いじめられたいと思ってしまう。

「う、うん……もつと……お願い……」

「……ふふ」

「もつと痛くていいから……ボクのこと、意地悪して……！」

「ああ、すごい。とつても良い顔だよ、テイオー……」

もう後戻りはできない。

渚のバーベキュー

一夜が明け、翌朝。

私が目を覚ますと、同じベッドでトウカイテイオーが眠っていた。

……いや、身に覚えがないとか言うつもりはないですよ。ええ。

昨晚の出来事は夢でもないし、現実でしかない……。

テイオーを動けなくして、後ろから覆いかぶさって。

尻尾をいじめて、耳元でゾワゾワするようなささやき声を聞かせ
て。

何時間くらいやってたかな……テイオーの方が先に力尽きて、パツ
タリと眠って終わっちゃったけど。

「……ふふ」

こうして眠ってる姿を見ると、なんでもないのでないのになあ。

小柄で、華奢で、あどけない普通のウマ娘。ただの友達で、クラス
メイト。

でも起きている時の、どこか自信に満ち溢れていて、強気なテイ
オーを見ていると……昨晚みたいに、滅茶苦茶にしてあげたくなくなっ
てしまう。

たくさんいじめて、意地悪して、恥ずかしがらせたい。そんな仄暗
い愉しみで、口元が緩んでしまうんだ。

それはきつと、私がこれまで培ってきた“他人の足を引っ張る”意
識の賜物でもあるんだろうけど。それだけでなくて、私自身の元から
の性格っていうのもあるんだと思う。

……テイオーがマゾで、私がサドか。

いやー……言えない。誰にも言えないよこんなの。

どちらかといえばサドよりもマゾの方が人にバレた時に恥ずかし
い気はするけど、だとしてもサドだって他人に知られたくないって。

昨日はテイオーに“テレビの前でばらしちゃう？”とか言ったけ
ど、いや普通に私が嫌です。ハツタリだよあんなの……。

けど……そう言ってやるだけであれだけテイオーが困った顔をし

てくれるのなら。

ギリギリのスリルであれだけ楽しい気分になれるのなら。

誰かに知られるかもしれない緊張感をスパイスにするのも、悪くはないな……なんてね。

「ほら、テイオー。起きてー。見学者だからって寝坊は駄目ですよー」
「んん……んあ……あ、ネ、ネイチヤ……おはよう……」

テイオーはすぐ隣に私がいたことに少し驚いた様子だったけど、昨日のことが尾を引いているのか、しおらしい態度だった。

「昨日たくさん汗かいたまま寝ちやつたんだから、シャワー浴びてきなよ」

「……ネイチヤのせいじゃん。あんなに……おかしいよ、あんなの……」

「あはは、まあそうなんだけど。……じゃあお詫びに、身体流すの手伝ってあげよっか」

「だ、駄目だから！ そんなのー！」
「冗談だよ、時間ないし」

テイオーが「時間があつたらやつてたの？」って顔をしてるけど、無視してさっさと着替える。

「今日からまた取材があるんだから、カメラ映りは気にしないとね」
テイオーで遊ぶのは十分に楽しんだ。

まだまだ愉しみたくはあるけど……今日もまたトレーニングに打ち込んでいこう。

匹場さんの取材が終わるまでは、カメラ映りの良いトレーニングを行う予定だ。

本当なら一極集中のメニューで淡々とローテをこなしていく毎日なんだろうけど、しばらくは砂浜を走ってスポ根感を出したり、レースしながらの動きでターフを回ったりする。

正直私のやりたいトレーニングとはかなり性格が違うんだけど、仕方ないとは思ってる。菊花賞に向けたスタミナ作りトレーニングはだいたい絵面が地味になるので……。

「ネイチャー、がんばれー！ あと一本ー！」

で、走ってる最中には時々テイオーからの応援が飛んできたりする。

このトウカイテイオーがトレーニング中の私を応援する光景というのも番組に必要なだからね。

私とトウカイテイオーの不仲説を解消したい。

そんな目的もあるので、当然ながらインタビュはトウカイテイオーの方にも行く。

「ナイスネイチャーとは同じクラスだよ！ すぐく頭が良くて、だいたいいいつも成績が学年のトップなんだ！ ボクもたまーに……結構課題を見せてもらうこともあるし……ま、まあそれは良くて！ うん、クラスでも人気者だよ。前はチョコもたくさんもらってたみたいで……」

いや——恥ずいな——自分の話されるの恥ずいな——。

しかもテイオー私が恥ずかしいのわかって色々喋ってるな——あいつ。

……テイオーのくせに生意気だ。後でお仕置きを考えておくか。

「ネイチャーはね、ネイチャーはね！ ターボと同じくらいスタートが速いんだよ！ まあターボの方がちよつと速いけどね！」

「同じチームの鼻肩目を抜きにしても、レース中の駆け引きに関しては同年代のウマ娘の中でも最も秀でている方だと思えます。一緒に走っていると、なかなか学ぶ事が多いですよ」

カノープスのみんなもありがとうね。

でもそんなに褒めなくて良いよ。ほどほどでいいからね……私恥ずかしくて死んじゃうからね。

あー、お母さんに見られるのかーこれ。いやあー。

「お疲れ様です。少し早いですが、昼食にしましょう。もう炭の準備は出来ていますよ」

「やったー！ バーベキューだあー！」

朝練が終わった後は浜辺でバーベキュー。

トレーナーが近くのスーパーで買ってきてくれた色々なお肉や野菜を使った豪華な昼食だ。

「匹場さんもお疲れ様です。良かったらどうぞ」

「よろしいのですか？　ありがとうございます！　ではにんじん焼きを……」

「ツインターボさん。しいたけを生焼けの状態で食べるのはいけません」

「ぐるぐる……！」

「唸つても駄目です。火の強い網の中央であと40秒焼いてください」

「いやー、大きなパラソルをさしてバーベキュー。良いねえ、夏って感じがして。」

「ししとうもぎんなんも美味しいよ。もちろんにんじんとお肉もだけど。」

「カイチョーにも写真送っておかなきゃ……昨日は、ごめんなさい……と」

「テイオー食べてる？」

「うん。ほどほどにねー。ボクそんな食べないから」
「カノープスに遠慮しなくてもいいからね？」

「あはは、わかってるって。じゃあもう一本もらっちゃおう！」

テイオーは食細めだからなー。最近はトレーニングも出来てないし、なおさらなんだろうな。

けど食べないと怪我也なかなか治らないし、筋力も落ちちゃうから。多少太り気味覚悟くらいで食べてもいいとは思うよ。

……トウカイテイオー。

こうして一緒にご飯食べて、喋っている分には普通の友達だ。

そんな友達を相手に、酷いことをしてあげたい。っていう気持ちは……名前をつけるとしたらなんなんだろう。

愛とか恋ではないんだろうなあ。私、女の子が特別好きっていうわけではないし。

けど、苦しんだり困ったりしている姿が見られるなら誰でも良いっ

ていうわけでもないし……。

うん……やっぱリトウカイテイオーだから特別なのかな。

雲の上にいるライバルで、一番キラキラした存在。

そんな彼女だからこそ、私の手で困らせて、弄んであげたくなくなってしまっただ。

「な、なに？ ネイチャ……じつと見て」

「んー？ ああー……なんでもない」

「……目が怖かったよ。みんなの前なんだから……駄目だからね？」

……うん。わかってるよテイオー。わかってるからその顔やめて。そういう顔するから私の方も、気分が乗って来ちゃうんだよ。

トウカイテイオー。

彼女にこれからも意地悪なことを続けていったら、どうなるのかな。

レース中に私にささやかれただけで、ゾワゾワして何にもできなくなっちゃう時が来るのかな。

楽しみだね、テイオー。

今度テイオーと一緒に走る時が、本当に楽しみ。

……きつとテイオーだって楽しみにしてると思うけど。

だけど多分、その時がくるのは、もつと……。

緩やかな束縛

合宿中はほぼ一日中、トレーニングのことに時間を費やせる。

勉強も遊びも学校行事も気にしなくていい。私はもとより勉強とかを苦にするタイプではなかったけど、やっぱり集中できるってのは違うね。

何よりコースをチームがほぼ独占して使えるっていうのが大きい。トレセン学園もたくさんのコースがあるけど、色々なチームが使う分時間を長くは取れないから。

「はっ、はっ、はっ……」

ここは良い。時間帯にもよるけどほとんどまるごと私たちのものだ。

長距離に向けたフォームの見直し作業も周りを気にしなくて良いのはすごい助かる。

「……テイオー、見てるなあ」

そうして走っていると、テイオーがこっちをじっと見ているのがわかる。

観察してる。ダンベルを持って筋トレもしてるけど、同じくらい私のフォームを研究しているのがわかる。

レースの時のような、ヒリついた目。負けず嫌いなテイオーの執念は、骨が折れてもまだまだ健在だ。

彼女は脚を溜めている。走れるようになった時が楽しみでもあるけど、いやあ、怖いね。

才能にものを言わせるタイプが時間をかけてじっくりと復帰してくるなんて、悪役モブにとっては悪魔そのものですよ。

……まあ。

そんな悪役だからこそ、普通じゃない手で主人公を陥れなくなるんですけどね。

「いやー良いお湯だった。走り抜いた体にお湯が沁みますわー」

「お、お疲れ、ナイスネイチャ。ボクもシャワー浴びたから……」

「そうなんだ？ 私達と一緒に浴場来ればよかったのに……」

「あはは……また今度ね！」

夜。部屋に戻ると、既にテイオーはラフな格好になっていた。

薄着になるとますます華奢さが際立つ子だ。こんな小柄な体のどこに、あれだけの速力を封じ込めているのか……。

それにしても、テイオーは私と一緒に風呂入るの避けてるなあ。少しシヨックだよ。別に変な事はしないのに……他に誰かがいるならだけど。

「テイオーはトレーニング見てて暇じゃない？ 結構長いし、大変でしょ」

「ううん、そんなことないよ。……あつ」

テイオーの座るベッドの隣に腰を下ろす。それだけ。なのにテイオーは一瞬、身を強ばらせた。

「……ライバルの走りを見て、それと一緒にボクならどう走るか……どうコースを取るか……そういうのを考えていると、時間つてあつという間に過ぎてくよ」

「へえ……イメージトレーニングってやつ？」

「うん。ターフの上にイメージのボクを走らせてね。スピカでもずつとやってたんだ。……考えてると、走りたくてうずうずするけどね」

「あー、だろうねえ。考えてるだけっていうのは辛そうだわ。暇なのとは別の意味で……」

どうせなら見るより走りたくなるのがウマ娘という生き物だ。

テイオーは走るの大好きなタイプだろうに。よくずつと我慢できてるよ。

「そ、それにさ……この合宿、ボク……楽しいと思ってるよ」

「……ん？ どういう意味で？」

「だから……ほら。ネイチャと一緒に部屋だし。退屈とかしないし……」

「へえ……」

少しだけ身を寄せて足同士を触れさせると、テイオーはぴくりと反

応ずる。

横顔を見れば、彼女は既にあの時のような……しおらしい表情を見せている。

「テイオー、私と遊ぶの好きになっちゃったんだ？」

「んっ……！」

そつと尻尾に触れ、優しく撫でる。

暴れようとはしないし、嫌だとも言わない。黙って受け入れるだけ。

「私もね。テイオーとこうやって遊ぶの好き。トレーニングの疲れが吹き飛んで、なんか調子が良くなるくらい」

「……どうして、ボクの尻尾触ってそうなるの……」

「んー、尻尾じゃなくても良いんだけどね。テイオーがそういう顔とか、そういう反応をしてくれるなら良いっていうだけだし」

「ふっ、ううっ……！」

テイオーの尻尾の裏側はじつとりと汗ばんでいる。

軽く爪を立てて搔いてあげると、テイオーの身体は面白いくらい素直に反応する。

「あつ、やめ……ネイチヤ、くすぐりたいよ……！」

ああ、楽しいなあ。本当に楽しい。

テイオーはどこまで染まってくれるんだろう。

どれだけ私に支配されてくれるんだろう。

……もつと試してみたいな。テイオーで、いろいろなことを。

「ねえ、テイオー……テイオーの尻尾さあ。私にちようだい？」

「はあ、は……えっ、えっ!? だ、だめだよそんな、痛そう……」

「あはは、取らなくてもいいって。ただ……私が“出して”って言った時、私の手に尻尾を差し出してくれればそれで良いの」

「……尻尾を、差し出す……？」

「うん」

私は手のひらを差し出して見せた。

「いつでもどこでも、私が“出して”って言ったらテイオーは尻尾を出して、私に触らせるの。自分から差し出して、私にいじめられちゃ

うの……ね、良いでしょ？」

「そ、そんなの……そんなのおかしいよ……」

「良いじゃん。ほら、テイオーこれ嫌いじゃないでしょ？」

「あつ、ああつ……！」

他人に尻尾を触られるのは耐え難いむず痒さがある。

なのにテイオーは私にそれをされると、嬉しそうな顔をしてしま
う。

わかっているんだよ、テイオーの気持ち。

「ほらテイオー。尻尾私にちょうだい？ 良いよね？」

「だめ、だめだよお……！」

「はいっ。手は……だよ。おいで、テイオー」

「……」

触るのをやめて、ベッドの上に手を置いた。

するとテイオーはもじもじと私の手を見て、しばらく葛藤する様に
小さく唸り……。

……やがておずおずと、自分の尻尾を私の手のひらの上に差し出し
た。

「……今日からテイオーの尻尾は、私のだね？」

「う、ううっ……変だよ、変なのに……！」

「ありがとね、テイオー。テイオーの尻尾、これからずっと大事に可愛
がってあげるからね……」

「ああ……！」

耳元に囁きかけながら、尻尾を優しく撫でる。

「……でもテイオーは優しくされるより、少し乱暴にされる方が好み
かなあ……？ ねえ、どう思う？」

「い、ぎっ……！ そ、そんな握り方したら、ダメ……！」

「ああ、その顔良いね……やっぱり優しくするのはやめよっか……こっ
ちのが良いもんね……」

刺激に耐えられずベッドに倒れるテイオーに、なんとも言えない気
持ちは湧き上がってくる。

もつともつとテイオーをぐしゃぐしゃにして、折り目をつけてあげ

よう。

いつでもどこでも私の声ひとつで、また折れてぐしゃぐしゃになってしまふほど、取り返しのつかない痕をつけてあげよう。私に負ける癖をつけてあげよう。

そうすればきつとテイオーは、ターフでも同じようになつちやうよね。

テイオーが何をどうしたって、私に勝てなくなる。

「ほら、テイオー。そのままだとまた枕がよだれでビシヨビシヨになつちやうでしょ?」

「はあ、はあ……ふえ……?」

既に汗ばんで目も虚ろなテイオーに、一枚のタオルを投げ付ける。

「ほら、私のタオル。それ、顔の下に敷いててね」

「こ……これ、敷いて……どうするつもり……?」

「テイオーのこといじめてあげるの。ほら」

「あ……!」

テイオーの手首をリボンで縛る。

赤と緑の私色のリボン。その気になれば口を使って簡単に解ける蝶々結び。

「嫌だっただらいつでも抜け出せるからね、テイオー。そのリボンを解いたら、今日は終わりにしてあげるから」

「……!」

「なのに……あは……テイオー、そのまま何もしないんだ……」

手首を束縛されているというのに、テイオーはベッドに転がったままま動こうとしない。

ただ恐れるような、縋るような……求めるような潤んだ瞳で、私のことを見つめるだけ。

……そんなに期待されちゃったら、ねえ?

「だったらテイオーのお願い、叶えてあげる」

「んうっ!」

テイオーの体に乗る、尻尾を掴む。後ろからテイオーのうなじに顔をよせ、優しく歯を立てる。

「あ、あ……！　　嗚ま、ないでえ……」

「テイオーの匂いがする……ねえテイオー、そのタオルはどう？　　私の匂いがするでしょ」

「ね、ネイチヤの匂いつ……？　　あ……ああつ！」

「そのタオル、テイオーの唾液でベトベトにして良いからね？　　私の匂いとテイオーの匂いを混ぜたらどうなるのか……ちよつと興味あるでしょ？」

「変っ……へ、変だよお……！　　こんなの、おかしくなっちゃう……！」

「あー良い顔……ねえテイオー、その顔撮って良い？　　保存したいなあ……」

「駄目、駄目え……」

「そっかー……じゃあ保存しなくても覚えられるくらい、今日はその顔見させてもらうから……！」

タオルに顔を埋めるテイオーの曇った声と、嗅ぎ慣れない他人の唾液の匂い。

熱い体温と、触れ合うお互いの汗。

私は今夜もテイオーと同じベッドで寝て、彼女をたっぷり虐めて、愉しんだ。

後方釘付け

トレーニングと、ちよつとしたバケーションと、合間を縫つてのインタビュー。

そうこうしていれば匹場さんの密着取材もすぐに終盤を迎え、今日がその最後の日となっていた。

思えば他人にじつと見られながらのトレーニングというのもトレーナーを除けば初めての経験だ。

カメラの前だとレースと似たような緊張が生まれるせいか、意外と臨場感を再現した面白いトレーニングになった気がする。

「長期間の取材に応じていただき、誠にありがとうございました！必ずやナイスネイチャさんの魅力を引き立てる番組に仕上げてください！」

「あはは……ど、どうもです……でもほどほどーな感じで良いですよ……」

密着取材。

なんでこんな私が、なんて思ったりもするけど、次の菊花賞を視野に入れば……確かに他人事でも無い。

こうなりやヤケですよ。せいぜい地上波でバーンと目立ってくれ……！

「お疲れ様でした。……さて、明日からカノープスは通常通りの合宿です。カメラが回っていないくとも、緊張感を保ってトレーニングに励みましょう」

「おー！」

「おー」

「うー」

ま、取材は終わりだけどここからが合宿の本番ですな。

外向きの特別メニューをやめて、先を見据えた地味な本格トレーニングの始まりですよつと。

「トウカイテイオーさんとも明日でお別れですね。わざわざカノープスの合宿まで来てくださって、本当にありがとうございます」

「ううん！　なんてことないよ！　見てるだけでも結構勉強になったしね！」

そしてテイオーは明日、この合宿所を去ることになる。
また会うのはかなり後だろう。

……ああ。トウカイテイオーをいじめてあげる日々が終わっちゃうんだ。

残念だなあ……テイオーのおかげで毎晩すつごく楽しかったんだけど。

「そっかーテイオーとも今日で最後かー。……次会う時まで、私のこと忘れないでよね？」

「も、もちろんだよ」

テイオーに何気ない風に話しかけながら、頬を搔く。

なんてことない仕草だけど、テイオーは私の動作から読み取ってくれたようだ。

テイオーがとっても大好きな、カリカリ引っ搔いてあげる時の仕草だと。

……そう、忘れないでよね。

何日後でも、何十日後でも。いつでも思い出して、悶々として欲しい。

私のことを思い浮かべるだけで、息継ぎが難しくなるくらいに。

……今夜が最後なら。

テイオーの思い出に残るよう、じつくりと……刻んであげないからね。

「今夜寝たら、テイオーともしばらくお別れだねえ」

「う、うん」

「この部屋も寂しくなっちゃうなー……」

トレーニングも終え、テイオーと一緒に部屋に戻ってきた。

エレベーターの中からずっと、私は彼女の尻尾を犬のリードのように握ったままである。もちろん今でも。

「テイオーも寂しい？」

「んツ……うん……そりゃあ、ちよつとは、寂しいけど……」

「えー、なんか反応うつすいなあ……テイオーはやっぱり私の事、眼中にないわけかあ……」

「そつ、そういうわけじゃー!」

狼狽えちゃって。わかつてるよ。

「ふふ。冗談だつてば。テイオーはもう、私のこと無視できなくなっちゃったもんね?」

「……当たり前だよ。こんなことされたら……誰だつて……」

「でもやつぱり、しばらく会えなくなるからさあ……テイオーの思い出にすっかり残るように、今日はたくさん遊ぼうね?」

テイオーの頬に手を添えてそう言うと、彼女は潤んだ目を瞬かせた。

「また……今日もボクは……」

「イヤ?」

「……イヤじゃ、ないよ……」

「……んー、良い子だねえ、テイオー」

「あつ……」

優しく頬を撫でる。そして……ピシヤリと、軽く頬を叩く。

「んっ……!?!」

ヒリヒリする程度の痛み。けど、普通人にはやらないような軽い暴力。

だというのにテイオーはちよつとビクリとした程度で、非難の声も上げないばかりか、むしろ「次」を待ち侘びるかのような目で私のことを見つめている。

「新しい『遊び方』……テイオー、絶対に気に入ると思うよ」

「新しい……」

「うん。テイオーが今日のことを忘れられなくなるくらい、とつても楽しそうな遊び……」

「う、あつ……!」

テイオーのポニーテールを優しく掴む。

頭皮を引っ張る軽めの刺激。そして動かさない顔を襲う再びの平

手。

「うっ……ああ……」

力は加減してる。じんわり痛むくらいのソフトな叩き方だ。けど、友達相手にやることでは絶対じゃない。

絶対じゃないけど……ティオーはこれでも、物欲しそうな顔をするんだね。

「……じゃあ、ティオー。一緒にシャワー浴びよっか」

「シャワー……あびるの……？」

「そう。ティオーの身体、洗ってあげるから」

スカートの上からティオーのお尻を軽く……ポン、と叩く。

それだけで通じたのか、ティオーの体がびくりと反応した。

「お風呂ってよく音が反響するからさ……きつと良い音が出そうじゃない？ ね？」

「……知らない、よ……」

「私も知らないから。一緒に聞いてみよっか」

「ふ、うう……」

手首を掴んで引き寄せる。低い声で囁きかける。それだけでティオーの全身は形だけの抵抗さえやめて、私にされるがままになる。

ああ、ティオー顔真つ赤……良いよそれ、本当に良い……。

それがさらに、痛みに悶えたり、涙を流したりすれば、もつと……魅力的になると思うんだ。

「ティオー……たくさん声、聞かせてね……」

「……！ う、うん……聞いてて……良いよ……」

最後の夜。

私はティオーの肌を何度も叩いてあげた。

もちろん痕なんて残らないし、血も出るわけがない。柔らかいところを音が鳴るようにはただだけのものだ。

ティオーはそれを気に入ってくれた。私も気に入ったけど、ティオーもすつごく良かったみたい。

「あ、ああっ……！ ふ、う……！」

「そう、タオル噛んで……声抑えて……良い子だね……ほら、ご褒美……」

「んうっ……!」

叩いたり、髪を軽く引つ張ったり。噛んだり、時には踏んづけたり。普通ではない。絶対におかしい。

だけど、「そういうもの」は現にあるし、私たちは「これ」を気に入ってしまった。

だからまあ、もう……受け入れるしかないよね。

普通じゃないんだってことは。

「ああ、噛まないでっ、ネイチャ、駄目! そっ、痛っ……!」

だから私は、テイオーの尻尾の付け根に印をつけた。

普通じゃないことの証を。私が彼女に勝つ証を。

「……もつともつと、私に弱くなってね、テイオー。私が後ろにいるだけで、何もできなくなるくらい。いつか、そうやって負けちゃうくらい」

「はあ、はあ……」

「それまではずつと、テイオーのこと虐めてあげるから」

「はあ……それじゃあ、ネイチャは……」

息も絶え絶えなテイオーが、私を振り向いて力なく笑って見せた。

「ずつと、ボクのこと……虐めてなくちゃダメだね……」

「……もう一回」

「……!」

テイオーとの夏合宿は、私の思い出にもずつと残り続けるくらい、とつても楽しいものになった。

テイオーの報告

トウカイテイオーは一足先にカノープスの夏合宿から離脱し、トレセン学園へと帰ってきた。

離れていたのは短い間のことだったが、チームスピカのメンバーは彼女の帰りを温かく迎えた。沖野トレーナーもトウカイテイオーの脚に特に不調がないことを確かめると、そこでようやく安堵したようだ。

「何事もなく安心してたぜ。まあ、南坂が……おっと、カノープスがテイオーに変なことをするとは最初から思ってたけどな」

「あ、あはは……向こうでは良い部屋に泊まれたし、美味しいものも食べてきたし、良い気分転換になったよ!」

変なこと、と聞いてやや言葉を躊躇ったテイオーだが、元々そういった方面に酷く鈍い沖野トレーナーが気付くことはなかった。

「テイオーさん! 食事の画像、どれも美味しそうでしたね!」

「俺もバーベキューしたいなあ……やっぱ肉を焼いて、ロックグラスで麦茶を飲んでって感じでさあ」

「アタシ達も夏合宿そろそろだったじゃない? ね、トレーナー?」

「ああ、来週になるかな。まあ旅館は……うん……良いところだぞ!

海も綺麗だしな!」

「おいおい本当かよトレーナー。いざ着いてみたらハワイアンズでしたじやタダじやおかねえからな。アタシのアルゼンチンバックブリーカーは本場仕込みだぜ?」

カノープスの合宿もだったが、やはりスピカはそれ以上に騒々しく、賑やかだった。

チームメイトのはしやく姿を見て、テイオーは帰ってきたのだと改めて実感した。

「おかえりなさい、テイオー。向こうでは何か収穫ありましたか?」

「マックイーン。うん、スピカとは違ったトレーニング風景を近くでまじまじと見ることで少なかったから、いい経験になったよ」

「偵察の甲斐はあったということですね。それは何よりです」

「みんなそれぞれ特徴的な走りをするんだなーっていうのと、あとはやっぱりナイスネイチャかなあ。あの子の走りはやっぱり……うん、とても上手だったよ」

「やはりそうでしたか。……世間では色々言われていますが、今回の取材で彼女の悪評も晴れると良いですね」

メジロマックイーンだけでなく、スピカのメンバーは全員がナイスネイチャに対して好意的だ。

ゴールドシップなどは半分以上悪ふざけで拉致や取調べをすることもあったが、元々彼女たちはナイスネイチャに対する隔意はない。世間での評判が悪意あるデマであることをわかっているし、何よりナイスネイチャの走る技術の高さを認めている。

「あのナイスネイチャさんがテイオーを虐めているだなんて、そんなことありえないというのに……まったく、ひどい話ですね」

「あはは……う、うん。そうだね……」

トウカイテイオーは苦笑いしながら、左頬に手を当てた。

そうしなければつい昨日の夜、彼女に優しく叩かれた時の甘い痺れを思い出しそうだったから。

「失礼します。カイチョー……いる……?」

学園に戻ってきたテイオーは、スピカの面々と同じくらい大切な相手に会いに来た。

合宿に赴く前はなんとなく気まずさのせいで顔を合わせにくくしていた、生徒会長のシンボリドルフである。

ノックして生徒会室に入ると、そこは静かだった。

一瞬そこに誰もいないのかと思ったが、目当てのウマ娘は座っていた。

「カ、カイチョー?」

「ああ……テイオーか。おかえり」

机にはシンボリドルフが座っていた。

トウカイテイオーの姿を認めて薄く微笑んでいるが、どことなくい

つもの覇気がない。額に手を当て、まるで頭痛でも堪えているかのような姿であった。

「ど、どうしたのカイチョー？ 具合悪いの？ 何か、飲み物持ってこようか？」

「いや、平気だ。これは……そう。蒙を啓いたと言うべきか……」

「ふふふ、いや、なんでもないよ。まあ、そっちに座ってくれ。合宿の話聞くのを楽しみにしていたんだ」

少しだけ体調を崩しているようだったが、トウカイテイオーに向けて親しげな笑顔は常と変わらない。

ならば少しでも楽しい話題で気持ちを上向かせよう。トウカイテイオーはこれまでそっけなくしていたことの詫びも兼ねて、合宿中のことについて話した。

話す内容はいくらでもある。

カノープスの練習風景、向こうでの豪華な食事、取材について……。シンボリドルフは楽しそうに話すトウカイテイオーを見て、顔色を良くしていった。

やがて、話題の内容はある人物中心のものへと移り変わる。

「ところで……トウカイテイオー。ナイスネイチャとは同じ部屋だったんだらう？」

「！ うん。そうだよ。カノープスのメンバーが三人で、二人部屋が二つ必要だったから……」

「……ナイスネイチャとは、どうだったのかな。実はそのことについてテイオーから詳しく聞きたくてね。報告してくれると嬉しいんだが」

「ほ、報告って言われてもなー……」

「大丈夫。お願いだテイオー。なんでも良い。テイオーの口から聞かせてほしいんだ……ナイスネイチャのことを……」

何故かシンボリドルフはナイスネイチャの話題についてご執心のようだった。

しかし彼女に対する敵意があるようでもない。ならば話すことも

やぶさかではなかった。

「あー……ナイスネイチャと一緒にの部屋でね……色々、話したり、遊んだりしたよ」

「……例えぼ？」

「例えぼって、それは……あつ！ ごめんねカイチョー、通話してた時へんな声出しちゃったけど、あれはね！ あれはネイチャに擦られてたからなの！」

「くすぐり……」

「う、うん。ナイスネイチャに……尻尾を触られたり、あ、でも別にボク、そういうのは痛いのがなくて……ただ、ふざけあつただけで……」

「……うん。大丈夫、安心してくれテイオー。これは秘密だ。誰にも言わないから……もつと教えてくれ……」

シンボリドルフは額を抑え、矛盾するような薄い微笑みを浮かべている。

秘密。誰にも言わない。であれば、トウカイテイオーは少し気恥ずかしかつたものの、多少の事実くらいはぼかして伝えても良いかもしれない。

同時に、誰かにその夜のことについて聞かれることを、〃悪くない〃と感じている自分も居た。

「それ、でね……ナイスネイチャは、ボクと一緒にのベッドで寝ててね……」

「ああ……」

「ちよつとだけ、意地悪なことをしてくるんだ……あ、もちろんそれってイジメとかじゃなくて、本当に……スキンシップみたいなもので……」

「……テイオーはその〃スキンシップ〃をどう思っているんだ？」

「ボクは……ナイスネイチャにそういうことされるの、結構好き、だよ……って、あはは、何言ってるんだらうね！ ……カイチョー？」

シンボリドルフは俯き、片手で顔を覆っていた。

よく見れば小さく震えてさえいる。

「……カイチョー、本当に大丈夫？」

「いや……良いんだ。これが……これが新しい世界……そうか、そういうことか……全てのウマ娘の幸福とは、つまり……喪失を快く受け入れるこの感性にこそ……？」

「……なんだか大変そうだけど、あんまり無理したら駄目だからね？」

ボクもう帰るけど、ちゃんとカイチョーも休んでよ？」

「ああ……ありがとう、テイオー。本当に……また今度、もっと詳しい報告を聞かせてくれると嬉しいよ……」

どこことなく昏いオーラの立ち込めているシンボリルドルフをよそに、トウカイテイオーは部屋を出ていった。

「この思考法は、トレーニングに……いや、トレセン学園全体に活かせるかもしれない……」

言うまでもなく、シンボリルドルフは迷走気味である。

サードカエサルの逃げ作戦

はづき賞は雨だった。

暑さの中で走るの嫌だけど、強いライバルをすり抜けて成績を残すためには今の季節を逃す手はない。そんなつもりで出走したこのはづき賞だった。

けどいざ当日を迎えてみれば雨に不良バ場。

暑くないのは良いけど、やっぱり雨はしんどいな。

何よりも。

「おいつすー。みんな今日はよろしくねー！」

あの子がいた。

ナイスネイチャ。

皐月賞にもダービーにも出ていた彼女が、合宿を終えたのか、途中で抜け出したのか、小倉にいたのだ。

……有名な子だ。

速くないのは知ってる。けど、絶対的に弱いウマ娘でないことも明らか。

メディアは彼女を貶す記事を書くのが好きだけど、とんでもない。

“妨害ギリギリの戦法を好むヒール”だとか言ったところで、妨害にならないのであればそれは真つ当な戦術なんだ。

そもそも妨害だってギリギリではない。これまでナイスネイチャが出てきた幾つものレースで一度も審議を取られていないのがその証拠。彼女は規定の中で最善の手を打っているだけに過ぎない。

「サードカエサルだよね？ 今日が一番調子良さそうだから……うん、一緒に頑張ろう？」

……そんなウマ娘に目をつけられてしまった。やり辛い。

それに、なんだか……彼女から発せられる妖しげな雰囲気、呑まれそうになる。

いけない。今から気圧されてたら逃げなんて打てないよ。

いつも通り冷静に、淡々とペースを刻むんだ。そうするだけで、今

日は勝てるはず。

それに、ナイスネイチャは短い距離は得意じゃない。彼女は長距離向きのスタミナを持つウマ娘だ。1800なら私の逃げだって最後まで持つ。

「怯えてるの?」

「……!」

ゲート入りする前、ナイスネイチャが楽しげな眼をこちらに向けてきた。

「……良い顔してる」

「!……うるさいっ」

なんだあの子。こつちを見て、あんな目を向けてきて。

ナイスネイチャっていつもこんな感じなの? おかしい。絶対に変。

「距離は短いけど……だからって、何もされないとは思わない方が良いよ?」

「!」

ゲートが開く。

「私はなんだってやるんだから」

雨の降る中、泥が跳ねる音と共にレースが始まった。

私の戦法は逃げ。逃げだけど、冷静さを欠かない逃げを武器にしている。

今まで苦戦が続いていたけれど、ようやく最近調子を取り戻してきたところなんだ。ここでまた躓くわけにはいかない。

水の跳ねる音。後続は後ろ。追い抜かされる様子はない。逃げのライバルらしいライバルが不在なのは出走表を見てわかってる。

スタート前に警戒していたナイスネイチャも近くにはいないようだ。

……彼女は走りながら囁くらしいけど、そもそも雨の降る中で囁き声なんて通るものなのか?

いや、通らない。そんなことできるわけがない。

足音だつて幾つもの水音が重なって大きくなつて。……好条件だ。ナイスネイチャも恐れる必要はない！

「ここだつ……!」

「!」

いや、気を緩めるな！ 近くにユニティライツが迫つてる！

外からでも抜かされるわけにはいかない！ 塞がれる前に加速を……! 多少の無茶をしても私は走り切れる！

「絶対負けないッ!」

今度は内からグージュニコが来た。

掛かつてる？ 厄介な……! 散発的に追い切りされてる気分だ。走り切れるといつても、こちらにも限度がある……!

……そうか、これはナイスネイチャの仕業か！

ささやいて、掛からせる。まるで自分の手駒のように他のライバル達をけしかけて、私を潰しに来てる……!

私に囁き声は聞こえない。邪魔もされてない。直接は。

でもナイスネイチャの息のかかった子達が、一つの狩りの集団のよう……私を追い詰めている……!

「はあ、はあ……!」

それでも。それでもこの距離なら走り切れる……はず、なのに……何故、こんなにも苦しい……!?

「雨だよ。いつもより、ほんの少し、息苦しいでしょ……!」

最後の最後で、並ばれた。ナイスネイチャに。全ての首謀者に！

「息を入れ損ねると、簡単に溺れちゃうの。経験、なかつた？」

「うる、さつ……!」

あ、しまった、声出すの、こんなに辛い……!?

「ふふ、苦しそう」

「……!」

最後にうつとりするような笑みを残して、ナイスネイチャは真つ先にゴールを駆け抜けていった。

『差し切ったあー! ナイスネイチャ、不知火特別に続き一着でゴ—

ル!』

息苦しい。咳き込む。ああ、そうか。知らずのうちに雨粒を飲み込んでいれば、僅かでも息苦しくもなるか。バ場も重い。いつもよりずっと身体が疲れている。

……そうなるよ、1800mという距離なんてあてにはならない。やられた。完全に崩されたな。逃げに執心し過ぎて、結局負けてしまった……。

「はあ、はあ……やるじゃん、ナイスネイチャ……」

「あはは、ありがと。サードカエサルも、良い走りだったよ」

そして勝負が終わると、用済みとばかりに挑発をやめる。……徹底してるな、彼女は。

勝負が始まるたびにいつもそんな仮面を被っていて、疲れないのになって思っちゃうけど。

「また走ることがあったら、よろしくね?」

そんなことを思っていると、すぐそばにナイスネイチャの顔があった。

近い。なにこの距離。その表情……。

「う、うん。その時は、よろしく……」

「ふふ」

……。

あれは、本当に仮面なんだろうか?

チームデネボラのリアタイ視聴

「よし、ストップ。クールダウンだ、リオナタール」

ゴール側からトレーナーの声がかかる。

何本か走って、ようやく調子が出た頃だったのに。

「そう不満そうな顔するなよ。身体を痛めつけてもしょうがないんだ」

「……そんな顔してました?」

「してたしてた」

それは、失礼なことしちゃったな。素直に立ち止まり、ごめんなきいしておこう。

「とにかく夏場の運動は体調を崩しやすいからな。菊花賞に向けて気合が入るのもわかるが、程々にしておけ」

これは、トレーナーから良く言われる言葉だった。

程々に。入れ込みすぎるな。実際、近頃は自分の感情が昂つているのがわかる。心に振り回されてはいけないんだってことも、わかっている。

でも、どうしてだろう。

菊花賞。これだけは絶対に、完璧に勝たなければ駄目なんだと。そう、私の魂が叫んでいるような気がするんだ。

「なありオナタール、休憩ついでに動画でも見ないか?」

……それにしても本当、うちのトレーナーはそればかりだなあ。

チームルームにあるタコ足配線とスマホ充電器も半分くらいトレーナーのだし。

まあ、スマホ片手に見ながらでもしつかり私たちのことを考えてくれているのはわかっているけどさ。

「また何か変な動画見てるんですか? トレーナー」

「おいおい人聞きが悪いぞリオナタール。アレだよアレ、ナイスネイチャだ」

ナイスネイチャ。

おそらく菊花賞にも出てくるであろう、数いるライバルのうちの人だ。

一番の警戒対象はトウカイテイオーとして、トレーナーは二番手あたりに彼女を警戒しているらしい。……ナイスネイチャは色々話題が尽きないから、よくわかる。

彼女の対策や作戦は全部トレーナーに任せてるから、私は従うだけなんだけどね。

「ナイスネイチャの特別番組が始まるんだ。悪いイメージを払拭しようっていう、URAとトレセンの努力の結晶だな」

「まあ、話には聞いてましたけど……」

ベンチでトレーナーと横並びになり、小さな画面を眺める。

ほどなくして、番組が始まった。

内容は普通のドキュメンタリーだ。

競走ウマ娘の練習風景やインタビュー、試合内容など。それ自体は珍しくもない。

けど、ナイスネイチャのように目立った実績のないウマ娘にわざわざスポットライトを当てた番組は多分、かなり珍しいと思う。最近のナイスネイチャはすごく調子がいいのか連勝してるけど、それにしてもだ。

「良い走りをするよな」

「……ですね。こう見ると、手強いです」

「実際のタイムはそうでもないんだがなあ」

実績のあるウマ娘ではない。が、見る人が見れば平凡なウマ娘であるとは思わないだろう。

番組内で彼女のレース技術、走行技術にスポットライトが当てられると、さほど詳しくなかった私などは思わず唸るほどだった。

『このレースでの第三コーナーのシーンを振り返ってみましょう。ナイスネイチャの視線に注目してください。彼女はここで速度を入れ、前方のウマ娘にプレッシャーをかけています。同時に右に注意を向

け、インを狙う後続を上手く牽制していました。全体のペースが崩れているのがわかります』

……番組はナイスネイチャを感情的に擁護するものではなく、論理的に彼女の技術を称賛するものだった。

言っではあれだけど、少し意外だ。けど、うん。こっちの方が世間からの誤解や悪印象は打ち消せるのかもしれない。

ただのヒールではなく、高い技術を持ったウマ娘。

……同じ競走ウマ娘としては、彼女への不当な風当たりが無くなってくれるのならそれが一番だと思う。

これまでの世間の反応は、あまりにも冷た過ぎたから。

「もともとメンタルを崩さないウマ娘だったが、これをきっかけに更に盤石になるだろう。最近はナイスネイチャも調子を上げてきてる。それが秋まで続くかはわからないが……今まで以上に注意は払っておくぞ、リオナタール」

「はい、トレーナー。……私生活で、あまりナイスネイチャと関わらないように。ですね？」

「そうだ。……生徒のプライベートにまで踏み込みたくはないんだけどな」

「いえ、大事だと思います。それに彼女とはクラスも違うし、あまり接点もないですから」

トレーナーは、私に「あまりナイスネイチャと関わるな」と指示を出している。

というのも、ナイスネイチャは常日頃からクラスメイトや知り合いに接触しては、常に自分に意識を向けさせるような振る舞いをしていくからだという。

それは私にもわかる。あの子、最近はなんだか……人気があるみたいで。

多分そういうイメージを抱いてしまうと、レース本番で足枷になってしまうんだ。本人もそれをわかってやっている。

私は菊花賞を獲りにいく。そのためなら多少プライベートに干渉

するくらい、なんてことはないよ。

『レース中のトリツキーな活躍とは打って変わり、トレセン学園内のナイスネイチャは人気者だ。多くの生徒達と分け隔てなく接し、楽しそうに談笑する姿が見える。話している相手の頬に触れるなど、親密な様子も珍しくない』

……それにしても。うん……。

『友人の耳元でささやきかけるなど、お茶目な一面も』

『あ、はい。ナイスネイチャ……ですよね。友達ですよ。とてもレースが上手で、優しく……ちよつとイタズラ好きなどがあるけど、それもあの子の、その、魅力ですよね』

『クラスでも中心的な子なんですよ！ 人気者で……誰か一人じゃなくて、けどナイスネイチャだからこそみんなを相手にできるっていうか、あの子なら、っていうか……』

『ありえん尊みがヤバイですはい』

『ナイスネイチャね、私にチョコをくれたんですよ。手作りの。とっても嬉しかったな……私のあのチョコも食べてくれたかな。うふふ』

人気……だよね、ほんと……日に日に、ナイスネイチャの話題性が増しているのは気のせいじゃないよね……。

デビュー後しばらくは話題にもなってなかったのに、大躍進だ。

『夏合宿では親しい友人のトウカイテイオーさんも同行。皐月賞、日本ダービーを取った二冠ウマ娘の彼女は療養中であるにも関わらず、ナイスネイチャさんの練習に駆け付けるほどの深い関係だ』

『ネイチャー、がんばれー！ あと一本ー！』

『練習中のナイスネイチャさんを応援するトウカイテイオーさん。実は彼女、ナイスネイチャさんと同じクラスなのだという』

『休憩中も仲が良く、木陰でナイスネイチャさんがトウカイテイオー

さんの尻尾を手櫛で整える様子も見られた』

……いや。いやいやいや。

仲が良い……けど、それは間違いないけど。

なんか近くない？ トウカイテイオー以外もなんか全体的に近くない？

「ふむ……ナイスネイチャとトウカイテイオーか。スピカにかけ合えば情報が手に入るか……？ いや、あの部屋は無駄に危険だから……」

そしてうちのトレーナーは情報にしか興味がない。

……うん、ナイスネイチャのことは全部トレーナーに任せておこう。

私は今まで通り、ナイスネイチャを全力で避ければいい。きっとそれが一番だ。なんとなくだけだね。

今年のクラシック戦線について語るスレ

392 : 名無しの野次ウマ ID : S g F 6 S u k E T

メジロカラーのペンライトは粗悪品が多いから公式の入荷を待て

393 : 名無しの野次ウマ ID : + e d t t V M 4 g

ウイニングライブで時々ドギツイ色のペンライト振ってる人いて
かわいそうだなってなるわ

品薄になること多いからわからんでもないけど、やっぱり発色が違
う

394 : 名無しの野次ウマ ID : 9 p g j B 8 B a 7

青と緑同時に振って誤魔化す方がまだマシ

395 : 名無しの野次ウマ ID : 1 2 u A w y s n E

せやろか？

396 : 名無しの野次ウマ ID : I z 9 j b Z R M E

特番はじまるぞ

397 : 名無しの野次ウマ ID : t 5 f f W B 8 y 5

コマンドー？

398 : 名無しの野次ウマ ID : 7 6 B r Y g y o z

ナイスネイチャの特番

399 : 名無しの野次ウマ ID : R M u E R a S k I

なんでナイスネイチャ……？

別にG1勝ったわけでもないよね？

400 : 名無しの野次ウマ ID : + / Z c c Y w i l

最近連勝してるから注目度は高いぞ

板の上級審判員様もよく審議スレ立てて盛り上げてるしな（皮肉）

401：名無しの野次ウマ ID：XsUueGYNg

ギリギリなレースしてるから良くも悪くも話題には事欠かないウマ娘よ

俺は個人的には嫌いじゃないんだけどね

けど仕事の中で見れねえよお

402：名無しの野次ウマ ID：u7rQ7／／Kp

ナイスネイチャのSNSもほとんど報告投稿しかされてないからわりと待ち望んでた特番だわ

403：名無しの野次ウマ ID：mMYr／7295

CMがURAばっかだな

404：名無しの野次ウマ ID：COlmeDIdc

はじまた

405：名無しの野次ウマ ID：guwilXlbX

かわいい

406：名無しの野次ウマ ID：alfYRdrll

レース映像画質ええやん

407：名無しの野次ウマ ID：AaVg5Pz6y

本当だ、口めっちゃ動いてる

408：名無しの野次ウマ ID：XvlVlBimd

本当に喋ってんな

409：名無しの野次ウマ ID：IKO9arKAq
でもなんでわざわざナイスネイチャを特番…？
トウカイテイオーならわかるけど

410：名無しの野次ウマ ID：IiJdbGQ7f
テイオーは既に何度も特番組まれてるだろ

411：名無しの野次ウマ ID：hSN3AGZ1+
まあ今のクラシック戦線だとテイオーの一強だし、他の子の特番があつても良いじゃん
ライバルの情報があつた方がレースを見る側としては盛り上がるわ

412：名無しの野次ウマ ID：ESctOt2Jq
たすかに

413：名無しの野次ウマ ID：aJnTgIFiV
へー、ナイスネイチャデビュー直後はめっちゃ燻ってたんや

414：名無しの野次ウマ ID：I0pKrnirk
戦績やべーな
未勝利戦でこれだと普通の子は引退も考えるのに

415：名無しの野次ウマ ID：dxkyUjPPm
最初期のレースでは普通に走ってるんだよ
映像がちと画質悪めだけど

416：名無しの野次ウマ ID：Bxn6iCY/A
こっから悪事に手を染めたわけね

417：名無しの野次ウマ ID：hFeZLxDTu

上級審判様じゃん

4 1 8 : 名無しの野次ウマ ID : O 3 W W 5 b 4 t H

喋ってもないし邪魔もしてないのね

今もこの走りの方が良かったんじゃない？

4 1 9 : 名無しの野次ウマ ID : X c j h n z o M q

ナイスネイチャがインタビュー受けてる

なんか新鮮な喋り方

4 2 0 : 名無しの野次ウマ ID : q M T 8 / o N j A

いつもよりトーン低め？

4 2 1 : 名無しの野次ウマ ID : 4 S 8 f m J h U O

実家で声低そう

4 2 2 : 名無しの野次ウマ ID : 8 C 2 d + w k 9 c

「私には速さがなかったので、勝つにはそれを補える技術が必要だったんです」

そりゃ本人も自覚あるよね…

4 2 3 : 名無しの野次ウマ ID : f w O O J t l D F

遅いなら練習して速くなれば良いじゃん

4 2 4 : 名無しの野次ウマ ID : l k S e Q a J D F

それが簡単にできれば苦勞はしねーよ

お前が練習して三冠取ってこい

4 2 5 : 名無しの野次ウマ ID : Y V 9 D d A E c r

お、ナイスネイチャの走りの解説あるのか

結構本格的な構成やんけ

4 2 6 : 名無しの野次ウマ ID : 5 O o F 6 a N c T

クラシックのぱつとしないウマ娘の技術を解析してどないすんの

4 2 7 : 名無しの野次ウマ ID : A N y E y C x l z

いや比較すると結構すごいよ

4 2 8 : 名無しの野次ウマ ID : i v W g J l R v Z

はえーフォームすつごい綺麗

4 2 9 : 名無しの野次ウマ ID : + F N A b q 2 y u

脚長い

4 3 0 : 名無しの野次ウマ ID : a X n n u n Y 2 9

かわいい

4 3 1 : 名無しの野次ウマ ID : O E I R + Q f 3 s

解説見ろや

4 3 2 : 名無しの野次ウマ ID : + I g 7 L d W U 8

コース取りすげーな

今のスローカメラの技術もすげーけど

ナイスネイチャがちゃんと狙ったコースに動いて他を牽制してるの
の
が
わ
か
る

4 3 3 : 名無しの野次ウマ ID : Z Z W m P w 3 I a

こう見ると喋りかけられてるウマ娘が明らかに集中を欠いてるのが
わ
か
る
な
w
w
w

4 3 4 : 名無しの野次ウマ ID : M b y x d q g 0 8

・・・
() * · ∇ ·) w w シャクシャク

4 3 5 : 名無しの野次ウマ ID : 5 4 R 1 L D A H 5
確かに斜行ではないな
滅茶苦茶邪魔そうではあるけど

4 3 6 : 名無しの野次ウマ ID : F Y 7 C 7 B 1 t g
邪魔なのは間違いない

4 3 7 : 名無しの野次ウマ ID : 6 x 5 f B Y d o +
斜めに走ってるじゃん
斜行だよこれ

4 3 8 : 名無しの野次ウマ ID : n P u x / S E y U
公式サイトでルール読み返してきてどうぞ

4 3 9 : 名無しの野次ウマ ID : m y c W f D j v C
うわ、コーナーこんなに攻めてたのか
他のウマ娘より明らかに内を走ってやがる

4 4 0 : 名無しの野次ウマ ID : 4 Z a M a 9 A b w
これだよ、こういう場所で抜かれてまた邪魔されるんだ

4 4 1 : 名無しの野次ウマ ID : k P Z 2 V o i Z q
あー、坂もこうやってるんだ

4 4 2 : 名無しの野次ウマ ID : t + / 7 Q 4 f 7 G
別にアンチじゃないけど、ここまで走れるなら速度上げに注力した方が良いと思ってしまうな…

4 4 3 : 名無しの野次ウマ ID : E Q a z 9 v 9 4 L
ナイスネイチャは上手いとは言われてたけど、こういうことやった

んやな

444 : 名無しの野次ウマ ID : / r 4 A D h d v g

面白い子やん

445 : 名無しの野次ウマ ID : h b t B R Y / z Q

まあトウカイテイオーに勝てるかっていうと無理そうだね…

446 : 名無しの野次ウマ ID : e 2 6 n Z W D 6 g

トウカイテイオーがナイスネイチャに陥落するわけないだろ w w

w

447 : 名無しの野次ウマ ID : 4 n z u 9 V r b /

あ、日常の様子も見せてくれるのね

448 : 名無しの野次ウマ ID : S A S U 8 w C s h

学園で鼻つまみ者になってそう

邪魔しまくってるし

449 : 名無しの野次ウマ ID : U 4 Z i L F U H 4

そんな奴が U R A の全面協力で特番組まれるわけがないだろ

450 : 名無しの野次ウマ ID : R b y s 3 6 q U 8

へー、学園では人気者なんや

意外

451 : 名無しの野次ウマ ID : E n R w H t A 2 0

水着かわいい

452 : 名無しの野次ウマ ID : i v X w y 7 S v g

なんかイメージと違う

453 : 名無しの野次ウマ ID : NV EZ 3 v a d G
チームカノーパス
初耳だわ

454 : 名無しの野次ウマ ID : h L a m g V K + d
同じく

455 : 名無しの野次ウマ ID : D b e r I N r u r
誰もわからん

456 : 名無しの野次ウマ ID : F F U x y O N R T
ナイスネイチャはどんな子か? つてインタビュ
ー
やらせ...?

457 : 名無しの野次ウマ ID : p 8 n N M O 4 w s
やらせではないだろ

458 : 名無しの野次ウマ ID : k F i N v O I B X
人気者なんやな
人望あるやん

459 : 名無しの野次ウマ ID : w T + u Z O I r g
それにくらべて俺らは

460 : 名無しの野次ウマ ID : d C g d o O P G L
そこから先は地獄だぞ

461 : 名無しの野次ウマ ID : 3 l w c c l f r m
人気者というか学園内にファンがいるというか

462 : 名無しの野次ウマ ID : a p C t g Y v 9 s
なんか普通にこう : 距離近くて触れ合ったりするもんなんだな

463 : 名無しの野次ウマ ID : 8 S L + G j + W O
良い匂いしそう

464 : 名無しの野次ウマ ID : 3 3 5 p N g J m v
女子校だしこんなもんなのか :

私は一向に構わん

465 : 名無しの野次ウマ ID : 9 C r G / q d l 6
意地悪なのか親切なのか優しいのかわからんぞ !

466 : 名無しの野次ウマ ID : v Z g V u a F Y +
いじめとかはなさそうので安心したよ :

467 : 名無しの野次ウマ ID : W z u b v / t B 4
トウカイテイオーだ

468 : 名無しの野次ウマ ID : 6 C f G i i v K M
ちっさい

469 : 名無しの野次ウマ ID : Z F t 4 z R A S z
言ってやるな !

470 : 名無しの野次ウマ ID : Z w 8 X M h V l T
同じクラスだったのか !

やけに仲良いとは思ってた

471 : 名無しの野次ウマ ID : G M Z L h N l U n
まだ怪我治ってないじゃん : 菊花賞どうなんのよ

472 : 名無しの野次ウマ ID : K5PyxyP6c
トウカイテイオー不在？

473 : 名無しの野次ウマ ID : Kk+Nl s u 8 N
いや菊花賞が楽しみだって、テイオーもナイスネイチャも言ってる

474 : 名無しの野次ウマ ID : f w T / e h v F z
トレーニング間に合うのか？
厳しくない？

475 : 名無しの野次ウマ ID : M f l P 0 i V 5 D
まだ夏だしわからんでしょ

476 : 名無しの野次ウマ ID : h m j 6 0 F U d l
この海どこだろ？

477 : 名無しの野次ウマ ID : g 7 T 3 I T r 5 0
トレセン学園が持つてる場所でしょ、結構あるよそういうところ

478 : 名無しの野次ウマ ID : K M a K W t B m t
無人島も幾つも買ってるしな 何故か知らんけど

479 : 名無しの野次ウマ ID : g r B 5 U O 5 N g
マジで何故なんだ？

480 : 名無しの野次ウマ ID : 0 p o m z G J 0 z
あらトウカイテイオー仲良さそうね

481 : 名無しの野次ウマ ID : E U O w + U V 6 O
バーベキューのチョイスなんやねんそれ

482 : 名無しの野次ウマ ID : n y j 4 3 2 R X 0
洗いわ

ニンジンが普通に見える

483 : 名無しの野次ウマ ID : 8 i W j x Z Q E Q
ニンジンは普通だろ

484 : 名無しの野次ウマ ID : 9 7 l 3 2 f L N x
そうかな : そうだった :

485 : 名無しの野次ウマ ID : d 5 y V E P V U a
ん ?

486 : 名無しの野次ウマ ID : B 3 y n g Z o / u
尻尾の手入れもしてあげるんやね

487 : 名無しの野次ウマ ID : w z x g 9 A D q U
怪我していると自分じゃやりにくそうだしな

488 : 名無しの野次ウマ ID : a g N S d j t a N
はくくく
シヤング????
ラ

489 : 名無しの野次ウマ ID : M b 7 h 3 a t c A
なにで ?

490 : 名無しの野次ウマ ID : w 6 H D Z I A Q i
荒らしに構うな

491 : 名無しの野次ウマ ID : d 6 J A S 8 f t /

こうして見るとナイスネイチャの目つきってなんか…大人っぽい
わね

492 : 名無しの野次ウマ ID : q o H x R + s X +
そうわね

493 : 名無しの野次ウマ ID : B G 7 U H B r U Q
中等部なのにしっかり者じゃないか

メディア対応の練習もやってるんだろうけど、この自然さは多分素
だろうね

494 : 名無しの野次ウマ ID : s h i s h i d o h
レース解説してたのは誰でしょう
気になります

495 : 名無しの野次ウマ ID : + 6 X 9 D 0 5 X w
ナイスネイチャはトウカイテイオーのことを見てるんだね
私はもうあなたの前に立ち塞がる相手にはなれないのかな
あなたの目に映るのはトウカイテイオーだけで、そこに私はいない
でも時々私のことを思い出して意地悪をしてくれるのなら、私はそ
れでも大丈夫

私はそんなナイスネイチャを応援したいから

496 : 名無しの野次ウマ ID : r q f a 0 A Q e 3
怪文書かな？

497 : 名無しの野次ウマ ID : B Y o M I k 0 t d
いやいや、なんか怖いからやめてくれ

498 : 名無しの野次ウマ ID : L n x R k 7 S K D
前略プロフにでも書いててクレメンス

499 : 名無しの野次ウマ ID : 7UUkby+3i
面白かったな

500 : 名無しの野次ウマ ID : QqzkzG/Qw
案外見応えはあった

他のクラシック戦線走ってる子もピックアップしてくれんかな

501 : 名無しの野次ウマ ID : kdZlU2OA/
ナイスネイチャのことちよつとだけ見直したわ

アンチスレの連中が色々言ってるけど普通にグレーですらないや
んけ

502 : 名無しの野次ウマ ID : udIibSvJK
アンチスレ今顔とID真っ赤やぞ

503 : 名無しの野次ウマ ID : 4eCN4EKOk
そつとしておこう

504 : 名無しの野次ウマ ID : onOogfWJF
アンチに聞き分けを求めてはいけない

505 : 名無しの野次ウマ ID : ig69e6zRF
髪がもふもふしてたな

506 : 名無しの野次ウマ ID : LhgOlF9EZ
走ってる和小蠅が捕まりそう

507 : 名無しの野次ウマ ID : yUTjbQCa4
物食べる時口に髪入りそう

508 : 名無しの野次ウマ ID : 3 N x Z A + F s b
可愛いからヨシ!

509 : 名無しの野次ウマ ID : + T V L S R 1 2 W
しかしよくあれだけレースに出走できるな……どーりで各方面で
話題になるわけだ

510 : 名無しの野次ウマ ID : r O y y 2 p k X a
出走レースを絞ってトレーニングに注力するトウカイテイオーと
はそういう意味でも真逆やね

511 : 名無しの野次ウマ ID : D O r H D a x t V
対決っていうほど対決らしくなるのかはわからんけど、トウカイテ
イオーとナイスネイチャの出る菊花賞楽しみだな

512 : 名無しの野次ウマ ID : K V s H p Q V w +
そもそもトウカイテイオーが出走できるのかどうか…

513 : 名無しの野次ウマ ID : x o T a 4 8 f W y
リオナタールの方が走れそうじゃない?

514 : 名無しの野次ウマ ID : M x v 7 9 a C 4 d
トウカイテイオーは長距離どうなんだろうねえ
でも俺はあくまでトウカイテイオーは推すぜ!

515 : 名無しの野次ウマ ID : 0 L 2 s C m y S N
まだ夏なんで夏レースの話しませんか…?

516 : 名無しの野次ウマ ID : 2 f 9 a 9 n d 8 t
クラシックに夏はないよ

517 : 名無しの野次ウマ ID : Gn / IApNOU
法廷

518 : 名無しの野次ウマ ID : 98nT / COM6
誰が休養期や！ 色々あるだろ、ほら…！

519 : 名無しの野次ウマ ID : 7sZUBQ5DW
にくま大賞典「」

520 : 名無しの野次ウマ ID : 8EPfYfXaM
なんだ今の…
いや本当になんだよ今の

八方睨み持ってそうな顔

お母さんからメッセージが届きました。

写真でした。私の特番の。私が夏合宿中、テイオーの尻尾を触った時の場面の。

本文無し。でも画面の向こうで笑ってそうなのはわかる。

「ぐあああああ！」

「うわあ！ ネイチヤが壊れた！」

「落ち着いてくださいターボさん。ナイスネイチャさんは時々壊れます」

時々思い出して叫び出す癖がついてしまったけどどうしようもない。

なんで……なんであの時の映像が……いや、カメラに気付かなかつた私が悪いんだけども……！

恥ずかしい……！ 悶え死ぬほど恥ずかしい……！ むしろいつそ殺してくれ……！

テイオーも番組の後でメッセージ送ってきたけど、見られちゃったね……”じゃないんだよ。見られたら恥ずか死ぬんですよこっちは。

「レースでは連勝中。特別番組の反響もまずまずだそうですし、今のところナイスネイチャさんには追い風が吹いてますよ。安心してください」

「トレーナー……向かい風の間違いじゃない……？」

「いえ、本当にかつてないほど順調なのですが……ナイスネイチャさんはもつと自分に自信を持たれてもいいかと……」

自信……自信かあ……。

まあねえ。確かに最近は自分のスタイルが上手く走りに嵌まっている感じはするし、そういう意味では乗りに乗ってるとは思ってますけども。

「夏合宿も終え、皆さんは間違いなく大きく成長しています。これか

らのレースで、力を発揮していきましょう」

「おー！」

「おー」

「あーもう。おー」

夏合宿を終え、トレセン学園での日々が戻ってきた。

私たちは確かに成長しているだろう。タイムにも精神的な部分にもそれは表れている。

けど、それは他の子だって同条件だ。

より強くなったライバルたちを相手に、どう立ち回っていくか。今後の私は、ライバルの伸びにも注意を向けていく必要がある。

とは思うものの、やれる事は限られている。

何につけてもトレーニング。そしてレース。空いた時間での研究だ。

奇を衒った戦術を突き詰めたい気持ちもあるけども、そう簡単に良いトリックが思いつくわけでもない。それよりは基礎トレーニングで身体を作っておくのが一番だ。

「トウカイテイオー、トウカイテイオー、トウカイテイオー……菊花賞、菊花賞、菊花賞……」

言葉を発しながらコースを走る。

息を切らさないように、しかし明瞭な発声で。相手に聞こえるように、より広い範囲にささやきが届くように。

「遅くなれ、ためらえ、立ち止まれ……」

相手を萎縮させる走り。あるいは掛からせるための走り。

不思議なことに、それは世間で一定の評価を得ているのだとか。

そんなもんかねえと思ってしまう。

だって、やってることはヒールそのものなんだよ？ 何かあっても、私のスタイルが苦手だって人は一定数いると思いますけどねえ。

「……ただの技術扱いされると、困るな」

ぽつりと溢れたのは私の本音。

確かに私の技術が評価されるのは嬉しい。けど、そんな正当な評価を受けてしまうと、私のお邪魔テクニクを無視されてしまうかもしれない。

「ナイスネイチャの作戦だから最初から絶対に気にしないようにする」。

咄嗟にはできない心構えだろうけど、長い時間をかければきっと不可能ではないだろう。

そうならもうおしまいだ。

私の走りに誰も翻弄されず、おおらかに受け止められるだけの結果しか残らない。

評価はうれしい。けどそれでは困るというジレンマ。うーん。

もつところ……特別番組つてもらってあれだけど、もう少しヒール扱いされた方が良かったな。

何か無いものだろうか。お手軽に、もう本能的に「この人と関わるとヤバイ」ってなるようなテクニク……。

って、んなもんあるわけないかー。

「オイ」

「ん？ はい、何か……」

走りの途中で声をかけられた。

ペースを落として立ち止まり、振り返ると……。

「よオ……お前、ナイスネイチャで合ってるよな？」

明らかに関わるとヤバイタイプの反社会的ウマ娘が私を睨みつけていたのだった。

「ピエ……」

明らかに凶暴そうな顔立ち。無数のピアス。タトウー。

ま……間違いない。この人は関わったら本格的に不味いタイプのウマ娘……！

「あ……やっぱりそうだ。見たぜエ特別番組……一躍有名人って奴だよなあ……最近は随分と調子が乗ってるみてえじゃねえかよ。なあ？」

「の、乗ってナイデス……はい……」

「そんなことは無エだろ。菊花賞に向けて今日も真面目に体力作りしてるわけだ。いやあオレは偉いと思うぜ？ ナイスネイチャには前々から目はつけてたしなア。ああ、オレはエアシヤカール。まあよろしく頼むわ」

ど、どうしよう。絡まれてる……絡まれてるよねこれ。

「で、だ。突然だけだよオ」

「はい……」

「面白い走り方するんだろ？ テメエは。相手の邪魔が得意なんだよなあ？ ちよつと今から並走してやつから、オレに対してやつてみてくれよ」

「えっ……」

「なんだよ不満か？ 別に怒らないから。約束する。なつ？」

ひえ……肩組まれた……笑顔も明らかに無理して作ってるし……。

「オレはお前のデータが欲しいだけなんだよ……良いだろ？」

データ!? こ、個人情報かな……!? 戸籍かな!?

だ、ダメだ……これは絶対に後から文句つけてヤキ入れられるやつに違いない……!

だって顔も口調もそんな感じなんだもん……!

もうこれは私だけの問題じゃない……下手したら、母さんにまで……!

「ちよ……」

「ちよ？」

「ちよつともうミーティングの時間なんで帰りますううう！」

「え？ あ、おいコラア！ 待ちやがれエ！」

うわああああ殺される殺される！

ヤバイよ目がヤバイもん！ 絶対変な白い粉とかやってそうな雰

囲気だもん！

もうやだ！ 有名人やだ！ 私もう今日は逃げろう！

「あああ！ でもあの殺気交じりの目つきは活かせるかもしれない
い！」

私はその日、恐怖と命の危険を引き換えに、新しいお邪魔アイデア

を手に入れたのだった。

「……タオル落としたまま帰りやがった……チツ、しょうがねえな。後でチームのトレーナーに届けに行つてやるか」

後日判明したことです、あの目つきのヤバいエアシヤカールさんは特に悪い人ではなかったみたいです。

ナマ言つてすみませんつした……。

ロイヤルビタージュースを飲み干して

夏。それは夏バテの季節。

ついつい暑さで食事が億劫になり、栄養バランスも崩れがちになる季節だ。

「にがつ……うえ……」

そんな夏のある日。

最近流行っているらしい青汁を飲んでみたら、想像以上に不味かった。

「トレセン学園特製の新製品らしいので、効果は間違いないそうです……味の方は不評らしいですね。僕は青汁といえばこういう味のイメージだったのであまり違和感は無いですけど」

持ってきてくれたトレーナーに罪はない。不味いつて噂は前から聞いてたしね。

けど青汁なんて美味しいものしかないじゃん？ ケールも大麦若葉も不味いと思っただ事はそんなになんよ私は。

けどこの青汁の不味さは隔絶してますわ。何をどうしたらこんなに不味くできるんですかねえ。

「無理に飲む必要はないので、要らなければ残りは返品してきますが……」

「いや、飲むよ。体に良いのは間違いないからねえ……不味いけど」

いやほんとやる気下がっていくくらい不味いんだけど、これしきのことです。体づくりを妥協したくはない。飲むと言ったら飲む。

最強ムテキのネイチャさんにかかればメンタルだって調整利かせてやれますよ……へへ……」

「さすがです、ナイスネイチャさん。これからは一日一杯、カノーパスにおける常飲ドリンクとしてキープしておきましょう」

ちなみに真っ先に飲んだのはイクノデイクタスだ。

体調管理に関しては一家言ある彼女なので、飲む時もメガネの奥が全反射で見えなくなるだけで済んでいた。

不味いものは不味いけど、それを受け入れる度量が彼女にはあるのだ。

「さて、ターボさん」

「嫌だー!」

「往生してください」

そしてここに一人、そんな度量を持ってない子が一人います。

カノープスの元気担当、ツインターボさんです。

イクノデイクタスに羽交締めにされ、目の前のテーブルには一口だけ唇をつけただけのほぼ完全に残ってる青汁が。

「覚悟決めなよ、ツインターボ」

「だって不味いんだもん!」

「良薬は口に苦しです。一息に飲み干せば問題ありませんよ」

「トレーナー助けて! イクノとネイチャがいじめるう!」

「ははは……」

トレーナーも苦笑するだけである。この部室に今、ツインターボの味方はいなかった。

「まあそんなに飲みたくないならいいけど……」

「ほんと!?!」

「けどテイオーだったらそれ、普通に全部飲んじゃうと思うよ? つためだったらあいつ、それくらいの事するだろうねー」 勝

「うッ」

テイオーを引き合いに出してやると、ツインターボは少し後ろめたさそうな顔をした。

「テイオー呆れちゃうよー? 〴〵ボクのライバルならこれくらいは出来ないと同じ土俵には立たないもんじゃー」って」

「あ、今の似てましたね」

「ぐあー! 飲むよお! 飲んでやるよおー! 飲んでトウカイテイオーを倒してやるんだあー!」

おっ、一気に行った。よしよしそのまま飲み干してしまえ。

途中で止めると苦味とえぐみでしんどいからねー。

「ぐえほげほげほ! ぐあー! 不味いいい!」

「もう一杯いつとく?」

「やだあ!」

ちなみにここまで煽つといてなんだけど、トウカイテイオーはこんな不味い飲み物は飲みません。

甘党だからね。

……いや。でもどうなんだろう?

今のトウカイテイオーは私以上に身体作りに配慮してるだろうし、案外苦いのを堪えて飲むのかもしれない。

泣きそうな顔をしながらも飲んだりするのかな?

……ちよつと見てみたいかも。

「はい、テイオー」

「……なにそれ、ネイチヤ」

放課後、資料室でレースの本を読んでいたトウカイテイオーを見つけた私は、例のロイヤルビタージュースを手渡した。

「今学園で（悪い意味で）評判の青汁だよ。トレセン学園開発で、効果は普通の青汁の数倍なんだってさー」

「……知ってる。すごく不味いんでしょ。わざと飲ませようとしてるよねえそれ?」

「ちえつ、なんだ知ってたのか……」

意識外からの苦味で悶絶する顔が見たかったのに、残念……。

「あ、あのお……ここは飲食禁止なので……ごめんなさい……」

「え? あ、すいませーん」

と思つたら図書委員の子に怒られちゃいました。

そういえば飲み物ダメだったね、うっかり。

トウカイテイオーは読書も一区切りついていたらしいので、今日はもう一緒に帰ることにした。

ついでに学園裏の花壇でも眺めようかと誘つて、一緒に歩く。

近づく夕暮れ。誰もいない裏庭。

「はい、じゃあこれ飲んで?」

「うわー！ やっぱり！ 絶対そうくると思った！」

というわけでトウカイテイオーのロイヤルビタージュース、再チャレンジです。

「えー？ 嫌なのー？ テイオー」

「嫌に決まってるじゃん！ なんでボクに飲ませようとするのさ！」

「ツインターボが飲んだのに飲めないの？」

「……関係ないじゃん！」

「えー、ターボかわいそー……ターボはトウカイテイオーなら飲むって思ったから、苦手なこれを飲み切ったのに……」

「ボク良く知らないけどさあ。それも多分、ネイチヤが焚き付けたんでしょ？」

「えっ？ すごい、良くわかったね」

「ほらあー！」

他人を引き合いに出せばあらゆる人にこの青汁を飲ませることができるかもしれないと思っただけ、そう上手くはいかないか……。

でもテイオー、私は諦めないよ。

「これを飲めば、テイオーの怪我の治りが早くなるかはあれだけど……間違いなく良い方向には向くだろうと思っただけどな……」

「うっ……」

「飲んでくれないのかあ、テイオー……そっか……」

「……わかったよお」

そういうと、トウカイテイオーはロイヤルビタージュースを受け取った。

手に取つたらもうこっちのもの。まだ気の進まない顔をしてるけど、あと一押し。

「ちゃんと全部飲んでくれるんだ？」

「う……まあ、それは……飲むからには……」

「じゃあゆつくり味わって飲んでくれる？」

「なんでえ!？」

「その時のテイオーの顔、じっくり見てたいから」

「……意地悪」

むすつとした顔のテイオー。

でも、彼女の目が少しだけ、この状況を愉しんでいるようにも見えた。

「じゃあ、飲むから……」

「うん。一口ずつ飲んで」

「……うっ……」

早速一口飲んでみて、テイオーが顔を顰めた。

「ほら、口離しちゃダメでしょ？」

「う……げほっ……苦いよ、これ……」

「私からのプレゼントなんだから。私の愛情だと思ってさ。ちゃんとじっくり味わってよ」

「……」

ああ、飲んでる。少しずつ、一口ずつ喉を鳴らして。

目に涙を浮かべながら、継るように私を見つめて、トウカイテイオーがロイヤルビタージュースを飲んでいる。

「ほら、もう一口。まだ飲み込まないで、口に入れて……」

すっごく不味いのにならぬ口の中で転がして、その度にまた泣きそうになりながら……。

うわあ、良いなあテイオー……。

私のお願いで、そんな不味い物を味わって飲んじゃうんだね……。

「えほっえほっ！ うう……まずいい……けど、飲んだよ、全部……」

楽しい時間はあっという間に終わってしまう。

テイオーにとっては短くなかっただろうけど、私にとってはすぐだった。惜しいなあ。

テイオーが涙をポロツと零すとこまで見たかったのに……。

「ひどいよ、ネイチャ……こんな……」

「ふふ、ごめんねテイオー。でも良く全部飲めたよ。偉い偉い」

「……当たり前じゃん。ボクは、無敵のトウカイテイオーだもん……」

そうだね。無敵のトウカイテイオー様はこんなこと楽勝だもんね。

「また今度、面白い飲み物あったら飲ませてあげるからね」

「うう……！　せめて、体に良いやつだけにしてくれ……!？」
「はいはい」

それでも嫌とは言わないあたり、本当に負けず嫌いなんだなって思った。

夏夜の郷愁と先行焦り

番組で親しみやすいウマ娘アピールがされていたおかげなのか、学園内でやや遠巻きにされていた私に話しかけてくれる人が増えた。……気がする。

元々クラスメイトとか身近な子たちからは仲良くしてもらってたけど、最近は違う学年の人からも声をかけられる機会が増えていた。り。

トレーニングルームで一緒になったとかによく挨拶をされるので、こっちはどもどもと返している。

普通の話し相手が増えるのっていいものですね。

「あ、あのっ、ナイスネイチャさん……ですよね」

「ん？ はいはい、ネイチャさんですよー」

夜の涼しいターフを走り終えた後、軽いジョグで後はもう帰ろうというタイミングで声をかけられた。

さっきまで私と一緒にターフを走っていたウマ娘だろう。この季節は夜の方が涼しくて快適なので、自主練中にかちあう事は珍しい。い。

長い黒鹿毛。小柄で臆病そうな、どこか薄幸という言葉をイメージさせるウマ娘だ。

見覚えはない。……はず。彼女は誰だろう。

「えっと、その……ライスね、ナイスネイチャさんのトレーニングが終わってから話そうと思って……」

ああ、私と一緒に走ってたのはそういう。

……結構な長距離を走ってたつもりだったけど、彼女の息は切れていない。

良いスタミナの持ち主だ。もし一緒に走ることがあるならあまり相手にしたくないタイプかも。

えーと、まあそれはそれとして。

「ライス……でいいのかな？」

「う、うん。ライスシャワーです」

「ごめんね、失礼な質問だったら最初に謝らなきゃいけないんだけど……私たちが、会ったことある？」

「あ、やつ、な、無いよ？ はじめまして……」

「あ、それはよかった。どもどもはじめまして」

お互いペコペコ頭を下げながらご挨拶。なんだこれ。

「……ライス、時々近くの商店街に行くことがあって……この前、知り合いのお花屋さんをお手伝いした時に聞いたんだ。ナイスネイチャさんのこと……」

「あー……はい」

近くの商店街。それを聞けば、すぐに思い当たるものは出てくる。あまり思い出そうとしていなかったものが。

「ナイスネイチャさん、近頃商店街に来なくなった……って。みんな、寂しそうにしてる……」

「……」

まあ、はい。うん。

行っていないもの。最近。ほぼ一年近く。

最初は地元みたいな温かな雰囲気に着かれて、足繁く通ってたし。色んな人たちに顔も名前も覚えられて、これからより一層親密になるんじゃないかって。第二の故郷になっちゃったりなんて思ったりもした。

でもやめたんだ。商店街に通うの。

「……私のせいで商店街の人達が悪く言われるかもって思ったら、ねえ？」

「っ……」

私は走るスタイルを変えた。覚悟を持って変えたんだ。だからそれ自体に後悔はないし、やめるつもりだってない。

けど、私の悪役じみた走り方のせいで、あの温かな商店街にまで心無い言葉が浴びせられてしまうかもしれないと思うと……私はあの場所から距離を置くべきなんじゃないかって思うようになってたんだ。

「……気にしてないよ。みんな」

「あはは……だろうねえ。あの人たちはみんな、本当にそう思うよ。優しいから……」

「本当に気にしてないの」

ライスシャワーが私の目を見つめている。

「ライスはナイスネイチャさんのこと、あまり詳しくないけど……みんなみんな、ナイスネイチャさんのこと心配してたよ。雑誌とか、ニュースとか……で、悪口を言われているのだって、怒ってた……けど、最近は悪く言われることも少なくなっただって、みんなそれ見たことか、あの子はいい子なんだって……」

「……そっか」

「みんな応援してるよ。だから、またいつでも遊びに来て良いんだって。……そう伝えて欲しいって、言われたの」

……そっかあ。

私、またそこに行っても良いんだ。

「ごめんなさい……ライス、うまく伝えられなくて」

「いや、いいよ。伝わってるよ全部。……ありがとう、ライスシャワー」

「！ うん……」

夕暮れ過ぎ。もう今からじや商店街はほとんどやってない。

……急に、そんなことを考えてしまった。

「でもね。私はまだまだ、やれることをやらなきゃいけない時期なんだ。商店街……またあの空気に浸っていたいけど……」

本音を言えば明日からでも足を運びたいくらいだけど。

「もうしばらくは、待ってほしいな。菊花賞までは、本気でいたいから」

「菊花賞……」

「勝たなきゃいけないんだ。菊花賞」

私には目標がある。やらなきゃいけないことがある。そのためには全力を尽くさなければならぬ。

「……すごいね、ナイスネイチャさんは。周りからどう言われても、

へっちやらそうで……ライス、そういうところ、凄いと思うな……」
「あはは、ありがとう。……私は、これが私にできる全力なんだって信じてるから」

「私にできる、全力……」

「そう。勝つための全力。持てる全てを注ぎ込んだ、最善最高の走り。私はそれを絶対に恥じたりはしない。だから、人から何を言われたって、構わない。……私自身はね？」

周りの人にまで波及するとさすがにちよい気遅れするけどさ。

「……かつこいいな」

「ほんと？　へへ、そう言ってもらえると嬉しいなあ」

「ライスも、そんな強さが欲しい」

「……今月は夜、結構走つてると思うから。その時だったら一緒にトレーニングする？　差し対策ばかりだと気が滅入るから、たまには先行対策やってみたかったし。付き合ってくれたら助かるんだけど……」

「！　う、うん！　ライス、またナイスネイチャさんと一緒に走ってみたい……！」

「やった、ありがとう！」

こうして私は、ちよつとだけ気持ちが軽くなり。

新たな練習仲間と一人友達になれたのでした。

生徒会室戦争

最近、会長の様子がおかしい。

エアグルーヴはその確信を深めつつあった。

「……とのことで、URAからの感触は悪くないそうです。ひとまずトレセン学園内にて試験的な開催を試み、その内容を評価して定期開催とするかどうかの検討に入る……と、秋川理事長が」

「そうか。ありがとう、エアグルーヴ。これでまた一つ、ウマ娘の幸福への道が近づいた」

シンボリルドルフは疲れたような笑みを浮かべた。

彼女は以前から学園の、生徒会長としての職務に忠実であったが、近頃は特に精力的であった。

以前よりも多くの生徒たちの声に耳を傾けるようになり、細々とした人間関係の問題に当たる機会が増えた。最近ではエアグルーヴが受け持っていた「目安箱」の対応にまで手を伸ばしている。

その上、新しい学園企画の発案、試算、検討など、膨大な作業をほとんど己一人で推し進めているような状態でもある。

今はこうして疲れた笑みを浮かべているが、本来なら倒れてもおかしくはないほどだろう。エアグルーヴには彼女が未だ働けているのが不思議であった。

「……会長。働きすぎです。そろそろ、お休みになられるべきかと」

「休みか……そうだな、もう少ししたら休憩に入ろうか。ありがとう、エアグルーヴ」

遠回りに休息を提案しても、こうして煙に巻かれる始末。

もっと強く、強硬に「休め」と言わなければならぬのだが……。

今のシンボリルドルフの目には、常にはない炎が宿っている。エアグルーヴにはそう見えて仕方かった。

シンボリルドルフは自分とは違う高みにいる。そんな彼女に、自分如きが口を挟んでもいいものなのか。

強い違和感を覚えながらも、エアグルーヴはシンボリルドルフを止

められずにいたのだった。

「失礼しますっ!」

ある日、生徒会室に來客があった。

「うわっ、……アグネスデジタルか。あまり大声を出すんじゃない……ん？ メジロドーベルまで。一体どうしたというんだ」

「……失礼します。エアグルーヴ先輩」

來客はアグネスデジタルとメジロドーベルの二人だった。

エアグルーヴは二人の關係性についてあまり心当たりがなかったが、二人の表情は固く、どこか強い緊張感に満ちている。

ただの用件ではない。エアグルーヴはそれを肌で感じた。

「おや……これは。やあ、アグネスデジタル。そしてメジロドーベル。ようこそ生徒会へ。ここへ何の用かな？」

書類を見つめていた顔をゆっくりと上げ、シンボリルドルフが微笑む。

対してアグネスデジタルが発したのは、自分の拳を握りしめる音だった。

「……撤回してください」

「撤回、とは？」

「わかっているでしょう。当然、〃約束の10ハロン〃への助言についてです」

〃約束の10ハロン〃？ 助言？ エアグルーヴは話を飲み込めなかった。

だがシンボリルドルフには伝わったようで、〃ああ〃と声を上げている。

「目安箱に投稿されていた悩みに対し、生徒会長として最善の答えを返しただけのことだ。それがどうかしたのだろうか？」

「……本気で言っているんですか。会長。あれが、あの結末が、あなたの答えと」

「全てのウマ娘に幸福を。私は私の理念に基づき、自分なりの助言をしたままでに過ぎない」

「だからって……！ あんなことは、あまりにも無情過ぎます！」
メジロドーベルが哀しみに吠えている。

目をかけていた後輩の尋常でない様子に、さすがのエアグルーヴも驚いた。

しかし、口を挟めるだけの前提知識が彼女にはない。

「二人のトレーナーと一人のウマ娘の心温まる触れ合い……育まれてゆく絆。なるほど、たしかにそれも良いだろう。しかし二人とも、考えてもみたまえ。……『それだけ』ではあまりにも、平坦ではないか？」

「なッ……」

「生徒会長、あなたというひとは……！」

「トレーナーには別のウマ娘を。ウマ娘には別のトレーナーを。お互いを想いながらも、別の関係性の中で摩擦してゆくかつての絆……そこから生まれる強い感情の唸り。ああ、想像してみたまえ……どうだ？ メジロドーベル。この潮流こそが、我々に必要なものではないか？」

「それはッ……可哀想です！」

エアグルーヴは何が起きているのかよくわかっていないが、激しくなるばかりの空気感に狼狽える他ない。

「そうです、メジロドーベルさんの言う通り……可哀想なのはいけません！ まして、それを一般になんて……！」

「ほう？ どうやらアグネスデジタル君は『わかる』らしい。……素晴らしい。それはまさに、君の恵まれた『素質』だ」

「んなっ?! 断じて違います！」

「恐れることはない。遠からず理解できることさ」

疲れた顔のまま、シンボリルドルフがどこかニヒルに微笑む。

「それに、これは『約束の10ハロン』だけに留まることではない。既に学園側は、私の思惑通りに動き始めている……今までのチームの枠に囚われない、新たな枠組みを再構築しての特別レース。そこでは今までの関係性が破壊され、新たな出会いと刺激が我々を待っているだろう」

「そんな……！」

「かつての親しい仲間を離れ、新たな友情の中で溶かされてゆく……そこで生まれる嫉妬、喪失感、敗北感……ああ、素晴らしい。イメージしてみたまえ。今まで心を許していた唯一無二の相棒とも呼ぶべき仲間が、別の者たちと親しげにする姿を」

あれ？ 新設レースの話にそんなドロドロした背景なんてあったっけ？ エアグルーヴは訝しんだ。

「私が『約束の10ハロン』に宛てた言葉は、近い未来やってくる我々の姿……それを予言しただけに過ぎないさ」

「……ッ！ 会長さん、あなたは何もわかっていない……『約束の10ハロン』のことを、なにも……！」

「アグネスデジタル……!? や、やめて！ それ以上はダメよ！」

「あの作品はッ！ こちらのメジロドーベル先生が書かれたものなんですよっ!」

「アグネスデジタルさんっ!」

「会長さんの言葉でどれだけ先生が傷付かれたのか……！ あなたは、あなたはなにもわかっていない！」

「やめて！ もういい、もういいの……！」

メジロドーベルは泣きそうになっていた。

その様子を見て、シンボリルドルフは『ほう』と目を細めた。

「本人がいたとは、私も予想外だった。……ふむ、であれば私の返信では書ききれなかった部分についても、この場で伝えてしまおうか。なに……これもまた、私からの『提案』さ」

「なッ……！」

「第四章で二人が福引きで当てた『温泉券』……あれをトレーナーと、新たに登場させる別のウマ娘とで使うというのはどうかな？」

「な、なにを……そんな……そんなことが、許されるわけっ……！」

「二人が温泉に行く姿を元々組んでいた方のウマ娘が目撃するんだ。二人が楽しそうに遠征にゆく姿を眺め……静かに膝をつく。ああ、どうだ……これほど素晴らしいカタルシスがあるだろうか？」

「ああっ……」

「メジロドーベルさん!」

メジロドーベルは血の気を失ったようにその場に崩れ落ちた。

エアグルーヴは、アグネスデジタルがメジロドーベルを支える姿をただ呆然と見ることにしかできなかつた。

そもそも今何が起きているのかもよくわかっていない。

「あなたは……あなたはどこまで冷酷なんですかっ! 会長さん!」

「……そうだ。それでいい……それもまた『素質』だ、アグネスデジタル」

「違います! あなたのそれは重度の倒錯……妄執に過ぎません!

私が……私が、あなたの目を覚ましてみせます!」

うな垂れるメジロドーベルを抱き起こし、シンボリルドルフを睨むアグネスデジタル。

その姿はまさに、悪の皇帝に挑む『勇者』そのものだった。

「先生……あなたの想い、お借りします」

アグネスデジタルはどこからともなく一冊の薄い本を取り出した。

「なんだ? それは……」

「これは……とある先生が遺した尊い詩集です」

「詩集?」

なぜそんなものを。そう言いたげなシンボリルドルフに、アグネスデジタルはニヤリと笑ってみせた。

「だ、ダメ……アグネスデジタルさん、それを開いては……見せてはダメ……」

「大丈夫です、メジロドーベルさん。貴女の想いはきつと……闇を打ち払いますから」

「ちが……そうじゃなくて……本当に……」

「ふむ。まあ、詩を貶すような趣味は私にはないが……」

アグネスデジタルから差し出された詩集に目を通し、シンボリルドルフが退屈そうにページを捲る。

「ふむ。至って普通の詩だ。友人を想う詩、先輩に対する淡い憧れ、そしてトレーナーを想起させる人物への純朴な好意……これといって風変わりなものではない」

「ガクッ」

メジロドーベルは力尽きた。

「……だが……なんだ……？　これは……あまりにもありふれた……凡庸なポエムだというのに……私の胸に溢れる、これは……」

「！　会長……！」

その時、シンボリルドルフは涙を流していた。

「私が……泣いている、のか……？」

「そうです。それがあなたの、会長さんの中にある本来の“心”……」

「馬鹿な……こんな、ありきたりなもので……」

「尖っているだけが尊さではないんです。会長さん、あなたは勘違いしていただけ……あなたが求めていた本当の気持ちは、こういうありふれた尊さのなかにあつたんですよ……！」

シンボリルドルフが冊子を取り落とし、顔を手で覆った。

「私は……なんという、思い違いを……！」

「いいんです。誰しも道に迷うことはあるんです……そして“推しは押しつけられるものではない”……それだけを覚えていただければ」
気を失ったドーベルの寝顔を、アグネスデジタルは慈悲深く見つめる。

「……それだけで、きつとドーベルさんも許してくれますよ」

「……すまない。メジロドーベル……アグネスデジタル……私は、私は……！」

「徳、積んでいきましよう……？」

「ああ、積むとも。何年かかっても、必ず……！」

こうして生徒会室内で起きた壮大な戦いは終わりを告げた。

シンボリルドルフを悩まし続けていた偏頭痛は完治し、彼女の嗜好を押し付ける振る舞いは消滅したのである。

「なんだこれは……一体何の何が何だったのだ……」

もやもやした気持ちを抱えたのは、最初から最後まで何が起きているのかわからないままだったエアグルーヴだけである。

「やあ、アグネスデジタル君」

「あつ！ どうもです会長さん！ お久しぶりです！ いかがでしたか!? あれから……」

「ああ。あれから私も己の行いを省みてね……他者の不幸を呼び込むことのない、健全な嗜好を得るに至ったところだよ」

「おお！ それは何より……」

「やはり仲の良いウマ娘同士の間には男性トレーナーを加えるのが一番だな。新たな関係性に加えて三人がそれぞれ絆を深め合う……これこそが私の求めていた『全てのウマ娘の幸福』なのだ……」

「なんだア……？ テメエ……」

アグネスデジタル、切れた！

運命の収斂

「ターボ、次のセントライト記念でリオナタールと勝負する！」
「ほへ？」

なしてターボとリオナタールが？

そう思っただけを確認し出走表を見てみると……あらま。

「ほんとだ、リオナタールと走るんだね。中山2200、向こうの得意な距離だぞー」

「絶対勝つー」

「気合十分だねえ」

セントライト記念。元祖むちゃつよウマ娘の名を冠したこのレース。

きつとりオナタールにとっては菊花賞前の最後のレースになるだろう。

そして、それは私にとって最大の障壁の手の内を覗き見る最後の機会でもあった。

「ターボさんは以前チームデネボラのトレーナーと約束していましたよね」

「あーそんなことあった……けどあれマジだったのか……な？」

「むっふっふ……まあ見てよネイチャ！ 菊花賞の前にターボがリオナタールをけちよんけちよんにしておくから！」

「けちよんけちよんて」

「そしたらターボが菊花賞に出るんだ！」

いやいや3000はさすがに体壊しますよターボさん。

と、まあそんなゆるーい感じのノリでセントライト記念当日を迎え、レースが始まったわけなんです。

「勝ったあああ！」

「マジかー」

「素晴らしい走りでした、ターボさん」

なんとツインターボが2着。リオナタールはターボの後塵を拝す3着でのゴールとなつてしまった。

一番人気のリオナタールがまさかの敗退である。これはさすがの私も予想外。

「すごいじゃんツインターボ！」

「ふふん！ ターボのニューウエーブ、ツインターボだもん！ ……でもどうせ勝つなら1着が良かったなあ……うーん、途中までほとんど先頭だったのになあ……ほぼ1着だったのにい……」

そうなんですよターボさん。実はレースつて最後の最後に抜かされただけでも順位が落ちちやうんですよ。

けどまあ、それでも本当に終盤にまでよく走り抜いたと思う。

「リオナタールはツインターボさんの展開に振り回されていたようですね。ペース配分が狂つて仕掛けどころを見失つたのでしょうか」

「そんな感じだったねえ。スタミナ作りはしてるはずんだけど……元々マイラー向きだししようがないんじゃない？」

3000に向けたトレーニングを重点的にしてたらターボの牽引する2200は少し戸惑うだろうなあ。実際、レースはかなり荒れてたし。

それでも勝ちちは勝ち。よくやった、ツインターボ！

「今日はトレーナーのお金で焼き肉だー！」

「ええっ!？」

「おー！」

「おー」

「まあ、全然構わないですけど……おめでたいので……」

「できる大人は違うねえ」

「煽てられなくてもお金は出しますからね……?」

こうして私達はターボの勝利、というか2着を祝い、少しだけお高めの焼き肉を味わったのであった。

「よう、リオナタール。元気がなさそうだな」

「……トレーナー」

チームデネボラのリオナタールとトレーナーは、ウイニングライブの後は帰路についていた。

レースの後で空腹ではあったが、リオナタールが3着祝いを素直に喜ばなかったためである。

リオナタールは敗北した。

不得意な距離ではなかったのに、高速バ場に終始惑わされ続けたのが敗因だろう。反省会をするまでもなく、明確な負け方であった。それゆえにリオナタールは、わかりやすいくらい落ち込んでいる。

「最近お前は力み過ぎてるぞ。今日のレースでもずっと前を狙ってばかりだっただろう」

「……ごめんなさい」

「菊花賞が近づいたたびに酷くなっている。が、今日の3着で少しは落ち着いたんじゃないか？」

車の助手席で、リオナタールが静かに涙を流す。

運転中のトレーナーは、それを見なかったフリをした。

「レースは水物だ。流動的で、常にその模様を変えてしまう。流れを支配するには、何よりもまず自分自身が平静でいなくちゃ駄目だ。言っちゃあれだがリオナタール、今日のメンタルのまままで菊花賞に出てたら悲惨なことになってたぞ。前もって一月前に体験できただけ、今日のレースは値千金だった」

「……慰めてくれるんですね」

「これ、慰めになってるか？ スマホ見れなくていいやり方が調べられないんだが」

「……ちゃんとなってますよ」

「そうか。なら良かった」

車が信号で止まり、トレーナーはナビを無意味に操作する。

「ひとつ、情報がある」

「……どんな情報ですか？ ゴシップ？」

「違う。トウカイテイオーの経過だ」

「！」

「菊花賞は……望み薄。だろう。とのことだ。沖野が言うには、だが」

菊花賞トウカイテイオーがいない。

それは、本命が不在であることを意味している。

「もちろんスピカも諦め切れてはいない。まだ完治に向けて全力を注いでいるはずだ。可能性はゼロじゃあない。だが……」

「不可能、だど？」

「この時期にまだ満足に走れないようじゃ、本番で無様を晒すだろう。沖野はそんなことをさせるトレーナーじゃない」

「……トウカイテイオーがいない……」

リオナタールが背もたれを軋ませ、車の狭い天井を見上げる。

そうしている間にも、信号は青になった。

「もちろん、本命がいないだけで厄介な相手は多い。ブレスオウダンス、ナイスネイチャ……決して油断のできない相手ばかりだ。リオナタールはステイヤー向きでもないしな」

「でも、負けません。……負けたく、ありません」

「その気持ちは大切だ。捨てなくていい。燃やし過ぎなければ良いだけさ」

「……はい。大丈夫。もう平気です。……今日みたいな走りは、しません」

顔を真っ直ぐ向けたリオナタールの目は、すっかりと澄み切っている。

「獅子は兎を狩るにも全力を出す。だが、お前が取るべき獲物は兎ではなく菊花賞の栄光だ。緩急織り交ぜて惑わせてくる兎ラビットなんぞ、お前は構わなくて良い。百獣の王として、どっしりと構えていれば……それだけで、お前なら勝てる」

「……トレーナー」

「ん、どした」

「あまり女の子にあてがう喻えではないので……」

「……嫌だったか？ かつこいいと思ったんだが」

車内に落ち着いた笑い声が響く。

リオナタールの涙はいつの間にか乾ききっていた。

心休まることのない場所

菊花賞が目前に迫る中で行われる学園行事といえば、駿大祭。

これから始まるレースシーズンを目前に行われるせいとか、これはさほど大盛り上がりするようなイベントではない。どちらかといえば、厳か系のお祭りに近いだろう。

祭囃子が聞こえてくると踊り出したくなってしまっけど、ここは我慢。今はレースに向けて調整を続けていかなければ……。

「ナイスネイチャ。トレーニングもいいが年中行事を疎かにしてはならんぞ」

なんて考えながらターフを走っていたら、エアグルーヴさんからのお小言を頂いてしまった。

「いやあ、あはは……コースが空いてたもんで、つい……」

「……絶対にやるなどまでは言わん。しかし、季節ごとの催しをあえて軽んじる必要もあるまい。祭りを放り捨てるのは特に、無粋というものだ」

「返す言葉もございません……」

「……近頃貴様は練習漬けだったろう。今日はもう上がって、身体を休めておけ」

副会長さんは優しいなあ……。

最近生徒会は何故かとても忙しそうにしてたから、ご自身も大変だったろうに……。

……よし。じゃあ私もせっかくだし、ゆつくりさせてもらいますかあ。

「あ、ネイチャだ。やつほー」

「おー？ テイオーじゃん。どしたのこんなところで」

お祭りを遠巻きに眺めてようかなとブラブラ歩いていると、偶然トウカイテイオーと出会った。

「ボクは病院の帰り道。トレーナーの車で送ってもらったところだ

よ。もうこれから寮に戻ってようかと思つてさ」

「そうなんだ。お祭りは行かないの?」

「お祭りは……今日は疲れたし、もう良いかなつて」

そう語るトウカイテイオーの表情は、明らかに元気がなかった。

いつものような笑顔を作ろうとして、それができていない。テイオーにあるまじき、キラキラしていない顔だった。

「……今日、私の同室のマーベラスサンデーがマヤノトップガンと一緒に泊まりに行くんだつてさ。マーベラス星を探す天体観測とかなんとかで」

「なにそれ……つて、泊まり?」

マーベラスサンデーは私と同室で、マヤノトップガンはテイオーと同室だ。マーベラスとマヤノは仲が良く、普段から元気……というかよくわからないテンションで一緒になって遊んでいる。

そのテンションに巻き込まれると元気が湧いてくるつちやくるんだけど、すごい疲れる。そんなハイテンションだ。

きつと今夜の天体観測会でも終始はしゃいでいるに違いない。

「そ。だからマーベラスもマヤノもないの。私たちそれぞれ、ルームメイトがいらないわけじゃん?」

「……そう、だね」

テイオーが自分の尻尾を隠すように後ろに手を回し、口ごもつた。秋祭り。ちよつと顔を出そうと思つてたけど、やっぱりやめよう。それよりもずっと良い過ごし方があるんだもの。

「ねえ、テイオー。私の寮室に遊びに来ない? 誰もいないし、ちよつとだけ……一緒に遊ぼうよ」

「あ……」

顔のすぐそばで囁きかけると、テイオーは小さな声を漏らし……小さく頷いた。

「おじやま、しまーす……」

「はい、いらつしやーい。向こうがマーベラスのところだから、まあ一応本人に許可取つてるわけでもないし、私のとこのベッドだけ使おうね

？ とりあえず座つてよ」

「う、うん」

部屋に入るとテイオーは緊張した様子だった。

……これから何か変なことでもされるんじゃないかって、身構えてるのかな？

わかりやすい反応……。

「とりあえず飲み物出さね」

「……ネイチャの匂いがする」

「当然、私のベッドだもん」

テイオーはベッドに座ると、お行儀悪く両足をぶらぶらさせた。

そう、両足。彼女はもう骨がくつついて、自分で歩けるまできている。多分、慎重にやれば走ることもできるだろう。

そう、慎重にやれば。全力で走ることは……。

「……ボクね、注射苦手だったんだ。怖いし、痛いし」

マグカップから一口飲みながら、テイオーが語る。

「でも最近は注射も怖くなくなつてさ。別にそこまで痛くはないし、大丈夫になったんだ。ちょっとチクツとするだけで治るのが早くなるなら、全然我慢できるなーって」

「ん。そっか」

私はテイオーの隣で話を聞いている。

触れ合える距離。けど今は、彼女の尻尾を弄ぼうという気分にはなれない。

「……ボク、菊花賞に出られないんだってさ。お医者さんは、自分の立場からは絶対におすすめはしないって」

ああ、そうか。言われたのか。

「約束してたんだよ。トレーナーと……最後の最後まで諦めないけど、最後の最後でお医者さんに止められるようなら、出ないって。それで……今日、ダメってことになっちゃった」

テイオーは泣いていなかった。ただ悲しそうにしているだけ。

「……無敗の三冠ウマ娘……なりたかったな」

テイオーが座ったままベッドに背中を倒し、天井を見上げた。

虚ろで、やっぱり悲しそうな目。

私は……彼女になんて声をかけたら良いんだろう。

慰めか。激励か。……全部誤魔化して、いじわるでもしてあげようか。

「……壁に、いっぱい貼つてあるんだね。ウマ娘のデータ」

「ああ、うん。まあね。対戦相手のはいつも見えやすいところに貼ってるよ」

私側の壁には大きなコルクボードとホワイトボードが架けられていて、そこには無数のウマ娘データが陳列されている。

時期によって入れ替わるけれど、今貼られているのは菊花賞に出てくるであろうライブルたちの情報だ。

「勉強熱心だなあ……ネイチャは……」

「まあ、ネイチャさんはそのくらいしか取り柄が無いですからなあ。みんなの弱点を集めて、いざという時使えるようにしてるんですよ」

「……ボクだけじゃないんだね。酷いなあ、ネイチャは」

拗ねたような顔で、テイオーが私のことを可愛らしく睨んでいる。

「菊花賞に出そうな子たちのデータなんですよ。それ」

「まあ、ね」

「……そこにボクのデータ、無いじゃん。ネイチャはボクが出ないこと、なんとなくわかってたんでしょ。信じてなかったんだ。ボクが脚を治して、菊花賞に出ることなんて。……取材では、楽しみだつて言つてたくせに」

どこかやけっぱちな彼女の声。私を責めるような、咎めるような。けど無理もない。三冠はテイオーの夢だったんだ。それが途絶えてしまったことを思えば……。

でも。

「テイオー、そんなこと言っちゃうんだ」

「……！ 本当のこと、言っただけだもん。ネイチャはボクのこと、本当はライブルだなんて……」

私はベッドの上のテイオーに跨つて、彼女の両手を握り締めた。

指と指を絡めるように。それに応えるようにして、テイオーの指も

おずおずと重なってゆく。

「私が知ってるウマ娘の中で、一番弱点を詳しく調べたのは……トウカイテイオーだよ。そのボードにはなくなたって、私の頭の中にはちゃんと全部入ってるんだから」

「……調子いいこと言っちゃってさ。ボクの弱点。そんなにたくさん知ってるの？ ネイチャは……」

「知ってる」

両手を抑えつけたまま、顔を近付ける。

トウカイテイオーと私が、お互いの吐息がかかるくらいすぐそばにまで。

テイオーは目をとろんとさせている。

顔は真っ赤。……誰にも見せないテイオーのもう一つの貌。私だけが知っている、彼女の姿。

「ネイ、チャ……う、あつ……！」

私はそのまま顔を近付け……テイオーの首を噛んだ。痕をつけないようにやさしく。けれど圧迫するように。

「んっ……どうして、いつも……ボクのこと、噛むのっ……」

「こうすると……ん。テイオー、弱くなるから……あむっ」

「はあ、はあっ……」

首筋を、僅かな凹凸を弄ぶ。大切な血管が幾つも通った、人でもウマ娘でも絶対に怪我をしたらいけない場所。

そんな場所を私にいいようにされて。私に全てを委ねちゃって。

「ネイチャ、あつ、痛い……動けない、よ……！」

なのにテイオーは、顔を歪めながらも拒絶しない。振り解かない。私にされる痛いことや苦しいことを受け入れている。

「はあ、はあ……酷いよお……」

「……」

荒い息遣い。潤んだ瞳。

「ネイチャ……？」

私はテイオーを押さえつけたまま、彼女の顔に近付いて。そのまま、近いまま。何もしない。

「はあ、はあ……ネイチャ……？」

「……」

「なんでえ……？ どうして、何もしないのさあ……」

「んー？ ……テイオー、私に何かして欲しいの……？」

テイオーのもどかしそうな表情。ぱくぱくと小さく動く唇。

わかるよ。テイオーが何をして欲しいのか。

「キス……したい？」

私もそんな気持ちも、ちよつとだけ。ないではない。

倒錯的な感情だつてことはわかつてる。けど、こうやって興が乗つてしまうと……弱々しいテイオーの姿を愛おしく思ってしまうのも事実なんだ。

だから、女同士なのに。テイオーにキスしたいなんて思つちやうような瞬間も、まあ、ある。

……でも。

「してあげない」

「……！」

「ふふ、いい顔……テイオーはして欲しいんだあ……？ そんなに物欲しそうに口を動かしちゃって……でも、ダメ」

「こ、ここまでしたら、だつてえ……そういうものじゃ、ないの……？」

「そんなことしたら、テイオーの心が満たされちやうじゃん」

倒錯でも。錯覚でも。きつと、私たちが一線を越えれば、満たされるんだと思う。

お互いに新しい関係になって。新しい付き合い方を始めて。

でも、私はそうなりたくない。テイオーにそうなつてほしくない。

「テイオーはこれからずっと、私にドキドキしなきやダメなの。私を見るだけで、声を聞くだけで、匂いを嗅ぐだけで。何にもできなくならなきやいけないの」

物欲しそうになテイオーから顔を離して、手を強く握る。

「だから、私はテイオーの心の安らぎにはなつてあげない。私があげるのは、刺激だけ」

「そんな……そんなの……！」

だからたとえ女の子同士でも、恋人とかそういうのにはならない。
なつてあげない。

「私がいつか、テイオーを負かすために」

「……！ ボクを、負かす……ため……」

「だからこれは、キスの代わり……」

私はテイオーの顔の上で、口を開けた。

舌を伸ばし、唾液を滴らせ……。

「あ、うあ……!？」

半開きになつたテイオーの口に、落とすした。

「美味しい？ テイオー。どんな味がする？」

「……わ、わかんないっ……こんなの……!？」

私の唾液を食べてしまったテイオーは、今までに無いくらい顔を
真っ赤にしている。

これってファーストキスになるのかな？ 間接キスになるのかな
？

「わかんないかあ。じゃ、もう一回飲んで……」

「や、やあ、ネイチャ、こんなの、おかし……んっ……!？」

私はテイオーの心の拠り所にはならない。

ただ、テイオーの心をぐしゃぐしゃにしてあげることとはできる。

そうやってめちやくちやにしてあげること、テイオーの今の心の
痛みを忘れさせてあげるんだ。

「恥ずかしいよお……！ もう、ゆるして……!？」

「テイオーの弱点、また増えちゃうね……もつと増やしてみよつか
……っ。」

「ご、ごめんなさい。ボクが、悪かったからあ……!？」

「んー、許してあげない。……生意気なことを言うテイオーは、たつぷ
り躡けてあげなきゃだしね……」

「あ、あああっ……!？」

「始めよつか……テイオーの弱点の、お勉強たーいむ」

私はその日、彼女の悲しみを紛らわせるように、何度も何度も噛ん
で、痛くして、ドキドキさせてあげた。

私がまだテイオーを見つめているのだと、挑んでいるのだと、彼女の奥底に刻み込むように。

三日前のフライング

木曜の14時。菊花賞の出走表が公開された。三日後に迫る菊花賞の、ライバルたちの一覧だ。私にとってこの出走表は何よりも重い意味と価値を持つ。

作戦を練る余裕は少ない。時間との勝負だ。

- 1番 アキバカガリ
- 2番 サーザンスキー
- 3番 アサギノコハク
- 4番 アルエスマオウ
- 5番 ナイスネイチャ
- 6番 マチカネヒオドシ
- 7番 トウデイウイナー
- 8番 ブレスオウダンス
- 9番 シガーブレード
- 10番 ケーツースイサン
- 11番 エンジヨイラストアー
- 12番 ロングゲストマー
- 13番 ナントーミスト
- 14番 ラストアンコール
- 15番 アルエスシーズン
- 16番 ストロングカジ
- 17番 サクラヤマトオー
- 18番 リオナタール

私は3枠5番。悪くない。

トウデイウイナーは7番。序盤は後ろに押し込める余裕はなさそうだ。

ブレスオウダンスは8番。ちよつかいかけやすい位置だ。

シガーブレードは9番。ブレスオウダンスとまとめて引っ掛け
てみるか？

個人的には今回最大の敵、リオナタールは18番。大外。手出しは
しにくいけどどうせ最初にかできる相手でもない。……けど
遠いのはそれだけで厄介だな。

……そう。ここにトウカイテイオーの名前はない。

芝3000。……テイオーにとっては未知の長距離だけど、それが
明らかになることはない。

トウカイテイオーは敗者ではない。けど、彼女は勝者ではないし、
挑戦者になることさえできなかった。

トウカイテイオーという名の本命不在の菊花賞。

それは観客にとつては落胆を禁じ得ないもので、人々の不満はネッ
トを見ればいくらでも垣間見える。

現時点での人気も割れ気味で、みんな誰を応援すればいいのかわか
らず迷っているようだ。

それはこの出走表に連なるウマ娘なら肌で感じ取っていることだ
ろう。

いつもより話題性のない菊花賞。そこで戦う自分……。

「……さて。じゃあそろそろ、レースを始めますかあ」

でも、彼女たちの多くは勘違いしている。

私たちの戦いは既に、この出走表が出た瞬間から始まっているん
だ。

事務的な報告ばかりのSNSアカウントを立ち上げ、私はそこで小
さく呟いた。

『菊花賞での出走が決定しました！ 皆応援ありがとう！ けど、ト
ウカイテイオーが不在なのは残念だなあ。今年の菊花賞、どうなっ
ちやうんだらう？』

それは波紋を広げる大きめの石。

レースを走るウマ娘自らが触れる「トウカイテイオー」という心

残り。

私の眩きはじわりじわりと拡散し、トウカイテイオー不在というガツカリ感をネットコミュニティの世界に表出させてゆく。

当事者が語っているんだから、控えてたけれどそれじゃあ私も何か一言。

そうやって話題が話題を呼び、菊花賞に出ないトウカイテイオーを中心として盛り上がる。

「……さあ、私たちはみんな脇役だ」

スリープさせたスマホの画面が、悪どい笑みを浮かべた私を映す。主演はトウカイテイオーただ一人。

彼女が棄権し、出走表に名を連ねなかった今でさえ、全ては彼女を中心に動いている。

私たちは端役。添え物。ただのモブ。

明日も明後日も、三日後の本番だってそれは変わらない。私が変えさせない。

「走っておいで、トウカイテイオー。あんたはまだまだ主演なんだから」

ナイスネイチャはトウカイテイオーと仲がいい。

だからこそ、私がトウカイテイオーについて話すのは自然なこと。

私はこの日、何度も何度もトウカイテイオーの話題に触れ、世間に彼女の影をばら撒いた。

まだ落胆を終わらせない。まだ惜しむ気持ちを消させない。

さあ、もつと盛り下がろうよ、みんな。

今年の菊花賞は、きつと一番つまらないんだから。

「……18番、大外だな。だがリオナタール、この距離なら枠番は大した問題じゃない。むしろ全体を冷静に見渡して、緊張を落ち着けろ」
「はっ」

出走表の発表。それを受けてチームデネボラ内においても、最後の調整と作戦会議が行われた。

「最近調子を上げてきているウマ娘が怖くはあるが、特別個人をマー

クする必要はない。今まで培った練習の成果を出せば良い。安定したラップタイムと、最後の差し。後方から一気に抜き去れるだけの地力がお前にはある」

「はい」

「……緊張しているのか、リオナタール」

「……いえ、緊張ではないです。ついにこの時が来たんだっていう……むしろ、腑に落ちた感覚があつて。冷静です。いつもより」

それはリオナタールの強がりではなかった。

彼女は本心からの言葉で、実際にリオナタールは落ち着いている。

18番という大外もどこかなるべくしてなったという感覚があるし、不利という気持ちはない。いわば、運命的な何かというやつであろうか。

「そうか。なら良い。……当日は作戦通りにいけ。馬場発表がなんだろうとやることは変わらない。何にも心動かされない王者の走りを見せてやれ」

「もちろんです」

チームデネボラのトレーナーにとって、唯一の懸念はリオナタールのメンタル面であった。

菊花賞に向けた彼女の強い想いはセントライト記念で悪い方向に作用した。一度の敗北によって冷静になれていれば良いのだが、こればかりはトレーナーでも万全にはいかない。彼はトレーナーであつて、メンタル専門のトレーナーではないからだ。

「安心してください、トレーナー」

「む」

「私は、取るべきものを取りに行くだけですから」

菊花賞。それは自分が掴み取るべきものなのだと、リオナタールは強く確信している。

それは当然のことであり、当たり前のことなのだ。最近はどういうわけか、そう思うようになっていた。

「一番強いウマ娘は、私ですよ」

この感情は驕りなのか、油断なのか。リオナタールも自分自身のこ

とがよくわかっていない。

それでも彼女は、己の感じる運命をトレースすることが栄光への道であることを疑ってはいなかった。

切れ者は嘯いている

392：名無しの野次ウマ

いよいよ菊花賞か

現地勢はどう？ 人いる？

393：名無しの野次ウマ

普通に混んでるよ

去年はもうちよつと列が長かった気もするけど、菊花賞は菊花賞だし

394：名無しの野次ウマ

東京でやってくれよお

京都までいくのキツいんすよ

395：名無しの野次ウマ

いやどす

396：名無しの野次ウマ

トウカイテイオーのいない菊花賞か……誰が勝つと思う？

397：名無しの野次ウマ

興味ないわ

398：名無しの野次ウマ

ブレスオウんだンス一択

多少の浮き沈みはあるけど彼女の未脚ならいけるはず。テイオーもないし

今なら調子も上がってるところだ

399：名無しの野次ウマ

トウデイウイナーでしょ
名前と顔が良い

400：名無しの野次ウマ
ブレスオウんだンスは京都新聞杯でナイスネイチャに負けたじや
ん

今回もナイスネイチャが何かやってくれそうな気はしてる
勝てるかっていうとうーん

401：名無しの野次ウマ

ナイスネイチャのレースの勝ち負けを額面通りに受け取ってはい
けない

最近リオナタールの名前が弱火気味だけど、あの子はやってくれる
ウマ娘だよ

今回はリオナタールがやってくれるね
まあみんなどんぐりの背比べっちゃそれまでなんだけどさ

京都レース場、芝3000m右回り。

天候は晴れ。バ場発表は良。

最も強いウマ娘が勝つといわれる、クラシック三冠最後のレース、
菊花賞。

この日、客入りは例年と比べてやや落ち込んでいた。

これまでURRはトウカイテイオーをメインにクラシック戦線を
売り込んでいたこともあり、彼女の不在は影響が大きかった。

今年のクラシック戦線はとにかくトウカイテイオーの一強。彼女
以外には考えられない。なまじトウカイテイオーにスター性があつ
たせいもあり、知名度でも人気度でも突出していた彼女が抜けた穴は
あまりに大き過ぎた。

どんぐりの背比べ。

そんな言われようは、なにも匿名掲示板だけに見られるものではな

い。

京都レース場に足を運んだ観客の中にさえ、陰では今日の菊花賞を
そう腐している者もいるのだ。

本命不在の菊花賞。

その言葉の毒は、ゆつくりと、静かに回ってゆく。

「周りのことは気にするな。今まで頑張ってきたんだ、自分の力を出
し切れば絶対いける！」

「えへへ……わかってますよ、トレーナー！」

トレーナーはウマ娘のメンタル面にも気をかけなければならない。

特にクラシック級のウマ娘はまだ経験も豊富とは言えず、不安定な
部分も大きい。

なのでネットでの不要なエゴサーチなどを控えるように指導する
ことは一般的だ。

今まさに菊花賞の舞台へ上がりとうとしているウマ娘の少女もまた、
そんな指導を受けた一人である。

「着替えたら最後の作戦会議だ。通路で待ってるぞ」

「はいー」

真面目で、極々模範的なウマ娘だ。

トレーナーとの関係も良好。今日までの調整も万全にこなしてい
る。

「……本命不在、かあ……」

しかし。

年頃の若者が、自分の晴れ舞台が他人から、日本中からどう思われ
ているのかが気にならないはずもない。

彼女はトレーナーからは控えるように言われているエゴサーチを、
事あるごとにやらずにはいられなかった。

自分がどう思われているのか。今日の菊花賞がどう思われている
のか。

気にならないわけがないのだ。

「……トウカイテイオーがいないからって、そんなに……言うことな

いじゃん……」

身体は仕上げてきた。作戦も練られている。

しかし本番当日、出走前の今まさに。彼女の、彼女たちのメンタルコンディションは、万全とは言い難いものであった。

◎ ⑧ × ⑧ △ ブレスオウンドダンス ◎ ⑧ ○ ⑧ △

調子：普通

スピード：B

スタミナ：C

パワー：C

根性：D+

賢さ：E+

ブレスオウンドダンス：所持スキル

『春ウマ娘○』

『末脚』

『直線巧者』

『垂れウマ回避』

『差し直線○』

『マイル直線○』

「一番人気……か」

ブレスオウンドダンスは浮かない顔だった。

一番人気。それもG1の舞台でもなれば誇るべきことだったが、彼女の表情からは純粹な喜びが窺えない。

お気に入りの勝負服に着替えて、今まさにターフに出て、同時に歓声が大きくなったのを聞いても尚、心の奥底には燻るものが残っていたのだ。

一番人気。しかし、その称号が実質的には二番手であることをブレスオウンドダンスは知っている。

これは本来ならトウカイテイオーのものだったはずなのだ。

彼女が不在であるせいで第二候補の自分に淡い光量のライトが当てられている。そう思えば、気分が盛り上がるはずもない。

しかし。

「……よっし、やってやるッ！」

彼女は両頬をピシヤリと叩き、気合を入れ直す。

トウカイテイオー不在のレース。だからなんだというのか。

彼女の意気込みはその程度で萎えたりはしない。むしろ、かえってトウカイテイオーが居なくてもという気概が湧いてくる。

3000mという未知の長距離に恐れはない。同じ距離はトレーニングで何度も何度も走っている。

だからあとは、やるだけなのだ。

× ⑩ △ ⑩ × ケーツースイサン × ⑩ △ ⑩ ×

調子：普通

スピード：B

スタミナ：D+

パワー：C

根性：C+

賢さ：C

ケーツースイサン：所持スキル

『先駆け』

『二の矢』

『好位追走』

『先行直線○』

『中距離直線○』

『垂れウマ回避』

『登山家』

『ラッキーセブン』

「今日は1着目指して頑張るよッ！」

勝負服姿でパドックに躍り出た彼女は、そう意気込んだ。

仕上がりも上々。感心するような観客の溜息と応援の声に、ケー

ツースイサンは一層笑みを深める。

「応援よろしくッ！」

彼女の中にも蟠りはあったし、自分の8番人気という現実について思うところもある。

が、ケーツースイサンは棄権したウマ娘の枠に滑り込む形で出走の決まった経緯があり、他のライバル達よりは幾分か軽い気持ちで今日のレースに臨んでいた。

「……ふふん。なーにがトウカイテイオーよ。出られるだけでも私の方がラツキーつてもんだわ」

8番人気という中途半端さもいつそのこと清々しい。

彼女は開き直ることでメンタルを立て直す術に長けていた。

「どうせだったらたてっぺん取ってやろうじゃないの」

ライバル達の強さはわかる。それでも、長距離を根性で走り抜いて見せる。

ケーツースイサンの気合は充分だった。

× ⑱ ○ ○ リオナタール × ⑱ ◎ ⑱ ▲

調子：好調

スピード：B

スタミナ：C+

パワー：D

根性：B+

賢さ：D

リオナタール：所持スキル

『秋ウマ娘○』

『末脚』

『外差し準備』

『差し切り体勢』

『差し直線○』

『追い込み直線○』

『マイル直線○』

『後方待機』

『直線一気』

『一匹狼』

『おひとり様』

リオナタールは、トレーナーを信頼している。

彼女は自身の得意な事と苦手な事をはっきりと仕分けられる性格だったので、苦手な分野はことごとくトレーナーに放り投げる事でそれらを解決している。

ある意味でそれは無思考に近かったが、作戦だと理解した上でのことであり、決して盲目的な決断というわけではない。

そしてトレーナーに信頼を置くという彼女の習慣は、今日この日、わずかに花開いたのだった。

「みんな、ちよつと落ち着きがない……かな？」

リオナタールが他のライバルを静かに見回してみると、空気感が伝わってくる。

萎縮。気負い。あるいはそれに反発しようとする怒気。

ライバル達は「本命不在の菊花賞」という世間の空気に触れた影響で、形は様々であったが、ほんのわずかに調子を落としていたのである。

リオナタールもトウカイテイオーの不在に思うところはあったが、ここ数日はチームデネボラのトレーナーの言う通りに頑張って封印していたのが功を奏し、他のウマ娘と比べて悪影響を受けずに済んでいたのだ。

「……うん。いつも通りだ」

必要以上にあがっていない。

心は沸々と静かに燃え、大人しく良い子のままでいる。

武者震いもない。調子はかなり良いと言える。

スタートが待ち遠しい。

ゴールはもつと待ち遠しい。

夢にまで見た菊花賞。憧れのマルゼンスキーですら持っていない栄光を、今日この手に。

リオナタールは自分の掌を握りしめ、

「おいつすー」

間の抜けた、しかし、心のざわつく声が聞こえてきた。

☆ ⑤ ☆ ⑤ ☆ ナイスネイチヤ ☆ ⑤ ☆ ⑤ ☆

調子：絶好調

スピード：E

スタミナ：B

パワー：D+

根性：C

賢さ：SS+

ターフにナイスネイチヤが現れた瞬間、誰もが彼女を見た。

平凡な容姿。派手さのない控えめな色合いの勝負服。

人気は6番人気。実際、彼女のトップスピードに特筆すべきものはなく、直線短距離のタイムを測ればここにいる全てのライバルが彼女に勝てるだろう。

しかし、この場にあるウマ娘は誰もがナイスネイチヤに戦慄している。

もはや誰もナイスネイチヤに油断していない。彼女を侮っていない。

彼女がレース中に繰り出す様々な技術スキルには、時計に映らない脅威があることは周知の事実となっていた。

「あはは、みんなしてそんな顔しないでよ。力抜いてこーよ、ね？」
ナイスネイチヤが隣の席の友人のような声色で、悪魔のように妖しく笑う。

気が付けば、観客席からは小さなブーイングが鳴り響いていた。
ナイスネイチヤはそれを意に介した風もなく、髪を弄っている。

「今日はほどほどにセーブしてさ……」

ナイスネイチャ：所持スキル

- 『春ウマ娘○』
- 『夏ウマ娘○』
- 『秋ウマ娘○』
- 『冬ウマ娘○』
- 『内枠得意◎』
- 『外枠得意◎』
- 『右回り○』
- 『左回り○』
- 『東京レース場○』
- 『中山レース場○』
- 『京都レース場○』
- 『小倉レース場○』
- 『良バ場◎』
- 『道悪◎』
- 『晴れの日○』
- 『雨の日◎』
- 『集中力』
- 『地固め』
- 『一匹狼』
- 『尻尾上がり』
- 『ポジションセンス』
- 『臨機応変』
- 『策士』
- 『お見通し』
- 『大局観』
- 『千里眼』
- 『直線回復』
- 『冷静』

『小休憩』
『深呼吸』
『コーナー巧者』
『コーナー加速』
『コーナー回復』
『差しコーナー◎』
『静かな呼吸』
『ウマ好み』
『がんばり屋』
『食い下がり』
『登山家』
『直滑降』
『垂れウマ回避』
『スリップストリーム』
『内弁慶』
『伏兵○』
『差しのコツ◎』
『逃げ牽制』
『逃げ焦り』
『逃げ駆け引き』
『逃げためらい』
『先行牽制』
『先行焦り』
『先行駆け引き』
『先行ためらい』
『差し牽制』
『差し焦り』
『差し駆け引き』
『差しためらい』
『追込牽制』
『追込焦り』

『追込駆け引き』
『追込ためらい』
『布石』
『後方釘付け』
『束縛』
『かく乱』
『目くらまし』
『まなざし』
『トリック（前）』
『トリック（後）』
『魅惑のささやき』
『八方睨み』
『スタミナイーター』

「正々堂々、レースを楽しんでいこーよ。……ね？」

菊花賞の泥仕合

菊花賞が始まろうとしている。

ゲートイン前の僅かなこの時間は、ライバルたちと言葉を交わす最後の機会だ。

普段ならば、ここでお互いに健闘を誓い合う。もちろん全員が全員そうするわけではないが、G1の舞台でフルゲートともなれば、半分以上のウマ娘は何かしら言葉を交わすものだ。

しかし今日この場において、ゲート前でコミュニケーションを取ろうとするウマ娘は居なかった。

不自然なほどの緊張感が辺りに立ち込めているかのように、誰もが口を開かない。

まるで全てのウマ娘に「念のため今日はその方が良い」とトレーナーからの指示が出ていたかのように。

そう、全てはナイスネイチャ対策の一環。

レース前に他のウマ娘を揺さぶるナイスネイチャへの警戒方法は周知のものとなっていた。

もちろんこれは今に始まったことではない。

故に、ナイスネイチャにとって特筆すべきアクシデントではなかった。

「はあー……」

レース前は誰も自分と話そうとはしない。それは予定通り。

会話に入ってきて欲しくないから他の子同士でもやり取りはしない。全ては彼女の読み通り。

「……せっかくの菊花賞なのに。トウカイテイオーがいないせい、観客席も盛り上がってないねえ」

耳を澄ませれば微かに聞こえるブーイングを自分以外のせいにして、ナイスネイチャはわざとらしく肩を竦める。

ギリギリ全員に聞こえるくらいの声量で。それでも声を張り上げない程度のバランスで。

「ま！　しよーがないか。本命不在じゃ誰が勝ったって面白くないもんね」

手を庇に、観客席を眺め彼女は語る。

「今年の菊花賞の時計は例年より何秒遅くなるのかねえ。テイオーが走ってたら逆にレコードが出たかもしれないけど、私達だと……まあ、二秒くらい遅くなっちゃうのかな？」

ナイスネイチャを除いた他のライバルたちは、変わらず沈黙を守る。

しかし辺りを包む雰囲気はより重くなり、内に秘められた怒りは静かに熱を上げてゆく。

「誰も私達なんかに期待してないよ」

誰かが口の中で呟く。

“それは違う”と。

「トウカイテイオーの居ない菊花賞を取りに行く私達は“空き巣”みたいなものだし」

誰かが強く芝を踏みしめ、草が千切れる音がした。

「情けないタイムを出して掲げる薄っぺらいトロフィーに、価値なんであるのかねえ……」

「——うるさいッ！」

一人が声を張り上げる。

それはライバル達の中で最も冷静さを保っていたはずの、リオナタールだった。

「……さつきから……！」

怒りが彼女の中で渦を巻いている。

長らく感じたことのなかった、赤黒い怒り。

だがその感情はリオナタールだけに限ったものではない。他のライバルたちも大小あれど、同じ気持ちを抱いている。

「客観的な事実ってだけ。私はそう思ってないから、怒らないですよ」

ナイスネイチャは特に茶化す風もなく、代弁したまでだと言いたげにそう流した。

自分は何も考えていない。期待されていないこのレースに対して

は何も思っていない。そんな顔で。

「トウカイテイオーと一緒に走りたかったのにな……」

「……」

ゲート入りが始まる。

観客席からは神妙な顔つきのウマ娘たちがゲートインする様子が見えていたかもしれない。しかし彼女らの内心は粗熱を帯びた怒りに支配されている。

ウマ娘は走りに対して異常な執着を持っている。

特にレースを走る競走ウマ娘たちにとって、レースとは大きな意味を持つている。

それこそ、ヒトとは一線を画すほどに。

一時であれば、事前の作戦を忘れさせてしまうほどに、強い感情が付随するものなのだ。

ファンファーレが鳴り響く。

菊花賞が始まろうとしている。

心の半分を覆い隠していた怒りが鎮まり、集中力が研ぎ澄まされてゆく。

「——『ボクが出てたら楽勝だったのになあ』」

「……ッ！」

それは今この時、最も彼女らの心を深く抉る声真似だった。

『ガタン』

ゲートが開く。

「——『ほら、みんなボクより遅いもん』」

トウカイテイオー
ナイスネイチャが好スタートを切る。

ただの声真似。子供だまし。トウカイテイオーは居ない。いつもの心理戦。

考えればわかる。考えなくてもわかって当然のこと。

——それが、今この一瞬だけは解らない

「行かせないッ！」

「違うー！」

「私のほうがッ……！」

結果として、全てのウマ娘がペースを乱した。

全てのウマ娘から全ての事前準備と作戦内容が頭から弾け飛び、剥き出しの闘争心のままにナイスネイチャの後を追う。

実況は困惑と驚きの声を上げている。だが観客席に向けられた声はターフの上にまで届くことはない。

ナイスネイチャのスタートダッシュと、それに追隨するハイペースな出だし。

走っているウマ娘たちの中で、自分たちを客観視出来ている者は一人もいなかった。

今この時、先頭を走っているナイスネイチャ以外には。

「……ッ！」

闘争心に火が着いたナントーミストがすぐさまナイスネイチャを抜き去り、続けてアサギノコハクも前に出た。

更にサーザンスキーがナイスネイチャに並び、彼女を睨んで先へゆく。

ややペースの乱れた好スタート。そしてバ群がある程度伸び、走者の脳裏についた炎が鎮火し始める。

「またやられた」。ナイスネイチャの心理戦に引つかかった自らが恥じ入る気持ちを自覚する。しかしその反面、トウカイテイオーがいれば」という思いを消しきれないでもいる。

トウカイテイオーがいれば勝っていた。もつと良いタイムが出る。

ここで勝てても「空き巣」扱い。

それは彼女たちが最近耳にする世間の声だった。

そして、なんとしても否定したい罵詈雑言でもある。

だからこそ、「止まらない」。

ペースを落とせない。遅くすれば無様なタイムを晒すことになる

のではないかという恐怖心と敵愾心が、彼女たちの掛かりを長くした。

「テイオーなら、ここで抜け出してる……!」

「ッ……!」

「ッ……だッ……!」

「くっ……!」

それに加え、常にナイスネイチャからの囁きが耳に入る。

レースに集中しようとする彼女たちの前に「トウカイテイオー」の存在がちらつき、魂が過度な熱を帯びていく。

「トウカイテイオー」。それは彼女たちにとって絶対のライバル。常に比較され続けてきた強敵。平静でいらられるはずもない。

それは「トウカイテイオー」という言葉を使われずとも、ただの声真似だけでも翻弄されるほど。

「遅い、菊花賞だなあ」っ……!」

「違う……!」

コースを塞がれる。坂で抜かされる。レース中に合計六回あるコーナーも、ナイスネイチャの武器となる。

長距離故にペース配分を保たなければいけない。息を入れるべき場所では入れ、溜めるべき足は溜めなければならぬ。

3000メートルは難しいレースだ。それらは事前に作戦として練り上げられ、各々がよく練習し、頭の中に入れ、我が物としていたはずだった。

「はあ、はあっ……!」

その事前準備のほとんどが瓦解しつつある。

度重なるナイスネイチャの牽制と駆け引きにより、早い者では1000メートル時点で既に息を荒げていた。

「ッこのまま離され続けて負けちゃうんだね?」

「……ッ! 私は……まだ、いけるッ!」

「あんたなんかにつ……!」

ナイスネイチャは常に煽り続けている。煽って煽って、ひたすらにバ群全体を焦らせてゆく。

彼女は「遅い」と嘯くが、現実には真逆だ。彼女たちのレースはかつてないハイペースで推移している。

そう思わせないのは「トウカイテイオーなら」という劣等感にも似た想いと、息を乱さずに走り続けるナイスネイチャを見て「問題ない」と判断している部分もあった。

「ふーッ……」

しかしナイスネイチャはゆっくりとペースを落とし、少しずつ後方へ下がりに続けている。

息を落ち着けるように下がりながら、同時に後ろのウマ娘の進路を塞ぎつつ、ささやいて掛からせているのだ。

ペース配分と牽制と駆け引きを同時に行う彼女のレース技術は、もはや誰にも真似できず、理解すら難しい域に達しつつある。

「『テイオーの居ない、菊花賞』……」

「！」

「『どنگりの背くらべ、みたいだね』……！」

リオナタールが無言で否定するかのようには掛かる。

コーナーで加速した影を視界の隅で捉えたナントーミストが掛かる。

シガーブレードの進路が塞がれ前を躊躇う。

ブレスオウんだンスの息が荒れる。

アサギノコハクが完全にバテ、一気に垂れ込む。

サーザンスキーのスタミナが切れて一気に順位を下げる。

「まだ、まだあ……！」

「言わせ、るかあッ……！」

誰もが歯を食いしばる。闘争心が冷静さにまで延焼し、理性を燃やす。

燃えている間は強く輝くそれは、燃え尽きた後の悲惨さを考慮しない。

「……ッ」

ナイスネイチャは目まぐるしく移り変わる順位の中で、誰もが息を荒げるレースの中で、一人だけ。

たったの一人だけ、正気を保っていた。

鈍らのラストスパート

ライバル達が走っている。

いつもより早いペースで。3000メートルで考えれば破滅的なペースで。

脆い子は早くも力尽き、大きく順位を下げている。

現在2000メートル。普通の中距離だつていうのに、破綻するところは既に破綻しかけている。

いつもならそんなレースはしないだろう。

そう、いつもなら。

今日は菊花賞。トウカイテイオーが出られなかった菊花賞だ。

私が彼女の名前を挙げて煽るだけで、彼女たちの心はいとも容易く燃え上がってくれた。

私がテイオーの走るコースを示して、本来の彼女のペースを騙つてやるだけで、レース全体にみるみるヒビが入って崩れてゆく。

みんな否定したいんだ。トウカイテイオーに負けるつていう自分を。

認めさせたいんだ。トウカイテイオーに勝てるつていう自分を。

……。

……バカじゃないの。

「……いないんだよっ」

何の牽制にもならない一人言が漏れる。

でも、いないんだ。トウカイテイオーはこのターフにいないんだよ。

この菊花賞にトウカイテイオーは出てなくて、戦うのはトウカイテイオーのいない私達18人で、それが現実で、そこで戦わなきゃいけないんだ。

なのにどうしてみんな焦るんだ。

トウカイテイオーがいるかのように振る舞えばすぐに掛かって。

火が着いて。ペースを乱して。

違うんだよ。いないんだよトウカイテイオーは。これはトウカイテイオーのいない私達のレースで、それがこの菊花賞で、私達の現実なんだよ。

ああ、わかったよ。なら良いよ。

そんなにトウカイテイオーと走りたいなら走らせてあげるよ。

「それでボクに勝てるんだ……ッ?」

「な、にをッ……!」

「負けない……!」

みんなは走れば良い。私が作り上げた幻影のトウカイテイオーと一緒に、*「トウカイテイオーが走る菊花賞」*を走っていれば良い。だから。

「この菊花賞を勝つのは、私だ……!」

美しい幻の勝利なんて必要ない。

荒々しくていい。薄汚くていい。そんな想いで全てを睨みつける。

私以外の全員が負けろ。そして最後に私が勝てばそれでいい。

タイムなんていくら伸びてもいい。ブーイングも嘲笑も空き巢呼ばわりもいくらでも受けてやる。

だから私によこせ。そのキラキラを。

「う、あああッ!」

残り500。

坂に差し掛かり、ブレスオウんだンスがスパートをかけ、私を追い越してゆく。

彼女の驚異的な末脚が牙を剥いた。

私は走る。

芝を踏みしめ、蹴り抜き、前へ駆ける。

最善のフォームで。最大の速度で。

私の持てる全てを込めて、ターフを疾走する。

それでも、私には私だけの現実が立ちはだかる。

*「遅い」*というどうしようもない現実が、いつだって私の邪魔をす

る。

「一番強いウマ娘は、私だッ……！」

更に後ろからリオナタールが追い込みをかける。

菊花賞の勝利にかける執念が最も強い彼女が、ついに先頭に躍り出た。

私だって息はある。ハードトレーニングで心肺は鍛えた。

気力はある。前に出る気持ちは折れていない。

それでも、足りないのか。

私の持てる最善、最速を、他のみんなが追い抜いていくのか。

レースは無慈悲だ。

個々人の力が残酷なくらいハッキリと現れる。

誰かが死ぬ気で走っていくのを、違う誰かが涼しい顔で追い越していくことなんて珍しくもない。

後続が迫る。

ゴールまでもが私を追い詰める。

残りの手札は何枚だ。

残りの時間で私になにができる。

……何も無い。

手札のない私に、どんなことができる？

……わかってる。

「走るんだよッ！」

走れ。諦めずに走りきれ。最後の最後にできるのは結局それだけだ。

積み上げた準備も小細工も最後には残らない。残されるのは自分の脚しかない。

だから勝負しろ。みつともない走りでも武器にして、最後まで戦い抜け。

その先へ行け。勝利を掴め！

「ぐっ……!?!」

長距離最後の坂。高低差四メートルの勾配がリオナターとブレ
スオウダンスのスタミナにトドメを刺した。

私の鈍らな末脚でも、相対的に勝てるほどに。

小細工は、無駄なんかじゃなかった。

「そん、な……!?!」

三着が二着に。二着が一着に。

「これは、誰にも渡さないッ……」

最後の最後、末脚と呼ぶにはあまりにも鈍いスパートを振り絞つ
て、私は一番最初にゴールを切った。

「私が……」着だああああッ!」

人差し指を掲げる。汗が弾ける。私だけの祝福の歓声と、私だけの
ブーイングが秋空に高らかに響いてゆく。

半バ身差の勝利。でも、勝ちも勝ち。一着。私の栄冠。

「はあ、はあ……!」

掲示板を見れば、時計は3分12.8秒。

……ひつどいタイムだ。

「あはっ……あはははっ!」

本当に酷い時計。良バ場で、晴れでこれ。これほど遅い菊花賞はい
つ以来になるんだろう?」

このひつどい記録を塗り替えるには奇跡でも来ない限り無理だろ
うね。

でも。だとしても。これが私の現実だ。

「私の一着に、変わりはない……!」

観客席を見ると、そこにはトウカイテイオーがいた。

……彼女は泣いていた。

ぼろぼろと涙を流し、一着を取った私を見つめていた。

「……今度こそ、私の番!」

そんな彼女に向けて、私は声を張り上げる。

ここからテイオーに聞こえるかどうかなんて少しも気にならなかった。

「私が……私こそが、一番強いウマ娘だ！ トウカイテイオー！ 私はアンタより強いんだ！ だからターフに戻ってこい！ 復活して、また私と勝負しろッ！」

菊花賞は私のものだ。これは誰にも渡さない。

だから欲しいなら、最強の座がほしいなら。ターフで私から奪い取ってみなよ。トウカイテイオー。

「……うん。戦う。絶対に戦う。ボク……絶対に、また走ってみせるよ……！」

トウカイテイオーは涙を流し、何度も何度も頷いていた。

「おめでとう、ナイスネイチャ……！」

……ああ、やだなあ。

なんか、そういうトウカイテイオー見ると……私まで、なんか泣けてきちゃったよ。

……カメラに映ってるなあ。嫌だなあ……へへへ……。

七色のサイリウム

ナイスネイチャの勝利は驚きでもって迎えられた。

本命不在の菊花賞。それ故に世間的な注目度も、期待度も低かったレースだった。

だがそんな観衆の退屈さは、スタート時点から裏切られることとなる。

長距離レースとしてはあまりに異例のハイペース。それが一人だけが逃げを打つ策としてならばまだしも、ほぼ全員。

全ウマ娘が掛かり気味という波乱を思わせる幕開けは、その後のレース展開の乱れを決して裏切らないものだった。

実況と解説は困惑する。今何が起こっているのかを正確に把握しきれていない故に。

ただなんとなく伸びたバ群を第三者の目線で見た時にわかるのは、ナイスネイチャを中心としてその乱れが動いているという事実。

レースの波乱はナイスネイチャが引き起こしている。

観衆は次第にそう捉えるようになり、実際にその流れは最後まで加速し続けた。

「負け、た……」

外から見ていた者にとつても難解なレースだった。

走っている最中のウマ娘達本人からすれば、不可解さはそれ以上のものだろう。

それでも、自分の敗因だけは自覚できているはずだ。

ナイスネイチャによって心を乱された。策に嵌ってしまったのだということ。

「負けちゃった……い！」

2着のリオナタールは悔し涙を流していた。

ウイニングライブを前に着替えてメイクも整えなければならぬのに、涙は堰を切ったように止まる気配がない。

勝てるはずだったコンディション。何度も入念に立てたはずの作戦。

事前の準備を全て、レース前の僅かな時間で忘れ去ってしまった。他のウマ娘たちと同じように、リオナタールは己の敗因をより強く自覚している。

ナイスネイチャに恨みはない。レース前のやり取りで少々腹が立ったのは事実だが、それも全てここまでの伏線だと思えば「見事」だと言わざるを得ない。

まして、ゴールした後に観客席のトウカイテイオーに言つてのけた言葉を思えば……。

「こっぴどくやられたな、リオナタール」

「……トレーナー」

控室のすぐ側で、トレーナーが声をかけてきた。リオナタールのすすり泣きを聞き取ったのだろう。

「ごめんなさい。私……冷静でいられなくて……」

「だな。お前があんな走りをするとは、正直驚いた。デビュー前のヒヨっ子にいきなり走らせた3000メートルでも見てるんじゃないかと思つたくらいだよ」

「……ごめんなさい。もつと、作戦を思い出していれば。冷静にレースを運べていたら……」

「怒ってるわけじゃない。いや……リオナタールが冷静じゃなかったのは事実なんだが」

トレーナーは慎重に言葉を選ぶように沈黙した。

「……ナイスネイチャの扱う『デバフ』は、そこが厄介なところだな。普通、レースっていうのは自分の持てる最大の力を出し切る、それだけのものだ。終わってみれば、自分よりも実力で勝る強い相手がいいた。それで片付くものだ……が、ナイスネイチャの出るレースでは少し違う」

「それは……私達が最大の力を、出しきれないから……ですか」

「そうだな。それがあある意味でナイスネイチャの力つてやつだ。確かにリオナタールは全力を出しきれなかった。悔しいだろう。だが、そ

の結果そのものがナイスネイチャの力なんだ」

デバフ。ゲーム的な用語で、能力を下げること。

技術として成立しているのであれば、それは間違いなく立派な武器だ。

「だから……消化不良ではあるだろうが。元気出せ、リオナタール」

「……」

「お前は2着だ。あんな荒れたレースで、お前は良くやった。……ダービーに続いて、まあ、シルバーコレクターなんてのは嬉しい呼び名ではないかもしれないが。……みんな、お前のライブを待っているよ」

控室から顔を出す。

そこには壁に背を預けていたトレーナーが、真つ暗な画面のスマホを見ながら、不器用に言葉を選んでるところだった。

「……しようがないですね」

「うおっ。もう着替えてたのか」

「ええ。……レースで駄目なところみせちゃいましたから。ライブくらいは、格好良く決めないとですし」

悔しさは強く残っているが、トレーナーの励ましのおかげだろう。

涙はもう既に乾いていた。

「それに今回のライブは……きつと、ナイスネイチャだけじゃなくて。私やブレスオウングダンスの色のライトも、たくさんあるだろうし」

「……ふふ。ま、そうだな。きつと、そうに違いない」

ナイスネイチャはまだまだ、逆風の強いウマ娘だ。

UR Aからのテコ入れもあって少しは波風の立たない報道姿勢が整えられてはいるものの、試合後のブーイングを聞くに、きつとまだまだ賛否を分けるウマ娘として活動してゆくことになるはずだ。

ライブでは自分たちがサイドから支えてあげなければ、きつと難しい雰囲気のリブになってしまうだろう。

自分だけがこうして悲劇のヒロインを気取ってはいられない。

あの遅いナイスネイチャですらG1レースで1着をもぎ取ってみせたのだ。

今後、自分が。リオナタールが再び返り咲かないとも限らない。きつと、運命は変えられるのだから。

「トレーナーもちゃんと見ててくださいいよね」

「当然だろ」

「またスマホのライトを振ったらぶっ飛ばしますからね」

「……色はちゃんと変えてるぞ」

「気分の問題です」

その日のウイニングライブは、赤と緑。だけに留まらず、実に多種多様なサイリウムが光を放ち、輝いていた。

ナイスネイチャは自分以外の色も多い光を見て、強がるでもなく楽しそうに笑っていたという。

“応援してくれる知り合いが見つつけやすいからサービスやりやすくして良いかも”

彼女はライブ後にそう語っている。

リオナタールは、まずは彼女のメンタル面から先に見習うことにしようという決意を固めたのだった。

「やー、ネイチャすごかった！ やるじゃん！」

「おめでとうございます、ナイスネイチャさん。まさかチームカノーpusからG1ウマ娘が生まれるとは……私も、当然ターボさんも。負けてはいられませんね」

「いやーあはは。……正直作戦が上手くぶっ刺さってくれて助かりましたよ、はい」

「ターボも次のG1で1着取る！」

「ははは、ターボさんはまず前提となるレースを選ぶところから始めましょうね……しかし、本当に見事な走りでした。ナイスネイチャさん」

「ありがと、トレーナー。……まさか私が、勝負服でセンターを踊るところになるとは……」

「輝いていましたよ、ナイスネイチャさん」

「ん、ありがと。イクノ」

チームカノーパスが京都レース場を後にする。

そんな彼女たちのそばで偶然、一人のウマ娘がすれ違う。

右のウマ耳に帽子を被せた、今はまだ名の知れていない競走ウマ娘。

「……チームカノーパス、っていうんだ……」

マチカネタンホイザは今日の主役の後ろ姿を、キラキラときらめく瞳で見送っていた。

チームカノーパスに新メンバーが加わる日も、そう遠くはないのだろう。

デバフネイチャはキラキラが欲しい

ボクにとってナイスネイチャは、ただ同じクラスっていうだけの友達でしかなかった。

同じ学年で、クラスで、寮で。だから話すっていうだけの、そういう関係でしかなかったんだ。

何故なら彼女の走りは決して速くはなくて、その時のボクにとって、レースは速さの戦いでしかなかったから。

そんな思い込みは若駒ステークスでナイスネイチャと一緒に走った時に覆されて。

彼女の走りが持つ、あまりにも強い執念と熱意に、ちよつとだけ惹かれるようになってしまった。

レースを走るために頑張る子は多い。いや、いくらでもいる。

けど、走って勝つために文字通り「なんだってする」子は、ボクにとって初めてだった。

ナイスネイチャは勝つためならなんだってやる。

ルールの範囲でなら他人の邪魔も、翻弄することも……ボクにも、どんなことだって……。

決して速いわけじゃないウマ娘が、ボクの背後に迫っている。

常にボクを追い越そうと、本気の闘志を燃やしている。ボクの首に噛み付いて、ボクを組み伏せようとしている。

ボクは、ナイスネイチャのそんな、勝負にかける溢れるほどの熱意が……好きなんだ。

「中継で見てたよ！ 最初はレースがどうなるかと思ってハラハラしてさ……」

「うんうん！ 私も見てた！」

「最後に一気に追い抜き返していったのすごかった！ おめでとう、ナイスネイチャ！」

「いやー、あはは。ありがとみんな。まさか私がG1取っちゃうなんてねえ……」

菊花賞に勝ったナイスネイチャは、学園内では相変わらず人気者だ。

学園では意地悪な雰囲気を抑えているけど、時々漏れる彼女の悪戯な仕草に夢中になってしまう子も多いんだって。

ボクにもファンは多いけど、ナイスネイチャに近づくのはどつちかというとしりウスシンボリとか、そういう感じのファンに近い気がする。

G1レースを勝ったおかげか学園の外でもファンが増えているみたいで、ネットでは菊花賞の荒れた様子を詳しく検証したりする人も多くて盛り上がってるみたい。

そんな調子でナイスネイチャが意地悪なだけじゃなくて、レースが上手なウマ娘なんだっていうことも広まっていけば、ボクとしても嬉しいかな。

ま、それでもボクの方が強いんだけどね！

「あ、テイオー。昨日返し忘れてたこれ、返しちゃうね」

「ん？ 何？」

ナイスネイチャが会話の輪から抜け出して、カバンを持ってボクにちかづいてくる。そして……。

「んっ……!？」

誰も見ていない一瞬の隙を突いて、ボクの尻尾をすりと撫でてきた。

……声が、漏れそうだった。危ない……。

「見過ぎ、テイオー」

「う……そんなこと……」

「我慢できないなら、教室でもしてあげよっか……?？」

……！ ほ、本当にネイチャは意地悪になっちゃった。

ボクのことをいつもからかって、翻弄して……。

「冗談だって。私もバレたくないしき。あはは」

……彼女は菊花賞だけで満足したわけじゃない。

次はまた別のレースで、今度はボクを倒そうと、新しい作戦を練っている。

こうしてボクに意地悪なことをしてゆさぶっているのも、そのせいだ。

ボクを、本気で……突き崩そうとしてくる。

その熱すぎる想いにボクはいつも、やられそうになっている。

……でも、負けない。ボクはネイチャに勝ち続けてやる。

だからやめないで、ナイスネイチャ。

……ボクのことを、これからも……。

「はい、席について！ ホームルームを始めますよ！」

つて、うわ。もうこんな時間だ。

「またね」

「うん」

ナイスネイチャとやり取りをしていると、すぐに時間が過ぎていく気がする。

……菊花賞のタイムが乱れたのも、こういうのがあったりするのかなあ？

タイムを乱さないようにするトレーニングとかも、これから始めた方が良いのかも……。

「えー、まずはお知らせからです。生徒会から上申された企画として、今までと全く異なる新しい形のレースが試験的に開催される運びとなりました。そのことについて、説明しますね」

ん？ 新しいレース？

それに生徒会つて、カイチョーが何か考えたのかな？

「新しいレースってなんだろう？」

「トウインクルシリーズとは違うのかな？」

「こら、静かに！ ……これはトウインクルシリーズとは別ですが、かつてURAが検討していたレースでもあります。日本のレースは基本的にそれぞれが1着を目指す個人技であるのに対し、海外における複数人でチームを組んで“チームの勝利”を目指すレース……この海外のレース形式を試験的に取り入れてみようというのが、今回の企画の目的、だそうです」

チームのレース……？

「その名も『チャンピオンズミーティング』！ このレースでは参加するウマ娘は今いるチームとは別に三人一組の新たなチームを作り、チームでの勝利を目指します！ 仮にチーム内の一人が最下位だとしても、チーム内の誰かが1着を取ればそれは勝利というわけです。皆さんには少々馴染みのないルールだと思いますが、URAはこういう新たなレース形態の導入に乗り気だそうですねよ」

チャンピオンズ、ミーティング……。

三人一組。新たなチーム。それに、チーム内の誰かが勝てばいい。複雑だ。面白そうだけど、すごい難しそう。クラス内のみんなも考え込んだり、ざわついている。

カイチョーがこんなレースを考えてたなんて……。

「……へー、楽しそうなレース」

騒めく教室の中で、ナイスネイチヤが不敵に笑った。

思わず誰もが彼女の方を見てしまう。

「チーム内の誰かが勝てば、チームの勝利か。ふーん……なんだか色々、面白そうな作戦が立てられそうじゃない？」

……ああ、一対一なら。ボクも勝てると思ってる。

でも、もしも勝たなきゃいけない相手が複数いて、ナイスネイチヤが『自分一人の勝利を捨てても良い』とした上で作戦を立ててきたら……。

……そんなレースでボクは、彼女のチームに勝てるんだろうか？

クラスのみんなはきつと同じことを考え、戦慄している。

楽しそうに微笑んでいるのはナイスネイチヤただ一人だけ。

「トウインクルシリーズも頑張るのは当然だけど。チャンピオンズミーティングも……結構、興味出てきちゃったなあ」

……新しい形のチームレース。

それはボクたちにとって、とんでもない波乱の幕開けになるのかもしれない。

ナイスネイチヤの眼は、妖しくキラキラと輝いていた。

番外編：菊花賞終了後のスレの様子

392：名無しの野次ウマ ID：o8IUBpLxL
菊花賞、まさかのナイスネイチャ一着

393：名無しの野次ウマ ID：bkvtkokMj
3分12.8は草

394：名無しの野次ウマ ID：ybIw/rtE/
ナイスネイチャが勝つとは思わなかった

395：名無しの野次ウマ ID：2xvVyvnc k
レース荒れ過ぎでしょ、何が起こったのさつき

396：名無しの野次ウマ ID：gAk3ccaPg
なんもわからん
ただナイスネイチャが勝って、審議も無かった

397：名無しの野次ウマ ID：fzTC+uWDk
実況「おおっとこれは……随分と早いペースですね!？」
解説「そのようですね……（困惑）」

実況「一体何が起こっているのでしょうか!？」
解説「何が起こっているんでしょうかねえ……（困惑）」
面白かったけどちよっと可哀想だった
さつき三回見直したけど俺もわからんもん

398：名無しの野次ウマ ID：ac3qOKb+8
最序盤ハイペースだったのに終わってみれば激遅で俺氏困惑

399：名無しの野次ウマ ID：XYscQXhWK
ナイスネイチャが何か言ってたのか？

400 : 名無しの野次ウマ ID : 8 b g P B 6 s B y
多分それ

というかそれしか考えられない

401 : 名無しの野次ウマ ID : e c G x e 2 G 1 C
ウイニングライブ楽しみだ

まだかかるよな？

402 : 名無しの野次ウマ ID : G u 8 3 / F 0 H X
ナイスネイチャが菊花賞を取るとは…途中絶対負けたと思ったの
に

403 : 名無しの野次ウマ ID : i i o s Q 1 G T P
リオナタールとブレスオウんだンスが抜けたと思ったら抜き返し
たからな

404 : 名無しの野次ウマ ID : V / P w 5 L y R b
終盤全員が失速してナイスネイチャだけがスパートできてたから
ね
途中でペース乱されまくったせいでスタミナ残らなかったんだろ
うな

405 : 名無しの野次ウマ ID : z j p X q h u o 1
審議入れるよ

406 : 名無しの野次ウマ ID : D H j I k o k l e
前々からナイスネイチャのレース中の囁きとか塞ぎが怖いとは言
われてたけど、今回は特に強く影響してたな…俺でも見てすぐにわか
るレベルだったし

407：名無しの野次ウマ ID：e0Z9VL2GI
ポジション取りの推移が普通の長距離レースと全然違うもんな
あんなに順位入り乱れる走り方してたらそりやバテる

408：名無しの野次ウマ ID：QxJEWSS9oM
やっぱりみんな長距離GI初だから？ 経験不足？

409：名無しの野次ウマ ID：D4Oxv4j+2
>>408

だとしても去年の菊花賞くらいにはなるだろう

今回の菊花賞は本命不在とは言われているけど、言われるほどみんな実力不足だったとは思わない

410：名無しの野次ウマ ID：JKT7gDcJN

トウカイテイオーだったらナイスネイチャに勝ってたのに

411：名無しの野次ウマ ID：/GYjiAvHK

トウカイテイオーはナイスネイチャに負けなしだからな

そもそもナイスネイチャの弱点よ

412：名無しの野次ウマ ID：avSJ2S/y c

ゴールした後みんな芝の上にダウンしてたな…相当ハイペース
だったんだろうな

413：名無しの野次ウマ ID：DdHmeMI/N

しかしナイスネイチャはそうでもなかったという

414：名無しの野次ウマ ID：HqL9tbm6i

解説「この席からではナイスネイチャの仕掛けた作戦の全てを見通すことはできませんが、間違いなく何か…：心理戦を仕掛けたのだと思います。ただ、それを抜きにしてもレース中の走行技術には驚くべ

き工夫が沢山ありました。今日ゆっくりと検証して、後日詳細にまとめてみたいものですねえ」

この人、ナイスネイチャが走る時いつも楽しそうに解説してくれるから好き

詳しい人にとってはナイスネイチャの走り方って魅力的なんだろうか

415：名無しの野次ウマ ID：34ZcHlaWL

>>414

ウマッターで毎回画像付きで解説してくれる人のツリーとか結構あるし、一定の需要があるんだろうね

海外勢も結構注目してるよ

416：名無しの野次ウマ ID：C66+02kbl

ウマッターの解説はいつもアンチがクソリップ飛ばしてくるから苦手だわ

417：名無しの野次ウマ ID：V3vWtnnnI

リオナタール：よくやったぜ：

418：名無しの野次ウマ ID：yPl8dCu7l

全員掛かったのを見ると、ふがないとは言えないね

419：名無しの野次ウマ ID：klvMalJNs

レース中なんて言われてたのか、出てた子達から聞いてみたい

420：名無しの野次ウマ ID：rYeuaZox5

インタビューではまだ特にそういうのでてないね

421：名無しの野次ウマ ID：7h4yX0qy+

いや、今ケーツースイサンがウマスタに投稿してる

4 2 2 : 名無しの野次ウマ ID : G D T o P p n m I
ケーツースイサンのアカウント p l z

4 2 3 : 名無しの野次ウマ ID : 2 S g F e t r 2 s

「菊花賞お疲れ様でした！ ナイスネイチャの作戦にまんまとはまっちゃったよ！ 悔しいけど完敗です！ 一着おめでどうナイスネイチャ！」

「敗因はトウカイテイオーの話を引き合いに出されて冷静さを失ったせいですけど、そう揺さぶってくる心構えが全然出来てなかったのが大きいです。クラシックも終わりかけなのに、まだまだ私は自分の走りができてなかったんだなと猛省しています。でも、次こそ勝ちます！ いつかはナイスネイチャも倒してやるからな！」

4 2 4 : 名無しの野次ウマ ID : I / W U F O G I U
やっぱりレース前に揺さぶってたのか

4 2 5 : 名無しの野次ウマ ID : X 2 x x Z F h v w
ゲートイン前のお通夜みたいな映像見るとそれも納得だわ

4 2 6 : 名無しの野次ウマ ID : h 2 7 5 j p S z P
なんか誰も喋ってなさそうなあれね w w w

4 2 7 : 名無しの野次ウマ ID : k g W 9 B c n 5 k
トウカイテイオーを引き合いに出されて、か……

ウマ娘たちも散々「本命不在」とか言われてたら思うところはあるよなあ

4 2 8 : 名無しの野次ウマ ID : A B i g c o a K z
メディアが悪い

4 2 9 : 名無しの野次ウマ ID : 6 8 c H U I T I W
俺らが悪いんやで

4 3 0 : 名無しの野次ウマ ID : + 4 p C U A E P 6
俺はそんなこと言っていない

4 3 1 : 名無しの野次ウマ ID : n d B v y 9 P Z 3
主役不在で盛り上がり欠ける菊花賞……それを否定するために
皆、全力で走ってたんやなって……

4 3 2 : 名無しの野次ウマ ID : O b M v C a C h O
なお

4 3 3 : 名無しの野次ウマ ID : 0 W + V L c F l j
ナイスネイチャ卑怯なのでは？

4 3 4 : 名無しの野次ウマ ID : K C r E c F u e z
卑怯は褒め言葉

4 3 5 : 名無しの野次ウマ ID : d Y I G u 2 U T B
ルールの範疇でやってるから卑怯も何もないでしょ

4 3 6 : 名無しの野次ウマ ID : z + c l Z W w t 4
卑怯とは言うまいな

4 3 7 : 名無しの野次ウマ ID : + W B 3 + k Y d +
>>> 4 3 6

お前は卑怯だろ！

4 3 8 : 名無しの野次ウマ ID : C F r m o P 4 R v
またレース見直してるけど、ナイスネイチャって後ろに目でもつい

てるんか？

真後ろの相手のレーン移動とほぼピッタリに塞いでて怖いんだが

439：名無しの野次ウマ ID：F5sFz8IRB

激遅タイムの秘訣やね

440：名無しの野次ウマ ID：OSnh4bEx6

急に進路を塞ぎにかかるのは違反だけど、同時に横移動するのはわりとセーフだからな

それが実際にできるかというは無理なんだけど

441：名無しの野次ウマ ID：oWy5vUms0

ナイスネイチャはできたぞ？

442：名無しの野次ウマ ID：n8laddc8B

こんな塞ぎ方されたら多少無理してでも大回りと加速で前を取りたくなるわ

443：名無しの野次ウマ ID：XmYAsd/iE

だからこそみんなバテてくんだろうな

妖怪スタミナ置いてけだわ

444：名無しの野次ウマ ID：YeWQRn9Mx

実況「ここでシガーブレード脚を溜め……ない!? スパートではない……ですがどうですか!？」

解説「あーこれは、掛かっているかもしれないですねえ。近くにナイスイチャがいるので何か心理戦をかけられたのかもしれない」

実況も解説もさぐりさぐりで大変そうだったなw

445：名無しの野次ウマ ID：BUHa8qmv1

展開も目まぐるしいから喋ること多くて大変だよな

446：名無しの野次ウマ ID：6lt3ykGqR

普通中盤あたりで先頭から順に読み上げていくのに、コロコロ順位変わるもんだからすげー大変そうだったね

447：名無しの野次ウマ ID：ehPO6BO6R

「中段で何かを企てているナイスネイチヤ」

何かを企てているは草

448：名無しの野次ウマ ID：BFldnJG4k

一度ピンマイクつけてレースしてほしい

449：名無しの野次ウマ ID：OzsvTuCKe

前やってたドキュメンタリーみたいな喋り方してるんだろうなー
長距離でもやってのけるのは驚きだ

450：名無しの野次ウマ ID：XAOPSDlTt

ドキュメンタリーって？

451：名無しの野次ウマ ID：64RJ+ugUg

夏の終わり頃やってたURAのナイスネイチヤ特番
菊花賞勝ったしまた再放送してくれんかな

452：名無しの野次ウマ ID：y+k6eKcgo

違法アップだけど動画サイトに上がってたよ

453：名無しの野次ウマ ID：CCohzgoY

違法は良くない

454：名無しの野次ウマ ID：xlxxPSkmZ

ナイスネイチヤの菊花賞勝利、競争ウマ娘の反応見てるんだけどす

ごいね、みんな祝ってる

455 : 名無しの野次ウマ ID : s4L2BJ7CB
ナイスネイチャはウマ娘に人気あるから…

456 : 名無しの野次ウマ ID : Fa8p6pNf7
アンチとの温度差がやべーやつ

457 : 名無しの野次ウマ ID : L4sjnXJp8
アンチがやべーだけやぞ

458 : 名無しの野次ウマ ID : mS2FEP6wu
アンチスレお通夜状態で草

459 : 名無しの野次ウマ ID : KiVRPA d2t
もうあそこは憎しみのぶつけどころを見失ってURAAアンチに
なってるから…

460 : 名無しの野次ウマ ID : amkKWVTH3
どうしてそうなるんや…

461 : 名無しの野次ウマ ID : iaXrBmj q6
>>>460
ナイスネイチャに審議点けないURAAが汚職やらなんやら
頭痛くなるから見ないほうがいい

462 : 名無しの野次ウマ ID : Hn8tlfq5o
>>>461
oh…

463 : 名無しの野次ウマ ID : 8gDMqUHH4

ブレスオウんだンス「最後の最後で力尽きてしまいました。とてもとても悔しく無念ですが、同じくらいナイスネイチャの策略を称賛したくもあります。完敗です。けど、次こそは！」
頑張った

464 : 名無しの野次ウマ ID : r9heNqRq8
走った子達の反応見た感じ、恨み節は無いね
みんな「やられた！」って言い方だ

465 : 名無しの野次ウマ ID : Sjs6GNyk
作戦勝ちだったんだろうな

466 : 名無しの野次ウマ ID : aga8MUAdW
お、ライブはじまた

467 : 名無しの野次ウマ ID : a1+kP3izQ
ナイスネイチャかわいい

468 : 名無しの野次ウマ ID : b6fHZNDhw
サイリウムの色ぐちゃぐちゃで草

469 : 名無しの野次ウマ ID : 6kN55SYZm
色用意できなかった人も多そうだな…

470 : 名無しの野次ウマ ID : iosfhCvsv
勝つとは思わなかったんだろうな…それでも応援するなら全員分の色持つてけとは思うが

471 : 名無しの野次ウマ ID : DqxZZV1OR
脚のベルト…なんか…いいね…

472 : 名無しの野次ウマ ID : U r X I H J T a q
通報

473 : 名無しの野次ウマ ID : q p 0 n P C I B t
まさかナイスネイチャがセンターで歌うことになるとはなあ
嬉しいよほんと

474 : 名無しの野次ウマ ID : J U k W W M N Z y
髪がふわふわしてる

475 : 名無しの野次ウマ ID : 6 r + 2 P L s v e
今日は誰も故障してないといいなあ

476 : 名無しの野次ウマ ID : Y 2 N C c s V D Q
それよな
全員無事でいてくれるのが一番

477 : 名無しの野次ウマ ID : C q A 0 + s C g f
京都じゃなければ見に行ってたのによおおお
なんで中山とか東京でやってくれねえんだよおおお

478 : 名無しの野次ウマ ID : 5 8 / S d o k R 4
>>477
草どす

479 : 名無しの野次ウマ ID : s w X / V l o Z +
マチカネヒオドシが「ナイスネイチャのトウカイテイオーの声真似
すごく上手でびっくりした」って投稿してる
声真似…?!

480 : 名無しの野次ウマ ID : t F x 2 B / D l i

声真似…？

481：名無しの野次ウマ ID：NQyL0zke5
声真似とは…？

482：名無しの野次ウマ ID：aya／UiH71
トウカイテイオーの声を真似して揺さぶってたのかね

483：名無しの野次ウマ ID：Uic9NHTNY
そういう揺さぶりもあるよか

484：名無しの野次ウマ ID：asMcVLZH
トウカイテイオーの声も結構特徴的だけど出せるもんなんかね

485：名無しの野次ウマ ID：lixOtbCk1
次も絶対勝つモンニ！

486：名無しの野次ウマ ID：l／+H+dRfs
>>>485

いやわからん

487：名無しの野次ウマ ID：V8z7QZdhq

長距離を波のあるペースで走りつつ、声真似して囁きかけつつ、背
後のウマ娘をピツタリ塞いで最終的に脚を残して一着でゴールする
それはただの化け物なのでは？

488：名無しの野次ウマ ID：Xo／VV0／WG
アンチじゃないけどわりと化け物みたいな技術とは言われてる

489：名無しの野次ウマ ID：6I6Ld2KO4
経験者はみんなナイスネイチャの技術を誉めるけど、できるかと言

われると絶対に真似はできないとは言いつ切るからな…

490 : 名無しの野次ウマ ID : X a H W Q 3 z C x
ボクならできるモンニエ!

491 : 名無しの野次ウマ ID : j j o 8 Y z R q g
想像できないっす…

492 : 名無しの野次ウマ ID : x L J n y k S y J
しかしナイスネイチャが一番強いウマ娘か…：確かに速いとも運
が良いとも言えないけど、こうしてみると強さは持つてるんだろな

493 : 名無しの野次ウマ ID : t L A i t f z 5 C
スピードが無いのに全員のスタミナを削って勝つ
レースという競技でできる芸当ではない

494 : 名無しの野次ウマ ID : k C 0 0 e G t w M
海外勢は「日本で最も凶悪なラビット」とか言ってるしね

495 : 名無しの野次ウマ ID : o p + P / M M 5 S
次のレースも楽しみだ

496 : 名無しの野次ウマ ID : O k o I g I + t j
次は何走るのかな
ナイスネイチャのことだし不調が無いならあまり間隔は開けなさ
そうだけど

497 : 名無しの野次ウマ ID : 5 c P c z a n v x
ナイスネイチャの次走が話題になる…：俺あ嬉しいよ

498 : 名無しの野次ウマ ID : 3 E F u r d P X I

俺は最初からナイスネイチャがやってくれると思ってたぜ！

499：名無しの野次ウマ ID：aEjTlX9SI

>>498

手首のギルギル言ってるのうるさいんですが

500：名無しの野次ウマ ID：RNJsOlWW6

この流れだとすごい言いにくいんだけど

やっぱり俺はトウカイテイオーに出てもらって、トウカイテイオーの三冠を見たかったよ

ナイスネイチャおめでとう、そうは思うけどやっぱりね

501：名無しの野次ウマ ID：oDDTLxOUM

まあわかるよ

502：名無しの野次ウマ ID：sinbOrNtr

確かにその気持ちは私にも未だ強くある

だがトウカイテイオーが取れなかった菊花賞を仲の良いナイスネイチャが掴み取り、それによってトウカイテイオーがナイスネイチャにこれまでとは違う特別な感情を燃やすのもまた、一つの青春なのだと思いますか？

次に二人が戦う時、互いの間に渦巻く情念

そしてそれを眺めるウマ娘たちの心中を想うと私は胸が熱くなるよ

503：名無しの野次ウマ ID：zkpKsIBPq

>>502

ごめん、よくわからない

504：名無しの野次ウマ ID：sinbOrNtr

>>503

素質あるぞ

505 : 名無しの野次ウマ

ID : AirShak41

>>504

お前何言ってるんだ？

番外編：誰と一緒にかは予約済み

怪我の治ったトウカイテイオーは、リハビリではない本格的なトレーニングを再開した。

菊花賞を見送って無念だろうけど、テイオーはテイオーで新たな目標を見定めていかなきゃいけないんだ。

テイオーは長距離を逃したことに悔いがあるのか、次の大目標を天皇賞春に定めているみたい。

長くても走れたんだってことを皆に証明したいんだろう。律儀なやつちゃで……。

それはそれとして、実際テイオーとはいえ長距離はどうなんだろうって気もしてるけど。最後までスピード保ったまま走れるのかねえ。

と、というのがトウインクルシリーズの話。

競走ウマ娘にとつての晴れ舞台は確かにトウインクルシリーズではあるけど、私たちはそれ以外にもレースの場を与えられているし、そういう戦場でも本気で望まなくちゃいけない。

ついこの間発表されたチャンピオンズミーティングなんかがまさにそれだ。

三人一組で走る特殊なチームレース。自分だけではなくチームの勝利のために走らなきゃいけないから、普通のレースとは大分勝手が違ってくるらしい。

まずは何よりも一緒に組む相手を先に考えなきゃいけないのだ。

誰と一緒に走ろうかなあ。

悪名高い私と組んでくれるかなあと少しだけ悩んでいたんだけども。

「ナイスネイチャ！ あのさ……私と一緒にチャンピオンズミーティング走ってくれない？」

「ねえお願い！ ナイスネイチャがいれば私も上手く走れる気がするの！」

「並走してくれるだけでもいいから……」

「ごめんね、迷惑だったかな。迷惑だよね……いきなり、私なんか……」

私の思いに反して、めつちやお誘いがたくさん来てくれました。

……なるほど。チームメンバーとしては力を発揮しそうだからってことか。お目が高いというか、私が思ってた以上にみんな目敏いなというか。

菊花賞も勝っちゃったしなあ私。もう普通のよわよわウマ娘とは誰も思ってくれないか。もつと油断してて欲しいもんだけど。

けど、うん。

実はもう既に先約がいたりするんだよね。

「あはは、ごめんねえ。もう私チーム組む相手決めちゃってるから……」

「あ、そうだったんだ……」

「じゃあ仕方ないね」

「ねえ、同じチームの相手って……誰？ 教えて欲しいな。……もしかして、トウカイテイオー？」

まあトウカイテイオーとは仲良いからそう思われるかもしれないけど、違うんですわこれが。

「ちよつとネイチャー！ もうチーム組んだってどういふこと!？」

私が寮の自室で髪を結んでいると、いきなりトウカイテイオーがずかずかと上がり込んできた。

慣れない髪型にしてるんだから集中させてよもう。

「チャンピオンズミーティングの話聞いたその日のお昼には誘われてたんだよ。一応その時は保留にしてたけど、話がまとまったから……じゃあよろしくお願いします」 ってことにしたわけ」

「ボクも誘ってたのに……!？」

そう、実はトウカイテイオーからのお誘いもあった。

あつただけけど、トウカイテイオーと組むのは無しにした。トウカイテイオーの走りは知ってるから相性は良いと思うし、単純に速い人

が居てくれたら有利だから最後の最後まで悩んではいたんだけどね。

「まあまあ立ち話もなんだし、座りなさいよ」

「ちゃんと聞かせてよね！」

「はいはい」

同室のマーベラスサンデーはチームレースのメンバーと一緒にトレーニングに出ているらしい。

マーベラスサンデーのチームメイトはマヤノトップガンとマチカネフクキタルだ。今日のトレーニングのためにどこかの山だか海だかに行っているそうだけど、詳しく聞いたはずなのに何をやろうとしているのが全くわからないので謎である。外泊許可を取って三日間出かけるらしいけど本当に何をするつもりなんだろう……。

「……あれ、ネイチヤその髪……」

「あーうん。たまにはちよつと変えてみようかなって。まあ別に誰かに見せるわけじゃないけど、ほら、私も外で目立つのちよつとアレになってきたじゃん」

「菊花賞勝ったもんね……ってことはそれ、変装のつもり？」

「まあねー。変じゃない？」

「ううん、全然。とつても似合ってる」

「へへへ、どもども……」

本当は誰にも見せたくなかったんだけどね、このポニーテール。

いつもと違うとなんかほら、やっぱ恥ずいし。

けどテイオーはからかかってる風でもないし、まあ、変じゃないなら良かったよ。

「……それで、ネイチヤは誰と組んだのさ」

「ああその話ね」

「同じチームの子じゃないよね？」

「うん。私が組んだのはセイウンスカイとエアシヤカールさんだよ」

「……？」

ほらやっぱ不思議そうな顔してる。

名前は知っててもなんでその人たち？　って思うよね。私もこの話されるまでほとんど接点は無かったし気持ちはわかる。

セイウンスカイは外で猫と遊んでる時にたまに一緒にいたりするくらいだし、エアシャカールさんに至ってはこの前までヤバいことしてる不良ウマ娘だと思ってたもん。でも話してみると普通に良い人でびっくりした。

「二人とも結構理詰めで走るタイプでねー、なんていうかこう、私とタイプが似てるっていうのかな?」

「あー、そういう……?」

「このメンバーでやれるとこまでやってみるのも面白いんじゃない? ってことで結成したわけなんですよ」

「……なんかバンド結成のノリみたいだね」

「正直なんとなくわかる」

せつかくチームで組んで走るんだから、自分の持ち味を活かせる走りをしてみたい。

私にとって重要なのは走っている最中でも考えられる思考力だ。

セイウンスカイとエアシャカールさんとなら、そういう持ち味を活かせるのでは。そう思って、私も決断したわけですな。

まあ、物凄く速い子を勝たせるために走ってみるのも悪くはないと思ってたんだけど。

どうせなら面白いレースにしたいじゃない?

誘惑には勝てませんでしたわ。

「そっかあ、決まったたのかあ……」

「あ、なーにテイオー。もしかして私と一緒にのチームになれなくて嫉妬してる?」

「や、別に、そういうわけじゃ……」

テイオーの髪を撫で、纏められた髪を軽く掴む。

こうするとそっぽ向こうとしても抵抗できない。テイオーの恥ずかしそうな顔が良く見えた。

「でもよく考えてみてよ、テイオー。私と一緒にのチームだとさあ……私に意地悪されないんだよ?」

「そ……それなら、無い方が良いじゃんか……」

「えー? テイオー意地悪されるの嫌いになっちゃった?」

「や、違って……そうじゃないけどお……」

最近、テイオーは優しく髪を引つ張られるのにも抵抗が無くなってきた。本当になんていうか……テイオーって、私を愉しませてくれるんだよね。

「はい、終わり」

「……え!？」

けど、そういうことばかりしてもいられない。

息抜きは努力の合間にするから良いのであって、そればかりだとだらけちゃうから。

「私はこれから色々お勉強しなきゃいけないんだから、今日はもうダメ。もっと時間取れる時のが良いでしょ？ テイオーも」

「……むう、わかったよ」

「だからはい、これ」

「? なにこれ、温泉……?」

私は机の引き出しから一枚のチケットを取り出して、テイオーに渡した。

「最近までずっと忘れてたんだけど、夏の終わり頃かな? 会長さんに温泉旅行一泊二日のペアチケットを貰ってたのよ。落ち着いたら仲のいいテイオーと一緒にどうかってさ。慰安旅行の下見ってことらしいよ」

「カイチョーが? へー、そうなんだ……温泉旅行……」

「二人で予定合わせてさ、一緒に行こうよ。そこでならきつと……二人でゆつくりできるよ?」

「!」

何を想像したのか、テイオーの顔が真っ赤に染まる。

……当日になって何をするかは……お楽しみ。

「あ、空いてる日は後でメッセージで伝えるからっ……! じゃあねっ!」

あらあら行っちゃった。……でもきつと、そう遠くない日取りで決まりそうな気がするね。

トウカイテイオーとの温泉旅行。ちよつと、いや、結構楽しみだ。

……そういえば温泉券もらった時に会長さんから、形式上、旅館での出来事についてはしっかりレポートとしてまとめて報告するようにな”って言われてたっけ。

遊んでるだけじゃなくて、こういう下見もちゃんとやらなきゃいけないんだなあ。生徒会も大変そう。

番外編：ロジカルな三人

三人のウマ娘でチームを組んで挑む特殊なレース、チャンピオンズミーティング。

まだ発足したばかりの企画ということで、正式な稼働を前に試験的なレースを行うことになっている。

その名も「ステラ杯」。

試走ではあるものの、栄えある最初のレースということで距離は2400に設定。距離がそこそこあるので戦略性のある見ごたえあるレースになるだろう。

そう、戦略性である。戦略性ってことはつまり、私の全てみたいなものだ。

そして、私と同じチームを組んだセイウンスカイやエアシヤカールさんにとっても、それは同じらしい。

チームの結成が決定し、ステラ杯出場を決めた私たちは、とにもかくにもまずは作戦会議を始めたのである。

「ッさん」はいらねエ。呼び名はどうだっという

エアシヤカール……まあ、本人がさん付けいらないうならそのままでいいか。

彼女はガチガチの理詰めで走るタイプのウマ娘だ。

見た目のアウトローさは一見して触れてはいけない不良ウマ娘のように見えるものの、走りにかける情熱は間違いなく本物だ。

データを元にした戦略眼の凄まじさは少し話しただけで伝わってくる。

脚質は追い込み。一番後ろから一気に捲り上げる走りは、私とも相性が良さそうだ。

「んじやーシヤカールって呼んじやおっかなー。あ、私もセイとかスカイとかでいいよー」

こつちののほほんとしたショートヘアの子はセイウンスカイ。

いつものんびりしてて、よくお昼寝してたり中庭の猫と遊んだりしている。私より猫が懐く。ずるい。

しかしそんなおっとりしてそうな雰囲気割に、走りそのものは抜け目がない。

脚質は逃げ。だけど、セイウンスカイはただ前を突っ走るだけでなく、後ろを走る相手を翻弄するという、実に高度な逃げを打つことができる。

聞いた話によれば盤外戦術も使えるようだし、柔らかい雰囲気とは打って変わってなかなかの曲者と言えるだろう。

「私はナイスネイチャです。私もネイチャでいいです。まあ、とりあえず次のステラ杯、よろしくおねがいします」

「ほーい」

作戦会議室はトレセンのレース場を見渡せる観客席を選んだ。

なんでこんなところで？　と思われるかもしれないけど、周囲にあまり人がいないからです。

私たちは、作戦で勝つつもりだからね。

「自己紹介はもう良いだろ。どうせもう互いに知ってんだ。それよりもステラのレース条件について共有するぞ」

「お、話が早いですねえー」

「レース場はここトレセン学園。芝2400の左回り……坂条件も位置も東京レース場とほぼ同じ。ま、言っちゃえばダービーと揃えたレースだな」

エアシヤカールはノートパソコン(Parcayというらしい)を広げ、なにやらデータらしきものを表示して私達に見せてくれた。

そこにあるのはまんまダービーと同じコース条件。これを走っていくわけなんだけど……。

「まさか9人立てレースとはねー。セイちゃんのにはちよつとやりづらいかない」

そう。1レースあたりの出走人数がなんと9人という、非常に少ない数でのレースになるのだ。

チャンピオンズミーティングは3人一組なので、出場は3チームと

いうことになる。

「つまり、敵は6人ってこった。オレとしては前を塞がれにくい分やりやすい。あくまで一般的なセオリーに当てはめればの話だが」
人数が減ると、脚質の影響は普段と異なってくる。

有利になるのは後ろの脚質だろう。単純に前を走るウマ娘が減るので追い抜きがやりやすいのだ。私のような差しウマ娘にもちよつと恩恵があるかな。

逆にセイウンスカイのような逃げのウマ娘はほとんど変わらない。後ろで塞がれたりでごちゃごちゃする相手が減るという意味では、確かにセイウンスカイの言う通り、やり辛さはあるのかも。

けどこれはあくまで一般論の話。

あいにくと私たちは普通の走りをするウマ娘ではなかった。

「まーライバルが6人きりってなると、駆け引きもやりやすそうかなー？」

「オレもわざわざ最後尾で機を窺う必要はねエな。いつもより差に近い位置で前目の位置を狙える……何より、このレースは個人技じゃねえ。チームが勝てばそれで良い……確認は済んでるはずだが、今更になって異論は無いな？」

「セイちゃんはおっけーです」

「私もです。……今回は個人の勝利を全力で捨てちやおうと思いまーす」

普段ならこんなセリフは絶対に吐かない。だからちよつとおかしくて笑ってしまう。

そも、日本のレースというものはルールとして「勝利を狙わない走り」に対して非常に厳しかったりする。

それはつまり、誰かを勝たせるためだけに走るとか。誰かを負かせることを目的にして走るとか。一着を狙わない走りに対して、まあ古い考え方も多分にあるんだろうけど、ペナルティが科されやすい感じになってるんですわ。

けどステラ杯ではそれが無い。

「自分が勝たなくても良い」という考え方で走っても、降着や失格

になることがないのだ。

私たちはそのルールを使い倒すことを目的として、このチームを結成している。

「いやー、いつも通り一着を目指す普通の走りをしてても良いんですけどねー。せつかくこういう機会ですし？ どうせなら面白いレースにしたいよねー」

「わかるわかる。私も今回は集団の勝利を意識してやってみたいなーって」

「『デバフ』だな？」

エアシヤカールは私のずる賢い走りのことを『デバフ』と呼ぶ。

ゲーム用語かな多分。使いやすいくらいから自分でもテクニクスの総称としてちよつと使ってみようかなって最近は思い始めてるんだけど。「まー、デバフ……みんなの脚を引つ張る走りは、今回全力でやるつもり。けど自分で狙えるなら一着も狙っていくけどね。けど走りそのもののスペックはスカイやシヤカールの方が圧倒的に上だから、基本は譲るつもりー」

私がそう言うと、二人が無言で目線を送ってきた。

うーん、何か感情が乗ってる。

「……お前の走りがオカルトじゃねエのはわかってる。映像としては何度も見てるからな。だがParcaen中に代入するには、まだオレ自身そのロジックをうまく咀嚼できてるわけじゃねエ」

「あ、わかるー。こっちも前から気になってたんだよねー。ネイチャの走りってやつ」

「……つまり、とりあえず私の『デバフ』を体験してみたい、ってことで良いのかな？」

「屋外で既にジャージに着替えてんだ。やらない選択肢がねエ」

「セイちゃんちよつと楽しみだなー。ウワサのデバフがどんなものなのか、わかっちゃうわけだし。んふふー」

やれやれ。まあ走ることになるのはわかってたんですけどね。

けど、どうせやるなら本気を出そう。

「じゃあアップも兼ねて、三人で軽く慣らしながらいきましょー。距

離はまー、実践形式に寄せる意味で2000でことぞ」

そうして私たちはターフに出て、走り始めた。

慣らしという名の“駄弁りながらの走り”を2000mの中にまで延長させ、息切れを狙うという姑息な作戦を発動させつつも……。
……まあ、やっぱその程度じゃこの二人になすすべなく負けちゃうんですけどね！

「はあ、はあ……ふー、やっぱ少人数で短めは無理ですわー」

走り終えた後、私は心地よい疲労感を感じていた。

データでは知っていても、私との走りが初見ということもあったのだろう。エアシヤカールとセイウンスカイはいくつかの“初見殺し”的なテクニクに嵌ってくれたのが幸運だった。

道中の雑談的会話。コース塞ぎ。コーナーでの加速。

色々やって、まあそれでも最終的にドベだったわけですが。

「……はあ、はあ……うへえ……聞いてた以上に性格わつる……」

「あはは」

セイウンスカイはちよつとげんなりしてる。申し訳ない。逃げのスピードに乗らせる前に前を塞いで、さんざんストレスかけてたからね。

「はあ、はあ……ふーッ……まあ、そうだな。オレも理解度は深まった。だが……畜生、この影響力をどうParcaeに代入すりや良いのか、悩むとこだな」

エアシヤカールは常に後ろから前を狙う走りだったから、より一層やりづらかっただろう。

それでも幾つかの引掛けをすぐさま看破してみせたのが恐ろしい。けど、うん。今走ってみてよくわかった。

二人とも走りながら考えを巡らせることのできるウマ娘だ。

この二人だったら、私の脚を引っ張る走りの渦中でも、自分を見失うことなくゴールを狙っていけるように思う。

私の走りで最も重要なのがこの“同士討ちにならない味方”の存在だからね。

「っし。ベンチに戻ってデータを整理したら、もう一度方針を固めるぞ」

「はいはい」

「あ、そういえばまだチーム名決めてなかったなあ……どうしょ」

「それ含め今日中に決める。発表もしておくぞ」

「さんせーい。どうせなら早い段階で存在感示しておきたいしねー」

あー二人はそういう考えか。ステルスも良いんじゃないかなって思ってたけど、それでも悪くはない。

「早めに存在を示して、ついでに他のチームも構成を焙り出す。つてことね」

「正解だ。判明してるチームはさっさとリストアップして、個別の対策案を立てておきてエからな。まあその作業は基本オレとこのP a r c a e でやっておく」

「セイちゃんはそれとなくチーム結成のウワサを流しておこうかなー」

「わお。二人共頼もしいなあ……」

チームレース、チャンピオンズミーティング。

それは私達にとって、出走する前から始まっているレースなのだった。

いやあ、本番が楽しみですなあ。

番外編：チーム・スカラーと王者の集い

チャンピオンズミーティング「ステラ杯」、オープンリーグ。それが私達の走るレースの名前だ。

レース条件は日本ダービーと同じ。コースを整えるために見たこともない重機がやってきて坂路を整備していたのにはびっくりした。聞いたところによるとあの重機は理事長の物らしい……。ダート以外も整備できるんだ……。

今回は試走なので、規模は小さい。勝ち負けにあまり拘らない種のお祭りのようなものということで、気軽に走るレースになる。

というのが建前なんだけど、実際に走る私達は手を抜いたりはしない。もちろんトウインクルシリーズを走る時のように全てを使い果たすような走りまではしないけど、それはそれとして本気は出すってこと。

誰だって負けるつもりで走りたくはないからねー。

『オネストワーズ完全に抜け出した！ オネストワーズ突き放す！ そのまま先頭でゴールインッ！ 一着はオネストワーズ！ 第6レースはチーム「フレッシュモブ」が1位となりました！ 二着はデザートベイビーでチーム「キャロライン」！ 素晴らしい熱戦でした！』

ステラ杯が始まり、会場は白熱した盛り上がりを見せ続けている。3人1チームが3つ、九人の出走という非常にミニマムなレースではあるけれど、チームの誰かが勝てば一着という特殊なルールがこのレースをいつも以上に戦略的なものにしてている。すごい盛り上がりだ。

こうして遠くから眺めているだけでも、なかなか楽しめるね。

「やー、こうして見ると味方と競っちゃう子が多いですなあー」

「慣れてないってのもあるんだろうけどなあ。本番じゃ尚のこと周囲を認識できねえんだろうなあ」

私はセイウンスカイやエアシャカールと一緒にレースを観戦している。私達の出走するレースは第9レース。待ってればもうそろそろだ。

それでも私を含め二人に緊張した様子はない。本番でも練習と作戦通りのポテンシャルを発揮できるだろう。そういう点において、私はこのチーム「スカラー」を信頼している。

「それよか芝の調子が思ってたより荒れてきた。いつもより負荷デカめを考慮しねーとな。第9レースでは稍重寄りになっていることを覚悟した方がいい」

「私達にとっては追い風かもね？」

「長距離の条件に近づくな嬉しい誤算だねー。ちよつとはらくーに走れるかな？」

作戦はセイウンスカイが逃げ、私が差し、エアシャカールが追い込みだ。

三人がそれぞれのポジションで相手を翻弄しつつ、それぞれが勝利を狙っていく。もちろん明確な勝ち筋が見えるのであればチーム内の誰かに勝利を託すことも忘れない。

……まあ、今回に関しては私はお邪魔虫に徹するのも悪くないかなーと思ってるんですけどね。一度そういう走り方もやってみたかったし。

何より……私達の対戦相手だと、そうしておかないと厳しそうだしね。

『続きまして第9レースの出走をお知らせします……出走チームは「スカラー」、「サニーレタス」、「ハチミーエンペラーズ」の三組となります』

そう、私達の対戦相手には……あの子がいる。

「まさか、トゥインクルシリーズよりも先にネイチャと戦うことになるなんてね」

「……テイオー。まだ本調子じゃないんだし、休んでれば良いんじゃない？」

「ふふん！ ボクはもう完全復活だよ！ 今更そんなこと言われたつて、萎縮しないもんね！」

対戦相手のチーム“ハチミーエンペラーズ”。そこにはトウカイテイオーがいた。

怪我が完治してリハビリも済ませ、調子もダービーの頃に戻しつつある。多分、もう既にトウカイテイオーは私の知る頃の走りができるのだろう。言うまでもなく強敵だ。

しかも、“ハチミーエンペラーズ”はそれだけじゃない。セイウンスカイの友達であるキングヘイローの姿もある。

「いやー、まさかキングと当たるなんてねえー……運命つてやつ？」

「“ステラ杯”はトウインクルシリーズではないとはいえ……本気でやらせてもらおうわよ？ スカイさん」

「やーん、こわーい……ちよつと手加減して？ 終わったら肩揉んであげるからさー」

「するわけないでしょっ！」

キングヘイローに関しては私はあまり詳しくない。脚質も……どうなんだろう。情報不足というか、よくわかってないんだよね。一通り器用に走れるみたいなんだけど。

そして“ハチミーエンペラーズ”最後の一人が……。

「はい、サクラバクシンオーです！」

「……」

「学級委員長です！」

「いや、んなことは知ってる」

サクラバクシンオーさんだった。

……おかしいな。前にアドバイス貰った後に彼女の戦績とか調べ直してみたけど、この人やっぱりガチガチのプリンターなんだよね。その時はステイヤーって言ってたのに。

「知ってるがよオ……お前プリンターだったよな？ 今回長めの中間距離で……」

「ステイヤーです！」

「……」

あ、エアシヤカールが無言でParcae開いた。

何かを調べて……何度かサクラバクシンオーさんの顔を見て、またモニターを見て……静かにノートを閉じた。

「……さて、出走だ。さっさとコース行つて準備すんぞ」

「皆さん！ 今日正々堂々バクシンしましょう！」

「……」

付き合つて少しして気付いたことだけど、エアシヤカールさんは興味のない話題やコミュニケーションの面倒な相手を前にすると無視を決め込む人である。

サクラバクシンオーさん……悪い人じゃないんだけどね……うん……。

トウカイテイオー、キングヘイロー、サクラバクシンオー。

“ハチミーエンペラーズ”はそれぞれ個性の違う実力者揃いだ。私達の作戦は既に固めきつているけれど、はてさて。それが彼女たちに通用するのか……。

……ちよつと揺さぶつておいたほうが安全かな。

特にこの距離で一番脅威になるであろうトウカイテイオーは、重点的に。

「……私と一緒にのチームじゃなくて良かったね、テイオー」
「っー」

ゲートに向かう途中、テイオーのそばでささやきかける。

「敵同士だし、今日はたっぷりいじめてあげるから……」

「……いらないよ、そんなの」

「本当に？ じゃあもうこれからずつと欲しくないんだ？」

「……そうは、言つてないじゃん……」

ああ、尻尾が変な揺れ方してる。触つてあげたいけど、皆が見てる。レースが終わつてからだね。

「そっか。じゃあテイオーが言つてみてよ。今日のレースでもいじめてください”っ”って」

「……そ、そんなの無理だよ。やだ……」

「嫌じゃないんでしょ。ほら言つて」

「……」

ゆつくりゲートに歩いてるけど、そろそろ喋り声も皆に聞こえく
らいの距離になってしまう。

もうそろそろこんなお喋りできなくなっちゃうよ。ほら、早く言わ
ないと。テイオー。

「……今日も……ボクのこと、いじめていいから……」

「ふふ……わかった。よくできたねテイオー。このレースも楽しみに
してて良いからね」

「……でも、勝つのはボクだからっ！」

あーあー、走っていつちゃった。……でも動揺は誘えたでしょ。

これで少しはレース中も調子を崩してくれるはず……。

「あ……」

「ん？ ……ああ」

そんな事を考えていると、私の後ろにウマ娘の姿が見えた。

同じレースに出走する『サニーレタス』の子だろう。……私とテ
イオーの会話を聞いてたせいかな、顔がちよつと赤い。

……あーあ……聞かれちゃった。でも、今日のは直接的なことは
言ってなかったし、まあ大丈夫か。

「……内緒ね」

「！ は、はいっ……」

にやりと微笑んで口止めを要求すると、彼女は何度も首を縦に振っ
てくれた。

……テイオーの他に、ついでにもう一人調子を崩してくれたかもし
れない。

番外編：俯瞰する者たち

——ガタン

『スタートしました！』

ゲートが開く。一斉にウマ娘たちが走り出す。

……中には、珍しく私がゲートで喋らなかつたことに対して疑問に思っている子もいるかもね。

けど今日のこのレースに限っては、それも計算の上。

「バクシィーンッ！」

「うわっ……!?!」

「負けないよっ！」

「ちよっ」

ゲートが開くと同時に先陣を切つたのはサクラバクシンオーさんとセイウンスカイ。それと少し出遅れた形のサンライトグレープ。三人とも逃げウマ娘で、先頭を悠々と走るスタイルを得意としている。

逃げウマ娘はその性格上、大抵がハナを取れなかつた時の調子が落ちる。他人の後ろを走りたくない気持ちが強すぎるせいで、萎縮してしまうんだ。

今現在先頭はサクラバクシンオーさん。

けどセイウンスカイはそれを強引に獲ろうとはしていない。

「ふっ……!」

むしろ、先を譲る余裕がある。彼女は多少のハナを取られたところで揺るがない理性を持っているし、今回はそれを裏打ちするだけの作戦があるからだ。

「くっ……!」

駄目そうなのはサンライトグレープの方だろう。彼女は先を行くサクラバクシンオーさんに釣られて盛大に掛かってしまった。

対するセイウンスカイは冷静そのものだ。サクラバクシンオーさんがプリンターということはわかっているし、事前にペースを乱されないよう何度も確認している。

つまり、このレースが始まって既に二人の相手が戦闘不能になったということだ。

「まだ前じゃなくて良いじゃん、一緒に走ろっ……?」

「っ……!」

一番の難敵トウカイテイオーはスタートで先手を取った私の真後ろ。

その後方にジンジャーポーク、キングヘイロー、ケミカルシナモン、エアシヤカールといった順で追走している。

「サニーレタス」も全員作戦を散らせているから、展開はこの人数でも縦長だ。

先方の逃げ組のペースのせいで全体が伸びているせいもあり、横並びになることがほとんどない。おかげで、私の「塞ぎ」もやりやすく助かっている。

今回の「相手」は六人。そのうち二人既に脱落同然で、対処すべきは四人だ。

けどそこで私が相手にすべきウマ娘はただ一人

トウカイテイオー。他の子はともかく、あの子だけは絶対に塞ぐ!

「っ、なんで……! こんな……!」

軽々としたステップだ。左右にスツと動き、レーンを切り替える。

けどドレーンを臨機応変に変える技術で言えば私だつて負けるつもりはない。ダービーは私の他に17人いたけど、今日意識すべき相手はテイオーただ一人。そんな条件で……私が前を譲ってやるはずがない。

「テイオーさん!? ……くっ、なら私が!」

完全にマークを外していたキングヘイローは……素通りだ。けど、後々対処できる。今は前を譲って良い。今はとにかくテイオーの速度と体力を削る!

「付き合ってくれるんだっ……? 嬉しいな……!」

「前、行かせてよ……!」

「やーだ……!」

1000メートル通過。このレースただ一人の追い込みのエアシャカールが追いついてきた。

そのまま私達の前を通り……過ぎること無く、私のやや左前側について並走する。

そこは絶好のお邪魔ポジション。テイオーが大きく膨らんで抜かす可能性さえも摘み取る、本作戦最高の位置だ。

「……っ!」

多少の左右への移動は私がブロックする。それ以上の大回りにはエアシャカールが余裕を持って対応する。普通だったら絶対にできない協力プレイだけど……二人以上いれば、こういうことだってできるんだよ、テイオー。

「キング! このまま行くよ! 右側開けて!」

「なっ」

「! ええ、わかったわっ!」

そしてペース早めに先攻位置を取っていたキングハイローが横にずれる。

が、そこを突くのはトウカイテイオーじゃない。

「——サンキュ」

「なっ……!」

エアシャカールだ。

テイオーの声真似。走ってる時だとわからないもんでしょ?

しかも今回はそれが味方の声。咄嗟の指示を出されたら……ねえ?

「ひ、卑怯なっ!」

「褒め言葉っ!」

「うわ、そんな遅く……! どいてよっ……!」

好位置から一気に捲り上げるエアシャカール。ペースを落として垂れてきたサクラバクシンオーさん。そしてそんなサクラバクシンオーを利用してトウカイテイオーの前に「蓋」を作り、前も横も完全

に封じて一緒に垂れ下がる私。

……はい、ここまでくればテイオーも完全に終わり。ここから逆転は絶対にできない。

「でも私と一緒になら落ちたって良いよね？ テイオー」

「……っ！」

「一緒に落ちよ？ テイオー」

「うっ……うううっ……っ！」

やがて私達がノロノロと諦め気味に走る中、セイウンスカイが一着でゴールを決めた。

二着はエアシヤカール。三着がキングヘイロー。

『ゴール！ チーム「スカラー」のセイウンスカイとエアシヤカール、堂々ワンツーフィニッシュを決めましたー！』

歓声。祝福の声。私に対するものではないけど……これはこれで、ちよつと心地が良い。

……私は八着で、テイオーは六着だ。まあ最後の最後に抜かされちやうのはしょうがない。

「いやー……こんな気持ちのいい敗北なんて初めてかも。ねえどうだった？ テイオー初めての着外は」

「ず……ずるいずるい！ こんな……っ！」

「えー？ ずるくないよー、ルール通り走ったんだからー」

「ボク、全っ然本気出してないのに……悔しいっ！」

「あははは。着順は私のほうが後ろだけど……今回は私の勝ちだね？

テイオー」

「むううう……っ！」

あー負けて悔しがるテイオー良いなあ……そっかあー、レースで負けるとテイオーはそんな顔するんだ……。

今回はチャンピオンズミーティングで、トウインクルシリーズではなかったけど……そっちで私に負けてたらテイオー、どんな顔を見せてくれるんだろう……。

「テイオー、次も私に負けてね……？ 私の後ろ姿を見て、悔しい思いをして……これからもつと、その顔を私に見せて……」

「！ちよ、ちよつと！……見てる……から」

……ああ、さっきの子が見てたんだ。そっか、じゃあしようがない。やめておこう。

「やー、一着もらっちゃいましたねー」

「……追いつけなかったか。途中のデバフに巻き込まれちゃったらしいな……」

レース後、のびのびと走った二人はご満悦だった。エアシヤカールは一着を取れなかったけど、まあこればかりは仕方ない。彼女にもトウカイテイオーの封じ込めを手伝ってもらったしね。どうしてもそこでロスが発生する。

結局一番自由に走れたのはセイウンスカイ一人だけだったようだ。

「話はさつきちよつとだけ聞いたけどさー。後ろの方の作戦はしつかり決めたんだってー？」

「うん、まあバツチリかな。やっぱり仲間がいると妨害もやりやすいねー」

「ハッ。前レースの傾向からして周りが見えてねえ奴が多いとは思っていたが……今回走ってみた様子だと、『見えてる』オレらの方がマインリテイってとこなんだろうなア」

レースの展開を読む。レーンを塞ぐ。速度をコントロールする。

簡単そうだけど、実はこういういった技術は……他の皆はあまり持っていない。

今回のステラ杯を走ってみて、そんなことを再確認した私達だった。